TRAL REVIEW

中央公論

十二月號

第三十二年第十三號


染めたと見えぬ
自然の黒髪と全じ色に染る
志らが赤毛染
ナイス
ナイスの五大特長
□タッタ二十分で染る。
□自然の髪の色艶に染る。
□襟枕に汚染の惧なく。
□洗で剝ず永く保ち。
□用法至極手輕便利也。
價 大瓶七十錢 小瓶四十錢 男子用三十錢
發賣 大阪東京 丹平商會
全國化粧品賣藥店にあり

ノベル賞金を得たる白耳義文豪 マーテルリンク著 文學士 栗原古城譯

六版

死後は如何

附錄「交靈術とは何ぞや」

四六判總洋布製・全一册
正價壹圓貳拾錢 郵稅十錢

▼將來の世界を支配するものは心靈の學也。

人間の死後は**絶滅**か、**永生**か、將た『醒むる無きの睡眠』か、既成宗敎は其權威を失し、近代科學は之に就て何等の說く所無し。而も闇黑の中一道の光明あり、**泰西の新科學は既に靈魂の不滅を實證し、將に輪廻轉生の眞理を說かんとす**。現代第一の文豪にして思想家たるマーテルリンクは、其神秘的冥想と、聰明なる理智との高潮に乘じて、深く此不可思議なる心靈の現象に動かされ、此大問題を解決せんとしたる者即ち此書也。譯者は將來世界を震撼すべき心靈運動の曉鐘として、本『**交靈術とは何ぞや**』に至りては、眞に人界靈界に亙る一大驚異を說ける書を提供する者と云へり。附錄とせる者にして、物質萬能の現代社會は之を讀んで將に大なる**戰慄と畏怖**とを禁じ得ざるべき也。

◉◉四版

デゼルチス著 高橋五郎譯

心靈學講話

四六判總洋布製
全一册
正價金九拾錢
郵稅金八錢

東京市本郷區西片町十番地
玄黃社
電話小石川一三九九番
振替東京七九五番

値が廉くて氣が利いた

大正七年 重要日記

□定價五十錢送料八錢中判□

高尚にして實用的なる日記を提供するは我社の誇也

今や需要率に於て日記界のレコードを破れる我が重要日記は、舊暦、九星、吉凶判斷、天候、溫度、年中行事は申すに及ばず、特に毎日「昨年の今日」なる欄を設け、昨年の其日の氣象、期米正米の相場出來事業を記載し、澤山の附錄を附する等、便利重寶にして、趣味と實益の源泉とも云ふべきもの、本年は特に大部數を印刷したれば切に江湖の御愛用を俟つ。

大正七年 婦人日記

定價四十五錢
送料八錢
中判總布製

我婦人日記は家計簿兼用の最良日記にして日日の記事欄會計欄の完備せるは勿論、年中行事より家計の取り方、子女の躾方料理衛生の事、貯金の事等滿載せり。

大正七年 懷中ノート

日記と手帳兼用の我社獨特の懷中ノート

特製▽定價四十錢▽郵税二錢小型皮製

並製▽定價二十五錢▽郵税二錢小型布製

紙質精良　印刷鮮明　記入至便　製本堅緻

體裁優美　附錄澤山　九星吉凶　價格低廉

東京京橋南紺屋町十二番地

實業之日本社

振替口座東京三二六番



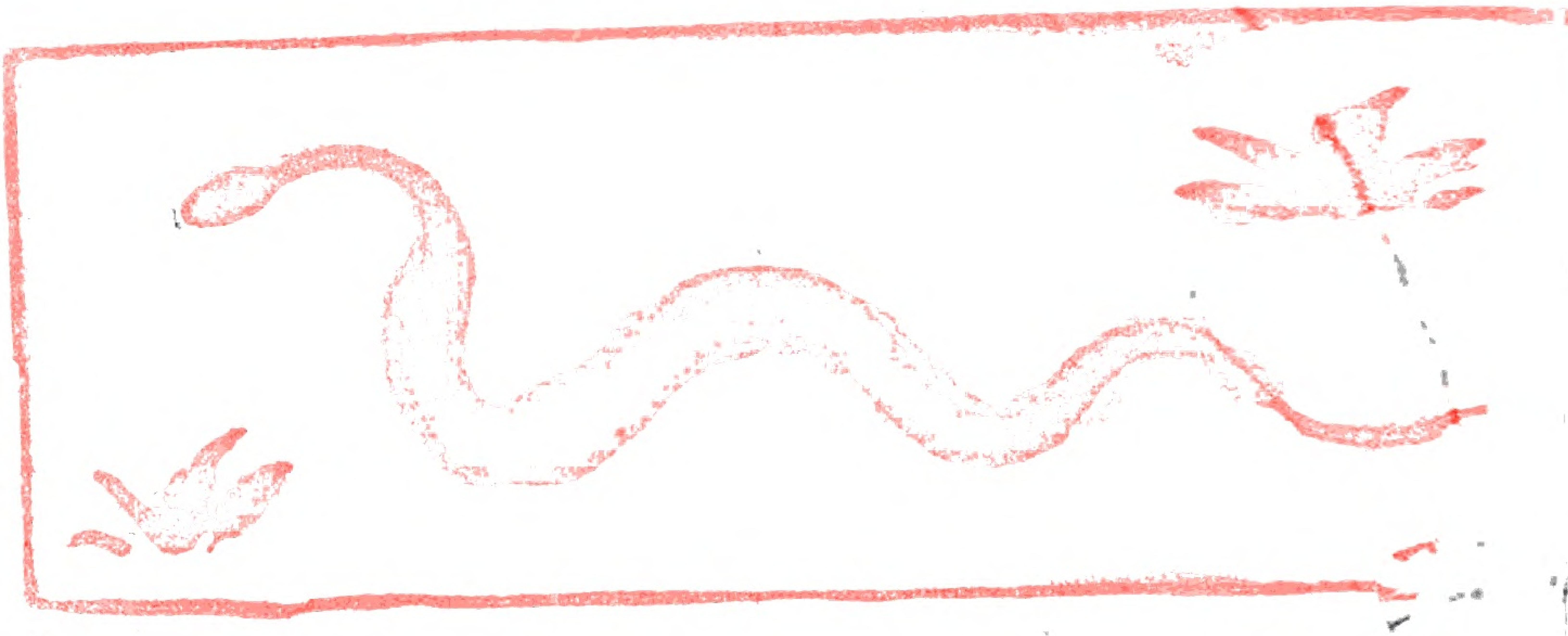
中央公論第三十一年十二月號目次

▼公論

第四十議會を前にして政界の狀勢を論ず……松井柏軒 一
社會主義者を退治せよ……青柳有美 一六
泰西名劇の上場について島村抱月氏に訊す……小山內薰 二六
日米共同宣言の解說及び批判……法學博士 吉野作造 四〇

▼說苑

尾張屋心中……村松梢風 一
心身鍛錬上より見たる各種の武術及び競技運動……小野鍾山 一四
東京市長及東京市政譚……靜思樓主人 二九
斯華十年……黑頭巾 四六



文明批評家としての
王堂と若宮卯之助

○王堂氏と若宮氏について……北昤吉 六八
○若宮田中比較論……岩野泡鳴 七〇
○田中王堂氏についての感想……本間久雄 七五
○文明批評家としての田中氏と若宮氏……石阪養平 七七
○田中氏と若宮氏……赤木桁平 七八
○どこかまだ物足りない批評家……近松秋江 八〇
○若宮卯之助君と田中王堂先生……生方敏郎 八三
○若宮氏について思ひ出すまゝ……上司小劍 八四

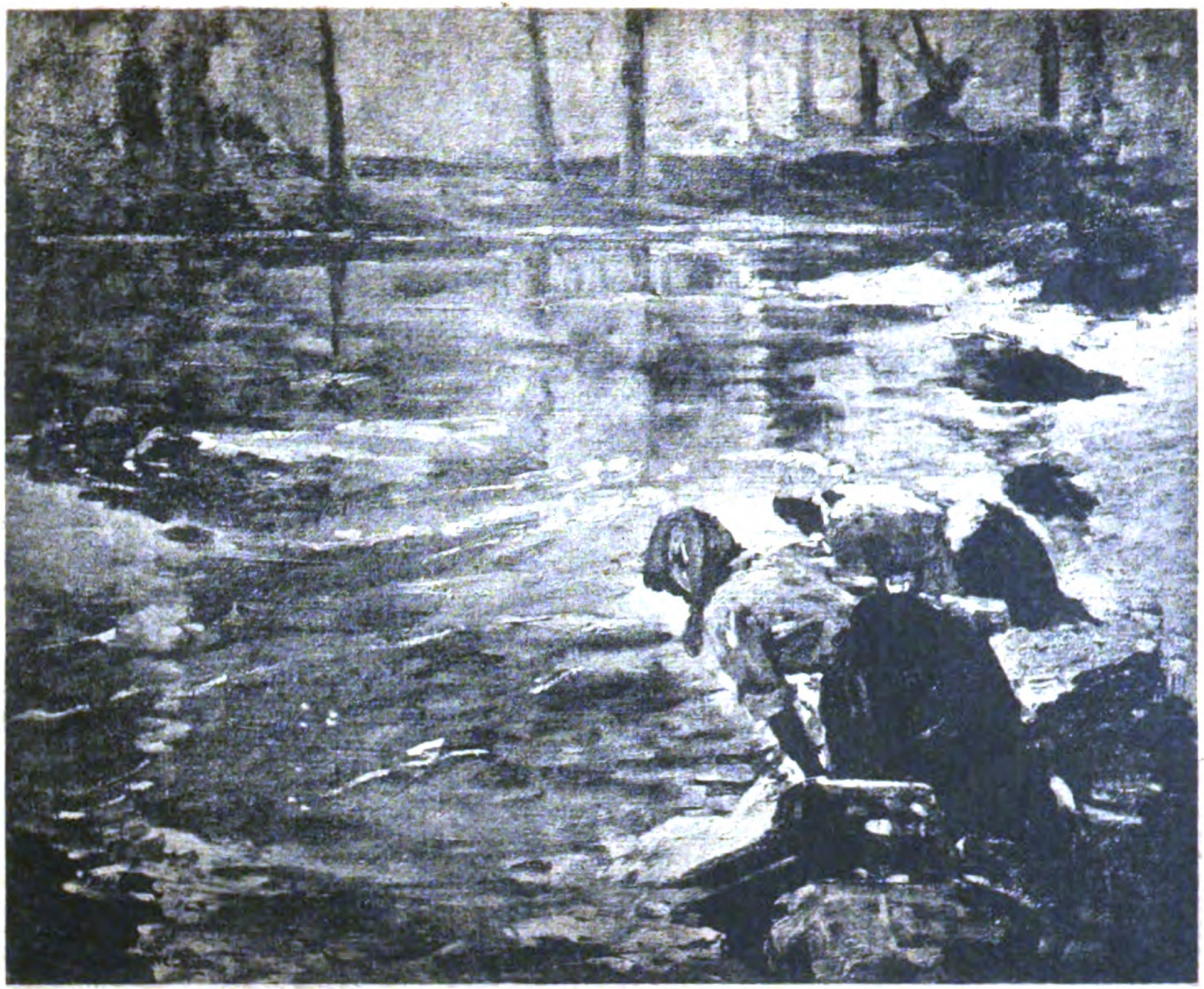
▼評論
所謂排法科萬能論によりて暗示せられたる三大時弊と段祺瑞失脚の飛報と我對支經營の頓挫……法學博士 古川學人 八六

（小說）
紅蓮……上司小劍 一
淨明寺橫町……長田幹彦 四七

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品廣告は掲載を謝絶す



"LAVENSES SUR L'INDRE PRÊS NOHANT"

FERNAND MAILLAND

中央公論



第卅二年第十三號
十二月號
第三百五十一號

第四十議會を前にして政局の狀勢を論ず

松井柏軒

（一）

去年十月九日寺內內閣の成立以來、茲に十有五ヶ月にして、第四十回帝國議會の召集を視る。政局に對する人心の頓に緊張し來るや當然のみ。

寺內內閣は、其の成立の初めに於て、既に國際的に若干の不便なる地位に在りき、英佛の諸新聞

其の聯合與國たる關係よりして多くは外交的辭令を用ひ、唯だマンチエスター・ガアヂアンその他の二を除くの外は、大抵歡迎の意を表したりと雖も、彼の露國のミリユーコフ氏の主宰すと稱せらるゝレーチ新聞の如きは、敢然として寺内首相を日本保守派の棟梁と目し、其の嚴格なる侵略主義は當さに最も支那を震慴せしむべしと評し、米國諸新聞も亦寺内首相の純軍人たると、朝鮮總督たりし經歷より推論して、頗ぶる不安の念あるを表し、就中その支那に對する懸念多きを言ひ、殊に當面の支那諸新聞に至つては、最も苛烈なる論調を用ひたりき、唯だ首相が米國聯合通信社の在東京社員に對して、その對支對米方針を披歷するに及びて、大に好感を以て迎へられしと雖も、尚ほ多少の誤解を懷くものありしや掩ふ可らざりき。

我が日本國民と雖も、彼の憲政會が第卅八及び第卅九の兩議會に絕叫したりしが如く、全然寺内内閣の成立を以て、非立憲なりとするに與せざるも、尚ほ前内閣を倒したる手段の間に不自然なる形迹ありしと、其の藩閥官僚の出なるとのため、十二分の快感を以て之を迎へざりしや、何人も否定し得ざる所ならん、乃ち國民の多數は政友會が異樣なる口實を以て之と提携したるを目して、單に利害の打算より出たる餘儀なき政略（ポリシイ）と做し、必らずしも其の本心に非ずと解釋し、而して政友會自からも今尚ほ陰に陽に然かく辯疏しつゝあるは、その明白なる證據ならずや。

内外の感情斯の如き時、殊に歐洲大戰の形勢益々緊密を加ふる秋、寺内内閣たるもの、義當さに最善を竭して以て中外に對する施設に鋭意せざる可らず、吾人は此の點に於て深く首相その人の心事を諒とし、殊に獨逸の東洋に於ける根據を覆へしたる戰果に就て、確然たる決心を有するを多とすと雖も、爾來一

ヶ年有餘に渉る政綱を檢討し來るに及びては、事の頗ぶる志と相違ふを遺憾とせざる所に

（二）

試みに財政方面を一瞥するに、支那に對する民間の放資を助成したるが如き、將た政府自から支那の借款に應じ、殊に兵器供給を應諾したるが如き、臨時國庫證券を賣出して一面對露軍需品價の決濟に便すると共に、一面財界の調節に資したるが如きは、共に吾人の成功として稱賛に吝かならざる所なりと雖も、彼の過大なる公債政策を立てて今や行詰となり、竟に中途より募債を打切らざるを得ざるに至りしが如き、初め船舶管理令を制定する必要なきを公言し、其の影響として船價及び傭船料の驚ろくべき暴騰を來すや、竟に同令を公布して一部財界に激變を與へたるが如き、紡績業者に對して印度棉花の購買を半減し、以て米國棉花を買付けんことを勸告しながら、黨人の反對に遭ふて竟に之を中止したるが如き、その意圖必らずしも不良なるにあらずと雖も、機を過まりて頗ぶる政府財政上の信望を減じたるは、之を失敗なりといふも、必らずしも反對者の惡言ならざるべし。

寺内内閣が其の主たる要務を外交に在りと做せるは甚だ好し、殊に對支外交に最も重きを置くといふや大に佳也、唯だ事毎に前内閣外交の失敗を唱へ、其の善後に大なる苦心を要すといへるは、假令詐らざる告白なるにせよ、政府者として前當局の失を訐くが如きは、幾んど多く先例なき所にして、隨つて其の所謂善後策なるものが、苟くも一歩を過まらんか、國民より苛烈なる非難を受くることは、因果律に於て必然なりとせざる可らず、吾人は必らずしも巧言令色を好まず、また多くの事の開放的なるを欲すと雖も、百般の事務に機密を尙ぶこと幾んど過度なる寺内内閣が獨り前内閣外交の非を擧ぐるに於て

甚だ率直なるを巽とせざるを得ず、今や對支外交に於て、世上の一部より峻酷なる批判を蒙むりつゝ、輙もすれば國論の沸騰を來さんとするは、蓋し內閣自から招ける應報に非ずして何ぞ。

寺內內閣は米國に對して何等爲したることなかりき、爲すべきことなきに非ず、爲さゞりしのみ、而して最近其の爲したる唯一事の日米共同宣言は、蓋し至當のものにして、殊に寺內內閣成立當初の米國輿論に考へ、その支那に對する日本の意向を疑惑するの深かりしを思ふに、石井子爵を特派して、其の疑雲を一掃し、寺內首相の曾て聯合通信を透して宣言したりし日米親善の確かなる礎石を据ゑしことは、外交上の一成功として、吾人の稱贊に遲疑せざる所とす。

然れども寺內首相の極力主張したりし、日支親善なるものは今乃ち如何ぞや、天下多くは內閣が支那の內政に不干涉主義を執ることを標榜しながら、實際に於ては却つて段祺瑞一派のみを援助するを攻擊し、而して支那南方派の徒また頻りに寺內內閣の北方に偏するを怨嗟するが如し、對支政策に關しては、彼の西原某を問題として頻りに攻擊の矢を放つが如き、其の低調にして而して偏執なる、寧ろ嗤ふに堪えたるものありと雖も、去つて再び歸任せずと稱せられし英國公使ジョルダン氏の今や北京に還るあり、米國公使ラインシュ氏の依然として飛躍を試むるあるは何ぞ、英國の廣東領事が陳炳琨氏に辭退を勸告せしは、ジョルダン公使の內命に出づるよし勿論なるも、その實我が公使林男との諒解に出づと傳へて、支那內政不干涉を裏切るものと評せらるゝは何ぞ、之を以て假令對支外交の失敗と斷定すべからざると論を俟たずと雖も、また何人も之を成功として謳歌する能はざるべし。

人を殺さば血を看るべし、之を救はゞ活かさゞる可らず、寺內內閣にして、眞に支那の統一して自强

ならんことを欲し、而して段祺瑞その人を以て、援けて以て事を成すに足る人物と自信せば、何故に公然之を援助して、以てその志を成さしめざるや、彼の南方の紛擾の如き其の微弱にして而して不統一なる、寧ろ言語に絶するものあり、我れ苟くも段其の人の私心を逞ふするには與せず、支那の公のために統一を全くせしむるを期し、賊を押して南方派に臨まば、調停と統一との易々たる、實に一舉手一投足の勞のみ、然かも尾を憚かり頭を怖れて斷ずるなし、果して何の心ぞや、斯くして徒らに英米の暗中飛躍と、支那諸方の陰謀と紛紜とを長ずるのみなるは、果して支那に特殊の利益を有する日本外交の眞面目と稱すべき乎、否、日支親善を全くする所以と稱すべき乎。

(三)

寺内内閣成立後、十有五ヶ月の政績中に於て、彼の滿韓鐵道の統一と、山東省に民政署を設置したることも、また稍々注目を惹くものたり、然れども其の前者が國内に於て一部の反對論を引起したるのみならず、事實上幾許の効果なきに拘らず、却つて支那人をして、一種の猜忌を生ぜしめしは惜むべし、後者は寺内内閣の心事を暗示するものならんと雖も、初めより支那政府に内議せざりしがため、今や其の抗議に逢ふて行詰まりの形に在るも異とせざる可らず、吾人は素より之を以て失敗なりと酷論するを欲せずと雖も、また成功として賛美することを能はざるを惜む。

歐洲の大戰は、一面より視て實に一種の兵器戰爭也、巨砲の外に、毒瓦斯、火焔液を始め、タンク、自動車の如き無限の効果を奏せしものあり、之を防ぐがため、また新式の鐵條網、鐵兜その他有らゆる器械あり、塹壕内の衞生設備の如き、また嚴峻に堪えざるもの多し、殊に飛行器の効力の偉大なる、皆

に攻防に、恰かも此の大戰をして一種の制空權爭奪戰たらしめしが如き觀なきに非ず、隨つてその種類の多様にして、而して操縱の巧妙なる實に豫想以上とす、今我が帝國の陸軍は、その器械の何物をも準備しありや、幾んど一も之なきには非ざる乎、殊にその唯一とも目すべき飛行器が、墜落に亞ぐに墜落を以てし、飛行器といへば、恰かも墜落すべきものゝ如く思ひ做さるゝに至りしは何ぞ、器械粗惡なる乎、軍人の操縱拙劣なる乎、抑もまた總て然る乎、若し斯の如くにして而して改むるなくんば、我が精兵も竟に奈何ともす可らず、如何に雄將猛卒なるも、赤手空拳を以て敵に當る能はざれば也、吾人の聞く所によれば、陸軍は七八ヶ年繼續事業として、總額約三億圓内外の兵器改良器を大正七年度豫算に要求すべしといふ、米國が唯飛行器の建造のみに十餘億圓を支出せんとするに視て、貧弱自から憫まざるを得ずと雖も、陸軍飛行器の狀態現在の如くにして、果して國民をして軍器改良費に同意せしめ得るや否や、、吾人は之を以て必ずしも寺内内閣のみの責任とするものに非ずと雖も、世に軍閥内閣と稱せらるゝまでに軍事に精しかるべき内閣の下に於て、陸軍飛行隊の成績不良を極むるを目擊しては、その所謂軍器改良なるものにも、多少の懸念なきを得ざるのみ。

斯くして陸軍の兵器大改良（大と稱するは太だしく不當ならん）に要する費額を始め、太だ切要するべき海軍費をも包含する大正七年度の豫算案は如何、財界の形勢將さに轉換せんとする時、政府は收入の前途に過度の樂觀を敢てせざる乎、一時剩餘金の巨額（五年度以降一億を超ゆべし）なるに慢じて、過大に政費を計上するの弊なき乎、第四十議會に於ける問題は、單に豫算案のみに視るも僂指に堪えざらんとす、何ぞ況んや寺内内閣の實行せる海軍の地中海出動以來、日米の共同宣言を公布したる結果、

太平洋警備の責任を加へたると、露國及び伊太利の形勢の不安たるとに由て、益々其の費額を加重すること必然なるべきをや。

有體にいへば、過去一ヶ年有餘間の政績を回顧するに、功ありと雖も失もまた多く、如何に好意友情を以て贔屓目に視るも、功過相半すとより以上に稱すると能はさるべし、殊に人心の趨向に注意するもの何時までも現狀維持に滿足する能はずして、必らずや局面打破を熱望せさるを得ざるならん、單に人情よりいふも是れ當然のみ、何ぞ況んや中夜に雞聲を聽て蹶起する有志の徒をや、現狀打破は今や内閣に反對する黨人のみの計圖に非ず。

（四）

政局の現狀打破を計畫するものに、二種の立場あるとを逸す可らず、其の一はいふまでもなく擧國一致論にして、他の一は即ち政黨内閣主義に基く。

擧國一致論は、大隈内閣時代にも政府側より唱導せられ、殊に寺内内閣は、其の成立の當初より之を高唱したりき、然れども寺内内閣成立の事實に徴するに、彼れは擧國一致を實行し得べき資格を缺けり、他なし、擧國一致と著るしく矛盾したる事情あつたれば也、寺内伯その人は、素より其の謀議にも與らざるべく、之を與かり知らば寧ろ頻蹙を禁ぜざりしならんと信ぜらるゝも、伯の關係及び閣内の有志者中には、大隈内閣を仆すに焦慮し躁急する餘、國惡を忌むの箴言をすら破りて、彼の鄭家屯問題を提げ來り、内外より挾撃して痛く一部心ある者の反感を挑發したりき、凡そ此の種の運動までも敢てして、政權を爭へるものが、假令口に擧國一致を唱ふるも、單に自家の權勢維持のために外ならざることは、

天下の齊しく認むる所ならん、吾人は寺内伯の初心を點檢して、其の閣僚の撰任に少からず心外の點ありしを諒察す、隨つて苦心したる臨時外交調査會に擧國一致の實を擧げ得ずして、寧ろ其の計畫の副産たるべき政黨懐柔が却つて主要の目的となれるを看て、已むを得ざる必然の歸結と做す。

唯だ擧國一致の必要は、今猶ほ昨の如し、否、今や歐洲の形勢緊張せるに由て、益々この切要を加へ來れり、試みに伊太利及び露西亞の情況を視よ、獨將マッケンゼン一呼して南下すれば、伊軍長蛇の陣形忽ちにして崩れ、今や豊沃なるヴェネチュアの平原を敵手に委し、遠く退きて守禦するの外なからんとす、米國は資本を以て、英佛は兵力を以て、共に極力之を援助すべしといふも、敵は內線作戰の便を有して、咄嗟に大兵を用ひ得るに反し、我れは陸路一條の鐵道と、敵潜水艇の危險多き地中海を經て軍隊を輸送せざる可らざる不利益あり、若し敵にして冬間を利用し、其の大兵を擁して、最大得意とする野戰により長驅して伊國を擊滅するの威を示さば、其の運命や測る可らず。

露國勞兵會のマキシマリスト派は、一び暴力を以てケーレンスキー政府を顚覆し、直ちに敵と三ケ月間の休戰を約せんとし、其の間順次に媾和の成立を宣言したるも、レーニン其の人に信用なく、ミニマリスト派を始め哥薩克その他多く之に同ぜざりしため、彼等沒落して、ケーレンスキー再びペトログラアドを回復したといふも、露國本來の革命は、農地分配にあらずんば其の眞目的を達し能はざるを以て、政局の將來豫測する能はず、何時單獨媾和を成すべきや、また幾んど知る可らざる也。

露國にして若し單獨媾和を成さんか、素より一の中立國に外ならずと雖も、倫敦宣言の違犯者として條約破棄の責任あり、聯合國は其の責任を問ふため、竟に露國に宣戰することなきを必せず、此の場合に

於て、獨逸の精力を分割せしめて、其の勢力を拘制するため、主として日本を促かし、露國に[illegible]陸より襲撃せんことを提議せん、若し果して然らば、我が國は海陸軍を擧げて露國を討たざる可らず、海上よりは浦鹽斯德を攻略し、陸上に在ては、哈爾賓その他を占領して、露軍は勿論、獨墺軍ともまた對戰せざるを得ざるべし。

假令然らざるも、伊太利援助の影響として、英佛米の諸國は、更に日本の軍事行動を要望し來りて、我れ或は竟に之を拒否するよ能はざるなきを必せず、我が國民中の心あるものが將さに開かるべき巴里會議に最深の注意を怠らざるは此のためならずや。

若し或は我が聯合與國にして、伊太利及び露西亞の形勢を奈何ともする能はずして、竟に一般的に媾和せん乎、其の表面の名義の如何なるにせよ、事茲に至りては、全く聯合國の敗北也、其の媾和條件が直接我れに如何なる大痛擊を與ふる乎、抑もまた媾和成立以後、國際政局の推移は、我が國をして如何なる勢に立到らしむべき乎、凡そ此等の點より審思するに、和戰孰れに決するにせよ、我れは重大なる立場に在り、一國の智勇辨力を傾倒するも或は及ばざらんとす、乃ち擧國一致の極めて切實なる、殆んど言を俟たざるのみ。

然れども寺内内閣不幸にして、擧國一致を實行するの資格なしとせば、餘儀なく之を引退せしめて、別に眞成なる擧國一致内閣を造るの外なし、唯だ夫れ擧國一致也、現在の有らゆる政黨政派を包容するは勿論官僚と雖もまた除外す可らず、官僚なるもの本來國民の多數に悅ばれざる傾向掩ふ可らずと雖も、其の材幹に富める、且の政界の諸方面に勢力あるに於て、また實に根據ある政黨と齊しく、政局に於

無視す可らず、随つて眞の擧國一致には、斷じて之をも包容せざる可らざる也。

（五）

歐洲大戰の經過より判じて、和戰孰れに決するも、我が國の地位の重大なる素より異議なく、此がため何物をも犧牲として最善を盡さざる可らざること、亦同感なりと雖も、此がため擧國一致の外に策なしとし、擧國一致の名を以て、官僚をも包容するの要なしと做し、寧ろ此の場合に於て、政黨内閣を完成して、以て立憲主義多年の宿志を遂ぐべしとするものは、即ち政黨内閣論者也。

彼等は以爲らく、歐洲の大戰は、巨大なる資本を費消し、多くの軍器を使用して、科學と工業との殆んど最大能力を發揮せしめ、有らゆる發明を應用しつゝあるに於て、殆んど資本戰、發明戰、器械戰、化學戰、工業戰の觀ありと雖も、最も貴重にして、また最も悲慘なる犧牲は人命に在り、而して此の最も貴重なる人命を最も多く犧牲としたるものは下級國民にして、彼等は是より自覺して、現在及び將來に十二分に其の權利を伸張すべく、その結果として、政治的、社會的、經濟的に大なる改革を視るべく、殊に多數國民の政治上に於ける勢力は、軍國の間、政府者の猛斷果決、恰かも專制の暴君の如くなると對照して微妙の作用あり、政府者が總てを勇斷果決して遲疑することなく、恰かも專制の暴君の如くなるを得る、一に斯の多數國民の理解承認を背景として然るのみ、是れ殊に注意すべき要點にして、我が國また、政府者をして有力ならしめ、以て善謀善斷、其の技能を活用せしめんとせば、何よりも國民と沒交渉なる、否、國民の後援を有せざる官僚内閣を排斥して、更に替ゆるに直接國民を基礎とする政黨内閣を以てするに如かず、是れ抑も世界の大勢に順應する所以にして、今日尙ほ藩閥官僚をして政權を把

らしむるが如きは、實に一種の時代錯誤のみ、思へ、米國と共同宣言を發せる我が寺内内閣が、彼れの平和主義、民本主義（民主主義と稱すれば直ちに共和主義と誤解するものあるを以て、殊に民本なる名稱を用ゆ）なるに對して、專制主義、官僚主義なるは、寧ろ異樣なるコントラストにして、即ち是れ大なる皮肉ならずや、速かに政黨内閣を打立てゝ、我れまた進歩主義、民本主義、平和主義なることを示現せざる可からずと。

彼等の官僚觀に曰く『年月は官僚のため墓穴を堀りつゝあり、官僚の中、實に材人多し、伊東子、平田子は其の最も雄なるものにして、寺内伯、清浦子、後藤男、田男、仲小路氏の如きも傑出者たり、金子子、末松子、都筑男、有松氏等また國家有要の材也、然かも世間に公道する白髮は、彼等の頭上を見舞ふことを忘れず、彼等は衰容漸く頽然たるのみならず、其の尙ほ用ゆるに足ると做すものは、竟に進みて政黨に歸化すべし、彼等以下の少壯官僚に至ては、政治を志す以上、相率ゐて政黨に來り投ぜんのみ、今にして彼等の存在を認むるがため、之をも包容せんとするは迂なり、彼等が過去に於ける政治上の徑路を思へ、素より彼等を敵視するに足らず、また之を撲滅するの要あらず、之を度外に措かば、彼等は乃ち自から來りて黨人に歸化するか、然らずんば墓穴に隱れて竟に其の姿を消滅せしむべし』と。

彼等は斯くして官僚をも包容すべしとする擧國一致論に左袒せず、却つて政黨内閣論を主張す、而して其の間また自ら二種の別あり、第一は既成政黨を融合渾和して而して然る後政黨内閣を樹立せんとし、第二は二大政黨對立を理想として、先づ政友會をして政局を擔當せしめんとす、その第一は稍々擧國一致論と近似すると別に說明を俟たざるべし。

（六）

第一の政黨内閣論を少しく具體的にいへば、現在の政友會と憲政會とを合同せしめ、國民黨また欲せば之をも迎へて、茲に一大政黨を作り、其の力を以て純乎なる政黨内閣を組織し、原氏を首相に、加藤子を外務當局たらしめ、國民の後援によりて政局を刷振し、和戰孰れにも極めて有力に其の手腕を發揮せしめんと欲するに在り、英佛孰れに於ても、各政派一致して國事に當るの現狀は、執て以て我が政黨内閣の範とすべし。

唯だ茲に甲の政黨あれば、別に乙の政黨出でて之と對抗し、以て國政に對する切磋琢磨の作用を爲すや必然也、卽ち政友憲政の兩黨合同するも、他の官僚その他の勢力また一致して一政黨を作らば、茲に兩黨對峙して、理想的に政黨政治の實行を看るべしとは、第一種論者の見解也。

今の政友會中には、他日政變あるに際し、平田子若し元老等より推立せらるゝが如きあらんか、直ちに憲政黨と相結びて政友會を一蹴すべしと做し、之を畏怖するがため、元老等の歡心を繋ぐに孜々とし、敢て藩閥官僚に公然對峙するに至らずと解する者あり、然れども憲政會の總裁加藤子が、元老より推立せらるゝ、平田子と提携せざることは、尙ほ牡鷄の竟に雛卵を孵化せざるが如きのみ、而して政友會が之を杞憂するは、畢竟他の離間中傷に畏縮するのみ、唯だ黨人の間、尙ほ此の種の杞憂を懷くもの多く、必らずしも政友會の一部をのみ嗤ふ可らず、是れ既成政黨合同論の起る理由の一ならざらんや。

第二の政黨内閣論は、二大政黨對立を理想と爲し、此のために政友會と憲政會とあるは卽ち理想實現に至便なりとし、先づ現在に於て最多數黨たる政友會をして純然たる一政黨内閣を組織せしむべしとす、

但し憲政會を以て、其の後を承くべきものと爲し、由て以て憲政會をして十分に政友會内閣の成立に盡力せしめ、國民と共に、其の前路の荊棘を苅除せしむるを條件とす、彼等は以爲らく、斯の如くするにあらずんば、何の日か果して政黨内閣の成立を看るに至らんや、憲政會は宜しく國民と共に、政友會を援けて藩閥官僚と反抗對敵せしめ、共に倶に決戰すべし、或る問題に由ては乃ち兩黨一致して官僚派と衝突すべし、假令議會の解散に會ふも、兩黨並馳せば、何者が能く得て之を破らんや、官僚派が城門を開くや論なきのみと。

彼等は政友會が所謂圓滿授受の名義を以て、官僚派より後繼内閣を托せらるゝを非とす、蓋し斯の如くすれば、官僚派より恩を估られたる政友會は、或は永く彼等の前に頭を擡け得ざればなり、抑ゝ是れ政黨内閣の出現に對する一種の汚辱にして、實に甚だ恥ぢざるを得ず、苟くも堂々乎として政黨内閣を成立せしめんとするもの、大權の發動の外、何ぞ甘んじて官僚一派の賣恩を甘受す可んやと主張す、畢竟名分を重んずる感情論に過ぎずと雖も、政友會のためには、また一の壯烈なる叫びならずんばあらず。

政友會にして獨力以て内閣を組織せんか、現在衆議院に於ける百六十の議席のみを以てしては、頗ぶる不安を感ぜざるを得ずと雖も、新政會員中五十餘人の内、密かに心を政友會に寄するものあり、然らざるも先天的に御用議員として、如何なる内閣にも忠勤を抽んでんとするものも少からざるのみならず、國民黨とは最も提携し得べき可能性を有す、故に政友會内閣假令官僚派を敵に廻すも、憲政會にして苟くも是を是とし非を非とする態度を取り、殊に政黨内閣の成立と發達とを助成する誠意だにあらば、能く其の懷抱する所の見を遂行するを妨げず、若し施設宜しきを得ずして民心を失はん乎、即ち快く政

を憲政會に讓り、斯くして二大政黨對立して、以て理想的に政黨政治を實行すべきのみ、是れ最も簡明直截に政黨内閣主義を實現する所以にして、故らに各黨派を合同せしむるの煩を要せずといふこと、是れ第二論者の主張の要旨也。

巷間傳ふる所によれば、最近に成立したる新政會中の策士等は、同會の竟に成りし結果として、彼の國民黨が官僚及び黨人の間に立ちて、キャスチングボートを握るの地位を喪へるを憫れみ、國民黨と新政會とを合同せしめ、尚ほ政友、憲政の兩黨中より多少の頭數を拉し來りて、以て寺内内閣の後繼たらんことを期待し、而して伊東子後藤男實にその帷幕裏に在り、卽ち來るべき内閣には、伊東子を首班とし、後藤、犬養、關の顔觸をその中堅たらしむべしといひ、政友憲政の兩黨中、伊東子後藤男の系統者を羅致し得べしと做すといふ、殆んど夢の如き空想也、今の黨人如何に輕浮なるも、何ぞ斯る策略に翻弄せられんや、抑もまた多年黨界に在りて一方の雄たる犬養氏その人、如何ぞ此の計策に乘る可んや。

唯だ現狀打破のため、擧國一致論と、政黨内閣實現說（第一と第二とも）とは、理義共に不順ならざるを以て、來るべき議會前後より、漸く其の鋒鋩を露はさんことは、今より豫期して多く謬り莫かるべし。

（七）

政界には詭變多く、黨人また權略を好むこと食色よりも太だしきものあり、啻だに灰吹より龍を出し、瓢簞より駒を放つのみに止まらざるを以て、隨つて謠言蜚語續出し、殆んど應接に暇あらざらんとするや想像に難からず、殊に近時財界の變動に伴ふて、一部民心の漸く倦めるあり、關西方面に於ける非内

閣氣焔また輕視すべからず、而して之に乘じて政友及び憲政の兩大黨を始め、國民黨と雖もまた競ふて機略をその間に逞ふし、有らゆる勢力と機會とを利用すべし、然れども國民にして眞に現狀打破を欲するに至らば、其の結着する所や知るべきのみ、吾人は素より擧國一致說と政黨內閣論との何れをも可否するを欲せず、また果して何れが民心に應じ形勢に順じて竟に事實となるかを豫斷し能はずと雖も、之を國際關係に視、民心の推移に徵するに、政局の將來の大要此の外に出でざるを信ずるのみ、唯だ此の說にして若し政界を觀測する人に取て多少の參考たるを得ば、則ち以て足れりとせん、然り、斯の世界の大勢の彌よ緊張し來る重要の時會に際して、人心を新たにするがためにも、現狀打破を必須とせば、宜しく誠を推し公を乘りて玆に政局を更改し、有力にして且つ有能なる政府を押立て、國民の多數を擧げて之を後援し、政事家をしてその智勇辯力を傾倒せしむるに止まらず、有らゆる階級をして奮勵努力、その能率の最大限度を發揮せしめて、以て國運の大恢弘を期せざる可らず、私情卑心を以て事を圖るを許さゞる也。(十一月十七日稿)

社會主義者を退治せよ

青柳有美

珠數さら〱と押しもんで

私の手には今、珠數がある。私の左の腕首には珠數が懸つてる。禪宗の珠數でも無い。法華宗の珠數でも無い。浄土宗の珠數でも、眞宗の珠數でも無いのである。八宗の珠數だ通佛教の珠數だ。私が外出に當つて必ず珠數を離さぬ事に決めたのは、去んぬる春の二月末頃からだ。釋宗演老師に歸依して、俄に三寶を尊崇する心を起したからか。爾うでは無い。私が耶蘇教徒にして佛教徒、佛教徒にして耶蘇徒であるのは、隨分古い事だ。耶蘇教會の教職に就いてた頃から、既に爾うであつたのだ。今私の手に懸つてる珠數は、決して佛教のシムボルで無い。惡靈退散御祈禱の爲めである。

「抑是は、桓武天皇九代の後裔、平知盛の幽靈なり」と物凄く名乘をあげて、惡逆無道を重ね神明佛陀の冥威に背き天命によつて西海に亡びし平家一門の月卿雲客、雲霞の如く浪に浮ぶ惡靈の姿と現じ、潮を蹴立て惡風を吹きかけ、押し寄せ押し寄せ、義經主從を海に沈めんとあせつた時に、辨慶珠數さら〱と押しもんで、東方降三世、南方軍荼利夜叉、西方大威德、北方金剛夜叉明王、中央大聖不動明王の索にかけて祈れば、流石の惡靈も次第々々に遠ざかり、遂には跡白浪と退散に及んだとは、謠曲「船辨慶」の故事だ。私は私の手にある珠數を押しもんで、惡逆無道を重ね神明佛陀の冥威に背く大正聖代の惡靈を退治せんとするのである。私は「船辨慶」の辨慶を大正の今日に學ばんとして、珠數を左の腕首に懸けてるのだ。

視よ、今の世の恐ろしき惡靈を。あゝ恐ろしき惡靈かな——惡靈その名を社會主義者と謂ふ。所謂社會主

義者は實に恐ろしいものである。眞正の社會主義者が、いろ〳〵と高遠の理想を說き、學者の如く權威ある者の如く豫言者の如く慈悲忍辱を以つて世に臨んだのは外國に於ける昔の事（日本では伊藤證信氏）だ。今の日本に於ける所謂社會主義者は卽ち然らず、ゴロツキの如く腕力ある者の如く野獸の如く同喝嘲笑を以つて社會を惡導せんとするのである。そのモツトウは「毆打つてしまへ」である。毆打られるば痛い。痛が出來る。傷も付く。若しも急所を毆打られでもしたら、大事な一命にも關する。實に恐ろしい事だ。然し、私の細いステツキでは、所謂社會主義者の錚々たる連中が好んで攜ふる太いステツキと渡り合つても、到底勝てる見込が無い。猶ほ一本の筆が二本の箸に敵し得ざるが如しだ。のみならず、所謂社會主義者は、私の知らぬ佛蘭西語を解し、露西亞の事情にも通じ、佛蘭西人の名やら露西亞人の名を私よりも、より多く知つてムる。又、私の讀んだ事の無い書物をも讀んで居る。その上、言論にかけては、孰れも無類の能者で、堅白異同の辯を弄し、是又、私などの到底及び得ざる處だ。迚ても太刀打が能きぬのである。所謂社會主義者を調伏せんと糞力味に力む私も、「無智」の一喝を食らへば風前の燈——忽ち彼等の天井打つ鼻の孔より噴き出す鼻息に吹き飛ばされ、小さく縮こまつてしまはねばならなくなる。大正の所謂社會主義者は、私の讀んで居らぬ書物を、果して幾萬冊讀んでムるのか、又私の知つて居らぬ露西亞人と佛蘭西人との名を、如何ほど多く知つてムるのか、彼等の所謂無智とやらなる私なぞに、到底測り得られぬものだとすれば、辨慶の故智に慣ひ珠數さら〳〵と押しもんで心靜かに、社會主義者の名乘を揚ぐる惡靈退散の御祈禱でもするより他に、所謂社會主義者退治の妙案も無いでは無いか。殊に私は、職業上の關係から、所謂社會主義者と日々接觸すべく餘儀無くされる。私の近邊には所謂社會主義の空氣が漲つてる。是等の人々と一々議論を戰はして居つたのでは、そんな事にあつたら時間を潰ぶされてしまつて、肝腎の職業を放擲せねばならなくなるのだ。

進帳」の富樫左衛門では無いが、あーら六づかしや問答無益——這個だ々々！と珠數さら〳〵と押しもんで見せるのが何より輕便の至りと、二月の末頃以來外出に當つて私は、必ず珠數を持ち廻る事にしたのである。

所謂社會主義者は、全く以つて物騷なものだ。何んでも彼んでも「無」にしてしまはうといふのだ。言ふのは寧ろ遠慮するが、行はうとするのだ。政府を無にし、道德を無にし、宗教を無にし、秩序を無にし、たゞ自分と惚れてる女（或は男、それも單に惚れてる間だけ）と、惰けても與れる給料と軍人遺族扶助料とだけ（能ふべくんば親の財産も）を「有」にして置き我儘勝手氣放題のあるつたけを盡くし、葬式で人が泣いてるのを見ても氣の毒なりと思はず、却つて無智なりとして之を笑ひ、人が羽織を着て出かける處へは態々ドテラを着て出席し、それで「無智の馬鹿共を輕蔑してやつた」と、高くもあらぬ鼻を蠢動かすのが、是れ大正の所謂社會主義者である。何んと恐ろしい物騷な輩ではムらぬか。こんな事は迚ても人間の能きる業でない。惡靈にして初めて敢てし得る處だ。珠數でも押しもんで退散の御祈禱をするより、私には全く他に藝當が無いのである。忠君愛國尊王奉佛——惡靈退散々々々々！

アカンベイを得意とする仲間

社會主義とは、讀んで字の如く、一私人の利益幸福を多少犠牲に供しても、私人の屬する社會の利益幸福を増進せんとするに鋭意する主義で、其極致は曾つて伊藤證信氏の唱道せる「無我の愛」に達すべきものだらうと思つてたのは、全く私が無智なるの致す處であつた。近年の進歩せる社會主義者は、斯る社會主義を、眞社會主義と稱して輕蔑し、斯る主義に拘泥する者を、大に嘲り笑ふさうである。然らば、今日の所謂社會主義者は、僞社會主義者と稱せらるべきものだが、私は今茲に眞社會主義と僞社會主義とを比較し、その是非を論ぜんとする意を毛頭も持つてるものでは無い。又、所謂社會主義者の讀んでる書物を讀んで居らず、所謂社會主義者の知つてるほどに露西亞人と佛蘭西人との名を多く知つて居らぬ私が、若し假に爾んな事でもした

ら、忽ち「無智蒙昧の輩に……」を浴びせかけられ、「毆打つてしまへ」の權幕に吹き飛はされてしまう危險がある。あゝ〳〵大正日本の所謂社會主義者は、其眼付からして物騷で恐ろしい。グッと睨んで「見え」を切る處なんかと來たら、九代目團十郞も及ばぬほどな技倆だと賞めれば、賞め得られぬでも無からうが、人に接する每に、あれほどまでに態々目蓋に力を入れて、鳥居流の似顏繪もどきに大きな眼目を剝いて見せたり、一寸外出するにも太いステッキを携帶して之をガチャ〳〵させたりせねば、世の中の馬鹿共を威かし得られぬものと想つてる所謂社會主義者の心事は、その實まことに弱いものと謂はねばならぬ。

僞社會主義(フォールス・ソーシャリズム)の果して善いものか惡るいものかは暫く別問題としても、所謂社會主義者の驕慢不遜なる態度には、御仲間以外の者なら誰でも胸を惡るくするだらう。彼等の間に專ら行はるゝ言葉に「輕蔑してやる」とか、「輕蔑してやつた」とかいふ術語がある。純朴で喧嘩能力に乏しい者を侮つたり、慈悲忍辱の心懸ある者を辱じめたりなんぞして、アカンベイをかいて見せるやうな眞似をする事を「輕蔑してやる」と稱するのだが、こんな事は獶猴の爲す業で人間の爲すべき事ではあるまい。斯んな巫山戲た眞似を繰り返へして揚々得意の色ある所謂社會主義者は、人として實に小つぽけなものだ。お話にも何んにもならぬほど小つぽけなもの(之を彼是穢に支る私は一層小つぽけだが)だ。所謂社會主義者の持病は、何んでも彼んでも威張りたい――威張つて見せたいといふ事である。世間が威張らせてくれぬから、自ら進んで威張らうとするのだらう。他人が叮寧に腰を屈めて辭儀しても、之に應じて辭儀せぬのみか、却つて胸を張り出してソックリ返へり、傲然と構へてエラ相な態度をして見せるのは所謂社會主義者の鏘々たる者である。それで當人のみは、大に對手方を輕蔑してやつた積らしいが、豈に計らんや却つて自分で自分を輕蔑して居るのだ。所謂社會主義者は、之によつて毫も豪くならず、アベコベに小さな人間になつてしまうのである。實に御氣の毒のわけだ。

所謂社會主義者は、他人から憐まれて、氣の毒がられるのを大嫌ひなさうであるが「輕蔑してやる」のを得意にして豪がるうちは、如何に大嫌ひでも、世間では那的所謂社會主義者を、大に憐み大に氣の毒がらざるを得無くなる。總じて今の所謂社會主義者には、妙な事を豪がりたがる癖がある。大祭日や祝日に、國旗が戸々に掲揚せられて居るのを見れば、鼻の頭に（口の邊りに非らず）惡魔の如き笑ひを浮かべてせゝら笑ひ「フム……忠君愛國面をして旗なんか皆な拙して居らア……」と、國旗に侮辱を加へ、之を掲揚する國民を輕蔑し、それで一ト角の見識でもある豪い人物になつたかの如く心得、傲然と構へて威風四隣を拂へる如き顏付をして見せ、以つて大に得意がるんだから、今の所謂社會主義者も、實のところ甚だアマイものだ。

然し、所謂社會主義者をして斯く驕慢不遜、傍若無人――「輕蔑してやる」のを職業とするヴエガボンドたるに至らしめたのには、政府者にも過失がある。政府者が所謂社會主義者に公然と尾行刑事を附けて置くのが惡るいのだ。彼等は先づ「已れは之ほどまでに府者より重大視せらるゝ豪い男（若くは女）だ」と自惚れあがつて増長し、時に「刑事を卷いてやつた」とか何んだとかと、聲高らかに得意の鼻を蠢動かし、尾行巡査を輕蔑する事を覺へるのが、抑々彼等に驕慢不遜の態度を持するに至らしめた第一歩である。甄別された人間になつた積らしい。須らく公然と刑事を尾行させる如き事を爲さず、察偵を放つて彼等平素の擧動を遺漏無く探査し、少しでも彼等に不穩の行動があると知らば何も遠慮するには及ばぬ――片つ端から檢擧してフン縛り、大日本帝國の法律に照らしドシ〳〵處分するが可いのである。猛獸は檻に入れて置くべきもので、放し飼に致すべきでは無い。公然と刑事を尾行させるのは、徒に彼等をして其驕慢不遜を増長せしむるのみで、實際の効果に乏しい憾みがある。

澁澤男爵閣下とて貧乏なり

社會はお互に持ちつ持たれつである。人は互ひに感謝し合つて、それで初めて社會も圓滿に運營せられて

ゆくのだ。與ふる者は右の手に於て爲せる事を左の手に知らしめず、受くる者は假令與ふる者に多少の私心あるを知つても、感謝して恩物を受くる間に、人情の精華が發し、義理因縁を生じ、人口の多くなつた今日の社會も、漸く無事平穩に治まつてゆくのである。然るに、大正の所謂社會主義者なるものには、些かたりとも感恩報謝の念が無い。給料を拂つてくれる主人を難有いなぞとは素より思はぬ。資本家は勝手に自己の私利私福を增進する爲に給料を拂らうのだから、乃公樣は御貰らひ給はるのだ、と謂つたやうな傲然たる態度だ。それで、いくら給料を昇げてやつても、依然として不足、依然として不滿、依然として、「貧乏」を口に絶たぬのである。

私は曾つて澁澤男爵閣下（私は資本家の走狗ゆゑ斯く資本家を尊崇する）の口から「我々貧乏人の力では迚ても足らぬから、昨今專ら富豪の間を遊說中です」との言葉を聞いた事がある。小學校の兒童時代には、日本一の大金滿家の如くに心得てた澁澤男爵の口から、斯く「我々貧乏人」の語を聞くに至つては、全く意外の感無き能はずだつたが、澁澤男爵の身になられてみれば、東京市養育院の事業や理化學研究所ぐらゐは、他を煩さず獨力で經營してゆきたいと思はれもするだらう。然るに自分の家產では迚ても其れができぬから、私が聞いて意外とする如き「我々貧乏人……」の歎聲を發せざるを得無くもなられるのだらう。斯う稽へれば、澁澤男爵閣下は自ら言はるる通り全くの貧乏人である。

大正の所謂社會主義者は、口の端や筆の端でこそ、弱者に同情し、貧者の生活を向上させたいやうな事を言つたり書いたりもするが、その實、彌次つた加勢する場合以外、眼中に弱者も貧者も無く、「社會主義」とは名ばかりで眼中に社會など一切置かず、自分の私利私福を增進する爲めには、無邪氣な多血質の貧しい女をダマクラかし、恰も其女を愛するものゝ如くに見せかけて、其女を僞り巧に其の女の弱點に乘じ、多くもあらぬ衣類を質にまで入れて、之に金錢を才覺さ

その眞情と誠意との籠つた貴い金錢を摑むや、之を或る他の惚れた女と樂む費用に供して恥ぢず、その惚れた女と共に自動車を乘り廻して巫山戯散らすなど、言語道斷箆棒至極の沙汰を盡くし、それで「視よ、こゝが乃公の豪い處だ」と高慢チキの鼻蠢動したり、念入特別仕立上等のドテラを着込んで態々宴會に出かけたりなんかし「この世の馬鹿どもを輕蔑してやつた」と得意がり、他人の迷惑や不快など何んとも思はぬほどだから、少し弱い者があれば之に對するに暴慢を以てして虐使し、少し弱點のある者があれば之をユスつたり居直つたりし、全世界の人間が能きるものなら皆んな、ペストでクタばつてしまひ、自分と自分の好きな女とだけが生き殘り、全世界の富を自分一人だけで獨占し、遊樂、淫樂のあるつたけを盡くしたいのを理想とする暴君だ。いくら給金を貰らつたところで、難有いなぞいふ感謝の念を起すもので無い。澁澤男爵閣下の如く、克己復禮に努め、儉約を專らとし、あれほどの身代になられても、なほ「我々貧乏人」の數を漏らさるゝほどだとすれば「三千世界の烏を殺し、ぬしと朝寢がしてみたい」以上の贅澤を盡くさんとするを理想とし、三千世界の人間がペストで皆んな斃れ、贅澤用品と好きな女とだけは、大黑さんの萬年小槌のやうなもの（但し破損の憂ひ無き）から、自然にポロポロガラ〳〵無限に飛んで出で、三千世界の凡らゆる富を獨り占めのシメコノ兎にしてしまひ、貴族以上の暴君となり、それでも猶ほ未だ乃公のやうな豪い人間には不滿足であると、朝から晩までフクレツラをして四方八方へ當り散らし、電話の交換手へまでも「馬鹿！」を食らはせ、少し美くしさうな、賢こさうな、優しさうな女は、總て之を足下にヘイコラさせやうといふのが是れ實に大正の所謂社會主義者である。成るほど之れでは、惰けながら給料を頂戴しても、難有いと思はずいつまでたつても、不滿に次ぐに不滿を以てし「貧乏々々」ばかりを口にして、ストライキを煽動したり、居直りをやつたりせねばならぬ筈だ。

給料を貰らへば、之に伴ふ義務責任を生ずるのは廿

世紀の法で有が、義務責任に囚はれたりなんかするのは資本家の走狗を以つて甘んずる無智蒙昧なる人非人の爲ることで、人非人ならぬ本當の人間たる所謂社會主義者は氣の向いた時だけ、性分の欲するまゝに仕事を爲れば、それで他から彼是文句を言はれるべき筈の無いものなさうで、又所謂社會主義者の如く孰れも揃つて才學拔群にあらせらるゝ方々は、資本家の走狗を以つて甘んずる無智蒙昧なる人非人等の如く誠心誠意仕事などするに及ばず、會社の豪い重役などと同じやうに、何事に關係しても一寸其持前の智慧を借してやればそれで高い報酬を得られるだけの御立派な資格があるのなさうである。こんな調子だから感謝の念さへ無い所謂社會主義者に、報謝の念なぞのあらう筈が無い。

廿一紀になつたら、いざ知らぬ事――廿世紀も大日本帝國大正の今日に、こんなヤラズ・フンダクリを理想とする人非人ならぬ本當の人々樣に跋扈されて、處構はず鳥居流に大きな眼玉を剝いて「見え」を切られたり、驕慢不遜の態度でソックリ返へられたり、非式に來て笑はれたり、禮節を保つべき席へドテラで乘り込まれたり、大きなステッキを應接室でガチャ〳〵させられたり、一にも二にも「毆打つてしまへ」を叫ばれたりしては、資本家の走狗を以つて甘んずる臆病な陰辨慶の私なぞは、迚ても恐ろしくつて生きて居られるもので無い。陰辨慶是に於てか「勸進帳」の辨慶を學び、珠數さら〳〵と押しもんで「忠君愛國尊王奉佛――惡靈退散々々々々！」――これ所謂社會主義者退治の御祈禱なりだ。

所謂社會主義者は殘忍暴虐

米鹽の代となり、女房のコート代となり、子女の牛乳代となる俸給を下し給はる（私は資本家の走狗ゆえ斯く資本家を尊崇する）主人をさへ難有いとも何んとも思はず、時に嚇かしたり居直つたりこそすれ、主人に對する義務責任なんかは、テンで放擲して顧みず、主人の命令否な懇請をさへも、馬耳東風と心得るどころか「うるさくつて困る」とツラをフクらして嚇く〳〵の所謂社會主義者のことだから、彼等には素より

の恩、國家の恩、衆生の恩、天地の恩を難有く思ふなどの念は、露些かだに無く、斯る念があつたり、義務責任を思つたりする者、又良心に從つて行動したがる者を、却つて無智蒙昧なりと罵り、「感恩報謝」の念を根柢として設計せらるゝ組織、制度の出現を見れば、自分だけは大に他から人並み闘抜けて感恩され度、また大に報謝もされたい癖に、自分が他に對して感恩し報謝せねばならぬのが苦痛で堪まらぬところより、極力之が破壞に力め、一生ノラクラ（ノラクラの「ノラ」は新しい女の標本ノラと同音）して暮さん事をのみ心懸け、天下にナマケ者ほど豪い者は無いかの如くに威張り散らすのが、今の所謂社會主義者だ。全く以つて愛憎もコソも盡き果てゝしまふでは無いか。大正の所謂社會主義者のナマケ方は、太公望の魚釣りとは全然その性質を異にする。ただナマケるのだ。働く丈け損だからナマケる――ヤラズ・フンダクリが人生の理想だからナマケると謂はんばかりの調子でナマケるのである。

苟も「善」と名づけられ得る物なら、文物、制度、組織――義理人情は素よりいふまでも無く――何んでも彼んでも、叩き潰してしまはうとするのが、大正の所謂社會主義者である。苟も少しでも「善人」の傾向ある人だと見れば、極力之に反抗して其人を苦しめ、之を「輕蔑してやる」事に努力するのが大正の所謂社會主義者である。「善」と名のつく事物や「善人」の傾向ある人物に、立ち塞がつて居られては、我儘氣儘勝手放題な自由（自由とは一例を擧ぐれば寒中に帷子を着てプル〱慄々、暑中に綿入を着てダク〱汗を流す事なさうだ）ができぬからだ。何んでも「惡」と名の付く如き文物、制度、組織と「惡人」の傾向ある如き人物を以て、世の中を一杯にしたといふのが、今の所謂社會主義者の理想である。但し、その「惡」に向つては、如何に同胞を苦しましても差支無い、否な苦しませるほど結構だが、自分にだけは「善」を以てせよとの條件を附けるんだから、實にムシの佳い沙汰で、私の如き無智な臆病者は、開いた口が塞らなくなる。大正の

所謂社會主義者は、他人の苦しむのを視ては悦び、他人の泣くを視ては笑ひ、他人を苦しめぬ丈け損なやうに心得て居る。そして「私は私の道を歩ねまばなりません」と來るのだから、恐れ入つてしまはざるを得ぬ。大正の所謂社會主義者には、弱者貧者に對する些かの慈悲同情だに無く、唯あるものは冷酷な殘忍性と傍若無人の暴虐性ばかりだ。成るほど、これでは、太いステッキを携へて歩るく堂々たる五尺の男子たる癖に、虚僞の愛を以て弱い正直な女をダマクラかし、質入までさして作らせた金錢を其女より卷き揚げ、その金錢で他の女と巫山戲散らすぐらゐの殘忍暴虐を敢てし得らるる筈だ。全く以つて惡靈以上に恐ろしい大箆棒である。斯んな大棒箆な眞似を、チョイ／＼やられて堪まるものか。

苟にも高遠の理想を懷いて、新しい主義を宣傳しやうとならば、其人は豫言者の如く學者の如く權威ある者の如くあらねばならぬ。少くとも志士であらねばならぬ。然るに、今の所謂社會主義者、否な「所謂」付で無い社會主義者のうちにさへ、志士の面影あるものが殆んと無い（崇敬に値する二三憂國愛人の士もあるが）。稍々上等の部に屬する者でも、彌次以上に出でぬのだ。若し夫れ紛々たる所謂社會主義者に取つては、恐くＩ・Ｗ・Ｗ（I won't work）「私は働きたく無い」連中である。然し、彼等は曰ふ「維新の志士は皆な乃公等の如くであつた」と。今の所謂社會主義者は維新の志士を學んで、女をダマクラかし、働くだけ損だと考え、ユスリや居直りをやつてるものだと、到底私は考へ得られぬのである。又、今の所謂社會主義者は、人の顏を見さへすれば「無智だ」「蒙昧だ」と罵り「あんな無智な奴は毆打つてしまへ」と叫ぶのだが、果して大正の所謂社會主義者は、それほどまでの學者で、それほどまでの智者だらうか。その讀んだ書物は果して幾萬冊あるか。その才智は果して振天動地のものか。燃へてる火の中へ手を入るれば火傷をするものであるとの物理の初步をさへ知らず、社會主義で天地の理法をヒックり返へし得らるゝかの如く想つたり、ダマクラかして

置いた女に寢首をかゝれやうとするなぞは、餘り學者の沙汰であるとも、智者の沙汰であるとも言ひ得まい。

私は、大正の所謂社會主義者を根コソギ退治してしまはねば我々大日本帝國の國民は一日も枕を高ふして臥て居られぬものと想ふのだ。いつ何んなヒドイ目に遇はされるか測り知られぬのである。所謂社會主義者はどうしても退治してしまはねばならぬ。全く危險だ請ふ退治せよ。と謂つたところで、まさか暴に酬ゆるに暴を以てするわけにもかぬから、珠數さら〳〵と押しもんで、心靜に口のうちで、左の呪文を唱へよだ。

忠君愛國尊王奉佛惡靈退散々々々々！——

終に臨み私は、堺利彥氏を所謂社會主義者と認めず、寧ろ同氏を同氏が攻擊する資本家階級の人と認め、同氏の社會主義唱道も同氏の職業に過ぎざるものと認め同氏が創立せる第一次賣文社が同社內に所謂社會主義者の跳梁を見るに至つて、所謂社會主義の實現となり、爲に解散を餘議無くせられたるものなるべきを想ひ「所謂社會主義者の弊逐に第一次賣文社を解散せしめしか」の歎を發する者である事を付け加へて置く光榮を有する。然り所謂社會主義の結果は、常に解散である。如何なる惡政府でも無政府に優るといふのは、這裡の消息だ。

泰西名劇の上場に就いて島村抱月氏に訊す

小山內　薰

抱月氏足下。

頃日突然私があなたの所に送りました一靑年は今まで前例のない好遇を受けて、あなたの膝下に働いて

ゐるさうでございます。青年からはその後何の便りもありませんが、私はその事を洋畫家M氏から聞きました時、心の中で幾度かあなたに感謝いたしました。あの青年は演劇に就いて、何等の素養らしい素養を持つてゐるものではありません。唯、繪が少しかけると言ふだけで、教育も十分ではありますまい。體力も危ぶまれます。併し、彼は不幸な青年です。富有な家に生れながら、その幸福を受ける事の出來ない、不思議な運命の下に苦しんでゐる青年です。彼は唯「一生懸命に働く」といふ覺悟だけを持つて、あなたの側へ縋りに行つたのです。彼があなたの爲にどれだけの手助けとなる事が出來るか。それは甚だ心元ないと思ひます。彼は何者かをあなたの爲に背負ふよりは、寧ろ何者かをあなたの背に置く事だらうと存じます。併し、どうか見捨てずに彼を愛してやつて下さいまし。そして、一日も早く彼があなたの爲に、たとひ「釘の一本になりとも」なるやうにしてやつて下さいまし。

抱月氏足下。

私があの青年をあなたの所へ送りました時は、丁度私が藝術座の「生ける屍」について、或感想を時事新報に公にしてゐる時でした。私のその感想はあなた方にとつて決して愉快なものではありませんでした。それは私も承知してゐました。それ故、私はあの青年をあなたの所へ送ります時、少なからぬ遲疑を感じない譯には參りませんでした。しかも――しかもあなたは、唯の一度で快くあの青年を入れて下すつたのです。私はあなたの寛大に對して、　　感謝いたさなければなりませんでした。

抱月氏足下。

それにも關らず、私は再びあなたに向つて、この餘り愉快でない公開狀を書かなければならない事になりました。實際、かういふ事は決して愉快な事ではありません。不愉快極まる事です。併し、道の爲にはその不愉快をも堪へ忍ばなければなりません。私も堪へて書きます。どうか、あなたも堪へてお讀み下さいまし。

抱月氏足下。

私が時事新報に發表した『生ける屍』に就いての感想は、實に慌て切つたものでした。實際を言ひますと、私はあの感想の全體を、藝術座の初日の夜、家へ歸つてから、一氣に書いて了つたのです。それは四百字の原稿紙にしてやつと十枚にしかならぬ短い文章なのでした。ところが、人の惡い時事新報の編輯者は、それをさも大事なもの丶やうに、小さく小さくちぎつては、ほんの少し宛新聞へ出したのです。私は實際冷汗をかきました。あの感想が若し人に讀まれるなら、食前か食後に、初から終まで一氣に讀まれ丶ば、それで好いのでした。決して、細かく味はるべき文章ではありませんでした。言はば、ほんの一寸した思ひつきを、何の省慮もなしに書き流したといふだけのものでした。第一、私は三幕目までしか見てゐないで、批評らしいものを書くといふ事が厭でした。若し、ほんとに批評を書くなら、辛くても終の幕まで堪へて見てゐなければならなかつたのです。三幕目で歸つたといふ事が、どんなにあなた方を不愉快にしたか、それも「芝居」といふものを一つでもした事のある私には十分わかつてゐます。

私はこ丶まで書いて來て、「事實」を打ち明けなければならないやうな氣がして來ました。それは決して自家辯護の爲のみではありません。私の或友達の爲にも、是非それを告白しなければならないやうに思ふのです。

丁度、『生ける屍』の三幕目が終つた時でした。同じやうにあの芝居を見に來てゐた私の或友達は私の側へ威すやうに近寄つて來ました。

「もうあとは見ないでも好いだらう。」

友達は命令するやうに、かう言ひました。私は不思議に感じました。なぜと言へば、この友達は藝術座に對して深い同情を持つてゐる男でしたから。

「なぜだ。」

私がかう反問しますと、友達は言ひました。

「君はこの芝居の批評を書くさうだ。さつきから君の

様子を見てゐると、もう余程辛抱がし切れなくなつてゐるやうだ。君はきつとこの芝居を惡く言ふに違ひない。」

「決して惡く言ひたくはない。併し、あんまりひどい。併し、トルストイに對して、あんまりひどい。」

「それは分かつてゐる。原作と比べられては困るといふ事は、藝術座自身でも言つてゐるのだ。併し、又そこには已むに已まれぬ事情もあるのだから、どうかあんまりひどく書かないで呉れ給へ。」

「ひどく書きたいとは思はないが、どうもひどくなりさうだ。僕も新聞には約束して了つたし、さうかと言つて、思つただけの事は書かずにはゐられないし、少し困つてゐるのだ。」

「では、好いから、あとは見ずに歸り給へ。僕も一緒に歸るから。」

「でも、せめてもう一幕。」

「いや。もう澤山だ。もう澤山だ。」

友達のかう言ふのは、藝術座に對する私の非難を少しでも少なくしようとする「贔屓」らしい愛情からでした。それは私にもよく分かつてゐました。

私は眞面目な批評を書くといふ上から言へば、實際終まで見てゐたかつたのです。併し友達の藝術座に對する同情。それをも無視する事は出來ませんでした。友達の同情は女らしい同情です。ほんとの意味での同情ではないかも知れません。併し、やさしい同情です。涙の出るやうな有難い同情です。私はそれを輕蔑する事は出來ませんでした。

私は忽ちかう考へるやうになりました。自分がこの芝居のあとを見るといふ事は、藝術座に對して――と言ふよりは、寧ろ私の友達に對して――非常に殘酷な事だ。

さう思ふと、私は直ぐ友達の詞を納れました。そして逃げるやうに友達と一緒に劇場を出ました。

抱月氏足下。

私が「生ける屍」を三幕目までしか見なかつたのは、さういつた個人的な女らしい感情からだつたのです。

私は藝術座を輕蔑したのでもありません。トルストイに對する藝術座の冒瀆を怒つたからでもありません。私が途中で失禮したのは、トルストイに對しては寧ろ不親切だつたのです。藝術座に對しては、寧ろ親切(若しかういふ詞が使へれば)だつたのです。

然るにも關らず、私のあの感想は意外にもあなた方を怒らしたさうです。あの脚本の改作者たる川村花菱君も、「書き方が氣に入らない」とか言つて、大分怒つてゐたさうです。これは確な筋から聞きました。あなたも餘り愉快には思つてをられないといふ事です。それは私を三幕目で外へ連れ出した私の友達から聞きました。

勿論、あなた方がお怒りになるのを、私は無理だとは思ひません。私があなた方だつたとしても、あゝいつた感想を讀んだら、きつと怒つたらうと思ひます。

併し、「無理はない」といふ事と「正しい」といふ事とは違ひます。大變違ひます。

あなたにしても、私にしてもあの感想を讀んで怒るといふ事はないのです。若し怒つたら、それは惡い事です。なぜと言へば、あの感想には少しの「惡意」もないのですから。

私は唯トルストイの爲に書いたのです。日本の新しい芝居の爲に書いたのです。日本の芝居を眞面目なものにしようと考へてゐる人達の爲に書いたのです。

若し、その眞意が通らなかつたとすれば、それは私の書き方が惡かつたのです。そこで私はもう一遍何か書かなければならないやうな氣がして來たのです。

抱月氏足下。

私はもう齒に衣着せずに、何も彼も率直に言ひます。私の粗雜な筆は先輩に對する禮を失するかも知れません。併し、私の心持は決してそれを失つてはゐない積りです。私は唯「藝術」の爲に、日本の「演劇」の爲に、そしてその方面で大きな使命を持つてをられる筈のあなたの爲に書きます。

抱月氏足下。

一體、藝術座といふ劇團は何の爲に與つたのです

か。先づ、私はそれからあなたに伺ひたいと思ひます。

私はあなた方の一團が、何故坪内博士の文藝協會から分離したか、その理由を明かに知つてはをりません。その事件の起つたのは、丁度私が西洋から歸る前後だつたので、私は事情に通じない點が多いのです。そしていまだにそれははつきりせずにをります。

併し、私はかういふ事を信じてゐます。そして、それは全然間違ひではないと思つてゐます。それはあなた方があの劇團から分立した一つの重大な理由は、「脚本の選定問題」であつたといふ事です。

坪内博士はその當時脚本より寧ろ役者の技藝に重きを置いてをられたやうです。役者の藝の爲になるものなら、多少脚本としては低級なものでも我慢をするといふ傾向を持つてをられたやうです。然るに、あなたは反對でした(多分さうだつたと信じます)。役者の藝は未熟でも、近代の優秀な脚本を上場しなければならない。日本の芝居を本當の意味での芝居にするには、たとひ藝は拙くても、どしどし好いものを演じなければならない。あなたはさう思はれたのです。(坪内博士の意見とあなたの意見とを、比較論評するのが今の目的ではありません。それ故、それに就いて唯今何も申さずに置きます。私は唯私一箇として、その當時、坪内博士に對してよりは、あなたに對して同情を持つてゐたといふ事だけを申し上げて置けば宜しうございます。)

藝術座が出來ました。その第一回の出し物はマアテルリンクの「モンナ・ワンナ」と「内部」とでした。いづれも泰西近代の名作です。世界のどこの劇場へ出しても、決して恥づかしい脚本ではありません。私共にとつては、その少し前に文藝協會が出した沙翁の「ジユリアス・シイザア」などより、遙に貴い、遙に有難い出し物でした。

私は多大の期待を持つて有樂座へ出かけました。あの小さな劇場は、廊下から見物席から樂屋まで、緊張し切つてゐるやうに見えました。

演劇としての「モンナ・ワンナ」と「内部」とは

その時も決して私を滿足させはしませんでした。私はあの少しも哲學的でない『モンナ・ワンナ』の演じ方、理窟で堅め上げたやうな『内部』の演じ方を、堪らず不愉快に感じました。併し、飜譯された脚本その者は、丁寧過ぎる程原作に忠實でした。マアテルリンクは「技藝」なり「舞臺」なりで傷つけられても、決して「脚本」では傷つけられてゐませんでした。私はそれを喜びました。ほんとに喜びました。

それから間もなくの事でした。私があなた方の『海の夫人』を見ましたのは。

あれも「演劇」としては、堪らなく不滿足なものでした。殊に、獨逸で可なり好い演出を見て來たばかりだつた私は、二幕目あたりで、もうどうしても見てゐる事が出來なくなりました。總てがセンチメタリズムです。センチメンタリズムの外何物もないのです。勿論、イプセンにもセンチメンタリズムはあります――それは如何なる脚本にも絶無ではないでせう――併し、センチメンタリズムがイプセンの總てではありません。私は田中介二君だつたか誰だつたかの扮したツングストランドの話を聞いてゐると、もう我慢にも坐つてゐる事が出來なくなりました。

併し――併し、それにも關らず脚、本はやはり原作に忠實でした。イプセン自身に見せても、決して不滿は言ふまいと思ふ程忠實でした。名作を名作として、飽くまでも大事に演じてゐるといふ正直なところがありました。私は又それを喜びました。

間もなく私の見たのは、あなた方の『サロメ』でした。それは實に大膽な試みでした。シトラウスのオペラが出來て以來、ドラマとして演ぜられるといふ事は西洋でも少ない(宗教上からの禁止は別問題としても)あの難曲を、あなた方が日本の舞臺に移さうと企てた事――唯その事だけでも、私は痛快に感じました。しかも、その結果は可なりに立派なものでした。脚本にも、多少の削除はありましたが、決してオスカア・ワイルドを怒らせる程ではなかつたと思ひます。あの種類の脚本が實演に際して、多少の削除を蒙るのは、已

ひを得ない事です。

抱月氏足下。

私は記録を座右に置いて、この文章を書いてゐるのではありません。それ故、藝術座がその後どういふ芝居をどういふ順で演じて來たかを、こゝにはつきり書く事は出來ません。併し、藝術座がその當初に於いて、西洋近代の優秀な脚本を如何に忠實に演じつゝあつたかといふ事は、もうこれだけで十分に分かると存じます。藝術座はその名の示すが如く藝術的な――從つて非商業的な――劇場として興つたのでした。そして、立派にその困難な任務職責を果して來たのでした。

ところが、突然私を驚かしたのは、あなた方の『復活』でした。私は實際びつくりしました。なぜと言へば、それは今まであなた方の歩いて來た道とは、全く別な道なのですから。

小説を脚本に直して演ずるといふ事、それが既に眞面目な劇場の企つべき事ではありません。苟も小説が如何なる性質のものであり、脚本が如何なる性質のものであるかを知る以上、それは斷じて出來る事ではありません。二つは全く別のものです。どうしても、一つを他に變へる事の出來ないものです。私はさう思ひます。

モスクワの美術座が演出した『カラマゾフの兄弟』、それは歴史的に可なり有名になつてゐます。同じ都ののネヅロビン座が芝居にした『白痴』、それは私も見て可なりに動かされました。それにも關らず、私は小説を芝居にする事には反對です。ドストエフスキイは飽くまでも小説を書いたのです。芝居を書いたのではありません。芝居にされようと思つて小説を書いたのではありません。小説を小説として書いたのです。如何なる理由からも『カラマゾフの兄弟』や『白痴』を芝居にされるといふ事は、ドストエフスキイの喜ばなかつた事だらうと信じます。私が露西亞から歸つて後、美術座が同じ作者の小説『惡魔』を『ニコライ・スタフロギン』の名で演じた時も、ゴオリキイなどは色々な理由から大反對を稱へました。

小説――しかも、トルストイの『復活』のやうな、芝居としては到底許されない長い時間の心理的經過を持つた小說を芝居にするといふ事は、少しでも藝術に對して眞面目な尊敬を持つてゐる者の、決して企て得ざる事です。佛蘭西のバタイユが脚色した例があらうと、私はその例に服する事が出來ません。私は藝術座に抗議を申し込むやうに、アンリ・バタイユにも抗議を申し込みます。西洋でやつてゐるから、日本でもやつて好いといふ理由はありません。西洋でも惡い事は惡い事です。間違つた事は間違つた事です。惡い事、間違つた事は飽くまでも排斥しなければなりません。

しかも、あなた方の『復活』の脚色は、少しもトルストイに忠實なものではありませんでした。トルストイの精神にも、トルストイの藝術にも、少しも忠實なものではありませんでした。『モンナ・ワンナ』『內部』『海の夫人』『サロメ』などの作者に對して、あれ程の尊敬と誠實とを表示されたあなた方が、『復活』の作者トルストイに對しては一回の脫帽をさへ惜しんでゐるやうに見えました。私は奇異の感じに打たれました。若しや、あなた方はトルストイに對して「何か怨みを抱いて」ゐらるるのではないかと思つた位でした。

トルストイに對して、斯くも不親切だつたあなた方は、反對に見物――低級な見物――所謂、衆愚――に對して、今までにない親切をお見せになりました。あなた方は笑はうとして芝居へ來る見物を十分笑はせました。泣かうとして芝居へ來る見物を十分に泣かせました。中にも、あなた方が見物を喜ばせたものは、あの有名な「カチユウシャの唄」です。

ああ。「カチユウシャの唄」。それはトルストイでもありません。露西亞でもありません。日本の歌です。私どもが小學時代から頭へ深かく打ち込まれた所謂「唱歌」のセンチメンタリズムです。丁度、その時分獨逸から歸つて來た私の親友――彼は作曲家でした――は、あの歌を始めて聞いた時、恰もどぶ泥の匂を嗅ぐやうな感じがしたと言ひました。

しかも、「カチユシャの唄」は忽ち有名になりました。

東京は勿論、京都、大阪——凡そ何處に行つても、「わかれの辛さ」を聞かない土地はないやうになりました。もうさうなると、トルストイもありません。『復活』もありません。ネフリユドフもありません。日本の唱歌「カチエシヤの唄」があるだけです。しかも、それであなた方は今までにない多額の金を得る事が出來たのです。少しく皮肉に言へば、芝居で金を得る筈のあなた方が、唄で金を得たのです。それは實際、飛んでもない間違ひでした。

ああ。「カチユシヤの唄」。若し、あれを一度でもトルストイが聞いたら、何と言ふでせう。『藝術とは何ぞや』を書いたトルストイ。若し、あのトルストイが「カチユシヤの唄」を聞いたら……私は今でも時々それを思ふと、恐ろしくて顫へずにはゐられません。

抱月氏足下。

『復活』以後のあなた方は、もう西洋のどんな優れた作家にも、どんな有名な脚本にも、少しも「恐れ」などは感じないやうになられたやうです。「須磨子を中心として、センチメンタリズムで見物を捉まへる事」唯それだけがあなた方の爲事になつたやうです。

唄で味をしめたあなた方は、ツルゲエネフの『その前夜』を芝居にして、その中へ吉井勇氏作の「ゴンドラの唄」といふのを挿み込みました。その次には、『アンナ・カレニナ』を芝居にして親子の對面で見物の涙を——そして財嚢を——絞らうとなさいました。私はもう『復活』以來愛想を盡かしたので、これは見ずに了ひました。

抱月氏足下。

私はここで、あなた方の『闇の力』の事を言はなければならなくなりました。

それは、あなた方が多分朝鮮から露西亞の方の長い旅を終へて歸つて來られた時分だつたと思ひます。あなた方は突然私どもに、迚も日本では見られまいと思つてゐた『闇の力』の實演を見せて下さいました。

しかも、それは立派な實に立派な演出でした。舞臺の設備から言つても、役者の技藝から言つても、今ま

での藝術座には決して見られなかつた細心な研究がありました。勿論、脚本には一字一句忠實でした。トルストイ自身でさへ書き直したといふ「子殺し」の一場をさへ、初めの作通りに、少しも拔かさずに見せて下さいました。

私は驚き且喜びました。藝術座がトルストイに對して長い間犯して來た冒瀆も、この一事で贖はれたと思ひました。『これで好い。これで好い。』私は心の中で、幾度かかう叫びました。

抱月氏足下。

然るに、私は再び裏切られました。今度の『生ける屍』の直し方は、あれは一體何を意味するのですか。

あの脚本は拙いと言ふので、あんなに直されたのですか。(若しさうなら、演出しなかつた方が好かつたのです。)

『闇の力』で贖がしてあるから、もう何をしても好いと思はれたのですか。(恐らく、そんな事はないでせう。)見物の前受のみを考へた爲に、ああいふ冒瀆をなすつたのですか。(それなら、もう藝術座といふ名を「藝術」の爲に廢して頂きたいと思ひます。)

いづれにしても、あの名作を——(私はあの作に就いて十月號の「トルストイ研究」に自分の印象を書いて置きました)——あんなにまで滅茶々々に毀したといふ事は、到底許す事が出來ません。

私はあなた方があの名作に對して犯された冒瀆を、一々擧げるのさへ、もう不愉快に感ずるやうになりました。

三幕目までの事は時事新報に大略書いて置きました。聞けば、五幕目では或ゴロツキがフエエヂヤ一件を種に、カレニン家をゆするのださうです。實に、大變な亂暴な直し方です。お話にも何もならない直し方です。

私は嘗てこの『生ける屍』をフイルムにした伊太利製の活動寫眞を見た事があります。フエエヂヤはやくざな道樂者でした。彼はマアシヤと夫婦になつて、ジプ

シイの車を押して歩いてゐました。ジプシイの頭がフエヱヂヤを鞭で打つといふやうな場面さへありました。私はこのフイルムを見て、どんなに怒つた事でせう。それは誣告に對する怒りでした。私の大好きなフエヱヂヤを誣告するフイルムが憎いのでした。

藝術座の『生ける屍』に至つては、それ以上です。あれはフエエヂヤ一人を誣告してゐるだけではありません。サアシヤをも、マアシヤをも、キクトルをも、フエヱヂヤの母をも、誣告してゐます。私はトルストイの爲によりも、寧ろトルストイの書いたこれらの人物の爲に、到底默してゐる事が出來ないのであります。

藝術座は罪をこれらの諸人物に謝すべきです。罪をトルストイに謝すべきです。罪を『生ける屍』といふ脚本に謝すべきです。最後に、かかる僞物をトルストイの『生ける屍』――たとひ、その改作としてでも――として、日本の社會に提供した罪を、ひろく世界に謝すべきです。

抱月氏足下。

若し見物一般の見物本位に墮したのなら、見物本位の脚本を選まれるのが宜しいのです。スクリイブがあります。サルヅウがあります。ベルンスタインがあります。クライド・フイツチがあります。何を苦しんで、トルストイのやうな非商業的な脚本作家に趨く事がありませう。(ここに非商賣的なと言つたのは、藝術的の目から見て言つたのです。實を言ふと、トルストイは萬民の爲に書いてゐるのです。『生ける屍』のやうな作でも、ほんとに忠實に演ずれば、一般の客にもよく分かるのです。そして、誰にでも面白いのです。從つて、お金も儲かるのです。伯林では一冬殆ど打ち通しにての芝居を打ち通して、毎日滿員を得てゐました。モスクワでもこの芝居をマチネエに出す程、澤山演じてゐました。それで、いつでも一杯客が來てゐました。併し、さういふ事は藝術座の方々には想像も及ばないのでせう。氣の毒な事です。)

若し、藝術座が松井須磨子本位で脚本を選ぶ方針なら、サラア・ベルナアルのレペルトアルでも調べるの

が宜しいです。『椿姫』も好いでせう。『フエエドラ』も好いでせう。何を苦しんで、『生ける屍』のやうな、女に「荒れ廻る場所」を與へない脚本を採用する必要があるでせう。

私は直言します。どうか再びトルストイといふやうに貴い名を、狗肉の羊頭にしないで下さい。どうか、『生ける屍』のやうな名作に、それより劣つた筆を入れないで下さい。

日本にはさういふ事に對する、何の制裁もありません。どうか、その制裁をあなた方の心の中に置いて下さい。日本の藝術の向上の爲に。日本の演劇の正しい進歩の爲に。最後に文明國である筈の日本を、世界各國に誤まらせない爲に。

抱月氏足下。

あなたはエレオノオラ・ヂウゼが『人形の家』を可なり滅茶々々に削つて演じたといふ話を御存じでせう。

ヂウゼは、少しでもメロドラマチックに見えさうな部分は、平氣で脚本を無視しました。クログスタット

に「父の死後三日」を言はれても、彼女は驚きの情を表はしませんでした。夫のヘルマアが「犯罪」といふ詞を發しても、それが彼女には特別なエッフエクトとを與へませんでした。二幕目へ來ると、ヂウゼの削除は愈々ひどくなつたといふ事です。彼女は乳母との非常に大切な場面を全然オミットして了ひました。ランクとの話の間にも、目的のないカットを所々に用ひました。「ト」書を無視しました。そして、舞臺のリズムとでも言はるべきものを全然出さないで了ひました。この一幕は、初めが陰欝で、中頃が陽氣で、最後が嚴粛になるべき筈なのです。イプセンはこの三つの陰影を確に意識して書いてゐます。それをヂウゼは一色に塗つて了つたのです。もつと驚くべき事は、ノラの恐怖と絶望とを最も高調にするクログスタットとの最後の場面を全然食つて了つた事です。勿論、タランテルラの踊なども、ヂウゼは略してやらなかつたさうです。

ゲウセがイプセンの脚本を毀した動機は、藝術座がトルストイの脚本を破壊した動機とは全然反對でし

た。デウゼは下等になる事を恐れたのです。臭くなるのを嫌つたのです。安價な涙を誘ふのを避けたのです。彼女がタランテルラを踊らなかつたといふのも、それが大抵の場合、單に一つのダンスとして喝采されて、戯曲としての熱を失ふのを知つてゐたからです。デウゼはイプセンの古技巧に對するこの最後の讓歩をさへ許す事が出來なかつたのです。

デウゼの「人形の家」破壞はかういふ高い動機からでした。しかも、それは作者に對する許し難い冒瀆でした。

彼女のノラを見たキリアム・アアチヤアはかう言つて批評しました。「シニヨラ、デウゼが若しノラを自分の當り役の一つに數へようとするなら、二幕目を再考しなければならない。原作脚本の臺詞を回收しなければならない。そして、シニヨラ、フラキヨ・アンドオの代りに、イプセンを彼女の舞臺監督にしなければならない。」と。(この最後の一句を『生ける屍』の場合に當てはめれば、「須磨子は抱月氏の代りに、トルストイを舞臺監督にしなければならなかつた」のです。)又かう言ひました。「一度でもイプセンの脚本を舞臺にかけた事のある者は、イプセンの書いた「ト」書から離れるといふ事は、惡い方へ離れる事だといふ事を信ずるに違ひない」と。

デウゼのやうな藝術的な動機から脚本を離れた場合にさへ、かういふ事が言はれるのです。若し、アアチヤアのやうな批評家が、藝術座の『生ける屍』を見たら何と言ふでせう。

「イプセンから離れるといふ事は、惡い方へ離れる事だ。」この詞はトルストイの場合にも、立派に當つて嵌まります。「トルストイを離れるといふ事は、惡い方へ離れる事だ。」「私はこの詞をあなたの足下に呈します。

若し、それが受け入られないなら、再び西洋の名作には手をつけないで下さい。西洋にも日本にも、どう直しても一向差支ない——しかも立派に商賣になる——脚本が澤山あります。どうかさういふものをやつて下さい。妄言當死。

大正六年十一月廿日

日米共同宣言の解説及び批判

法學博士 吉野作造

(一)

所謂日米共同宣言書なるものは、我國に於ては十一月七日外務省より公表せられたが、其形式は米國國務卿ロバート・ランシングより我石井特命全權大使に宛てたる公文と、之に對して石井大使より米國國務卿に宛てたる公文とより成つて居る。日附は十一月二日、内容は全然同一。詰り共同宣言の普通の形式に據つたものに外ならない。而して此公文につき我々の注意すべき點は次の五項目である。

一、本宣言書は兩國政府の共に利害を感ずる諸問題につき意見の一致したるもの丶表示にして、且つ特に支那共和國に關するものたる事。特に支那共和國に關するといふ點を我々は念頭に置く必要がある。後にも説くが如く、本宣言中領土相接近する國家の間には特殊の關係を生ずるの原則を承認したからと言ふて、我國が樺太に於ける特殊地位を承認せしむる事も出來るとか、又は墨西哥に於ける米國の特殊地位を承認せねばならぬとかいふ議論が二三新聞に見えたが、此等の説は全く本宣言の專ら支那共和國に關するものたる事を忘れたる議論である。

二、今日此際斯かる宣言を發表するに至れるは、「近年往々流布せられたる有害なる風説を一掃せんが爲め」得策なりと認めたるにある事。近來日米兩國の間に憂ふべき感情の疎隔のあつた事は、米國國務省が諸新聞へ公布せる公示なりとて米國大使館の發表せる文書が最も明白に之を認めて居る。曰く「日米兩國人民中互に極東に於ける自他活動の動機を相邪推せるが如き感情多くの點に於て存在し……近日來世を惑はす不

實の流言風說は益々盛んに行はれ……何等の異圖なき適法なる金融上の企業も裏面政治上の意義あるが如くに曲解せられ、從つて此等の企業ある每に兩國人民は互に相敵視反對せんとするに至れり」と。而して日米兩國は其原因を專ら獨逸の陰謀に歸して居る。前記文書は此點について又「斯くして兩國人民が顧慮疑惑の態度を取るに至りしもの、畢竟獨逸が多年來巧妙秘密に計畫助長せし反間運動の結果也」と言つて居る。日米疎隔の原因は只一に獨逸の運動の結果とするは予輩全然贊同するに躊躇するか、兎に角之を今日の儘に放任すべからざるは言ふを俟たない。なぜなれば、前記文書も云へる如く「之を放任して控制するところなくんば或は延いて重大の事態を馴致するに至る」べきを以てゞある。而して或は兩國の衝突遂に避くべからず、政府は須らく豫め之が準備を爲さゞるべからずと言ひ、又は極東に於ける彼我兩國の利害は根本より相反すとなして、互に太平洋岸に於ける他の活動を以て異圖あるが如くに言ひ觸らすに至つては、今日獨逸膺懲の戰爭に從事して居る際何を以て能く共同動作の効を完うする事が出來よう。故に今日此際斯かる宣言を見たのは、日米兩國民の誤解を一掃して東洋平和の基礎を固め、且つ來るべき戰後經營に對して今より兩國の方針を確定すると共に、又目下戰はれつゝある戰爭の目的を一層有効に達成せしめんとするの主意に出でたものであらう。

三、米國政府は「日本國が支那に於て特別の利益を有する事を承認し」、「日本の所領に接壤せる地方に於て殊に然」るを承認せる事

此點に關する宣言書の文面には、兩國政府は先づ以て凡そ「領土相近接せる國家の間には特殊の關係を生ずる事」を互に承認し、其適用として米國が日本國の有する前記の特殊利益を承認するといふ事になつて居る。して見れば、支那共和國に關すると否とに拘らず、日米兩國は領土近接する國家に生ずべき特殊關係を尊重すべしとする抽象的一般原則を承認した譯になるが、併しながら本宣言の本當の目的は此抽象的原則の承認にあらずして、寧ろ其適

用として日本が支那共和國に於て此原則の適用を受くべき特殊利益を有する事を承認するにある。謂はゞ右の原則は特に共同に公約するを要せざる程に明白なる原則であつて、只或國が或他國地域に於て有する所謂特殊利益は、果して此明白なる原則の適用を受くべき利益なりや否やに爭があり得る。從つて本宣言は、日本の支那に於て有する利益は前記一般原則の適用を受くべき特殊利益なる事を米國が承認したといふ點に重きを置くべきである。故に本原則が一般原則の承認を約束したからと言ふて、米國が日本の特殊利益を承認したと同じ意味に於て、本宣言は又日本をして墨西哥に於ける米國の特殊利益を承認するの義務を負はしむるものであると言ふのは、輕重の別を無視するの論である。勿論墨西哥に於ける米國の特殊利益は、支那に於ける日本の特殊利益と同樣に之を尊重するの必要がないといふのではない。事實同樣に尊重する必要があるかも知れず、又之を尊重するのが日本の道德的義務であるとも言へる。が、然し斯くの如きは直接本宣言の認むるところの事項ではないのである。

更に此米國の承認する日本の所謂特殊利益なるものについては二つの問題が起り得る。一つは、日本が特殊利益の承認を米國に向つて主張し得る範圍如何の問題であつて、今一つは其所謂特殊利益とは如何なる種類のものなりやの問題である。本宣言の文面によれば特殊利益を認め得べき範圍は二段に分れて居る。一つは支那共和國全體である。一つは所謂日本の所領と接壤せる地方である。日本は領土相近接せるの理由を以て、支那に於て特殊の利益を有する事を認めらるゝとあるが、所謂「支那」については何の制限も認めてゐない。併し之は支那本部に限るのか、或は遠く西藏内外蒙古等をも含むものかは一つの疑問である。恐らく普通英國の勢力範圍とせらるゝ西藏や、露國の勢力範圍とせらるゝ外蒙古やは除外せらるゝものと思ふけれども、宣言書の文面には何等の制限が置かれてない。次に「殊に然り」と一段強く特殊利益を認めらるゝところの日本の所領に接壤せる地方といふのは何れ丈けの範

圍を云ふのか。此中に所謂南滿と東部內蒙古とが包含せらるゝ事は元より明白である。山東省や福建省が此內に含まるゝや否やは自ら一個の疑問たるを得る。而して支那全體に對して認めらるゝ特殊利益と、所謂相接壤せる地方に於て認めらるゝ特殊利益との間に何等か實質上の差別があるものとすれば、後者の範圍は特に最も精密に之を確定するの必要がある。此種の確定は通常密約を以て定むるを常とするが、日米兩國の間には此點に關して果して如何なる諒解があつたであらうか。

次に所謂特殊利益とは如何なる種類の利益を云ふか、之が何よりも大事の點である。之については先づ支那全體に對して認めらるゝ利益と滿蒙等領土相接壤せる地域に認めらるゝものと實質上何等かの差別がないかといふ點が最も大事である。此等の點については本宣言には何等の定めがない。之も恐らく何等かの形に於て兩國政府の間には內々精密なる協定がある事と信ずる。此等は外交上之を公表するを憚るものであるが故に、本宣言の文面丈けについて見れば、どれ丈けの特殊利益を米國が承認したのやら甚だ漠然として居る。解釋の仕樣によつては非常に大きな利益ともなり又非常に小さい利益ともなる。尙此等の點については後段に於て更に之を論じて見よう。要するに支那、殊に我國と密接の關係ある地方に於て、空漠ながら我國の特殊利益なるものを承認せしめ得たのは、又一の成功たるを失はない。

四、日本の特殊利益に對する米國の承認は、次の二條件に繫つて居る事。一、日本は支那領土主權の完全に存在するを認むる事。二、日本は他國の通商に不利なる偏頗の待遇を與へ、又は條約上他國の有する既得の權利を無視すべからざる事。宣言書の本文には以上の二點は、日本政府の屢々保障せる所であつて、米國は全然其累次の宣言に信賴するとある。けれども之は米國が日本の特殊利益を承諾するの交換條件として、日本をして又承認せしめた主義であるといふ事が出來る。斯くして日本は特殊利益を主張する事を承認せら

れたるも、支那の領土主權は十分に之を尊重し、他國の通商には均等の機會を與へ、條約上有する所の他國の既得權は之を侵さないといふ公約を宣言したものである。此公約は專ら米國の日本に對して主張し得べき所にして、日本の所領と相接壤せる地方たると否とを問はない。從つて滿洲蒙古に於ても米國は此點に就ては日本の爲す所に容嘴するの權利を得たものと云はなければならない。而して此等の義務を日本が負擔するといふ事は、日本が特殊利益を有するといふ事とどれ丈け調和する事が出來るか。殊に一段立入つて特殊利益を主張し得る所の滿蒙に於て、本項目は如何に其適用を見るか。之れ亦實際問題としては餘程注目に値する。

五、兩國政府は「毫も支那の獨立又は領土保全を侵害するの目的を有するものにあらざる」と共に又「常に支那に於て、所謂門戶開放又は商工業に對する機會均等の主義を支持し」且つ以上の趣意に反して「特殊の權利又は特典」を獲得するものある時は、兩國政府は其何國政府たるを問はず一致して之に反對すべき事

即ち日米兩國は互に支那の獨立及び領土保全と門戶開放並びに商工業上の機會均等主義を尊重するを約するのみならず、更に一步を進めて之を妨害するものあらば一致して之が排除を期する事を約束したのである。故に例へば、戰後獨逸が再び支那に向つて領土の租借などを申込むやうな場合には、兩國政府は此項目によつて飽くまで獨逸に反對する事が出來るのである。只茲に問題となるのは日本の特殊利益の承認は、此一般主義の例外をなすものなりや否やの點である。他の言葉を以て云へば、特殊利益の承認の條件として立てられたる第四と第五の項目とは同じ事を言つて居るのかどうかといふ問題である。若し同じ事を言つて居るのなら、特殊利益の承認は第五の原則の例外ではない。同じ事を云つてるでないとすれば、所謂特殊利益は此般原則の例外をなすものにして、又特殊利益の特殊利益たる所以を明かにするものである。而して第四に於ては支那の領土主權の完全に存在すべき事を云へるに

止つたのに、第五に於ては殊更に支那の獨立又は領土保全と別の文字を使つたのは、玆に何等か多少の意味が伏在して居るのではあるまいか。

(二)

以上解説するところによつて見れば、此共同宣言によつて日米兩國の天下に明かにせんとしたところの眼目は二つある。一つは將來列國の取るべき對支政策の根本的一般原則の宣明であつて、他は日本の支那に於ける殊に滿蒙の如き領土接壤の地方に於ける特殊利益の承認である。

第一に將來に於ける對支政策の根本義としては、支那の獨立及び領土保全、門戶開放並びに商工業上の機會均等を掲げて居る。而して日米兩國は獨り自ら此根本義を尊重すると共に、何れの國をしても此極本義を侵さしめざるの決意を宣明して居る。尤も此根本義は諸外國の既得の權利にまで亘るものではなからう。從つて此根本義と明白に抵觸する各國の租借地の如きは今更ら之を奈何ともする事は出來ないといふ譯なのであらう。只之によつて將來に於ける諸外國の陰謀を沮止せんとする事は明白である。元來支那の獨立及び領土保全とか、又は門戶開放、機會均等とかいふ事は各種の宣言協約に於て繰返されたる問題である。併しながら之に對する侵害を共同の力を以て防止しようとする堅き決心を表明したものは今度の協約を以て初めとする。此點が實に本宣言の特色であつて、從つて又日米兩國は此種根本義の支那に於ける確立につき、如何に熱心であるかを語るものである。而して東洋殊に支那に對して最も深き利害關係を有する日米兩國が、かゝる堅き決心を有するといふ事は支那の安全なる發達乃至東洋の平和の爲めに最も欣幸すべき事たるは云ふを俟たない。之れ本宣言が東洋平和の歷史の上に一時期を劃するものなりとまで重く見らるゝ所以であらう。而して余輩の考ふる所によれば、かゝる主義の宣言は我日本の對支政策に於て實に一大發達を意味するものであると思ふ。何となれば支那の領土保全、獨立の尊重といふやうな事は最も必要な事であるに拘は・

ず、從來日本は日本其物の安全、日本其物の膨脹發達を念とするに急にして、結局日本其物の安全並びに發達の基礎たる支那の安全と發達とを重く見なかつた嫌がないではない。故に口に領土保全とか獨立の尊重を唱へながら、時には自ら之を傷け、又他國を誘ふて之を傷けるに至らしむるが如き行動がなかつたではない。之れ我々の日本の爲めに又東洋の爲めに深く遺憾とする所であつた。然るに近時支那の運命は實に直ちに我國の運命なりとするの意識が極めて明瞭となり、支那其物の安全なる發達を冀ふの念が極めて痛切となつたのは最も慶賀すべき現象である。而して日本國民の此新らしき意識は、最近最も明白に組育のある公開の席に於ける石井子爵の聲明に表はれて居る。其言に曰く「予は支那門戸の閉鎖は決して我政府の政策たらざりしものにして、將來に於ても又た然らざる事を確信する。吾人の機會均等の改善の爲めにあらゆる協力と競爭とを歡迎する。吾人は善良なる政治、即ち支那に於ける平和安寧及び議會の發達を要求するものである。吾人は常に我隣國支那の忠實なる友人且つ扶助者たらん事を冀ふ。吾人は啻に支那の保全若くは主權を侵さんと試みざるのみならず、侵擊者に對しては結局支那の保全と獨立とを防衞するの方法を怠る事は出來ない何故なれば吾人の國境は支那に於ける海外勢力の侵入若くは干涉によつて著るしく脅かさるべきを知つて居るからである」と。此確信に基いて今後の對支政策を一貫指導する事を得ば、之れ獨り日本の幸福ではない。實に東洋全體の幸福である。兎に角此見地に立つて共同宣言の發表を米國政府に促したのは、實に日本の對支政策の一大進步といはなければならない。

第二、日本の特殊利益の承認については前にも述べた如くいろ〳〵の疑問がある。此等の疑問を明かにせずしては其範圍も意義も明瞭でない。而して兩國政府は結局に於て如何樣にも解釋せらるべき空漠たる約束をする譯は無いから、予は此種の公約に普通なるが如く、本宣言に伴つて必ず他に一種の何等かの形式に於ける密約の存在する事を疑はぬものである。此密約に

よつて特殊利益の及ぶ範圍、並びに其種類性質が明かになつて居る事を信じて、深く心を傷むるの必要なしと信ずるものであるが、暫く此等の點に關する予輩一個の私見を述べしむるならば、先づ第一に廣く日本の特殊利益を認めらるべき一般地域は、大體支那本部と見てよい。更に分り易く云へば直接北京政府の命令の其儘行はるべき範圍と見てよからう。或はもつと分り易く此等の地域を代表する意味に於ての北京政府といつてもよい。而して此等の範圍に對して日本の有する所謂特殊利益とは如何なる種類のものかといふに、之は恐らく極く輕い意味の政治的優先權に過ぎまいと思ふ。經濟上の優先權は門戸開放、機會均等等の主義にも背く故、含まれては居るまい。恐らく支那に於ては米國は日本の同意無くしては支那に對し何等の政治的活動をなすまいといふ位のものであらうと思ふ。斯く斷ずるには無論多少の根據がある。其は嘗て英國公使が袁世凱に戰爭參加を勸めた時日本は之れに極力反對したが、其際英の外務大臣グレー卿は今後英國は豫め日本の同意を得る事無くしては、支那に於て何等のイニシヤチーブを取るべからざるべしといふ公約をなし、其後此趣意が公文を以て通告して來たといはれて居る。後佛國亦同じやうな公文を送つて來たから、佛國も亦英國と同樣に日本の此の一種の政治的優勝の地位を認めたものと云はなければならない。此れ丈けの特殊地位を日本が領土相接近せるを理由として主張するは、決して無理にあらざると同時に、又此れ以上の積極的優勝權を主張するのは、容易に諸外國の同意を得べき所ではあるまい。一般に主張するを得べき所謂特殊地位は大方此位のものであらう。

次に領土相接壤せる地方といふのは、恐らく主として滿洲蒙古を意味するものであらう。福建は臺灣の對岸に位すと雖も、領土相接壤するといふ事は出來ない。山東は今日のところまだ何れとも極まらない。なぜなれば、山東に於ける日本の權利が今日尙確定の狀態にないからである。元の獨逸領たる膠州灣租借地が戰爭後南滿に於ける關東洲と同一の地位に置かれ

とすれば、山東省は即ち滿蒙と共に日本の特殊利益を主張し得べき範圍となる。故に山東省が所謂領土接壤の地方の中に包含せらるゝや否やは、山東省の現狀を以て之を斷定する事は出來ない。媾和締結の後山東の地位確定するを待つて初めて極めらるべき問題である。今にして山東省の地位を本宣言によつて確定し得べしとするのは本末を顚倒せる議論である。然らば特殊利益を主張し得べき第二の區域として殘るところのものは只滿蒙のみとなる。然らば問ふ。我日本は米國の承認により此滿蒙に於て主張し得べき特殊利益は如何なるものであらうか。此點を明かにする爲めには、先づ次の諸點に注意する事が肝要である。一、日本の特殊利益の主張が支那の主權に悖らず、他國が從來支那より許與せられたる商業上の既得權を無視すべからざる事、即ち此特殊地位を主張する事の結果他國の通商に不利なる偏頗の待遇を與へざるものでなければならない。第二は、日本獨り主張し得る利益であつて、他國は之を主張し得ざる種類のものでなければならぬ事である。他の言葉を以て云へば、普通の國際間には存在し得ざる權利でなければならない。領土接壤の結果として特別に主張し得べき利益でなければならない。之に關聯して一つの問題となるのは、領土接壤を理由として日本が支那に對して主張し得るなら、支那も亦日本に對して同樣の主張をなし得るかといふ問題である。北京のイーヴニング・タイムスは、明白に同じやうな事は支那から日本に向つても主張し得ると說いて居る。けれども他方チャイナ・ガゼットの如きは「日本が支那に特別なる地位を占めたるは支那の從來の政治宜しきを得ざりしが爲めである。從つて支那が自ら改革し其國家をして目的あり能力あるものとする迄日本の特別なる地位は繼續せらるべし」と說いて居る。又「支那が覺醒し自由の位置を高めざる間は、如何にすとも米國も英國も佛國も日本の位置を如何ともする事は出來ない」と說いて居る。之によつて見れば、所謂特殊地域とは領土相接壤するの結果、强國が弱國に對して有するところの特別利權であつて、從つて支

那から日本に主張し得べき性質のものでない。第三所謂特殊利益が、日本が支那との條約に於て有するところの權利利益のみでない事亦略ぼ明かである。尤も支那政府では日米兩國より所謂共同宣言の交附を受くるや、之に對して自らも亦一の宣言を發表し、其中に「支那政府は各友邦に對し公平平等主義を取り、其の條約に基く利權を一率に尊重せり。卽ち領土相接壤せる國際間に特殊の關係を生ずるものも亦支那との條約上規定されしものを限とす」云々と言つて、出來る丈け狹く解せんとして居るけれども、之は支那としては當然の事であらうが、然し條約によつて有する權利の主張丈けならば、何も第三國の承認は必要でない。特に第三國の承認を必要とせし所以のものは、條約によつて有する權利以外の利益を意味するものと見なければならない。

第四に、所謂特殊利益は商工業上の特權でないといふ事も亦之を想像する事が出來る。只誤解してならぬ事は、日本が支那に於て領土相近接するといふ地理的關係上商工業に關し、事實上他國より優れる地位にある事は、諸外國と共に米國も亦認めて居るところである。十一月九日米國公使の支那政府に致せる通告中にも「日支兩國の地理的關係により、日本の支那に於ける商工業的事業は、明かに何れの他國人民の同種の事業よりも遙かに優れる特殊利益を有す」と云ふて居る。併しながら、之は只事實の認定に過ぎない。事實上優勝の地位にあるといふ事と、更に進んで優越なる特權を認むる事とは自ら別問題である。故に同上米國公使の通告中の他の部分には、日米共同宣言の來歷を敍して「日本特使は地理的關係より生ずる特殊地位を商業上工業上に利用するの素志なき事を宣言し」たるにより、双方の協議が圓滿に進んだと言ふて居る。又米國國務省が各新聞紙をして發表せしめたる公示の中にも「石井大使一行の來訪は我國人をして大いに見解を改めしめたり……日本の政略は侵略にあらず、日本は地理上支那に有する特殊關係を商工業に利用し利益を壟斷せんとするが如き一點の異圖なきを宣言」云々と

る。之によつて見れば、米國は日本の特殊利益を認むるも、其特殊利益たるや斷じて日本の商工業の發展の爲めに利用すべからざるものとするの諒解の上に協定したものと認めて居る。して見れば、米國の考は商工業に關しては何處までも機會均等主義で、彼等の日本に承認せんとするところの特殊利益は斷じて經濟的のものでない事が明白である。

五、日本の所謂特殊利益は經濟的のものでないとすれば、果して如何なる性質のものであるかといふに、此點については關係兩國は元より英吉利などでも殊更に說明を避けて居る。之れ又一つの注意すべき現象と言はなければならない。米國政府の發表せる公文の中にも此點は全然明白に說明されて居ないが、駐支ラインシユ公使が支那に於ける不安の念を鎭める爲め、本國政府に特殊利益の意味を問ひ合せたるに對し、米國國務省より發せる返電には「之に關して特別の說明を加ふるの必要なし」とあつた。英國に於ては、下院議員スミス氏より政府に向つて特殊利益の意味の質問があつた。之に對するバルフォアの答辯は、同盟國間のの協定に關し我々は勝手に兎角の說明をすべきものではないといふやうな答辯を與へて居る。我日本に於ても此等の點については未だ明白の說明がない。斯く說明を缺いて居るところに卽ち深長なる意味が存するので、之れ畢竟說明し得ざるにあらず、說明を避くる事が實に無用の誤解を避くる所以なる事に氣がついた爲めであらう。而して予輩をして率直に信するところを述べしむれば、日本の所謂特殊利益は大體政治的のものであると言はなければならない。帝國外務省筋より出た說明として各新聞に一樣にあらはれた記事の中に、石井大使は國務卿ランシングに對し「支那の安危の關する所我國の如きはなし」と述べ、ランシング氏は十分之を諒承せりといふ文句がある。之れ豈日本の特に希望する所は支那の安危存亡に關して、普通の獨立國家間に認められざる特別の地位の承認を求めんとするものではないか。然らば之を以て大體政治的なりといふは假りに正確の形容詞でないとしても、槪ね當

らずと雖も遠からざるべしと思ふ。

之を要するに特殊利益の如何なるものたるかに就いては未だ明確に之を劃定するの材料に乏しきも、其斷じて經濟的のものにあらず、寧ろ政治的のものたるべき事丈けは疑を容れない。而して日支兩國の關係を基礎とする事理の當然より歸結して、此政治的特權は積極的の干涉權にあらずして、日本其物の安靜を擁護するといふ消極的目的の範圍內に於て、支那の內政に干與する事を承認せらるゝといふ特別の地位を意味するに外ならない。而して斯くの如き特殊地位は、特に滿蒙に於て認めらるゝ事たるは又言ふを俟たない。

以上の如く日米共同宣言の主なる內容は、滿蒙に於ける日本の特殊地位の承認と、支那に於ける列國活動の一般原則として、獨立及び領土保全、門戶開放並びに機會均等主義の尊重と、此の二つである。後者を一般的原則とすれば、前者は此原則に對する例外である。尤も條約の文字に拘泥して强いて理屈を揑ねれば、日本は支那全體についても特殊地位を承認されて居るし又滿蒙に於ても領土保全、門戶開放、機會均等の主義は蹂躪する事は出來ないと云へる。成程支那全體に關しても、前に詳しく述べた通り、日本は或種の特典は認められて居る。然しながら共同宣言の精神を忖度すれば、上述の如く第一に一般原則を聲明し、第二に滿蒙に於ける除外例を認むるものと言はなければならない。

滿蒙に於ける日本の特種地位を認めた事は、疑も無く日本に取つて一つの成功である。何となればそは元英吉利や露西亞の早く已に承認せる處であつたとは云へ、米國は未だ嘗て公けに之を承認した事無きのみならず、寧ろ常に日本に不利益なる態度を此問題に對して取らんとして居つたからである。米國年來の主義は寧ろ例外なく支那の全體に、所謂一般原則の完全なる施行を希望するにあつた。滿洲だらうが蒙古だらうが特例を認むる事は彼の希望せざる所であつた。一八九九年の秋から冬にかけて、米國國務卿ヘーが我國を初め英・佛・露・獨・墺・伊の六國に向つて發したる提議

中には、「清國に於て保有し又は保有する事あるべき勢力範圍又は租借地内に於ては、外國の既得の權利を侵さゞる事。何れの國の商品も關税上並び鐵道輸送上同等の取扱ひを受くべき事、又其中の港灣に航行する船舶は同等の港税を徴收せらるべき事」といふやうな所謂門戸開放、機會均等主義を嚴格に行ふべき事を主張するものである。次いで一九〇九年十二月國務卿ノックスが滿洲鐵道の中立を提議したる如きは、一方に於ては甚だ無遠慮の嫌なきに非ざるも、他の一方に於ては滿洲に於ても全然一般原則の除外例を認めざらんとする米國の斷乎たる決心を見るべきである。故に今度の宣言で日本が滿蒙に於ける特殊地位を承認せしめたのは、米國から云へば非常な讓歩であると云はなければならない。日本から云へば、固より米國の承認無くとも我滿蒙に於ける地位に軒輊あるべからずと雖も、而かも日米親善の振興を必要とするの時、殊に戰後米國の東洋に於ける地位の大いに躍進せんとするの秋に方つて、米國よりかゝる承認を得たといふ事はさう輕々に看過すべき事ではない。支那全體に對する一般原則の宣明の方は、日本も無論多年唱道し來つた所であるけれども、寧ろ米國の方が最も熱心に唱道した所である。寧ろ日本は從來此宣言を唯紙の上で留めて、實際は餘り此原則の支那全體に於ける確立を熱心に考へなかつた傾がある。故に或意味に於ては此項目に關して、日本は米國の主張に讓つたといつても差支はない。併しながら茲にもう一つ考へねばならぬ事は、米國の主張に日本が讓つたと云ふのは、日本は之が爲めに多少の犧牲を忍んだといふ意味ではない。寧ろかゝる一般原則の確立は、日本の爲めにも必要なのであつた。唯從來日本は餘りに國防的見地に偏して對支經營を着眼して居つたが故に、かゝる原則の確立の方面には興味が薄かつたのである。而して之が實に結局に於て日本の不利益でもあつたのである。而して今度の戰爭で日本は支那と經濟的に結ぶの必要が最も痛切に感ぜられ、斯くて今や我々は支那を全體として着眼し、此全體の支那と結ばねばならぬといふ必要に覺醒せん

としつゝあつた。斯くして米國のかねての主張に賛同して一般原則の確立の爲めに盡さんとするの新機運に向ひつゝあつたと云へる。故に正確に云へば此點に於て日本は何も米國に讓歩したのではなくつて、本來正當の主義に復歸したまでの事である。唯米國から云へば從來此問題に比較的熱心でなかつた日本を誘うて、自家多年の宿論の主張に、新たに最も有力なる友邦を見出した事を大いに滿足に思つてゐるに相違ない。從つて日本自身から云へば何等の犧牲を拂つたのではないけれども、米國自身から云へば可なりの成功位に考へて居るだらう。

（三）

日米共同宣言の内容につき我國一部の論客の間には、我國の多年唱道し來つた事で何も新らしい事はない、有つても無くても同じ事だなどゝ云ふものがある。之と同じやうな議論は無論米國に於ても無いではない。言葉はそれ程極端ではないが、今度の共同宣言は米國が多年主張する所のものを、日本が受諾せしものに過ぎずなどと云ふ說が屢々新聞などにも見える。無論見樣によつては從來あり來りの事を其儘紙に表はしたものに過ぎず、之によつて何等新らしいものが加つて居るのでは無いと云へぬ事はない。併しながら之が今後の日米外交の發展の上に全然無意義であるかといふに、決してさうではない。

先づ日本の立場から云ふて見ると、滿蒙に於ける特殊地位を承認せしめたといふ事が決して無意義ではない。滿蒙に於て特別の地位を占有して置くといふ政策が日本の爲めに眞に得策なりや否やの問題は暫く之を別とするも、少くともかゝる特殊地位を洽く諸國から承認して貰ひたいと云ふのが、我國の多年の希望であつた。第二次第三次の日英同盟も一つには之れが爲めに締結された。日露協商の如きは云ふまでもない。然るに米國は――而かも近來東洋に於て段々勢力を張り來る所の米國は、事實上は兎も角形式には之を承認してゐないのみならず、動もすれば之が承認を欲せざるの意を明かに表示せんとするの態度に出でよう、

る。之が日本に取つて確かに一つの外交上の障礙であつた。今や日米共同宣言は此障礙を日本の爲めに取り除いたのであるから、決して之を無意義といふ事は出來ない。更にもう一つ此宣言の日本將來の對支政策に重要の意義を有する點は、支那の一般領土の全面に就き領土保全門戸開放機會均等主義を、從來よりも一層有効に主張し得ることゝである。支那の一般領土に以上の主義を確立すべき事は從來誰も云つて居る。日本も固より之を主張するのであるけれども、現に自分が滿蒙に除外例を立てゝ居る以上は、他の部に於て一般原則の確立を主張する上に、自ら多少の不便を感ぜざるを得ない。日本は滿蒙に於ては飽くまで特殊利益を主張し、他國が他の部分に於て日本と同樣に特殊地位を主張する事を許さゞらんとする。之が地理的近接の當然の結果なりと我々は云ふけれども、他の國では之を日本の得手勝手と見て、强く之を主張すればする程日本に侵略的野心あるにあらずやと疑ふ。斯くして日本は一般原則を承認せしむる事は容易いけれども、滿蒙に於ける除外例を承認せしむる事が實に困難であつた。ウッカリ一般原則を以て外國に相談を持ち掛ければ、ソンナラ滿蒙に於ける特殊地位を捨てよと云はるゝ恐れがある。けれども日本としては此の一見兩立し得べからざるが如き兩者を、等しく承認せしむる事が必要であつた。而して此日本の希望に對し反對の急先鋒たりし米國に、日支兩國の特別なる地理的關係を說いて十分なる納得を得た上、我國の立場を完全に諒解して貰つたといふ事は、之れ實に日本外交の非常なる成功と云はずして何ぞや。斯くして日本は滿蒙に於ては特殊地位を主張しつゝ、支那一般の領土に於ては、如何なる國に向つても特殊利益の設定を拒む事が出來る事となつた。俺丈けは特別だ、お前方は滿蒙に於ける俺の眞似を支那のどの部分でも爲てはならないと云ふ事を、從來斯う云ふ事には最も反對であつた米國の裏書を以て斷乎として云ふ事が出來る事になつたのである。

日米共同宣言は又米國に取つても決して無意義では

ない。米國は多年予の所謂原則の確立を主張し來つた。支那に何等の事實上の根據を有せざる米國に取つては、各國の特殊地位を承認せざる事が彼等の利益にも合する。從て彼等の感情からと云つても、又彼等の利益から云つても、又は彼等の所謂道義の觀念から云つても、支那に於ける或一國の特殊利益の設定には、常に不快と不安とを感じて居つたのである。而して斯の如き不快不安の種は、從來最も多く日本より來ると感じて居つたが、日本が此態度を改めない以上は、外の國も之に模するものが有ると云ふ風に考へて、日本以外にも猜疑の眼を放たずしては居られなかつた。然るに今や日本より懇切なる說明を與へられ、一つには滿蒙に於て特殊地位を主張するの已むべからざる所以を明かにし、一つには滿蒙以外に於ては日本は全然米國と同一の考であると云ふ事が分り、斯くして滿蒙に於ては其之を經濟的に惡用せざる條件の下に特殊地位を承認しつゝ、他方日本と云ふ有力なる國と共同して、支那全體に於ける排他的勢力範圍の設定を有效に除斥する事を得たのだから、米國は之より大いに東洋問題に就いて心を安んずる事が出來るのである。即ち從來陰鬱なる黑雲の中に不安を感じて居つた米國の東洋政策は、此日米共同宣言によつて俄に光明の中に躍かれ、安心して堂々として濶步する事が出來ることになつたのである。之れ米國に取つても決して無意義なりと云ふ能はざる所以である。

唯問題は米國は日米共同宣言並びに之が締結の際に於ける、石井特使一行の所謂虛心坦懷の說明に信賴して、全然安心を極め込んで居るか如何かと云ふことである。他の言葉を以て云へば、日本政府並に國民は此共同宣言の趣意を十分に諒解し、又十分に之を尊重して、忠實に其の公約する所を守るか如何かの問題である。此點に就て遺憾ながら懸念に堪へざる事は、米國は日本從來の態度より推して多少の不安を抱いて居ると云ふ事である。「日本從來の態度」に關する米人の觀察が果して正鵠を得て居るか如何かは暫く別問題とするも、少くとも彼等は日本は從來表面の宣言は極め

公明正大であつたに拘らず、實際に之に忠實でなかつたと見て居る。今度の宣言についても、之は米國年來の主張であつてそれを日本が事實と眞面目に認めなかつたのを今度改めて我々の主張を確認したのだと云つて、暗に日本が從來の過を改めて我々の方について來たといふやうな言説を弄して居る。例へばイーヴニング・メールは「日米新宣言の實體はジョン・ヘー初めて國際政策を打ち建てたる門戸開放主義並びにルート高平協約に再陳せられたる領土保全主義を單純に確かめたるものにて……日本政府の訓令を經て石井子爵の之を公式に受諾せる事は、日本の支那に對する領土侵略の風説を永久に葬るものである」云々と云ふて居り、又紐育タイムスの如きは「支那の領土若くは主權を尊重するの原則に對する日本側の嚴肅なる誓約として之を承認せんと欲する」と云ふやうな事を云つて居る。又華盛頓ポストが「米國の有識者は從來かゝる提議をなすの正當なるを知つて居つたけれども、只日本が之を悪用せざるやをのみ懸念して居つた。今回の宣言の末文に於て支那の獨立又は領土保全及び商業的機會等主義に反する事をなさゞるべしとあるから、吾人は最早や何等の疑惧を抱くを要せなだらう。日本は一昨年の對支要求の如きを繰り返す事もしないだらう」と言つて居るのも、取り樣によつては一種の皮肉と思はれないでもない。紐育ヘラルドの如きは「米國の權利を拋棄せず、支那に對する其公平なる態度を變へざる範圍に於ける日米國の協議は云々」と冒頭し、次いで「支那はルート高平協商が其領土主權を保證せるに拘らず、其後屢々主權を侵されたる事實あるに鑑み、本回の宣言にも不信を抱く事であらう。」と言ふて居る。又前記の紐育タイムスは別の論文に於て「宣言の効果如何は寧ろ實行にある。……支那に於ける日本の特殊利益を認めたるは決して支那の主權を侵害するの意味なき事は日本の須らく諒解せざるべからざるところである」と云ふて居る。此等の論調を綜合して見れば、米國の有識者間には日本の誠意に對して多少の不安を抱いて居るのではあるまいかと思はれる節がある。而して

以上の新聞は皆米國に於て最も有力なるものであることを思ふ時に、我等は此等の論議を決して輕々に看過する事は出來ない。我々が只一片のお座なりとして此共同宣言を見ざらんとする以上は、此米國有識者間の疑念を一掃し忠實に宣言の趣意を實行せんと欲するの誠意を示す爲めに尙大いに努力することなければならない。日米共同宣言は更に我々の大いなる奮發を俟つて其眞に希望する目的を達する事が出來るものである。此宣言の成立に直接の關係ある政府當事者に此覺悟なかるべからざるは云ふを俟たざるが、眞に彼等が此點を痛切に感じて居る以上、從來の對支經營の方針は玆に大いに緊縮を加ふる必要がある。この點あの點といふ細目についても云ふべき事は澤山あるが、今は管々しく述べぬ。只此宣言の趣意と相容れざる事にして、政府の一擧手一投足の勞を以て直ちに之を禁遏し得べきやうな事は支那の各地に澤山ある事を言ふに止める。宣言の發表し放しで從來のまゝで押し通すやうでは、我々は遺憾ながら此共同宣言の趣意に忠實なるものと許す事が出來ない。獨り政府許りではない。國民夫自身も從來支那問題に關して抱くところの感想も、亦概して之を言ふに、決して共同宣言の中に流れて居る根本思想と步調を同じうする底のものではない。此等の點についても政府は國民の智識を啓く爲めに大いに努力するところなければならぬ。政府が如何に宣言の趣旨に忠實ならんとするも、國民の思想が何時までも侵略方面に向つて居るやうでは、決して米國の識者の十分なる信賴と安心とを得る事は出來ない。故に日米共同宣言の發表は、或意味に於て我々日本國民に獨乙と同じやうに國際間の協約などゝ言ふものは一片の紙屑に過ぎないといふやうな態度に出でるか、或は米國や英佛等によつて代表さるゝ飽くまで道義をして力に勝たしめようといふ思想の見方をするか、此肝要なる問題を提供して居るものといふ事も出來る。今や日米共同宣言は、更に進んで太平洋に於ける日米兩國の海軍共同策戰の協定を成立せしむるに至つた。英吉利は勿論、佛蘭西も、伊太利も、之を以て聯合國間

連絡を一層堅くするものであると言ふて非常な滿足を表はすのみならず、從來動もすれば世界共同の理義に興味がないといふ風に見て居つた日本に對して俄かに一轉して好感を表すやうになつた。これ即ち日米共同宣言は不知不識の中に日本をして英米側の思想の流の中に一層深く足をふみ入れしむるに至つた徴象である。して見れば、世間には隨分獨逸カブレの說もあるに拘らず、矢張り日本國民の思想は不知不識世界の大勢に押されて、略ぼ其方向を誤つて居ないと言ふ事が出來る。更に之を意識的に確乎たる決心を以て迎へしむるは將來に於ける識者の責任でなければならぬ。

(四)

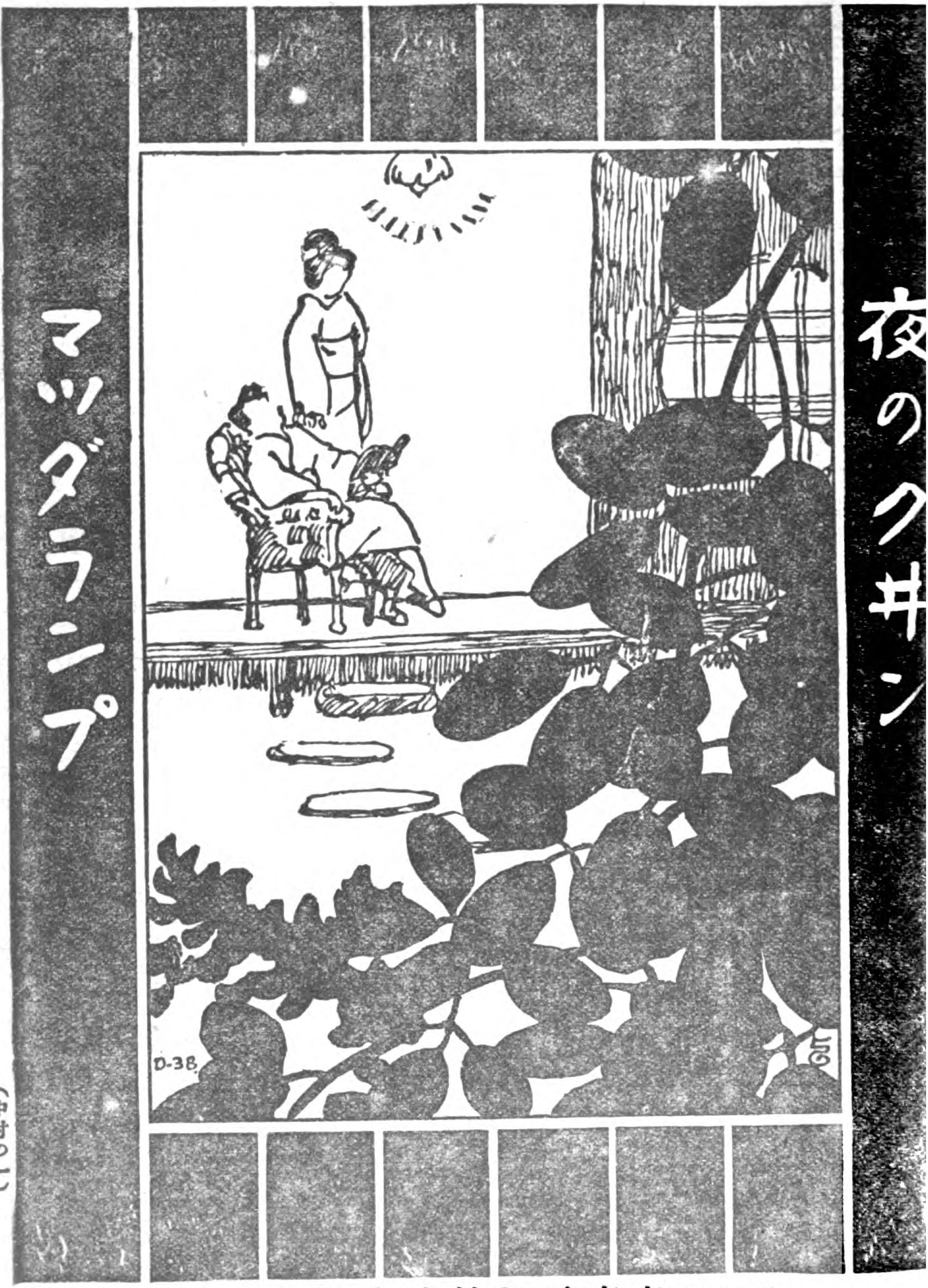
從來日米間に一種好ましからざる誤解あり、最近殊に疎隔が甚だしく、双方の相當識者間に日米開戰論などが唱へらるゝまでに至つて居つたことは、彼我兩國政府側の公表せる說明書にも述べてあつた通りである。此等の疎隔が共同宣言によつて全然一掃せられた事は殊に慶賀すべき事であるが、併しながら元來日米兩國の疎隔の原因は、双方政府筋の云ふが如く全く獨乙の離間策によるものなりや否やは、尚之を愼重に考察するの必要がある。第三者の離間策のみによる誤解ならば、双方胸襟を開く事によつて忽ち根本的の融和を見る事は出來るけれども、然しながら予輩の考ふる所に據れば、日米兩國の疎隔はもつと深い所に原因があると思ふ。否な予輩ばかりではない、少しく日米從來の關係を知つて居るものは、獨乙反間策の說を以て一片の外交的辭令とするに異議がなからうと思ふ。然らば何が双方——昔は極めて親善であつた——を近來斯く疎隔せしめたかと云ふに、之にはいろ／＼ある。其中殊に我日本の側に存する原因と思はるゝものの二三を列擧すれば、第一には我々多數の日本人が米國有識階級の社會及び國家の經營に關する理想を諒解せざる事である。其結果として第二に米國の所謂帝國主義的の思潮並に施設に對する正當なる理解の缺如を擧げなければならない。從つて第三に我國に於ては以上の不理解に基く對米暴論が相當に横行して居る。殊に海軍

擴張の急務を主張する人の間に此種の論者を見るが、之も亦最近疎隔を甚だしくした主なる原因である。第四に支那に於ける日本人跋扈の事實も亦著しく日本に對する米國の反感を挑發した。之には米國の方にも多少の誤解はあらうが、日本人の爲す所にも許すべからざる不都合のあつた事は、我々も亦認むる所である。誤解にしろ正解にしろ日本人は支那殊に滿洲に於て、正義の許す範圍を超えて不當に支那人は勿論、諸外國人の利益を蹂躪して居ると云ふのが、米人一般の輿論であつたやうに思ふ。第五に今度の戰爭で、米國などが最も世界的正義の爲めに戰はんとして居るのに、此點に關する共鳴が我々に著しく缺けて居る。之れ亦相互の完全なる信任を齎らし得ざる重大なる原因である。

以上は唯二三の例を列擧するに過ぎない。要するに今日を機として双方眞に大いに親善ならんとすれば、當局者も國民も茲に又大いに反省する所がなければならない。獨乙をして乘ずるの隙なからしめたと云ふ丈けで安心するならば大いに誤りである。且つ我々は茲に一度手を携へて親善の途に踏み込んだといふ事を忘れてはならない。同じく不信の戟先を向けらるゝにしても、一旦親善を看板にして提携し、後之を裏切つたと感ぜしめて受くるところの不信の尤めは、一層激しく來るを常とするからである。

日米共同宣言は日本から云つても米國から云つても支那に對して極めて公明正大な政策を立てたものであつて、之が誠實に守らるれば支那の之によつて受くる慶福は測るべからざるものがある。けれども、支那政府並びに國民が此宣言の公表に對して一種の不快を感ずる事は又止むを得ない。前記の支那政府の宣言も亦支那の公使が華盛頓に於て並びに東京に於て「支那國民の希望を酌量せずして成立したる協約には全然拘束せられざる」旨の通告を、それ〳〵の外務省に通告したといふのも、政府としては尤もの事である。之によつて支那國民の安全が保障せらるゝのであるから、寧ろ之を歡迎すべきであると云ふのは、獨立國民の心理を

解せざるの俗説である。北京ガゼットが「第三國の有する特殊利益の承認を何等當該國の同意を俟たずして公然發表するが如きは獨立國に對する侮辱である」と敦圉いたのは、正に支那人の感情を率直に述べたものである。それ丈け又我々は此際殊に支那人の感情をも尊敬するの態度を忘れてはならない。なぜなれば、日米共同宣言は又一面に於て日支兩國の親善提携を必要とするが故に起つたものであるからである。一時の憤激は止むを得ない。支那人は米國に對してめ今日は憤激の聲を高めて居る。前記北京ガゼットは更に續いて「米國が日本の侵略主義を裏書して自ら進んで此措置に出てたのは誠に警愕に堪へない。思ふに、米國の此措置は支那に於ける同國の威信に及ぼす事尠少にあらざらん。從來公平至誠を以て支那に接し來れる同國の爲めに殊に遺憾に堪へない」と云つて居る。而して我々の更に忘れてならぬ事は、斯くても米國の側には遠からずして支那の反感を和らげ得る丈けのあるものを持つて居る。我日本に果して何物を以て支那民心の誤解を解かんとするか。斯く考へて予輩はつくづく我官民が從來永く對支政策の根本義を誤つた事を殘念に思ふ。それ丈け予輩は今日を機として支那に對する考を根本的に改善せん事を呉々も國民に希望せざるを得ない。



神奈川縣川崎町　東京電氣株式會社
電話川崎五〇、一〇一、一〇二、一〇三、一〇四

販賣出張所　東京　大阪　名古屋　門司　福岡　仙台　札幌　大連　上海

早稻田大學講師

吉田絃二郎氏新著

（好評激甚）

新刊發賣

著者第三の創作文集

生くる日の限り

四六判最上製美本
全壹册紙數四百頁

正價金壹圓卅五錢
郵税金八錢

『人々よもそつと靜かにしてくれ、私は今眠らうとしてゐる』私の靈は今靜かな眠りを求めてゐる。私は默つてゐたい。私は只一人でゐたい。私の周圍には私に好意を持つてくれる人、私の生活を慰めてくれる人々のある事は私は知つてゐる。けれども利己的な私の心はこれ等の凡ての人々を受け容るゝには餘りは貧しい。私は感謝しつゝも人々から逃れなければならぬ。私は自然の生活を欲する。自然の愛と自然の悄とを欲する。『人間よりもより多く樹を愛する』と言つた天才の言葉は今私の心に强い共鳴を感じさしてゐる。樹とそして人間よ私達は姑く孤獨のうちに靜かに祈らうではないか。（著者識）

白石實三氏新著

（數年の努力に成れる熱烈眞摯の研究●紀行文革新の第一聲）

新刊發賣

一種獨特の藝術品

武藏野巡禮

四六判最上製美本
全一册紙數四百頁

正價金壹圓卅五錢
郵税金八錢

萩・薄・虫聲・曠野・月光、秋の武藏野は綸の如く詩の如し武藏野を知り武藏野を愛し武藏野を慈しむに於て著者は現代の第一人者である。本書は著者が巡禮探勝實に數年委さに武藏野の自然を見、人を見兼て其處に生起する土地河川都市田園等の各社會問題を考察せる熱烈眞摯の研究書なり。文や清新豐麗一種獨特の新藝術品を完成し在來紀行文の舊型を打破して別に史實に一新生面を拓けるもの新藝術愛好者は勿論武藏野及郊外愛慕者は必ず本書を繙いて此美玉の如き新抒情詩を愛誦せられよ。

東京市神田區表神保町七番地

大同館發行

振替貯金口座東京八七貳番

定價金廿三錢
郵税一錢五厘

婦人公論

製本出來
中央公論社

十二月號

■張りと意氣地で罪に陥ちた柳橋の藝妓…澤田撫松
無知の悲劇ともいふべき此哀話は朋輩の夢一筋に始つて讀者の同情を强要す。

■我國女性の爲めに氣を吐く女教師大會…文學博士 澤柳
女教師大會の盛況は我國婦人問題の歴史に特筆大書すべき出來事である。

■年末の苦しみから免れる爲めには…嘉悦孝子
—下宿主婦の心懸が肝要—

■計畫ある家政を樹立せよ…高師教授 佐々木

■『裁縫學』講義…女學校長 渡邊裁縫

■女子の觀た男子の再婚（山室島瓶氏を藉りて）…西川文子

■奴隷的婦人道德の撲滅…西川松子

刻下必讀の文字！

『お歳暮』の贈答可否？
（一）お歳暮贈答の習慣は良い事でせうか
（二）お歳暮には何品を上げるが一番良いでせうか
（三）實際に貴家ではどうしてゐらつしやいますか
右三問に對する六十名士並に夫人の御回答

■奇異なる結婚風俗のいろ〳〵…日野三郎

■新聞記者になつてから…五明しづ

■太陽の話（家庭科學）…近藤教授

■大阪の名流婦人…石丸喜世子

■質屋の暖簾をくゞる女…伊勢屋主人
質屋の主人が見た此種の女の觀察は一般に女の參考となる者多し

■日本の芝居に出て來る女…伊原青々園
日本の芝居の代表たる忠臣藏に出て來る女を拉した時代の理想的婦人を論ず

■『處女の尊』を自覺せよ…在紐育 茅原華山
日本の女は處女の尊さと處女の誇りを知らない。故に墮落する

毎號好評長編小說連載
■玉藻の前…岡本綺堂
■女人神聖…谷崎潤一郎
■秘めたる戀…德田秋聲



尾張屋心中

村松梢風

一

法親王を守護した彰義隊の一團が、雨を冒して山傳ひに落ちて行つてから稍暫らく經つた頃、道灌山の雜木林の中に、具足の上に泥まみれになつた陣羽織を着て、義經袴をはいた歲若な武士がたゞ一人、手鎗を杖に突いて、切り株へ腰を掛けて憩んでゐた。

此の武士は天野市之丞と云つて盡忠隊の一人であつた。彼れの組は上野下寺の宿坊詰で、今朝から數回激しい戰ひをしたが、午過ぎになつて愈々黑門が破れ、宮が奥州をさして落ちて行かれたといふことが知れ渡つてから、彼れは四五人の同志と一緒に上野を遁走したのであるが、脚に受けた手創のために思ふやうに歩くことも出來なくて、途中で同行の者にはぐれて終つた。彼れは疼む脚を曳摺りながら野山をさ迷つて歩いたが、最後に、倒底此の重傷で落ちのびることは不可能だと悟つた。そして所詮は敵の手に掛るなら、潔く戰場で討死しやうと決心して、漸う是れまで引返して來たところであつた。

鐵砲の音や鬨の聲が、此處では只騷然とした一つの響になつて間斷なく聞えてゐる。其の間を時々大砲の

音が、空や林を鳴らして通つて行つた。凄まじい戰の光景が、市之丞の頭の中に渦を卷いて現はれてゐた。大勢の敵に取り卷かれて滅多斬りに斬り殺された男や、天水桶の水を飲みかけてゐる時鐵砲で脾腹を擊たれて死んだ男などの、最後の有樣が繪を見るやうに眼に浮んだ。豆を炒るやうな小銃の音が聞えると同時に、彼れは棒で打たれたやうに脚が痺れて、思はず其の場に倒れたのであつた。暫く經つて味方の者に助けられて坊へ引上げた時、自身の生きてゐることが何だか不思議なやうに感じられた。

彼れは眼をあげてあたりを見た。林の中は寂と靜まり返つて、頭の上に被さつてゐる木の枝から、雨の雫がポタポタと叢に落ちてゐた。

山の下には靑々した田圃が何處迄も展がつてゐた。處々に村落や林が島のやうに浮いてゐる。丁度水墨畫のやうに煙つてゐる向うの果に、微かに吉原あたりの屋棟が見える。ふと、秋篠の顏が市之丞の眼に映つた。彼れの心は突然温いものに觸れたやうに感じた。そして潮のやうな感情が胸に盛り上つて來た。

最後に秋篠に會つた時のことが市之丞の頭に浮んだ。夜更けてから、彼れは一人上野の寺を拔けて廓へ行つたのであつた。其の夜彼れは珍らしく酒を飲んだ。そして自身でも不思議な程興奮して、一人で燥いでゐた。どんな場合にも「俺は戰爭をするのだ――」といふことを考へると、女に對する未練や哀傷的な心持が、虐げられたやうに引込んで終つた。別れ際にも「現世で二度と會へないのだから、ようく顏を見せて呉れ」などゝ冗談らしく云つて、泣き腫した女の顏を引き寄せたりした。

何とも云へない物足りなさと悔恨の情が、市之丞の胸に目醒めて來た。同時に曾て覺えたことのない程劇しい愛着を女の上に感じた。

「俺はこのまゝ死んで終ふのだ――」と思ふと、譬へやうのない寂しい氣分が胸を襲つて來た。泪が、蒼ざめた頰を流れた。

不意に、向うから人聲が聞えた。市之丞は吃驚して、

殆んど無意識に鎗を伏せて叢の蔭に身を隱した。間もなく人馬の足音が近づいて來て、官軍の一隊が林の向うを勢よく駈けて通つた。「宮樣の跡を追擊するのだらう」と思ひながら、市之丞は草の葉の間にチラチラ映る官兵の猩々毛を見送つてゐた。

彼れが叢の中を出て、其處から麓の方へ木の根や岩角に縋りながら下りて行つたのは、それから餘程經つてからのことであつた。

二

宵から雨はあがつたが、どんより曇つた空が重くるしく屋根の上に被さつてゐた。廓では一軒も店を張つてゐる家はなかつた。素見しの影もない薄暗い往來を稀に茶屋の提燈がゆきゝするばかりで、不氣味なほど淋しい夜であつた。

尾張屋の表二階の秋篠の座敷には宵から來てゐる客があつた。それは去年の秋頃から足繁く通ひ始めた客で、山田源吾といふ福岡の藩士であつた。やゝ頭髮の薄い、三十恰好のでつぷり肥つた男で、床の間を背に悠然と脇息に凭れながら、次の間の女達を相手に酒を飮んでゐた。

バタバタ廊下を小刻みに歩いて、松ヶ枝といふ新造が座敷へ這入つて來ると、

「わたしや今向うの角で見ましたが、上野の方がまだ大層明るくなつて居りますよ」と呆れたやうな顏をしながら云つた。

「まあ、いつになれば鎭まることだらう、何分あの大伽藍が灰になつて終ふのだからねえ」と年增の女が客に酌をしながら感慨めいた云ひ方をした。

「まだ大變なことがあるんです」

「なにが大變さ」

「あのネ」と松ヶ枝はチラと客を憚るやうな眼遣ひをして「小紫さんの方がネ、今日お亡くなりなさつたんですと」

「えッ」と女達は一度に駭いて聲を出した。

「わたしや借りた物を返しに行つて、次の間で樣子を聞きましたが、何でも御家來の方が、形見を持つて知

らせに參つたといふことで御座んした」
「まあ何たるお氣の毒なことだらう、囀花魁がお嘆きだらうねえ」
　年増はしんみりと云つた。燭臺の燈がパッと明るくなつた。
「その死なれたといふ仁はどういふ方なのぢや」と、源吾は話に興味を持つたらしく、盃を下へ置いた。
「小紫さんの深い馴染で、さるお旗本の若樣で御座んすが、矢張り上野へお籠りなされたといふ噺で御座んした」と松ヶ枝が云つた。
「何ぢや彰義隊か」と源吾は吐き出すやうな調子で「朝敵になる程な不屆者は、命を取られるが當前ぢや」と云つて厭な顏をした。座が急に白けて終つた。
「縱へ朝敵とやらでも、亡くなつて見ればお氣の毒では御座んせぬか」と、年増は稍ゝ抗した調子で云ふ。
「違ふ、違ふ。一天萬乘の至尊に」と源吾は兩手を上げて拜するやうな形をした。「敵對奉る極惡者は犬畜生にも劣つた奴ぢや。八ツ裂きにしても飽き足らぬわい」

源吾はいきり立つて云つた。其權幕に駭いて女達は顏を見合せて默つて了つた。
　源吾がかう云ふについては理由がある。勿論、彼れは小紫の客に何の意恨がある譯ではなく、と云つて餘り學問をしたことのない彼れは、當時流行の尊王論といふやうなことに就いても、格別な見解を備へてゐる譯ではなかつた。が、彼れは疾うから、自身の通つてゐる秋篠には天野某といふ旗本の客で深間のあることも、其の天野が今度彰義隊へ加盟したといふことも知つてゐた。だから彼れは今日の上野の戰爭を、朝廷對德川といふ大きな問題として觀るよりも、此の偶然の出來事のために日頃憎くて〳〵耐らない色敵の天野が、生死に關はらず二度と世の中へ出られない人間になつて終つたことを考へると、心から小氣味の好い愉快千萬な噺である。で、今夜も幸ひ非番なので廓へ遊つて來たのであるが、僅な間に病人のやうに窶れて終つた秋篠の顏を見ると、其の原因が判つてゐるだけに厭な感情を持たずには居られない。それでも側に附い

てゐる間はまだしも、最前何處かへ出て行つたまゝ一向顏を見せない。彼が耐り兼て女共に「秋篠を呼べ」と云ふと「花魁は氣分が惡いと仰しやつて下で按摩を取つておいでゞ御座んす。深い仲なりや偶には我儘も出るといふもの、ちつとは勘辨してお遣りなさいましな」と見え透いた御座なりを云つて人を馬鹿にしてゐる。莫大な散財をした上にこんな厭な思ひをさせられたことが、今までにも何遍あるか知れない。それといふのも皆あの天野といふ青二才があるからだ――と、こんな風にイラ／＼してゐる矢先へ、女共が小紫の客に託(こと)言(よ)せて彰義隊の肩を持つ様子を見ると、忌々しさと不愉快とで、胸の中がむしやくしやして來る。

「お主達に今日の戰を見せて遣り度かつたぞ。旗本の直參のと大口叩き居つた奴等め、朝敵になつては袋の鼠同前、いやはや慘めな態であつたわい。自體彼奴等(きやつら)は、三味線彈いたり踊りを習うたり女子(をなご)の眞似ばかりし居つた腰拔武士ゆゑ、戰の役に立たぬのも無理ではないて」

から云つて、源吾はまだ鬱憤が晴れ切らぬやうに、彰義隊を罵倒したり、或は受け賣りの大義名分論を說いたりして女達に聽かせた。

最前からつまらなさゝうな顏をして眼をこすり／＼座つてゐた禿(かむろ)が、脇を向いて小さい欠伸を嚙み殺した。廊下を柝子木が鳴つて通つた。

「さあ／＼、花魁をお連れ申しますから、旦那も少しお寢(よ)るといふことになさいまし」

と一人が云ふと、女達はそれ／＼しほに座敷を片着け始めて、無理矢理源吾を床の中へ入れて終つた。

三

藏の中は一寸した座敷造りになつてゐる。奧の方は板敷で、棚の上にいろんな箱が並んでゐる。「黑塗本膳廿人前」「伊萬里燒口取皿」などゝ蓋に書いた文字がぼんやり讀める。四季の花鳥を畫がいた屛風を引廻して、緞子の厚い布團を重ねた上に、市之丞は黃八丈の寢卷を着て悄然(しよんぼり)と座つたゐた。

時々創口が疼んで來た。そして何ともつかぬ恐怖…

絶えず市之丞の神經を脅した。彼れは些細な物音にも戰いで、刀を膝へ引き寄せた。三河島の或る農家の納屋の中に潜れてゐた時のこと、夜更けてから其處を出て、泥濘の畔路や寢靜まつた人家の間を、魔物のやうに通り抜けて漸う尾張屋の裏口へ辿り着く迄、妄想といふ妄想を、彼れは其の間限りなく見てゐた。然しどんな瞬間でも、彼れは自身を視詰めてゐる秋篠の顏を意識しない時はなかつた。

徐かに藏の戶が明くと、屛風を片寄せながら秋篠が這入つて來た。お召縮緬の座敷着を脫いでふはりと屛風に掛けて、紅の長襦袢のまゝぴつたり寄り添つて座ると、長煙管に有明の灯を移して市之丞に渡した。

「よう起きてゐて下さいましたこと」

「軀は疲れてゐるのだが、種々考へて睡られぬから、つい今し方起きて見たのさ」

「創がひどく疼みは致しませんか」

「大きに快い」と市之丞は云はずには居られなかつた。「お前に會うたせいか、疼みもすつかり忘れたやうだ」

秋篠は嫣然笑つて自身も煙管を手にしながら、

「それは好いあんばいで御座んす、したがこんな藏の中ゆゑ、嘸淋しかつたで御座んせう」と勞はるやうに云つた。厭で厭で耐らない源吾の側から廊下へ呼び出されて、裏番の親父に「天野樣がお越しになりました」と耳元で囁かれた時は、秋篠は息の止る程に仰天した。夢心地で長い廊下を驅けて、上草履のまゝ裏庭の飛石を傳つて行くと、松の木の根方に、市之丞が簑を着て立つてゐた。其の時から秋篠は不思議な程雄々しい氣分に動かされてゐた。彼女に對する愛着一つに命を繼いでゐる、寄る邊ない、痛ましい男の姿を見ると、云ひ知れぬ力で引きつけられるやうに感じるのであつた。

●

遠い記憶になつた或る日の事が秋篠の胸に甦つて來た。それは一昨年の春櫻の花が眞盛りの頃であつた。其の日秋篠は素人風に姿をやつし、廓の幇間や藝者に取り卷かれて、駕籠に乘つて本所の市之丞の邸へ行つ

た。名うての藝人達も集まつて來た。酒宴が夜徹し開かれた。明るくなつてから、秋篠は稍疲れたうら哀しいやうな氣分を感じながら、金屛風を引き廻した座敷で市之丞と對き合ふことが出來たのであつた。双親共にない氣隨氣儘な市之丞の、華やかな生活はそれから後も續いた。

「人の身の上は本統に分らぬもので御座んすねえ」と、秋篠は沁々した調子で云つた。

「それも私(わし)なぞは心柄故仕方がない」

さう云ひながら、市之丞も物思ひに耽るやうな眼つきをした。稍暫らく二人とも默つてゐた。極度に靜かな夜が、壓しつけるやうに二人の周りに迫つた。

「私はお前に會ふてもう思ひ置くことはない。もし他人にまで迷惑を掛けるやうなことになると濟まぬから」

「それは大丈夫で御座んす。廓の人は誰しも公方様の贔負で御座んすが、取り別けうちの親方さんは俠氣(おとこぎ)のある人で、貴郎の事は氣好く承知して居りますゆゑ、ちつとも氣兼なく養生をして下さいまし」

秋篠は勵ますやうに云つたが、何時迄かうして居られる譯でないことはよく分つてゐる。結局定められてゐる市之丞の運命を考へると痛ましいことであつたが、同時に、男に別れてから後の味氣ない自身の生活も眼に見えるやうな氣がした。秋篠は次第々々に泪ぐましい氣分に誘はれて行つた。

四

夜半(よなか)に山田源吾は慌たゞしく尾張屋の店を出て行つた。

千束村の六郷阿波守の屋敷に屯營して、淺草方面の警戒に當つてゐた福岡の番兵が二百人餘り、吉原の大門口へ押し寄せて來たのはそれから間もないことであつた。自身番に居睡りをしてゐた當番名主か慌てふためいて驅け着けた時には、すでに官軍が堤(どて)一杯に立ち列んで、衣紋坂の上に四斤の臼砲が筒口を廓へ向けて据ゑつけられてゐた。

「江戸町一丁目尾張屋彦兵衞をはじめ、其他廓内に於

て彰義隊の賊徒を圍まひ居る赴、天朝を畏れざる不屆至極の者共である。右は町役人に於て嚴重に取調べの上主諸共差し出すやう。萬一隱し立致す時は廓内一統を同罪として、大砲を以て焼き拂ふから左樣心得ろ」と、洋服の上へ陣羽織を着た隊長が、名主に對つて嚴重に云ひ渡した。

廓内は沸き返るやうな騷擾に陷つた。女子供は泣き叫んだ。人々は、今にも大砲の彈が頭の上で破裂するやうに思つて、遁げ場もない廓の中を右往左往に走り廻つた。軈て一同の名主達が大門口の會所へ集まつて相談を開いた。それ迄に手分けをして調べた處に依ると、其の時廓に隱れてゐた彰義隊の脱走が、尾張屋の天野市之亟を筆頭に皆で八人あつた。江戸町二丁目の佐野槌では、一軒で三人まで圍まつてゐた。名主達は、何れも青くなつてしまつた。

其の座に唯一人、呑氣らしく煙草を喫したり、紙入から耳掻きを出して好い心持さうに耳などほじつてゐる男があつた。それは竹島甚右衛門といふ江戸町一丁目の名主であつた。竹島はもう可成りの齡だが、まだ廓内の訴訟事などは一人で取り仕切つて、廓切つての名物男と云はれてゐた。

「竹島さん、何かいゝ御勘考でもありますか」と軈て一人が相談をかけた。

「左樣さ、先づそんな者あ探して見たが一人も居ないと云ふばかりでせうなあ」と甚右衛門は何でもないことらしく云つて「お膝元の廓から彰義隊を繩付にして出したと云つちやあ、第一世間へ對して外聞の惡い咄ですからな」

「それあ如何にもお説の通りだが、然し一人も居ないと云つても官軍が承知しますまいて。他所は兎に角尾張屋はあの通り明瞭指されてゐるんですからな」

「何構ふ事あない、何處迄も居ねえと云ひ張りやあそれで濟んで了ひますよ。云ひ拔けの仕樣に就いちやあ、別に私に考へがあるから」

「さう手輕に行つて呉れりやあようがすが、黒田の奴はと來ると亂暴ですからな、浮かりすると本統に大砲を、

打ち込みますぜ」

「あはゝゝ。何も黑船が陸へ上つて來やしめえし、さう大騷ぎをして心配するがものはありませんや」と、甚右衞門は持前の皮肉な調子で云ふのであつた。

一同は癪に障りながらも、何と云つてもこんな場合の役に立ちさうな人間とては甚右衞門以外には一人もないのだから、結局不安心ながらも一切を彼れに委せることにして、軈てゾロ／＼揃つて官軍の前へ行つた。

「お訊ねに依りまして廓内隈なく取調べましたが、左様な者は一人も見當りません」と甚右衞門が隊長に云つた。

「默れ、尾張屋彦太郎方の藏中に一名匿まひあることは疾と見屆けて居るのぢや。一人も居らぬなどゝ、僞りを申立てると許さぬぞ」

「是はしたり、尾張屋は手前支配内に御坐ります、若しお疑ひあらば直ぐ／＼同家をお調べ願ひます」

直樣二三十人の官兵が尾張屋へさし向けられたが、軈て空しく引返して來て、天井から床下まで殘る方なく搜したが遂にそれらしい者の姿が見えなかつたと云つて隊長に報告した。

「さては其方共迄朝敵に加擔致し、何れかへ隱せしに相違ない。斯くなる上は一軒殘らず屋探し致し、何方にても賊徒を匿まひ居る時は廓内一統を同罪として、大砲を以て鏖殺しに致して吳れる」と隊長は猛り立つて吐鳴つた。

「飽く迄も吾々共をお疑ひなされますならば是又是非に及びませぬ、お心任せに願ひますが、然し吾々役柄として念のため申上げて置きますことは、當所は幕府御執政中は江戸町奉行の支配を受けて居りましたが、古來より水戸様の御領地で御坐ります。されば御手配になります前一應領主へお掛合ひ下さりますやう、其の上の事で御坐りますなら、縦へ燒拂ひになりますとも鏖殺しにされますとも、一同聊かお恨みは御坐りません」

最初から手順を誤まつた官軍の掛合ひが甚右衞門の

附け目であつた。（然し、此の隊長のみならず、當時多くの人が、吉原を江戸市中の如く早呑込みしてゐたといふことも事實である）如何に亂暴な官軍でも、有力な勤王方である水戸家の領地と聞きながら、無法に亂入したり、まして大砲を打ち込むなど〻いふことが出來る筈はない、そんな事をした日には、隊長が腹を切る位では治まりのつかぬ騒動が持ち上るに極つてゐる――と、甚右衛門は先を見越して高を括つてゐた。だから彼れは最初尾張屋の店の者から、秋篠の客の福岡藩の武士が慌たゞしく歸つて行つたといふ咄を聞くと、官軍が目星の付いてゐるのは尾張屋だけに相違ないと思つたから、直樣市之丞を吾家の二階へ連れて來て置いて、謂はば氣休めに尾張屋だけを屋探しさせたやうな譯であつた。

甚右衛門の掛合ひは美事に効を奏した。官軍は何の手出しもせずに引き上げて行つた。夜は疾うに明け放れてゐた。月はじめから降り續いた五月雨の空が漸う霽れてうら〻かな朝日が輝いてゐた。

五

其の日の江戸は終日血腥い噂で持ち切つてゐた。「賊徒斬捨御免」の達しが廻つてゐた。官軍は街の要所要所に關門を据ゑて一々通行人を改めた。誰でも彰義隊の脱走を捕へると、首一つについて金一兩の褒美にあり附いた。それで官軍の人夫や浮浪の徒が、五人十人と隊を組んで、さながら狩場の勢子のやうに、市中に潜伏してゐる脱走兵を捜して歩いた。

天野市之丞と秋篠が、尾張屋の藏座敷で心中をしたといふ噂が、誰云ふとなく廓中に擴まつたのは、其の日の午過ぎのことであつた。様々の揣摩憶測が行はれたが、兎も角も此の心中沙汰が、今朝の大砲騒ぎ以來一層興奮してゐる廓の人達に與へた感動は決して小さくはなかつた。廓にまた一つの美談が殖ゑたやうに云つて、人々は囁き合ふのであつた。然し、表向は秋篠一人が自害して死んだといふことであつた。暮れ方に、寂尾張屋の裏門から、忍びやかな葬ひが出た。

源吾は其の夜も廓へ這入つて來た。彼れはいつものやうに仲之町の天滿屋へ行つた。それは黑田の家中の侍達がよく贔負にして遊ぶ引手茶屋であつた。

天滿屋の者は吃驚したやうな顏をして彼れを迎へた。亭主が慌たゞしく、彼れの後から二階へ上つて來た。

「山田さん、尾張屋の一件を御存じないんですか」

「何だ、尾張屋の一件とは」

「秋篠花魁が」と云つて亭主は口籠つた。「自害して亡くなりましたよ」

「何、秋篠が死んだ――」と源吾はさつと顏色を變へた。

「詳しいことは判りませんが、兎に角自害したことは本統なんで、それから今朝の騷動も、何も彼も原因は貴郎から始まつたことに違ひないと云ふんで、大變憎まれてゐる樣子ですから、萬一粗相のないうち、今夜は直ぐにお歸りなすつたが宜敷いやうに存じますんで」と、亭主は心配さうな顏をして云つた。

「天野はどうしたらう」といふ考がチラと源吾の頭を掠めたが、直ぐに雜多な感情に揉み消されて終つた。嫉妬と未練に引づられて、重ね〴〵厭な思ひをしに來た自身の愚しさを後悔した。源吾は借りた編笠を冠つて、遁げるやうに天滿屋の暖簾を潜つて出た。

源吾が江戸町の角まで行つた時であつた。矢庭に道の兩側から人影が躍り出て、彼れの腕を左右から捉まへた。

「何をする。無禮者」と源吾は吃驚して叫びながら振り放さうとしたが、相手は啶りと捉まへてゐて放さなかつた。

「貴公は福岡の山田氏であらう」と、他の一人が源吾の前へ廻つて鋭い聲で云つた。襟の掛つた着物に緋縮緬の扱帶を結んで、長い刀を一本差してゐる。直覺的に彰義隊の脫走に相違ないと源吾は悟つた。

「違ふ、人違ひぢや」

「卑怯なことを云ふな」

其の男はいきなり源吾の編笠を引つ剝いだ。

「旦那、其の野郎が山田に違へねえんで」と横合から遊女屋の若い者らしいのが口を出した。もう周圍に彌次馬が立つてゐた。

三人の男は、無理無體に源吾を引き摺つて行きかけた。二人が腕を捉へて引張ると、一人が後から襟首を持つてグイ／＼押して行つた。其の後を彌次馬がゾロ／＼隨いて行つた。

「これ、人違ひぢやと云ふに、亂暴するな、許して呉れ」

源吾は一生懸命分疏（いひわけ）をしながら、有らん限りの力を出して暴れたり踠いたりしたが無駄であつた。終ひには着物がはだけて、肥つた胸や腿などが見苦しく露はれた。雪駄は何時の間にか飛んで裸足になつてゐた。

江戸町二丁目の非常口の側迄來ると、一人が番小屋の男を呼んで門の扉を開かせた。其の時はもう源吾は死人のやうな顔になつて、おはぐろ溝に渡した、撥橋を意久地なく引張り出された。

田圃には水が漫々と溢れて、蛙が其處此處で鳴いてゐた。十六夜の月が、芝居の書割を見るやうに、向うの人家の上に懸つてゐた。

「拙者に斬らせて呉れ玉へ」と、緋縮緬の扱帶をしめた男は飢えた時のやうな表情をしながら云つて、源吾の腰の物を抜き取るとそれを溝の中へ抛り込んだ。

「助けて呉れ、命ばかりは助けて呉れ」

源吾は惡夢に魘されてゐるやうな哀しい聲を振り絞りながら叫んだ。そして夢中でペコ／＼頭を下げた。

「諾々（よしよし）、命は助けて遣るぞ」と、捉まへてゐる男は笑ひながら、同時に手を放して、源吾の軀を突き飛ばした。

源吾は危く倒れさうになつたのを漸う踏み停まつた。其の時一人が、隼のやうな眼つきをして、居合腰に構へてゐた。源吾は一散に逃げ出した。おはぐろ溝の脇を夢中で驅けてゐる源吾の頭を、秋篠の顔が稻妻のやうに掠めて通つた。

それは十歩ばかりの間に過ぎなかつた。飛鳥の如く源吾の後を追ひ縋つた男が「エイッ」と鋭い氣合を掛け

たと思ふと、已に其の時は拔身を提げて道の眞中に突つ立つてゐるのであつた。

源吾の上半身が月光の中にもんどりを打つた。腰から下は足を踏ん張つたまゝ立つてゐたが、軈て重心を失つてばつたり倒れた。西瓜を割つたやうな胴の斬り口から、血がダクダク音を立てゝ迸つた。勝手な方角を向いてゐる四肢が糸で繰られるやうにピクピク動いた。

「あはゝゝゝ」と、三人は顔を見合せると、聲を揃へて笑つた。

御卽位に付、脫走之者、一切助命被仰出。

かういふ布告が太政官から出たのは其の翌日の事であつた。それ迄廓に潜れてゐた彰義隊の脫走兵は、思ひ〳〵に姿を變へて落ちて行つた。山田源吾を殺したのは佐野槌に居た三人で、紅い扱帶をしめてゐた男は、桃井春三の高弟でとりわけ居合の達人として知られた岩井平馬といふ旗本だといふことが後になつて分つた。

胴斬りになつた源吾の死骸は、眼も鼻も判らぬ無慘な態になつて泥田の中に轉がつてゐた。それを面白さうに子供が取り巻いて、石をぶッつけたり、棒でつゝいたりしてゐるのであつた。

「今の新聞に、雜誌の批評を書く先生方は創作と論文とのみに重きを措いて、僕の書く「對話」や村松梢風氏の「物語」などに一言も及ばぬのは怪しからぬ。其價値から云つても、面白さからいつても、決して小說に劣るものでないと思ふ。何とか彼等に批評されるやうな欄に移して貰ひたい」と、生方敏郎氏は不平を洩らしてゐた。（一記者）

心身の鍛錬より觀たる各種の武術及び競技運動

——劍道・槍術・弓術・長刀・柔道・相撲・野球・テニス・ボート・徒歩・登山・馬術・水泳——の價値

小野鍾山

▽運動の根本精神

如何なる階級を論んぜず、最も必要なるは健全なる精神と健康なる肉體である事は言ふまでもない。殊に今後の國家發展に重大なる關係を有するものは、國民の體力問題である。

元來人の體力なるものは、有限なるが如くなれども、適切なる鍛錬を施す時は、實に無限大の力を養成し得られるものである。弱き者も必ず强壯に成り得るのみならず、强壯なる者は猶より以上に强壯になる事が出來るのである。然らば、其體力養成の適切なる方法如何と云へば、各自の體質に應じて其選定をせねばならぬ事は勿論なるが、少年壯年老年を通じて最も適切なるものは、先づ我國固有の武術である。藤田東湖先生が、神道無念流の開祖たる福井先生の碑文に書かれたる左の一文は、啻に武術のみならず、總ての競技運動の眞精神であると思ふ。

『天下の爲めに文武を用るは治亂に備るなり。一治一亂は世の習はしなれば、治にも亂を忘れずとぞ。されば武藝はしばらくも廢すべからざること云はずして知るべし。

今其の道を講ずるもの劍、槍、長刀、弓、鳥銃、火術等その家數多あるが中に、只劍のみ其來ること久し矣。久しきが故に其法を以て家に名づくるもの、幾派といふ數を知らず。我福井先生、幼より劍法を好み諸流に出入して、其の萃を拔き、自ら一流を開けり。名づけて神道無念流といふ。

抑も劍は、死生を瞬息の間に決する藝なれば、其の法を精はしくせずんばあるべからず。法の精しきは、學の熟するにあれば、我門に入るもの中道にして廢することなく、愈よ上に學び、終に其の極に至

らんことを願ふべきものなり。

武は戈を止むるの義なれば、少しも爭心あるべからず。爭心ある人喧嘩口論に及べば、又刄傷に到らんも計り難ければ、劍を學ぶ人は、心の和平なるを要とす。されば短氣我慢なる人は、却て劍を知らざるをよしとす。大抵人の行正しくて其の上に武ある人はよし。行正しからざる人の武あるは、人を害するのみならず、己をも害すること出來るものなり。されば、虎狼の强きは、實ならず。畢竟世の不爲めになるのみ。却て弱き庭兒の人の害をなさぬにはおとりつべし。堪忍の二字は萬事に渡れども、怒りをおさへるを第一とす。劍を學ぶ人は格別之れを心得べし。僅の事より刄傷に及び、終に我身を亡し、我家を失ひなば、子は親に對し臣は君は對し、不忠不孝の罪如何せん。しかのみならず其の師を恥しむ。深く恐れ愼むべし。他流をそしるべからず。劍を知らざる人に向ひておのれが藝をほこりとすべからず。卒爾に仕合致すべからず。凡そ長を學び譽を競ふはいやしき心なり。」

此眞精神たるや、所謂尙武の氣象であつて、即ち男子の道である。故に、他の競技的運動法に於ても、此眞精神を失はないやうに注意して、總て自己の精神の訓練向上といふ事を根本的基礎として行かねばならぬのである。單に體力の養成のみを目的として、精神上の修養を忘るゝが如きは、運動精神の根本義に反する邪道と言はざるを得ぬ。殊に生兵法は大怪我の原と云はれて居るのは、全く武術の眞精神を閑却したるに由つて生ずるのである。

以下順次に、運動精神の根本義即ち身心訓練の立脚地よりして、各種の武術及び競技運動の價値を批判して見ようと思ふ。

劍術

劍術を單に體力を養成する運動の方面より觀るに、精神と肉體と劍とが一致して、自ら攻擊又は防禦が出來るやうになるのを目的とする。其爲め、肉體の各部分を通じて筋力の剛健を養成するものである。頭部を打擊するから腦に弊害があるが如く考へて居る者かあるけれども、それは極めて淺薄な見解に過ぎない。一例を以てせんか、現に醫學博士の佐々木隆興氏や今裕氏の如きは、劍道の熱心家にして、而も同時に醫界に於ける活動も亦目覺しきものである。前者の微生物化學に於ける、後者の發疹チブス病原體研究に於ける、共に最近醫學界の異彩である。運動をもなさず、風

耐へぬやうな體を有つた博士達の到底企及すべからざる頭腦を有するものたるを想はしむるではないか。殊に從來適法なる稽古に於て、未だ頭腦に障害を惹起した實例が無いのである。抑々吾人の肉體は、訓練によつて非常に强大なる抵抗力を生ずるといふ靈妙なる素質を有して居るものであるから、頭部は言ふまでもなく、打擊を受くる各部を通じて身體の全部に、訓練を重ぬる每に、大なる抵抗力を生じ强壯なる骨格美を形成し得るものである。卽ち緊張せる精神が充實する場合に於ては、吾人の肉體は、普通の場合には害を及ぼすが如き打擊に對しても、尙且つ抵抗し得るのみならず、之に順應して變化し且つ發達するものである。

劍術に於ては、手足の運動が敏活になるのを要求すると共に、頸幹全體の一致運動を必要とするものであるが、更に其上に「呼吸」といふ事を最も大切な問題として居る。**卽ち呼吸を整へて、動中に靜を持し、靜**中に動を保ち、突差の間にも理智の働きを分明にならしむるものである。されば、如何なる場合にも俗に言ふ逆上するといふが如き事は絶對に禁止されてある。物の生命を握み、事の要領を得るのを其特長とする。此境地に達したる場合は所謂『劍三昧』である。玆に於てか、劍法も亦宗敎の根本義と一致するのである。卽ち劍禪一致の境界は、劍術なる有形的手段より、進み進んだる究竟の目的地であつて、劍道と云ふ上より論ずれば、手段としての劍術によりて業を修し、其進修練磨の間に理を覺り、理業兩ながら修め得て、始めて劍道と云ふ廣大なる大道に到達し得らるゝのであつて、其根本精神は心身統一の極致である。

彼の高僧東海寺の澤庵禪師が柳生但馬守に與へたりと云ふ、「太阿記」によれば、すべての武術の眞精神は、全く禪は申すまでもなく、あらゆる萬藝の眞精神と一致するものたることが明瞭である。試に之を和譯して記さんに、

「蓋し、兵法は勝負を事とせず、强弱に拘らず、一歩を出でず、一歩を退かず、敵我を見ず、我敵を見ず。天地未分陰陽不到處に徹して、直に功を得つべし。」

夫通達の人は刀を用て人を殺さず、刀を用ひて人を活す。殺すを要せば即ち殺し、活すを要せば即ち活す。殺の三昧、活の三昧也。是非を見ずして能く是非を見、分別を作さずして能く分別を作す。水を踏むこと地の如く、地を踏むこと水の如し。若し此の自由を得ば、盡大地の人、他を奈何ともせず、悉く同侶を絶す。

這箇麽を得んと欲せば、行住坐臥語裡默裡茶裡飯裡、工夫して怠らず、急に眼を着け、窮め去り窮め來り、直に須く見るべし。月積み年久うして、自然暗裡に燈を得るが如く相似たらば、無師の智を得て、無作の妙用を發せん。正與麽時、只尋常の中を出でずして、尋常の外に超出す、之れを名づけて太阿と曰う。

此の太阿の利劒は、人々具足、箇々圓成す、之を明にするものは、天魔も之を怕れ、之れを昧す者は、外道も之を欺く。或は上手と上手と、鋒鋩相交つて勝負を決せざるは、世尊拈華、迦葉微笑なり。如し又舉一明三、目機銖兩は、是れ尋常の靈利なり。若し又此事了畢の人は、一未だ舉せず、三未だ明かならざる以前に於て、早く截つて三段と作す。況んや顏々相對するに於てをや。

是の如きの人は終に鋒鋩を露はさず、其疾きや電光も通ずるなく、其の短きや急嵐も及ぶなし。這般の手段なくんば、終に拈却着し擬却着し、便舌鋒を傷り、手を犯し、妙手となすに足らざるなり。

情識を以て卜度することなかれ、言語の傳ふべきところなく、法儀の習ふべきところなし。教外別傳の法是なり。

大用現前、規則を存せず、逆行するも逆行するも、天も測るなし。是什麽の道理ぞ、古人曰く、家に白澤の圖なければ、是の如きの妖怪なしと。

若し人錬り得て、這箇の道理に至らば、一劒天下を平げん、之れを學ぶもの輕忽にすることなかれ。』

この「太阿記」の眞精神を移して、すべての競技運動の精神たらしめたならば、その利するところ蓋し大なるものであると信ずるのである。

又劍法中に於て、最も簡單で最も行ひ易く、而も最も精神修養に適せるものは居合術であらう。居合は、氣、劍、體を一致さする訓練法であつて、氣合を根本とする、刀の操法である。而も其練習には一坪許りの土地があれば、相手がなくても一人で何時でも行ひ得られる、最も普通人に適せる方法であるから、特に取立てゝお勸めする。

之を要するに、劍法は精神修養を根本目的として、肉體各部の圓滿なる鍛錬を計り、少、壯、老、を通じて毫も故障なく行ひ得らるゝものであるから、他の總ての競技的運動に對して遙かに秀れて居る方法である。

剣法を練達すれば、心身の強壯といふ事について大なる自信を有つから、何事に從事しても敏活に明確に綽々たる餘裕を有つて當る事が出來る。そこで、今玆に劍道界に於ける先輩並びに之を學べる人々に對して切望するところは、此尊ぶべき劍法をば單に肉體の運動法たるに終らしめずして、其眞精神を會得し以てあらゆる社會的事業の上に利用せられん事である。斯くの如くにして、劍の道即ち人の道、人道即神道となり、あらゆる道と合致するのである。

槍　術

槍術は現今極めて其勢力を失つて居るけれども、これ亦劍法と同じく、心身の鍛錬には頗る妙味ある方法である。これは狹い場所では出來難いといふ不便があるから、それで遣る人が少ないのでもあらう。槍術も亦其理法は劍法と同一で、其打物が槍であるのと、操法が異つて居るばかりである。而して槍術も多くは少年時から老年時に至るまで使用し得られるものである。單に日本固有の武術を保存するのみならず、將來大いに盛んにせねばならぬと思ふ。加之槍術に於ても劍法の素振りと同樣に、對手を要せずして、操法を行ふことも出來るのである。

弓　術

弓術の特色は靜的狀態の訓練であつて、身體の各部分を通じての運動は劍法と殆んど同一である。靜止的訓練であるから、身體虛弱の人、特に婦人の運動に適して居る。日本固有の武術は『禮に始まつて禮に終る』と敎へて、總て禮儀の精神を重んじて居るが、就中此弓術は『禮は射の如し』と稱して、特に內的方面の修養を肝要として居る。即ち「術」によつて精神と肉體的形式を調和統一して、坐作進退悉く禮に叶つて而も上品なる品格を養成することが出來るのである。其術の末に拘泥せず、精神を捉へて以て立派な人格を完成するといふのが、詰り日本武術の根本義である。

長　刀　術

長刀も亦其精神とするところは劍法と同じである。が、主として女子に適するやうに組織されてある。長

刀は即ち「打つ」にあらずして「なぐ」にある。「打つ」には多大の力を要する場合が多いのであるが、「なぐ」場合には惰力を利用するのであるから、比較的體力の弱き婦人に適するのである。昔時武人の婦女は大抵此術を心得へて居つたが、今後の婦人も彼等より以上に此術を究めて、强壯優美なる品格を作つて欲しいものである。現今女學校などでは稀には長刀體操なるものを遣つて居るやうであるが、尙ほ一般に大々的に遣るやうになることを希望するのである。婦人が身體を壯健にする事は、婦人夫自身の幸福といふよりも、亦男子の爲めといふよりも、より完全より强壯なる子孫を生み、又其子孫を敎養する上に於て最も必要にして緊急なる國家の大問題であらうと思ふ。

柔術

其精神に於ては他の武術と何等異るところはない。然し、全く獲物なしに攻擊防禦の訓練を計ることは、劍道等と少しく異るけれども、各部の筋肉を調和且つ一致運動をせしむる點に於ては、同じである。予は訓練の極致に至れば、此術も劍法と同じく總ての時代を通じて實行し得られるものであると信ずるけれども、體力的關係が重大な事になつて居るから、老年者に多少無理な點があるやうに思はれる。何れにせよ、少年者より成年者に至る體力養成精神修養には最も適切なものであるから、其體質の如何、其趣味の如何より判斷して、劍法柔道何れなりとも兩者中必ず其一つを選ぶべきである。柔劍共に我國民性に最も適つたる國民的武術にして、他の運動競技に比して最も優秀なものである事は言ふまでもない。

相撲

相撲にも所謂「相撲道」と稱して精神的訓練を計つてをるが、主として外部的の筋力を養成する方法である。之によつて訓練されたる體格は非常に壯大なるが如き觀を呈するけれども、其實全く特別巨大なる體質を有する者のみが之に從事するのであつて、其之を以て常人を律する譯には行かない。されば、之によつて彼が如き只單に肥滿せる體格を得んと欲するのは不適

當なる習である。抑も眞の健康體なるものは、皮膚、骨格、筋肉の三つが揃つて强大になるのであつて、肥滿しをるが健康體にて瘦せをるが病體であると言ふ事は出來ぬ。却て事實は少しく瘦せ氣味の人に眞の健康者があるのである。相撲取の頭は常人に比して賢愚如何、彼等は長命であるか、其人格如何といふ點を考ふるならば、思ひ半ばに過ぐるものがあらうと思ふ。又力を主とする技術であるから、少年者老年者は、何うしても血氣盛んなる壯年者には叶はない。然し相撲の最も長所とするところは、何等の武器なく全くの裸體であるから、全身空氣に觸れ土に親しむといふ點にある。自然養生論の要義は、土、空氣、日光に親しむ事であるからして、之を室內觀衆の上で行ふ商賣人の例に習はずして、原野、森林、海濱等に於て行ふたならば其功偉大なるものがあらう。されば、之を自然養生法の見地より言ふ時は、各種の競技的運動中相撲を以て最も秀れたるものといふ事が出來る。又之は我國最古より永き歷史を有する所謂國技であるから、千萬人中に於て特に秀れたる者を選び、之を角技せしめて龍虎相鬪ふの壯觀を見るも亦興味ある事であらう。

野球

野球は米國の國技であるが、我が國に於ても盛んに行はれつゝあるのは、頗る愉快な事である。最初は學生の間丈けであつたが、近時に於ては會社員等の普通人の間に行はれつゝあるのは最も喜ぶべき傾向である。野球は國際的競技であるから、社會性或は協力同心といふやうな思想を養ふに最も適してをると共に、極めて敏活といふ事を尊ぶところから、最も文明的最も近代的な運動と言ふ事が出來よう。又其技術が非常に複雜であつて、あらゆる運動の特質をも夫々取り入れてをるところから、演劇を綜合藝術といふやうに、野球も亦綜合運動と言ふ事が出來やう。之を他の運動に夫々對照して見ると、バッチングは劍法、ランニングは徒步、盗壘辷込みは柔道、投球は弓術といふやうに、其技の本質に於ても形式に於ても一種共通の點があるやうである。茲に一言野球選手に注意したき事は、從

らにユニホームの美と技術の輕妙を誇つて勝負にのみ囚はるゝ事なく、矢張り序論に掲げたる武術の眞精神を根本義として、精神の修養人格の完成を其最大目的として、彼の野球商賣人の卑しき態度に倣はざらんことを希望するのである。自然養生法より之を言ふならば、帽子をつけず、靴をはかず、殆んど半裸體になつて行ふならば、其功果は非常なものであらう。之は決して至難な事ではない。恐らく其創立時代はミットもグローブもつけなかつたものであらう。キャッチ及びファストを除いた他の選手はグローブを一切つけない事としたら何うであるか。今日でも外野手丈けにはグローブを禁じても決して苦痛ではあるまいと思ふ。此保護をする服装を可成用ゐぬといふ問題は、劍法等の武術に於ても同じく望ましき事で、面、籠手、胴、臑當等は實際不必要である。なるべく如斯諸道具を用ゐずして素面素手にて其敵に當るところに、自然の養生にも適ひ、眞の修養にもなり、本當の妙味があるのである。

庭　球

庭球は普通人が行ふに最も適して居るものと見えて、近頃なか〳〵盛んになつたやうである。會社銀行官衙等でもコートを設けて之を奬勵して居るのは、愉快な現象である。然し堂々たる男子の精神及び肉體の鍛錬法としては何うであらう。勿論無いよりは之れ有る方がよいには極つてをるが、庭球位の運動で滿足して了ふといふことには。予は不滿足である。之は食前食後の一寸とした運動としては適當であらう。又老年者及び婦女子には最も適當してをる。之も心身の敏活といふ事を養ふ部類の運動である。

短　艇

ボートは、之れ又協力的運動として壯快なものであるが、其地理的關係に於て常に何處ででも行ふ事が六ケしいといふ不便がある。海又は河の清い空氣と水及日光等に親しむ上に於ては此上もない運動である。而して腕力、腹力及腰の力の強大を計るけれども、聊か一方に偏する嫌がある。此點に於ては、競爭用の

トよりも寧ろ、日本從來の櫓を漕ぐ方が、全身の運動法に適して居る。

徒歩

徒歩は人類の最も自然的な運動であつて、毎日一定の時間之を行つたならば非常な功果があらうと思ふ。之は主として肺臟、腹力、心臟等を强壯にするものであるが、各自の體質に省みて其程度を試みねばならぬ。徒歩は各種の運動中最も平和的なもので、必ずしも競爭の相手を要しない。何等の器具を要せず、何時でも何處でも遣れる。始終駈足をしてをる人は『人間は歩むよりも駈足の方が自然の狀態ではないか』とまで言ふて居るが、必ずしも常に走る必要はない。予の友人には一人は一日二十八里と他は三十里歩く者があるが、之は決して珍らしい事ではない。何人でも少し注意して居れば、容易に此位は行けるものである。

徒歩にしろ駈足にしろ、最も注意すべきは腰に力を入れる事である。自然體のまゝ腰の力を中心として、よく呼吸を整へ、足は高く上げる事なくなるべく眞直にスーッ、スーッと前に出し、兩肩兩手は身體の動揺につれて自然と之れに調和するやうに動かして一歩一歩方向を巧に定める。而して目的地を定めたならば、それに向つて全然眞直ぐに進み、決して右顧左眄する事なく、心は無念無想の境地に置くか、但し或る一つの事を熱心念想して、何等の雜念なくあらゆる邪念を去りて、詰り一種の禪定に入るのである。予は之を名付けて『徒歩三昧』と稱して居る。近來マラソン競爭なるものが頻りに行はれて居るやうであるが、之に臨む靑年諸君は決して斯かる競爭場裡のみでなく、平日も絶えず其用意と其決心を以て徒歩して貰ひたい。餘程遠方の土地でない限り、電車には乘らない事に習慣付けるなどは最も妙である。勿論自働車人力車等には絶對に乘らん事にするのである。劍法が武術中の粹であつて、野球が運動中の粹であれば、徒歩は正しく最も自然にして平凡なる方法にして、正しく運動中の米の飯であらう。徒歩を輕蔑して常に自働車人力車等に乘る者は米を食する事能はずして藥のみを取れる病人の如

きものであらう。

登　山

登山に種々澤山なる効力ある事は言ふまでもないが、其最も特色とするところは、空氣の變化と日光の强烈とに對して身體の抵抗力を養成し增進する事である。

馬　術

馬術は、古より六藝の一として、甚だ重ぜられ、古の紳士の資格には缺く可らざるものであつた。而して馬術は、對手が意思感情を持つた生物であるから、此點に於て他の劍槍等と異つて居る。卽ち騎手の心と、馬の心と一致しなければ、あらゆる運動が出來ないのである。けれども馬術も徒らに技術のみに走つてはいけない。精神修養に重大なる關係のあることを忘れてはならぬ。彼の「鞍上人無く、鞍下馬なし」との言は、馬術の奧義であつて同時に劍禪一致の境界と同じである。

運動方法としても、馬術は、又夫々の特長があると思ふ。單に身を馬背に托するからして、何等の運動が出來ぬと思ふかも知れぬが、それは全く門外漢の觀察であつて、妙處に到れば馬背尙平地の如くであつて、而も全身の運動が十分に出來るものである。

殊に馬術は國防上大なる意義があるもので、歐洲各國が馬匹に不足して、盛んに購入せんと腐心しつゝあるのは、戰爭に缺く可らざるからである。一寸考へれば、飛行機や飛行船、自働車や汽車があれば、馬匹は不用たるが如くに思ふ人もあらうが、それは大なる謬見である。敏活なる軍事的運動に、馬匹の缺く可らざることは、軍事家の常に云ふところである。

更に附言すれば、馬匹の改良には百年を要する底の大事業であるが、顧みて日本の現狀を視れば心細き次第ではあるまいか。

此頃帝大學生が陸軍大學に於て、馬術を練習して居るが、庶幾くば單に面白半分の遊戲的運動視せず、前述せる武術の眞精神を根本義として、更に進んでは、國防上重要なる馬匹の改良に資せられんことを。

尚進んでは國民一般に此馬術の趣味が廣まつたならば、其利益は、啻に其人の身體の健康ばかりではあるまいと思ふ。

水泳

水泳は最も全身的の運動であるから、適宜にやれば大なる効果がある。海水と淡水との優劣はない。只不潔なりや否やが問題である。然し普通の健康體ならば、不潔な水でも敢て構はない。「水火を辭せず」「淸濁合せ呑む」の元氣がなくてはならない。水は其分量が多い程壓力が强いから、小川よりも大河、大河よりも大海の方が、皮膚の抵抗力を强める上に於てよろしい事になる。茲に一言注意して置きたい事は、水は日光及び空氣をさへぎるものであるから、長時間水中にある事は自然の養生に適はない事である。故に時々陸上に出て、日光と空氣に全身を暴露する必要がある。水泳は水泳夫自身よりも、其爲めに海岸又は河邊に出てゝ、其大氣に全身を暴露して詰り日光浴と土療法を行ふといふ事に一層の意義があるやうである。予は常に夏季中は日光直射浴をなし、寒中は海水又は淡水に浴する事にして居る。之は皮膚の訓練の爲めに最も有効であるから、眞實なる健康體を得んと思ふ人は必ず行ふがよろしい。

▽結論

此外に猶幾多の競技的運動法があるが、其根本的精神は皆同一であるから、其精神を夫々應用すればよろしいのである。結論として二三注意して置く事がある。

（一）**興味を以てしろ。**

澤山の運動中何を先づ遣つたらよいかといふ事は、之は各人の精神と體質によつて理性を以て判斷せねばならぬ事であるが、先づ何よりも自分の好きな物から遣らねばならぬ。自分の興味を感ずる事は苦痛や困難を凌いでも遣れるものである。「好きこそ物の上手なれ」で、自然と上手になつて來る。されば、先づ理性で以つて此運動といふものを選定した以上は、之に向つて大なる興味を感ぜねばならぬ。

(二)繼續的に行へ。

一度實行に着手したら、決して途中で止めてはならぬ。假令嫌氣がさそうが厭きが來ようが、最初の決心を貫かねばならぬ。氣まぐれ、一時的といふ事が一番惡い。繼續的にやるといふ其事が、實に精神修養の根本義である。日本人は近來「運動は若い間」のみのやうに考へて、學生時代には隨分熱心にやつて居るが、一度社會に出て家庭でも持つと、すつかり止めて了ふといふ惡習慣がある。身體も精神も一生涯を通じて訓練し緊張して居らねば噓だ。其爲めには老いても益々盛んに遣らねばならぬ。又夏季の間は海水へ行つて眞黑になつて身體を鍛へて居るが、秋風がそろ／＼吹いて來ると、やれシャツだそれ頸卷だ外套だと、澤山の着物を着込むから、折角鍛へた身體も忽ちの間に元の默阿彌となり、冬中風邪のひき通うしといふ事になるのである。されば、何時も海水へ行つて居る氣になり、毎日運動會をやる精神で、身體を鍛へる事が必要である。マラソンが流行する時のみ、よく走つて、流行しなくなると自働車や人力車に乘るといふのでは駄目である。

(三)時・處・物に拘はるな。

暇さへあれば何時でもやるがよろしい。暑い日中でも暗い夜でも、風が吹き、雨が降り、雪が積つて居る時など最もよろしい。道が惡いからマラソンを延ばさう、雨が降つたら登山をやめようといふのでは駄目である。斯ういふ困難な時遣らねば其やりがひがないといふ位の元氣でなければならぬ。又運動競技の道具に囚はれてはならない。ミットが破れたから試合が出來ない、足袋がないから駈足をやらないといふのではいけない。道場の中のみで強くて、外へ出ると弱くなるやうではならない。擊劍や柔道など道場稽古のみして居ると、何うも以上なやうな弊害がある。何等の武器なく、跣足裸體で大氣の下大地の上で訓練してこそ、眞實の健康體は得られるのである。

(四)呼吸を整へ腹力を強くしろ。

總ての運動に通じて最も肝心な事は呼吸を整へ腹力

を强くする事である。所謂「臍下丹田」である。近時腹式呼吸なるものが流行してをるが、卽ち之れである。正しき呼吸と强き腹力は實に運動精神の生命の源である。腹力を强くし呼吸を整へてさへ置けば、頭は常に明瞭にして、手足は自由に動き、火に入りても暑からず、水に入りても寒からず、あらゆる事に自在である。仙術とか忍術とかいふ所謂奇蹟も、此呼吸と腹力の應用から來るのである。呼吸整はず腹力の弱き時には名刀を以てしても尙ほ眞の斬れ味を出すことは出來ない。走つても持續して走れない。假令一時的には遣れても、直ぐ弱つて了ふ。呼吸腹力の訓練は禪の道に共通して居つて、其處に運動と所謂修養の根蒂が包藏されて居る。

總ての運動、卽ち競技的の運動は勿論、平常の一擧手一投足の動作に於ても、この腹力を中心としての、全身の統一的一致運動をなすことが肝要であることを忘れてはならぬ。換言すれば、例へば一指を使用する場合に於ても、全身の均等的統一ある動作として現はれるやうに、又右手を使ふ場合に於ては、左手は言ふまでもなく腹力を中心とする平均せる力の配合せらるゝやうになることが肝要なのである。而して之等は人體の生理、組織上より起る必然の道理なのであるから、仔細に注意によりて、其深妙なる味を會得するが重大事なのである。

この腹力を中心とする、人體の支持と運動とに、最も大切なる關係を有するものは、呼吸の調子である。呼吸の調子と、腹力の鹽配とのこの二拍子が調和するところに吾人の肉體は、吾人の豫想し難き大なる力を生ずるのであつて、所謂超人的の力も、技神に入るの心境も、この肉體に於ける二拍子と、統一せる精神とが、融然として一致契合せる刹那に於ける、人力の發現に他ならぬのである。此間の消息を武術の方面よりは、合氣とか氣合とか稱して居るのである。而してこの氣合なるものは、武術のみならず、人間界日常の生活に於ては、萬事を通じて必要なるものであつて、人に對し、物に對し、事に對して、自己の統一せる靈肉

の力が人、物、事、に應じて、それを支配するか、支配さるゝか、將た又渾然として相抱合するかと云ふ、重大なる關係を有するものである。

(五)精神本位にしろ。

如何なる運動にしても、先づ第一に決心をせねばならぬ。決心をするといふ其事が已に肉體を强壯にする第一義である。已に一度決心したならば、決死の勢を以て斷行せねばならぬ。決死の覺悟さへすれば、眼中それ何物かあるである。決心を確立し、決死の勢を有せざる以上は、如何なる運動に於ても其奥儀を究める事は出來ない。不健康といふ事は「自己の心のまゝに自己の身體を統卒する事能はずして、自己の肉體の爲めに自己の精神を左右さるゝ」狀態を云ふのである。されば運動に於て健康體に達すれば、「自己の心なるが故に自己の心のまゝに爲し、自己の肉體なるが故に自己の心の命ずるまゝに爲し得る」やうにするのである。自己の心を自己の意志のまゝになし、自己の肉體を自己の心のまゝに支配し得ぬといふのは、何んたる耻づべき事であらうか。世間の人滔々皆然り。されば近代人は殆んど悉く病人と云ふてよろしい。「各人皆病人なるが故に我れも病人にて可也」といふのが今日の有樣である。我々は之れで辛抱する事は出來ない。之を見て滿足する事は出來ない。これ卽ち予が茲に運動の必要を高調する所以である。實に運動精神の根本義は「心身の調和」「靈肉の統一」にある。「分別を爲さずしてよく分別をなし。是非を見ずしてよく是非をなす」「不用意の間に自ら用意に達す」といふが此境界である。

(七)動け、働け。

如何なる場合に於ても、人は動くべきもの働かざる可らざるものたることを體得せなければならぬ。近世文明の半面には、吾人をして、不覺不識の間に、不健康に誘導しつゝある數多の原因が存在する。一面には極めて華麗なる色彩を有して、一面には甚だ人の健康を傷ひつゝある事例は、殆んど枚擧に遑あらぬ程である。卽ち一例を以てすれば、衣食住の如き、都會人士

のそれは、甚だ華美であつて、而も之がために、天賦の稟性たる本能的營養機關の障害を惹起して居ることは、到底、都會人士以外の、比較的自然に親しむ機會を多量に有する人々の安全なるには、比較すべくもあらぬ程である。

されば此點に於ては、都會人士は、更に多くの反省と努力とを以て、自己の心身の健康を計ることが大切であつて、而もこの目的を遂げんとするには、必ずや、先づ自主自動の根本精神に基きて、能く動き能く働くと云ふことが、消極的に害を去り、積極的には心身の健康を増加する所以である。餘りに便利重寶過ぐる文明の恩惠は、全く、之に浴するものが緊褌一番することを忘るゝと、元も子も失つて了うことになるの恐れがある。

故に、能く動け能く働けと云ふ、自然の法則に由りて、心身の向上と發達とに注意して行くと云ふことが肝要である。

動け働け、動ける水は腐ることなく、早き瀬には魚住まず。吾人の肉體も又然り、終日營々孜々、汗して働くの身には、停滯物の生ずることは極めて稀であつて、留る水は腐り、働かぬ身には、要もなき滋養の滓まで堆かく、終に健康を害する始末に立ち到るのである。實に注意すべきことではあるまいか。

次號の本欄には

小野鐘山

心身鍛錬より觀たる「荒行」及び「寒行」

を掲載すべし

東京市長及東京市政譚

靜思樓主人

一

東京市の事は何日も殘念の感じを禁じません。東京市を提げて、近世日本の首都とし、東洋隨一の大都とし、世界强國の模範的都市の一たらしむる雄大にして堅實な計畫は、殆んど未だ手が着けられて無く、此の必要を感知し、身を以て之に殉ぜんとする熱心な市長其の人も歷代未だ現れて居ないやうに感じますのは、必ずしも吾輩だけの感じでは無からうと存じます。

今や奧田市長已に逝いて、其の後任の物色中、誰が此の重要の位地に着かれるか、今日に於ては(十月七日起草の日)固より豫測の下しやうも有りませんが、試みに從來の市長の名前だけ、及び、其の任期だけを揭ぐれば、略ば左の如く爲つて居ります。

歷代の東京市長調べ

上、東京府知事として

髙崎　五六　明治十九年三月より同二十三年五月に至る

蜂須賀茂韶　明治二十三年五月より同二十四年七月に至る

富田鐵之助　明治二十四年七月より同二十六年十月に至る

三浦　安　明治二十六年十月より同二十九年三月に至る

久我　通久　明治二十九年三月より同三十年十月に至る

岡部　長職　明治三十年十月より同三十一年に至る

肥塚　龍　明治三十一年七月より同年十月に至る

中、東京市參事會市長として

松田　秀雄　明治三十一年十月より同三十六年六月に至る

尾崎　行雄　明治三十六年六月より同四十四年十月に至る

下、東京市長として

尾崎　行雄　明治四十四年十月より同四十五年六月に至る

阪谷　芳郎　明治四十五年七月より大正四年二月に至る

奥田　義人　大正四年六月より同六年八月に至る

右の如く爲つて居りますが、右の中、明治十九年より（寧ろ明治二十二年より算すること正當なるべし、後の市會議長の項參照）同三十一年に至る約十三年間に、市長の人を替へたこと七人に對し、明治三十一年以後、大正六年に至る約二十年間に、市長の人を換へたこと僅に四人に止まるのは、吾輩の觀て自治制の成功と信ずる所の一點であります。特別市制の時代には、府知事卽ち市長として、政府の換るごとに府知事が換り、卽ち市長が換る、政府は換らざるも、府知事市長は尙換るといつたやうに、政府の意思は時々に變じて、殆んど恒久、持續の堅實性を缺いて居たのに反して、市民の心は、流石に中央政府の心ほど浮薄ならず、一旦選任した以上は、飽までも之を信賴して、恣まゝに移動せず、斯くて歷代の市長をして其位地に落ち着いて、徐ろに其の事を視さしめたのは、東京市民の成功であり、同時に自治制度の成功であると信じます。次に前七人の四人は華族で、後の三人のたゞ一人のみが華族（阪谷男のみ華族と知るべし奥田氏は其の逝去の際華族に叙せられたのみなるを以て）であり、他の三人が皆平民であつたことは、又東京市民の好尙の存する所を見る、是れ亦自治制の成功と吾輩の確信する一點であります。門望にあらず、閥閱にあらず、格式にあらず、たゞ實力如何を思ふ、平民の天地は、古今東西、いづれも實力の天下で有ります。其の證據には、後の四人の三人は皆大臣の經歷が有つた人達で、前の七人の中、大臣と爲り得た人は、たゞ千家男

一人あるのみ、東京市民は、どうかして、大臣たり得る人、若くば其の以上の人を得て、東京市の冠冕とし、其勢威を張らんとしたので有ります。大臣たるが故に其人必ず力ありと謂ふのでは有りませんけれど、前後を比較してこゝに一段の相違を見る所に、東京市民の苦心が有り、又努力が有り、又主張が有り、少くとも形式に於てなり、幾分の成功を收めた點と思ひます。此の如く、吾輩は歷代市長の顔觸を點檢したゞけで、既に已に我が自治制は多少成功いたして居る、決して失敗の跡だらけでは無いと信じて居ります。

二

次に歷代の市會議長の名を掲げて見ませう、東京市會に於ける勢力の消長の跡は、之を以て直に諒解せらるゝことゝ存じます。

歷代の市會議長調べ

楠本　正隆　明治二十二年六月より同二十八年十二月に至る
須藤時一郎　明治二十九年三月より同三十三年一月に至る
中島又五郎　明治三十三年一月より同三十四年一月に至る
星　亨　明治三十四年一月より同四年六月に至る
末吉　忠晴　明治三十四年七月より同年十月に至る
金子堅太郎　明治三十四年十月より同三十五年十月に至る
仁杉　英　明治三十五年十月より同三十六年十一月に至る
大岡　育造　明治三十六年十一月より同四十年一月に至る
中澤　彥吉　明治四十年一月より同四十三年一月に至る
江間　俊一　明治四十三年一月より大正三年六月に至る
中野　武營　大正三年六月より今日に至る

以上十一人の市會議長中、假に中央政界の勢力別に

依り、政友系と非政友系と別ち、若しくは進步派と非進步派と別つて見ますなら其の進步派と見るべきものは、最初の楠本氏と、須藤氏と、最後の中野氏三人のみで、他の八人は、悉く政友系の人か、若くば政友系に化せられた人（例へば末吉氏の如き）達であります。以て東京市會に於る勢力の變遷を察する事が出來ませう。其の初め明治二十二年より同三十三年迄の十二年間は、實に進步派の天下でありましたが、但、其の時期は所謂特別市制の時代で、進步派は其の勢力に屬する一味同志の市長を擧ぐることが出來ませんでした、而して明治三十三年、中島氏の議長と爲り、星亨氏の議長と爲つた時代は、特別市制は漸く已に撤去せられて、東京市會は自由に其の信頼する所の人物を推薦し、市參事會市長として、直接に事を視せしめ得る舞台に進んで居りました。故に東京市會に勢力ある黨派が、其の勢力を擁護して、意中の人を擧げ、或は其の傀儡として、或は事實の代表者として、市政を左右し得る時代に爲つたのは、實に星亨氏等の勢威を揮つた時代に始まることで、是れ星亨氏の名が、突兀として一紀を劃するが如く、東京市會史に聳ふる所以の一因であると存ぜられます。爾來十五六年、政友系の東京市に勢威を揮つた時代は、卽ち政友系の中央政界に威福を擅まゝにした時代で、卽ち明治三十三年、故伊藤公が初めて政友會を組織し、爾來、十五六年の天下を略ぼ其の手に占斷したやうに、其の期間の東京市政は、概して政友系の勢力の下に在りました。但、東京市會に於ける黨派の關係が、中央政界の政黨關係と同じからず、其の間に種々の參差の有る事は、申す迄も無い事、こゝには便宜上、斯く概說するに過ぎません。

大正三年に至つて、中野氏の議長と爲り、東京市會が、珍らしくも進步派の冠冕を見るに至つたのは、折柄、中央に力を得た大隈系の活動の餘波に過ぎますまい。自治政は、中央政治と區劃して、別に一ヶ獨立の門戶を張るべきものに相違ありませんけれど、然し乍ら中央勢力の自治政に及ぼす影響の顯著此の如きものがあります。中央政治に注目する人は、同時に、地方

政治にも注目せねばなりません。此の事は東京市に於て殊に甚しきものがあるやうに信じます。のみならず、地方政治は中央政治の基礎である。地方政治を顧みずして、中央政治の改善を圖るといふ事は、もと〳〵無理である、此の如きは其の本を計らずして其の末を較べんとするの類で、決して適正な趣意主張ではありません。吾輩は此の點に於て、當今の政治家の迂愚を憐まずには居られません。星亨、尾崎行雄、此二人は、中央政治にも、地方政治にも、確に一隻眼の有る人でありました。兩人の名が、善かれ、惡かれ、今に於て朝野に籍甚なる一理由は、こゝに在ると察せらるゝ次第であります。

三

奥田氏の後に、誰が擧げらるかと云ふことは、前に斷りました通り、固より豫言の限りでありませんが、誰を擧げたらば可いか、どんな人なら、東京市長たるに適するかといふ事は、比較的に述べ易いと思ひます。

其の第一は東京市に關係の深い人である、東京市に關係の深いといふは、長く東京市の住民であるといふ事に限りません、長く東京市の住民である事も其の一要素でありますが、それよりも更に東京市の生活に縁故の深く、東京市政の過去現在に關係が滿ちて居り、出來得るならば若干程度の興味を有つて居る事であります。一例を擧げるなら、東京市會議員の選擧や、區會議員の選擧にも注意を拂ひ、相當盡力し、少くとも身自ら選擧場に臨んで投票をした事の有るやうな人で無くてはならぬと思ひます。此れは大切な要件で有ります。平生、東京市政の事を蔑視し、東京市會議員、區會議員の事を蔑視し、其の選擧、其の行動、其の形勢を蔑視し、全然相關せざる方針を持し、若くは相關せざる事を以て獨り自ら高くする所以の如く思ふて居た人達は、これ實に東京市民の賊である。自治制の賊である、斯様な人を市長に擧げるといふ事は無い。尾崎氏は其の初め東京府會議員として、府市の行政に關係を有つて居たし、奥田氏は市參事會員として、誠實

に執掌した事も有つたし、其に斯様な點から縁故の深い人であつたから、即ち市長たるに相當な若干の因縁の有つた人であるが、阪谷男の事は之を知らない。何にせよ、東京市に縁故の深い人を擧ぐるが宜しい。

第二には中央政府、少くとも内務大藏兩省に通りのいゝ人が可い。東京市は何かにつけ中央政府へ交渉の事件が多い、今日迄は兎もあれ、將來若し東京市を大いに改造し、擴張せんと欲すれば、其の關係は益緊く益深く成り行くに定まつて居るから、從つて中央政府に通りのいゝ人が市長と爲る事はいろ〱便宜である。東京市民の體面を損じない限りの程度に於て、中央政府に信ぜられ、敬せられ、日頃了解の出來合つて居る人を擧げるが宜しい。此の點に於て、動もすれば中央政府の高官たりし經歴の人が重んぜらるゝ傾向と爲つて居るのであるが、阪谷男、奥田氏は、其の官界出身の人として、民間育ち、有志家育ち、政府攻撃軍の驍將たる尾崎氏よりは、幾分の便宜が有つたに相違ない。

第三には經濟的趣味好尙の深い人が宜しい。東京市政といふは、法律や、一般政治の方面よりも、寧ろ經濟的方面に於て、東京市民の生活に直接する政治である。一言にして之を蔽へば、東京市政といふは、東京市民の生活を、如何にして便利に、より豐富に、より快活に、より自由に、より有益にするかといふ政治である。それを主として經濟的方面から考へる、それが即ち自治政治である。故に市長たる人は、此の方面に心がけの厚い人、よく氣の着く人、其の趣向に富み、其の工夫に堪能な人を擧げるが宜しい。國の財政は、必ずしも市の財政と同じで無いが、此の點から、阪谷男は理想の人として歡迎せられたのである。後、奥田氏の出で、阪谷男よりも信頼せられ、阪谷男よりも、多く有利の事業を計畫したやうに評判されるのは、蓄、時の廻り合せと、其の周圍に在る人達の信用關係に依る事で有りませう、奥田氏が、阪谷男よりも、多く市民の經濟事情に注意を拂ひ、其の方面の足しに爲る事業を、巧みに、仕出來したといふ理由では無いと

思ひます。左様に考ふべき事實は別段無いやうに存じます。奥田氏の人氣を博した理由は他に有りませう。それにしても阪谷男は、其期待された方面に出色の成功を收めなかつたかも知れません、歳月の足らぬ故か、時期の不利であつた故か、補佐者の人を得なかつた故か、若くは勢力關係の良く無つた故か、いづれにしても、其の才を其の期待された程に展ばし得なかつた憾みが有るかも知れません。然し乍ら東京市が經濟向きに堪能な市長を得なければならぬと云ふ理由は少しも動きません。東京市は、どうなりして、そのやうの手腕あり、才識あり、豫て主張ある人物を索めるが可いと存じます。尚此の點に於て尾崎氏は物足らぬ所の有る人のやうに評されましたけれど、實際に於て電車の市有を實行したのも斯人であり、瓦斯問題を解決したのも斯人であり、改良下水の實行に着手したのも斯人であり、改良上水の擴張に着手したのも斯人であり、更に東京灣築港に着手しかけたのも斯人であり、尾崎氏は大體に於て、東京市を近世都市の大觀を具有せしめんとする趣向、計畫に於て、歴代の東京市長中一頭地を抽いた人でありました。奥田氏は其の電車賃を引き上げ、電燈案の收支を纏めたゞけで、其の爲す所補綴に止まり、此れ等の大事を、創始的に經營の緒を開いたのは、尾崎氏であります。尾崎氏の東京市政に對する着眼と、其の日本の市政に、一道の光輝を與へた功勞は決して沒すべからざる事であると存じます。

第四、海外の事情に通じ、進歩的主張趣味の人が必要と思ひます。此點に於て尾崎氏と阪谷男は、其施設に晴やかな近世的面影を殘して居りますが、奥田氏のは所謂整理一方で、幾分守舊の面影が有ります。但、これ亦奥田氏の好評を博した一因で有りまして、時代は何となく此の守舊的態度に淺からぬ執着の情を現して居りますが、然し乍ら所謂近世的都市は、要するに進歩的趣味、思想、要求、活動の産物であり、又其の源泉でありますから、之を滿足に作り上げる事は、其の方向の非常なる努力、躍進を要する事であります。

へば築港である。尾崎氏と阪谷男は、其の熱心なる欲求者でありましたが、奥田氏は之に反し之を無用視する意見の人でありました。こゝに尾崎氏阪谷男と奥田氏との相違を見る、其の趣味に於て、其の性格に於て、其の學問思想に於て、並に市に對する其の理解に於て、前者と後者の著るしき相違を見る。西洋の都市如何を研究した人は、都市と港灣との關係に於て、其の必要の事業たることを決して疑はない筈である。假に、東京市は貧乏で、西洋の都市は裕福で、それで事業の計畫に、大小、緩急の別が有ると致しても、苟も市民の生活に對する市政の關係責任を思ふ者は、必ず叶はぬ迄も之をやらなくてはならぬと思ひ、やつて見たいと思ひ、無理にも之を計畫せんとし、夢寐にも之を棄て難く思ふのが當り前である。後の市長たる人には、どうか、海外の事情に着眼して、善く其の趨勢を詳解し、日本のみの東京にあらず、世界の東京として、敢て一日も後れざらしめん事を期する理想あり、大志あり、企畫力ある、兼て實行力のある人を得たいと思ふ所であります。

第五包容力、調和力、按排力の勝れた人を擧ぐべきであると思ひます。申す迄も無く二百萬市民の利害、得失、窮通に係る一切の事を擔當して居る。其の仕事は頗るうるさく、其の爭ひも隨分けはしく、其の裁決は可成り面倒である。それに耐へ得る人、それを辨じ得る人で無くてはならぬ。奥田氏は此の點に於て力量を現したやうに思ひます。尾崎氏は理に強い人、やゝもすれば爭ひを惹き起したかも知れませぬ。阪谷男は情に厚い人、やゝもすれば斷定を控へがちであつたかも知れませぬ。奥田氏は其の間に在つて善く練れた人として、各種の故障を排除するに一日の長が有つたやうに感じます。即ち奥田氏はたゞ理を述ぶるのみで無く、情をも盡さんとする、即ち、渡る所に渡りをつけて、表面からも、裏面からも、入念に事情をつくし、以て故障の現れないやうに工夫する、其の故障を防ぐことに頗る周密であつたと思ひます。故に奥田氏のやり方は、尾崎氏の如く進むにかたよらず、阪谷男の如

く退くに急ならず、鋭き所あり、粘り強き所あり、八面に應酬して、能く包容し得、調和し得、按排し得たと思ひます。是れ實に奥田氏の檜場であつたやうに思ひます。後の市長たる者も亦此種の才幹力量に富まねばならぬと思ひます。

偖、現れたる候補者の中、誰が一番多量に此種の資格を有して居るかと考ふれば、山本達雄氏は或は怕る第一の資格に缺けて居りはしますまいか。例へば氏は市會議員の選擧等に盡力した事は有りますまい、盡力は舍いて、自ら投票した事が有りませうか、吾輩は之を知りませぬ。中野武營氏は現に自ら市會議長をして居るから、此の點に於て問題は無いとせねばならぬ。濱口氏、床次氏等、各其のいくつかの資格を有つて居らるゝ。澁澤男は一番多量に有つて居らるゝやうに察するが、澁澤男の缺點は其の餘りに老いて居らるゝ點に在りませう。然らずんば好箇の市長であると思ひます。其の他市會議員中に豐川良平氏あり、加藤正義氏も居られる。吾輩は所謂富豪に政權を持たせる事に、例も贊成し兼ねる一人で有るけれど、兩君の如きは、東京市民の長老たるに相違ない、市長は市民の長老から擧げらるべき者とすれば、兩君も亦市長たる幾分の資格の有る人と思はれる。況や其の既に市會議員たらるゝをや。

若槻禮次郎氏は最後に現れて、一番有力な候補者と承りますが、如何にも氏は其の技倆に於て、其の閲歷に於て、すぐれた適任者であると思はれます。若槻氏の如きが一番振つて力を入れて見られたら、東京市政の内容に對し、必らず新たに啓發せらるゝ所が有り、日本の市政の進歩に貢献せらるゝ所の甚だ多かるべきを疑ひません。然し乍ら氏は地方政治、自治の問題に幾分興味の有り、注意を寄せられた事の有る方でせうか、そこに疑問なきを得ません。

其の他に、市民の長老として、朝吹英二氏の如き、莊田平五郎氏の如き、森村市左衛門氏の如きが、折々候補者に擧げられて居りますが、吾輩も此の二三子の如きは、同じ富豪の中でも、稍市長たるに可なる人だ

と思ふて居ります。

富豪若くば長老の中から擧ぐれば、略ぼ以上の如き人で有りませう。其の他、敎育家可なり、裁判官可なり、新聞記者可なり、浪人可なり、廣く各所に門戶を開放して求むるが宜しい、決して舊大臣、舊大官と、獨り官吏の古手をのみ漁るべきでは無いと信じます。六かしいと言へば六かしいが、倫敦の市長の如きは、一年限り、古い市參事會員から、順々に、豫じめ一定の表を作つて交代して居る、それでもやつて往けるのでありますから、そう難題とするには當らないと思ひます。

四

以上の一般的說明の外、吾輩はこゝに幸の機會を藉つて聲明して置きたい二つの意見が有ります、共に東京市制の根本の組織に關する事で有ります。

其の一は德川公若くば其の一門の人を東京市長に擧ぐる事でありますが、これは前段の第一東京市に緣故の深い人をと申した其の邊の趣意にも合致する事であり、加之、更に自治制其者の根本の精神であり、要素であるとも信ずるのであります。

一體、日本ほど歷史を重んずるやうに見せかけて、其の實歷史を輕んじて居る國は有りません。現に東京市には、明治以降の歷史はあつても、其の以前の歷史は無いと申すべき有樣であります。東京市がそうで有るやうに、自餘の各市も亦そうで有る。橫濱、神戶は、勿論新しい市である。京都市は古い市であるけれど、これも東京市の新しく爲つた如く、同じく新しく爲つて、維前以前の歷史と絕緣いたして居る。吾輩は獨り大阪市のみが、やゝ舊來の傳習、在來の遺產を傳へて居るやうに思ひますけれど、それも東京や、京都や、神戶や、橫濱の如く、まるつきり、新らしく爲つた、新しい習慣ばかしに爲つた內地の各都市に較べて申します事で、西洋の各都市に較べて申しますれば、共に同日の談ではありません。彼の都市には、英吉利や、伊太利の如き古い歷史の國は且らく別として、獨逸の如き、米國の如き、新しい國々の都市にも、いづ

れも相當の歴史が有り、昔ながらの市風資源を傳へて、昔と今とを一つに續けて居るやうに、奥床しい所がありますけれど、日本の都市には殆んど一つもそれが無くて、まるで殖民地の新市街同樣、孤立索居して、昔にも繋がりが無く、周圍にも連絡が無いやうな、寂れて、涸れて、潤ほいの無い趣が有ります。

よく人の申します、倫敦市長の就任式行列は、古い鎧や甲を持ち出して、古物展覽會の趣が有ると申します如く、彼の地の都市は、それ程古い紀念を、左ながらに今日に傳へて居ります。左ればこそ自治である。自治は歴史の遺物、其の積聚、其の結晶である。殖民地の出來星の寄り合ひ者の所には自治は無い。親子三代、近所と互に見知り合つて居る所に始めて自治は有る。歴史なくては自治は成らない。然るを獨り日本のみは、此の歴史の上に自治の政を築かずして、歴史を滅ぼし、人情を亡ぼし、向ふ三軒兩隣り、悉く寄留者、寄合人、風來人ばかしの上に之を築かんと致して居る。これが日本の自治制の振はない最大原因であると思ひます。

考へて見れば、明治維新の當局は、成るべく舊歴史を破壞せんと致しました。所謂廢藩置縣は英斷であつたに相違ない。然し乍らそれは舊歴史の破壞でありました。舊歴史の破壞は舊關係の破壞であります。舊關係の破壞は、舊人情の破壞であります。新行政區の民は、最早、舊歴史、舊關係、舊人情に依つて固く結ばれた隣人では有りません。同じ隣人でも、仇き同志の隣人も有る、或は然らざるも秦人の越人の肥瘠を見る如く、利害、休戚相關せざる寄合者である。そこに地方自治の行はるゝ理由は有りません。故に舊各藩を破壞し去つて、新行政區を置き、其の下に自治制を布いたのは、當時の行政家乃至立法家の大なる過ちで有ります。當時の行政家乃至立法家は、所謂自治の要旨を領會して居なかつた者であります。

藩を廢して縣を置いた當時の計畫は、無論已むを得なかつたものでも有りませう。而してそれに利益の伴ふて居る點も有りませう。而してそれに五十年の闕

係、人情、因緣の附隨して來た點も今日は固より之ありませう。然し乍ら議論の便利のため、短刀直入的に申しますが、昔の三百諸侯を今日其の舊領地に還し、其の諸侯を其の地方の市長として職に就かせたら、日本の自治の事業は、朞年ならずして必ず其の面目を改め、所謂隣保相助ける敦厚の氣風が勃然として起るに相違ないと信じます。

以上の論旨は尙詳述を要しますが、他日に讓り、偖て、以上の如き論旨に依り、吾輩はこゝに德川公一門の誰か然るべき人を、東京市長に推すやうにしたいと提唱するのであり、それが東京市の自治を振ひ起し、日本の自治を盛んならしむるに至る副產の利益も少小で無いと信ずるのであります。不幸にして、今の各市民は此の事に心着かず、市長の選擧に、縣知事とか、警部長とか、他の地方行政の經歷あり、其の土地には何等の因緣なく親しみ無き者を擧げ來る習慣に爲つて居りますが、吾輩は之を大なる心得違ひと思ふて居ります。重ねて申します、歷史の無い所に自治の政治は成り立ちません。彼の歷史に由らずして自治の政治を布かんと致して居りますものは、皆、間違ひであります。

右は今回の東京市長の選擧を目當に申すのでは有りません、左りとて德川家との因緣も、年を歷るに隨つて段々衰へて往きます。どうぞ、其の全く衰へ切らない中に、右に申したやうな思想慣習を作り上げ、東京の自治制を、獨り明治維新以後の薄つぺらな土臺の上に置かず、之を德川氏の當初に上せて三百年、若くば太田道灌の當時に遡らせて、古くして、厚い、奧深い、人情因襲の上に築き立てたいものと思ひます。

五

以上に於て其の一を述べました、こゝに端を改めて其の二を論じます、それは現行府縣制中の、特例の一つなる、市部會廢止論であります。

或は市部會廢止論、それは中央公論に論ずべき重大の事體で無いと思はるゝ方が有るかも知れませんが、吾輩を以て思へば、此の制度こそ、今日の都市の發達

を妨げて居る一大弊因である、東京市の現狀を論じ、其の將來を思ふに當りては、必ず論及せねばならぬ要目と信ずるのであります。市部會廢止論は、約めて言へば、今日の府と、今日の市の間に存する重複せる機關の廢止を要求するので有ります。如何なる場合に於ても、重複せる機關は、無用の機關である、吾輩は其の一を廢したい、孰れを廢するかと言へば、府に在るそれを廢するの外は無い。

試みに左の規定を御覧なさい。

府縣制の中より

第四十一條　府縣會の議決すべき事項左の如し

一、歳入出豫算を定むる事

二、決算報告に關する事

三、法律に定むるものを除くの外使用料手數料府縣税及夫役現品の徴收に關する事

四、不動產の處分並買受讓受に關する事

五、積立金穀等の設置及處分に關する事

六、歳入出豫算を以て定むるものを除くの外新に義務の負擔を爲し及權利の拋棄を爲す事

七、財產及營造物の管理方法を定むる事但し法律命令中別段の規定あるものは此の限に在らず

八、其の他法律命令に依り府縣會の權限に屬する事項

右は府縣會の職務權限である、こゝに市會の職務權限を揭ぐれば、殊に明瞭と爲るのでありますが、煩雜を厭ふて揭げませぬ。去り乍ら、要するに同じ事である。但、市會の議定事項は十一に分つてある、それは法律が新しいから規定が綿密に爲つたので、府縣制は三十二年の制定であり、市制は四十四年の改正である、故に、其の規定事項の相違を來したのは當然であるが、以上に揭げた第一項より第七項までの規定事項は、悉く其の十一項の中に含んで居り、其の字句すら殆んど相類して居ります。而して市部會とは、右府縣行政の中の、市部に關する事項を審議決定する機關である故に、其の權限は、即ち市會の權限と全く同一にして、其の施設する所は互に相重なり合ふ事に

居るのであります。日々の新聞記事を注意して讀まるれば直ぐお分りに爲ります事ですが、東京府知事の絶ゑず聲明し活動して居る範圍と、東京市長の聲明し活動すべき範圍と、如何に相重複し交錯して居りますが、それだけ其の費用の負擔も、動もすれば相重複して居る。而して其の重複する割合に、市民若くば府民は其の恩澤に霑ふては居りません。反つて其の弊を受けて居る嫌ひが無いでも有りません。

吾輩の一友人は、曾て此の事を以て東京市制の大缺陷なりとし、明治三十六年、四十二年の兩度、此の事を論議しましたけれど、世上應和者なく、降つて大正三年の全國各市聯合協議會には、當時名古屋の市長阪本釤之助氏が之を提唱するに至りましたが、又唱和者少かりしと云ふ。吾輩の一友人は兎も有れ、阪本氏は縣知事としての經歷に加ふるに市長の經驗を以てして此の說あり、以て現行府縣制の市部會制度が、如何に東京市を初め、大阪市、名古屋市等の大都市の發達を妨げ、活動を阻礙して居るかの一端を窺ふに足る。東京市を初め、內務中央の吏に、切に此の點の顧念を願ひたいと思ひます。

前の舊藩主を尋ねて、歷史的舊誼に依り、自治の根本的刷新を圖らんとするの說は、遠くして難い意見でもありませうが、以上の市部會廢止論は、近くして易い意見である。中央法制の吏が、秩序的に、論理的に、推究してくれゝば、直に片の付くべき問題であると思ひますから、幸に新生面を發揮されたいと思ひます。

六

東京市の財政を、或は膨脹し過ぎて居るやうに唱へる世上の說は、又しても世上の研究心の餘りに乏しい事を證する一事例として嘘嘆せざるを得ませぬ。

試みに大正六年の所謂市財政總覽を見ると、左の如く爲つて居ります。

大正六年度豫算總攬

歲入

經濟區分	總歲入
市（普通經濟）	五四〇五〇七一円

養育院	二七三一五五
水道	二五二〇九六四
市區改正	三三三三四五六
上水道擴張費	三四〇〇〇〇
火災共濟金	三五四六〇九
事業公債償還金	三一一二四五八
上下水道公債償還金	一三九九四二一
電氣軌道事業費	一二三五五五六三
電氣供給事業費	二五四四一八二
電氣事業減債金	六三九五一七七
電氣事業工場勘定及貯藏物品費	二六六七四五九
計	四三七二一六一五

歳出は略しまするが、以上の總歳入は四千三百七十二萬圓である。假りに之を標準として考へまするなら、人口二百餘萬の東京市一年の經費が四千三百萬圓なるとは果して膨大と謂ふべきでありませうか、これが第一の問題である。吾輩は斷じて然らずと思います、決して膨大とは思ひません。何處の世界の强國に僅々四千萬圓五千萬圓を以て、一年の經費を支へて居る大都市が有りませうか。(第二)以上の四千三百萬圓の內容は、以上の項目で分ります通り、吾輩は之を揭げて一定の收入豫算と爲すすらおかしい事だと思ひます。大藏省が斯樣の豫算樣式を是認し慫慂することが既に不思議の感に堪へません。どこに工場勘定や貯藏物品費若くば減債金の如きを、普通歳入に編入する所が有りませうか。此等の勘定を適當に分類し淘汰し去れば、四千三百萬圓の勘定は更に小さい〳〵勘定に爲つて仕舞ひます。故に此の額を標準として觀察することすら、既に世上の誤りである。(第三)尙以上の項目第一に市(普通會計)とあるから見れば、其の餘は皆特別會計であることが自明の理である、吾輩は之を一緒に列敍することが既に間違ひの元であると存じますが、然らば其の普通會計は幾何かと言へば、五百四十萬圓である、東京市の經濟の正味はこゝに在る、決して大きな費用ではありません。(第四)然らば其の普通會計に屬する五百四十萬圓の中、實際に於て、市民の

負擔に屬する市稅の總額は幾何かと言へば、百八十四萬圓である、これが市に對する市民の正味の負擔である、決して重いとは謂はれないと想ひます。尤も此の外に市區改正に屬する特別の租稅がある、それは六十六萬圓である、故に合計二百五十萬圓である。更に此の外に區の收入する租稅がありますが、それは主として小學教育に關する費用に充てられます。要するに市稅として、市民の負擔する費用は、以上の年額約二百五十萬圓に過ぎない。これが東京市として果して膨大な財政計畫で有りませうか。

吾輩は東京市民の負擔に屬する租稅が四千三百萬圓あつても、東京市の今日に處する計畫としては、尚多いとは謂へないと思ひ、どうかして、東京市がそれに堪へ得るやうに工夫して往かねばならぬと思つて居ります。東京市は一市といへども帝都である。帝國の盛衰榮辱を一市に荷ふて居る大切の都會である。而して其の人口は二百萬を超へて居る、此れ位ゐの負擔は之を甘じてせねばならぬ。而るを況んや二百九十萬圓に止まるに於てをや。今日に於て東京市民の租稅負擔の過重なことを論ずるのは、要するに根據の無い說と存じます。

更に別の材料を掲げて之を證しませう。本年四月に發表せられた東京市內の民有地總面積は一千二百九十八萬餘坪、約一千三百萬坪で、其の總地價は九千四百五十八萬圓餘、約九千五百萬圓と爲つて居ります。考へて御覽なさい、何といふいゝ加減な地價調べで有りませう。一坪當りが平均七圓三十錢に過ぎませんが、どこに東京の市中に現在七圓三十錢しかしない廉い土地が有りませう。東京市は地租に課稅することは出來ません、たゞ市區改正特別稅に於て、本稅の百分の九を課して二十一萬圓餘を取つて居りますが、御承知の紐育市は、其の宅地と建物に對する課稅だけで一億五千萬弗からを取つて居ります、殆んど之を唯一の財源として經營いたして居ります。制度の相違も有りませうけれど、東京市の一千三百萬坪を僅に九千五

百萬圓の地價見積は餘りに低くてお話になりますまい。

七

以上のお話は假設にしても、聊か當節の問題に觸れて居ると思ひますが、此の外に大東京市の區域を如何に定むるか、東京市の特別市制を如何に定むるか、而して新東京市長に如何なる事業計畫を立てしむべく希望するかの問題が、頗る世上の注意を惹いて居りますけれど、吾輩は唯だ以上に述べた通り、帝國の首都たる新時代の新東京市を最も大膽に經營したいといふ數語を繰返すのみにして、本論を結びます事を、遺憾ながら已むを得ないと存じます。

終りに臨んで、尚、申添へて置きたいことは、今回の風水害の善後協議として專ら其の衝に當つて居る有志者は、例に依り澁澤中野の諸氏其他の富豪にして、東京市若くば東京府選出の代議士は、一人も其の發起者に爲つて居らず、實際に於ても、少しも周旋奔走いたしてくれて居りません。日本の市の根底の薄弱な所以はこゝに在る。これが西洋ならば、決して此の如き事は有りません。必ず代議士が先に立つて、其の中心と爲つて、奔走盡力いたすので有ります。其の代議士は必ずしも市の富豪では有りません、日本と略ぼ同じ手合の人達と見ていゝので有ります。而して其の代議士連が先に爲つて斡旋し、唱道するに當り、其の市の三菱氏であり、三井氏であり、澁澤氏であり、中野氏である富豪、耆宿、先達の人々が、いづれも其の召集に應じて馳け集まり、其の指揮に應じて充分の盡力をするので有ります。其の通りでありますから、其の市役所と代議士の關係も、黨派の異同に拘らず頗る親しいのであります。卽ち、彼の代議士と市役所と富豪とは、相互に呼應して、各其の適する所に力を用ゐて居る一種の有機體でありますが、我が代議士と、市役所と、富豪とは、散り〱、ばら〱に、各が自々、銘々勝手な眞似を爲して居る有樣で有ります。彼に於ては有機體である、故に自治體でありますが、我に於ては有機體でありません、故に自治體と謂へません。こ

れは前に申した歴史關係論と共に、是非世上の一顧を得たいと思ふ吾輩の切なる願望で有ります。

且、西洋に於て、パーマネントセクレタリーと申して、黨派出身の外なる、永續の事務吏が有つて、中央政治に於ても、地方に於ても、黨派の紛更以外に嶄然として獨立して居る規律は、日本にも亦必要の事で、其中央政府に必要な如く、地方自治體にも同じく必要な事と存じます。吾輩は德川公の如き、東京史に歴史的因緣の深い人を擧げて市長とし、其助役に、こゝに申す意味のパーマネントの助役を置き、これに一般の事務を掌理せしめ、市長は時あつて變るも、其の助役は永遠に動かず、以て東京市の事務を、市長の更迭と黨派の形勢に依り、變動せらるゝ事の無いやうに保障したいと思ひます。それを極めて大切の要務であると信じて居ります。東京市のみならず、各地の大都市が斯樣に心する事に爲れば、必ず効果の多かるべきを信ずるの餘り、東京市が卒先して其の模範を示すに至らん事を陰ながら切望して居る次第で有ります。

斯筆十年

——其の間、操觚者として見たる世事、人事——

黒頭巾

其一

今、吾輩、越後に在り。日々、霙日和に、靜思、以て、筆を執りつゝあり。恰も旬日の前、吾人數友と共に花を成田町に觀る。黄花白花、燦爛として不動尊を繞りて照映す。不動尊の背後の火焔、更に菊花の光燄を

添うるなり。踰えて二日、吾兒の誕辰の晩餐會に、一家團欒して、健康の盃を擧げ、微醉恍然たる中に、門を出で、俥を驅つて上野に到る。衆兒相送るの聲、猶ほ耳邊に聽くが如し。夜景杳茫として、吾夢を載せて千山萬水を踰ゆ。輕井澤の名、夢、現の中に過ぐ。睡醒むれば、曉光、乃ち日本海の雲影を迸つて窓外に來る。直江津なり。近郊皆、雪を帶ぶ。此身、始めて天涯に在るを覺ゆ。

◎山邱の雪、車窓に映ず。客魂爽涼、窓を排して郊原を望む。濟雲微しく垂れて寒意を添う。紅旭、地平線上に現はれ、光芒、斜に枯林を射る。今年、雪の來ること早し。去年に比すれば、初雪、蓋し四十四日の差ありといふ。雜木林、葦蘆、ともに未だ落葉せず、寒光、既に天地を染めて、人をして忽ち塞北の詩を想起きしむ。

◎吾母、故郷に在り。病後、秋來、いよ〳〵壽康を加ふるを聞く。車窓相距る五百里。此の寒威、遠く南侵することと莫からん乎。吾儕、坐に退いて短信を草すれば、汽車、日本海に沿ひ、東走すること半時許。目を擧れば、忽ち雨聲、颯々、窓を打ち來るあり。暗雲、密に鎖して兩脚、次第に重く、北海の白浪、澎湃として、濤影、高く汽車を襲ひ來る。

◎直江津より東、柏崎、鉢崎。今、一々、驛を記せず。鐵路、實に、波際に接して東走す。一帶の沙邱、起伏して、僅に波濤と鐵路とを隔つるのみ。盤舍、碁くが如くに沙邱に點綴し、波濤、或は躍つて邱上に見ゆ。沙邱、缺くる處、日本海の莽蕩、吾が顏を照らす。近は白浪洶湧し、遠は碧波杳渺として鵬雲に接し、雲濤融合するところに穀糊あるべし。

◎一望、郊原際無きは下越の野なり。若し、快晴、青天に眸を放てば、野色、北海を帶びて大陸に到るの思ありといふ。此の朝、雨ます〳〵重くして遠望す可からず。烟樹頻りに西走し、濤聲漸く遠ざかり、山邱出沒して、中越に到る。塚山に下車す。村驛、寒雨に蕭條として四顧皆、林邱なり。俥程十分にして小驛に到る。則ち宇塚野山なり。小溪、家に沿ふて奔り、山驛の情趣あり。忽ち左傍に、喬木森々、林園、外溝を繞らし、自ら一郭を爲すあり、問はずして土豪たるを知るべし。俥、まさに林園に到らんとして、外溝に沿ふて左折し、翠錦堂に到る。

◎翠錦堂の主人、寒光といふ。相迎へて北庭の紅楓を看る。北越に、元と此の如き紅楓無し。父祖、京洛よ

り賞らし歸るところなり。紅楓、翠松と、影地に爛す。微雨、紅を染めて、坐ながら嵐山、高尾の秋光を賞するに足る。紅葉、此の如くにして雪既に來る。北海の寒を見るべし。

其二

◉吾輩、翠錦堂の南窓に、閑に北國の霙日和を送る。閑適と暢和と、此頃の如きは近來得難し。吾輩の趣味、書窓に在り。明窓淨几を得れば、淹留して耽思するに足らずんばあらず。此處に起臥する事、既に五日を過ぐ、猶ほ一日の如し。今日、朝來。風遠く去り、軟和の日光、南窓に映じ、小禽の啼くを聞くことあり。

◉文人の書齋は城郭なり。快心の城郭を築き成さば、死守するに足るべし。王國は自ら紙上に在り。然れども吾輩の如く、十年來、南船北馬。乾坤を以て家と爲し、到處に、明窓淨几を求めて城郭を築く者は、則ち懸軍萬里、筆を戟と爲して以て野戰を事とする者ならずんばあらざるべし。

◉吾輩、此に來りてより日として夜として、霙(みぞれ)ならざるはなし。風、雨雪を含んで林木を吹く。主人、吾輩に問ふ。能く霙に飽かざるを得るや。吾輩、答ふるに未だ飽くこと無きを以てす。蓋し山村寥落と雖、其の寒寂、閑雅の景象、又た以て執着するに足る。主人、四五日ならざるに早く既に飽くものは、碧潭の魚、翠色の美を知らざるが如きなり。霙日和の續くこと半歳の長きに斷續するの時、乃ち恐らくは消閑の方を講ぜざる可らず。其の未だ僅に五日、十日の時、北海の霙日和、却つて吾輩をして新情趣を味はしむ。

◉今日、朝來、頻りに鴉鳴を聞く。小禽も亦、厭窓に迫つて鳴く。未だ窓を開いて其の形を見ずと雖、鳴音、頗る溫情あり。吾が北海の獨游を慰むるもの有るに似たり。日、亭午に近くして風漸く暖に、日光曙々として窓櫺を照らし、闌木の影、紙窓に映ず。鴉影時に日影を動かして過ぐ。五日來の霙日和、今、始めて此の雅日を得る。時に、廊下に出れば、紅楓の枯葉、板簷に散落し、葉緣、卷縮して初雪の夢、未だ醒めざるらし。

◉吾輩は元來、田園の人なり。田舍兒なり。凡そ田園の禽鳴、樹聲、遠き兒啼、馬跡、すべて雜響、聞くに諱ならず。是等の響音の來るや自然に律調を爲す。窓外の音響、坐右に銕鼎、湯を湛へて松濤を鼓するあり。悉く銕鼎の律呂に合するに非るは無し。市人の來りて

俗事を談ずるよりは、何者も敢て、此の野趣の一大音樂堂に向つて破調を試みるものある事無し。

其三

●吾輩の東京の駒籠の僑居は、樓に登れば、滿目悉く喬木なり。近きには富士、神明の二の大なる森あり。遠くには田端、日暮里の翠色、田圃を含んで吾が軒端に映ず。樹下、すべて人家なり。觀來れば東京は森の中に在り。吾が書樓より見たる東京人は、まさに森林生活を營みつゝある者ならずんばあらず。

●森林は人生の聖殿なり、趣味の寶庫なり。森林無くんば人生は荒寥たらん。吾輩をして駒籠に執著せしむるものは、此の二の森と、且つ四周の樹影とに在り。

●森林生活は趣味極無し。森林に一溪を得れば、更に健かなる性命を生ず。東京の下町には行樹多し。近年、殊に多し。日比谷公園に沿ひ、内幸町の康街の老柳一列、林を爲すものを以て、趣味第一とす。

●風景は斜に透視するを佳とす。茶の趣味の極致も亦た此に在り。幾千か青簾を透して、數四の坐敷を隔てゝ、細く遠く庭樹を認むる時、三伏の夏、なほ炎暑を忘るゝに足る。行樹の蔭より正しく見たる帝都の町は

興味少し。畫趣も少し。御溝の柳蔭より斜に、水に沿ひて遥望する時は畫趣あり。山の手の森かげより、森の中の帝都を望む時畫趣尤も饒しとすべし。

●田園の樂しむ可きは樹木、林邸多ければなり。田園に歸るは森林に歸るなり。田園には老木あり。老木は造化の手を以て地上に畫ける國土の藝術なり。老木は則ち自然の繪畫を象徴す。吾が駒籠の僑居は、林木多しといふも、市井の氣漸く浸染せざるにも非ず。但だ二の森の老木、頗る愛す可し。羅馬の都は或は一日にして建つべし。百年の大木は一日にして生ず可らず。吾輩は老木に憧憬す。

其四

●吾輩、駒籠の神明町に住すること既に八年。吾輩の操觚生活十年の中、其の大部は此に經過せり。吾輩に一男三女あり、皆、此の町の小學に就學し、半は卒業し、半は在學す。吾輩の始めて此の町に來りし時、電車を去ること二十町。其の後、山手線に駒籠驛を設け、市内線は白山下より上りて巣鴨に進み、更に本郷線に春町を得、漸く電車線に遠捲せらるゝを思ふ。今年、吾輩、西游より歸り來れば、左に近く動阪線、右

には駒籠橋線、此の町を掠めて新設し、最も近きは吾家と直徑二町に過ぎざる可し。八年前、吾輩、樹蔭を求めて此に來りしに、八年の後、電車線は吾輩を追ふて此に來れり。

◉此の町、染井に近し。昔、植木屋の巣窟なり。今、なほ植木屋多し。閑暇に乘じ、輕杖を弄して植木屋に到れば、此の町の五十年來の變遷を聞くこと多し。吾輩も亦た窃ら幾多の變遷を目睹す。其の閑靜より漸く繁華に赴くの速やかなるは驚く可し。八年來、狹陋なりし小學は新築して大廈を起し、市内第一の新式と稱す。其の落成式に、參列せしに、市長奥田義人、自ら青年時の昔を演說して、兒童に訓誡せしに、斯人、既に亡し。八年來、此の町に在つて、殆んど其の變遷を見ざるものは、富士神社の森かげの卅軒長屋と、町の向ひの岩崎の別邸のみなり。

◉岩崎の別邸は、古の柳澤侯の別墅なりといふ。蒼々たる樹色、門牆に溢る。帝都の中、此の森、此の別邸無し。森の南隣、瘋癲病院なり。吾輩、月下に往來するに、往々、悲悽の聲を聞く。吾輩、青年時より蘆原將軍の名を聞く。將軍、依然として此に棲老し、健剛衰へずといふ。則ち神明町の內外、十年來、些の變革を見ざるは、卅軒長屋と岩崎との外に、蘆原將軍あり。

◉吾輩の始めて來りし頃、南隣に狩野友信あり。北隣に鳥居龍藏あり。友信は舊幕繪所の遺老、其の人、淡泊、親しむべし。或は風呂屋の歸途、石鹸と手拭とを携へて、吾輩の書齋にも來りし事あり。平生、好んで十四代將軍と狩野芳崖とを說く。杯を擧げて此の二者を語る時、感興逬るを覺ゆ。鳥居の書樓の庭に、老銀杏樹あり。彼が霞町に轉住するの後、大風、一夜、此の喬木を吹き折る。

◉吾輩、此に來りし時、偶、故鄕より母を伴ふ。母、共に住すること四年。其の間、吾輩、チブスの重患に罹り、體溫三十八度より四十度餘に上ること八十日、瘠せて竹の如く、鬚髯、籬の如し。時に、妻兒ともに病み、身世の慘憺たるを思ひし事あり。幸然、吾母、健にして家事を統率す。吾輩の蘇するを得るも、母の壽康なるに因る。今、母、獨り故鄕に在り。千里游踪、夢魂相憶ふ。

◉歲華流るゝが如し。風雪の中、今年又た盡きんとす。丁巳の歲尾は壑に赴くの長蛇の如く、戊午の年頭は、鬣を振つて進み來るの健馬の如し。吾輩の駒籠に在るも八年更に、一を加へ、尋いで九年、十年となるも本

た泣きに非るべし。

◉夫れ十年の歳月は斯生涯に於て甚だ長し。吾輩、十年來、未だ其の太だ長かりしを自覺せず。試に、回憶して、往事を語る時、始めて長かりしを知る。將來の十年、また此の如くして經過するならん乎。過去の十年、理想の中に過ぐ。將來の十年、全く理想の中に在り。理想に經過したる十年は春宵の短夢なり。理想に來らんとする十年は輝くこと新花の如し。

◉吾輩、少時より父母に隨つて諸國を經歴し、移住し、萩に生れて深川に卜居するに至る。深川は萩の南、日本海岸の一邑、近松門左衛門の出生の地なり。而して稍長して膝下を辭して游學し、今に到るまで、一處に約十年を經過したるは、唯一の神明町あるのみなり。此の地 執著するを覺えずして、漸く親んで離れず。自ら第二の故鄕と思はざるも、事實に於ては第二の故鄕ならずんばあらず。

◉斯生、假令、百廿五歳を經歴すとも、十年は生涯に於て短からず。人生、再生を期せず。樹下石上、吾が足跡の印するところ、則ち悉く萬古、唯一無二の因縁に非るは無し。此を思へば、十年の久しき、一地帶に定住する時、自ら以て記念するに足る。吾輩、偶、斯筆十年を思ふ時、併せて直ちに神明町を聯想するなり。

其五

◉斯筆十年、概ね鴻爪雪泥の間に揮ふ。吾輩、未だ海外に游ばずと雖、海内を三分して其の二を游歴せり。而して馬船の忙はしき今年の如きは無し。吾が席、殆んど帝都に暖なるに暇あらず。明年に期するところ亦た少からず。斯生、恐らくは游蹤に老ゆるに至らん。則ち年老に到ると雖、尙ほ、萬里の游を廢せざらん事を夢想す。

◉吾が筆を載せて到る處の國、會心の景、會心の人有らざるは無し。到る處の青山、皆、以て棲老するに足らざるは無きなり。然れども人生、風裏の飄蓬のみ、斯身、思ふところに任せず。自由なるは、恐らくは吾と筆のみなるべし。實は、筆舌といへども自由なるを得難し。

◉釋迦は解脫を教ふ。然れども彼が五十年間、斯道を說いて倦まざるを見れば、彼が執著の強さを見るべし。執著無ければ、斯生無し。人は執著に生く。不滅を說くは、執著の幻影ならずや。

◉夏目漱石の病歿する時、其の煩悶するを聞く。天命

は彼の執著を強奪せるなり。斯生に執著せんとするも、自然が冷酷の手は、債權を執行するの態度を以て人の壽を奪ふ。漱石には持病ありて、豫ねて長壽の難き覺悟せしなる可きも、萬一の際に臨んで執著を禁ずる能はざるは彼の至情なり。彼の文學は彼の大なる執著の中に在り。

●吾輩の見たる中に、侯大隈と公山縣とは執著の強き人なるべし。二人者、其の趣を異なす。二人者が老健無比なるも、畢竟、其の執著の中に在り。大隈の百廿五歳說は、其の執著力を表現す。彼は、眞に、百廿五歳以上を得るやも知れず。然れども單に長壽說より見れば、彼の理想は尚ほ小さし。

●古人の中、安東省菴には二百五十歳、大江丸には二萬歳の句あり。共に大隈を凌駕す。子渡邊國武は道術を好む、無量壽と仙化とを期するか、吾輩一たび彼に逢へり。彼は多く蝦蟇を養ひ、居然として蝦蟇仙の如くなりし。吾輩の見たる日本近世の詩人の中にては、九九八十一萬年、長生以て理想を逞しくせん事を言へる者あり。是れ蓋し執著の理想の尤も遠大なるものなり。

●執著は必らずしも生命のみに非ず。「生」の延長と、「生」の充實とは執著の由來するところなり。人容易餓ゑず、死せず。恰も懸崖絕壁の間、炎天にも枯死せざるが如し。

●乾ける砂の路にも、巖石の罅隙にも、草木の生長すること、人の逍利を求めて到らざる無きが如くなるを見る時、愴然として「生」の執著を嘆じ、「生」の貴ぶ可きを思ふ。又た併せて殺生戒を聯想せずんばあらず。

●吾輩、鞋底、到處、山巔水涯、住民有らざるは無し。人間にも絕壁の間あり。先年、南航して琉球に到りしに、大風雨の爲に、大島海峽に回航せし時、船窓より極めて奇僻の山巔に人家あるを望見して、此處にもまた一の故鄉ある乎と、深く感嘆せしことあり。蓋し旅行せずんば故鄉を解せず。此の如き奇僻の地を見ずんば吾が故鄉を憧憬するに到らざるべし。

●神、土を假りて人間を造りしかば、人間を奪ふて土を還す。土は則ち鄉土なり。鄉土は尤も慕ふ可く尤も悲しむべし。人は神を謳歌すれども、人を奪ふ者も神なり。生を奪ふは尤も不仁なり。然れども生を與へたるの仁は神に非れば能はず。

●古より大往生の語あり。然れども十年來。吾輩の識れる大往生は公伊藤の如きは無し。是れ恐らく古今の

大往生なるべし。ナポレネンも、謙信も、秀吉も、皆、此の如き大往生を得ず。

其六

●筆を以つて劍と爲して戰ふ者は忙はしき哉。行住、坐臥、觀るに隨ひ、聞くに隨つて想を凝らし、一々、新想を出さゞれば筆力揚らず。角力は春夏二回に大場所あるのみ。操觚者は一篇毎に、悉く大場所ならざるは無し。

●浩々歌客の晩年、吾輩とゝもに親愛す。彼は淡泊の性、酒を愛し、酒豪に非れども酒人なり、歿後、定めて酒泉太守たるべし。彼の句に一字猶藏古魂といふ。魂魄、寄せて文章に在り。吾輩も亦た全く彼と志を同じくす。

●操觚者の王國は紙上に在り。斯筆枯ると雖、此の王國は不滅なり。文人、死して朽ちざる所以のもの、唯だ此に在り。古大家の文を讀めば、古人、死したりとは思はれず。古人の魂魄、文字に藏するもの、還原し來つて今人と語るなるべし。今人の後人に於けるものも亦た此の如くなるべし。

◎巣林子を讀み、其の七十を過ぎ、形容定めて枯渇し

たる可しと思はるゝ年齢に及んで、彼が熱情、哀艶の情調を歌つて、後人を艶殺するを見て、其の魄力の大なるに感ず。此の如きは才にあらず、氣魄に在り。

●清人の文を讀むに、其の中、文章を有する者は死せず、文章無き者は英雄豪傑も亦た皆死すの語ありしを喜ぶ。此の語、含蓄饒し。究竟、人間の不朽は文章と離れず。生前、劍に權あり、死後、文に權あり。死後は劍に力無し。生前と雖、文に力あり。

◎浩々歌客は醉に次ぐに睡癖あり。微醉、微吟、次ぐに座睡を以てす。座したる儘睡つて、暫らくして醒め、或は二三時を經て醒む。一昨年の新春、共に期して飲み、將に別るゝの後、彼、座睡して夜半に醒め、人定まつて天地閑寂。籠鶏の私語するを聽き、忽然として、詩を思ふといふ。

◎彼は小禽を籠飼し、盆栽を愛し、石を愛す。其の情藻、欽すべし。彼、つねに吾輩の頑健に憧憬し、吾輩は則ち彼の情藻に憧憬す。古人は見ず、知らず。近來、吾輩の見たる文人墨客、極めて頑健なる者は概ね情藻少し。今春、彼の一週年の記念會に、徳富蘇峰、彼を讃して、其の文必ずしも妙ならず、其の人則ち文章なりと言ひしは、彼の爲、亦た甘受すべし。

其七

◉吾輩、十年來、其の剛健無比にして衰へざる者を見るは、公山縣、侯大隈と太刀山となるべし。此の三人は、三山の嶄然として峙つが如し。山縣は腸胃を病み、弱軀と言はゞ言はるべし、然れども節制の嚴正にして、精良なる時計の時を誤らざる如きは前古にも匹儔稀なるべし。此の事、決して過稱に非ず。

◉五六年前、吾輩、彼を古稀庵に訪ひ、散策して海岸に出づ。彼は鳥帽、輕杖、飄然として行く。彼曰く、近來、少閑を得る。試に今人の小說を讀まんと欲す。何等の作か、可ならん。吾輩乃ち答ふるに「吾輩は猫である」を以てす。且つ漱石を說く。彼、首肯せり。然れども、其の後、彼、果して「猫」の一書を讀みしや、否やを詳にせず。政變、歷起り、彼必ずしも閑ならず。彼は依然として政壇の山斗たり、大御所の名實、空しからず。而して若き漱石死して、今や其の全集出づ。

◉二宮孤松は、言論界の一古老なりし。當年、末松謙澄と「谷間の姬百合」を共譯せし事あり。彼は、實は故老といふには餘りに若かりし。然れども吾輩も彼の死後に、其の享年を知つて、若かりしに驚けり。故老らしくも見え、自ら故老を以て任ぜし人なりし此の人、山縣の爲に無位の一幕僚なりしも、早く歿せり。

◉侯松方は赫々の名無し。然れども彼が老來、筆蹟の益進むを見れば魄力尚ほ衰へざるものあるべし。世、皆、六十の手習を笑ふ。松方は八十を過ぎて手習する者なり。大師流を學んで、大師流を鼓舞す。彼の師橫井北泉は彼よりも三四歲の長者なり。此の師弟、筆力の老剛、恐らくは近代に匹敵無し。

◉凡そ强を象徵するものは太刀山なるべし。單に、其の强を論ずれば、蓋し空前の强味ならん。講談に見る明石志賀之助は暫らく除く。若し太刀山をして、努力を以て、其の位置を堅守するを期せしめば、恐らくは風、大錦、西の海等悉く橫綱たるに堪へざるの後に至るまで、獨り橫綱を張る者は彼たる事、恰も山縣、大隈が後進政治家の甦るゝに干せず、巍然として雄を稱する如くならん。

◉操觚者として雪嶺、蘇峰、鷗外三人が健剛なるも亦た壯觀たるを失はず。彼等は皆、非常の强軀を有す。啻に十年來、衰へざるのみに非るべし。其の文名の久しきを以てすれば、蘇峰の如きは、筆陣に雄視すること三十餘年。吾輩始めて中學に入りし時、彼の文を讀

む。今、見れば漸く半白にして、尙ほ童顏なり。
◉鷗外は先年、吾輩に語りて、毎月、百ページの起稿を理想すといへり。數年來、彼が、日々に、大毎及び東日の紙上に連揭する續稿の長さは人を驚かす。其の努力、非凡といふ可し。

其八

◉文展は今年其の十一回に當る。斯筆十年、則ち略ぼ文展と年壽伯仲す。文展に見れば、人事、世事の變、皆、其の中に在り。
◉美術熱の勃興は、世運推移の最も著るしきもの〻一なるべし。殊に繪畫に於て然りとす。文展の外に院展、科展あり。新聞、雜誌が美術の爲に費す紙數の增加せるも非常なり。將來は知らず、今に於ては日本は美術國なり。
◉今朝、昨日來の晴和を重ねて、南窓の軟暖言ふ可らざるの妙味あり。主人は、越後の小春の南窓、殊に可しといふ。小春の南窓は、到處可なり。必ずしも越後のみに非ず。然れども吾輩、中國に生れて、生平、未だ北海の情調を解し易からず。游踪、西南に伸びて、北國に少し。先年一たび越後に來り、信濃川の河口を觀、新潟の砂邱に登つて佐渡を望みし事あり。時、四月の半にして、積雪磊々たるも、春風漸く銀世界に吹き來る。霙日和に逢はずんば北海の情調を解せず。此の游、初めて越後の眞を見るものなるべし。
◉南窓の軟暖に、主人、頻りに古書畫を示す。雪と書畫とは越後の趣味なり。今、吾輩、此の如くして在れば、北游の興味盡きず。彭百川の寒山拾得一幅、恍然として吾を忘れしむ。竹田生、山中人饒舌に、百川の畫、今人作る能はず、市氣無ければなりといへり。竹田生、吾を欺かず。此の幅、小幀にして淡墨なり。宜しく明窓に揭ぐべし。
◉吾輩、尙ほ數日を、此の書齋に送り、雪を長岡、新潟に觀て、岩越線に由つて羽前に入るべし。前途、觀畫の樂、洋々たるものあり。吾輩、先年、雪中に出羽を一巡し來る。中尊寺を觀、盛岡城に登臨し、青森より兩羽を歷て、一瀉千里に歸る。唯だ雪中の鳥海山、銀盤の中に白玉を盛るが如くなりしを印象す。此の如く美しき山を觀たる事稀なり。
◉吾輩、五六年來、游踪、概ね畫行脚ならざるは無し。自ら畫かずと雖、觀畫を勤めて怠らず。畫行脚の行、一々、枚舉せず。就中、尤も長かりしは今年

の游とす。吾輩、竹田生に傾倒し、竹田生の國と畫とを觀る可く、豐後に淹游すること七十日。其の山水、其の畫、誠に豫期するところに超ゆ。豐後は眞に南畫の國たるを知る。

◉竹田生の作畫の態度を見れば、彼が不朽なる所以を思ふ。彼は、終生、敬虔の意、愉らず。彼は餘りに愚直ともいふべし。然れども其の敬虔、愚直なるもの、則ち吾輩、彼に傾倒する所以なり。彼は成名の初も晩年も同じく一生懸命にして、寸楮容紙にも、不死の魂を藏するは、彼の才、識、氣魄の大、執著の深を見る。誠に文人畫の山斗なり。

◉竹田生と異趣にして、志を同じくする者、芳崖あり。芳崖は明治新畫運の革新の第一人者なり。彼の抱負、一世を蓋ふ。彼の鄕里は長府にして、大將乃木と同じ。彼の遺墨、多くは東京とボストンと鄕里とに存す。彼の鄕里には尙ほ多く彼の逸事をも傳ふ。竹田生と芳崖との畫は、人の氣魄を涵養するに足るべし。

其九

◉吾輩、禽聲に於て尤も鶯を好む。吾輩の友人にも鶯と杜鵑とを誇說する者少からず。山鶯尤も可なり。山鶯は遙に杜鵑に勝れり。溪谷の書樓に悠游して流鶯を聽く時、斯生の光華、此に存するを思ふ。子規の句に、「林檎食ふて牡丹の前に死なんかな」と云へり。林檎も可なり。牡丹花も大に可なり。吾輩も子規と同趣といふを妨げず。然れども吾輩は、尤も山鶯を好む。山鶯聲裡に讀み、且つ書き、悠游自適以て斯生を終はるを得ん事、是れ吾輩の至願なり。

◉山鶯の聲を聞けば吾魂をして悠久境に游ばしむ。吾輩の游歷したる中、山鶯の國といふ可きは、豐後と薩摩となり。此の二國ほど山鶯の多きは無し。山鶯の多き處、杜鵑も亦多し。鹿兒島にては冷水町に、山本九馬亭の僑居に寓し、飽くまで鶯と杜鵑とを聞けり。冷水町は城市と谷を隔て丶、烟霞の幽邃鄕、咫尺の間に鹿兒島ありとは思はれず。鶯聲、鵑聲、朝より啼き斷えず。吾輩、此處より雨の日に琉球に航す。當時、千溪の子規、亂啼して吾行を送るの句あり。寶境なり。此町より城市に出るの間に、岩崎谷あり、大西鄕の墓あり。墓畔、定めて鶯聲、鵑聲、啼き過ぐらん。

◉豐後に來りて、佐伯に、番匠河畔に宿すること五日。朝暮、鶯聲を聽きつ丶獨步を懷ふ。吾輩、獨步の生前には相逢はざりき。吾輩、始めて黑頭巾と稱せし

時、彼、肺を病みて既に晩年なりき。番匠川は彼が壮年にして、其の氣魄、情藻を養ひし處なり。吾輩、此に來り、此の川に臨んで、彼の遺文を讀みつゝあれば、涙、流れて息まず。

◉若き文人阿南匠川、吾輩を導き、彼の舊書樓を訪ひ、舊城に登つて獨歩を説く。眼界に入るの山川、概ね獨歩の足跡を印せざるは無し。獨歩が此の山川風景に契合するの深を知るべし。此處に來つて彼の文を讀めば、彼在すが如きなり。彼は山鶯を説かざりき。徐に鶯聲を聽きつゝあれば、暢和極り無し。暢和して、以て、眞摯、敬虔ならしめ、無我ならしめ、欣然微笑の中に永遠の感、油然として來る。獨歩は多く悠久を説けり。彼を起して、鶯聲を語らんと欲す。

◉吾輩、佐伯に、舊師舊友に會し、併せて新知と共に、佐伯灣に舟を浮べて、綸を垂れ、半日の清游を試みし事も亦た忘れず。百廿峯、一灣を繞り、身は蓬萊畫圖の中に在り。島の鶯、婉轉として高く舟中に向つて語る。得難きの詩境なりし。

◉佐伯は詩境、畫境なり。人物亦た此の如し。矢野龍溪、藤田鳴鶴、此に出づ。獨歩を佐伯に招きしも龍溪なり。吾輩、鳴鶴は見ず。龍溪と語れば、佐伯の趣味を懷ふ。此の地、青年、獨歩に憧憬する者少からず。匠川は其の錚々たる者なり。彼兄弟、皆、武健にして文を好み、美髯を有す。皆、淸白にして、未だ娶らず。

◉山鶯の尤も多きは竹田なり。竹田は其儘にして南畫の傑作なり。淸溪あり、瀑布あり、青嶂あり、竹殊に多し。人物、竹木、ともに畫中のものにして、山鶯と杜鵑と河鹿とを點出す。螢も亦多し。壯快の光景無しと雖、極めて閑雅なり。趣味鄕なり。天、閑雅の二字を象徴して此の溪谷の趣味鄕を作るものならずんばあらざるべし。竹田生が此に生れて、其の人物、其の畫、ともに「雅」の極致を得たるもの、竹田の地氣、凝結して、此の傑人となれるなるべし。

◉吾輩の友人白茅生、斷金の交を爲すこと久し。彼南遷して竹田に在り。吾輩、彼の書樓に寓すること二旬、其の淸境、永久忘れず。曉に、鶯聲に喚び醒まされ、鶯聲に日暮る。奇峯、後に在り。三畝を隔てゝ、前に竹樹の邸あり。朝、高窓を放つて、臥して青空を眺めつゝあれば、竹影、參差として半天に交はり、竹田生の畫を掲ぐるが如し。此の如き會心の書樓、從來、未だ得ず。將來も得易からざる可し。

其十

◉雪船、支那より歸り山口に往くの前、豐後に來り、天開圖畫樓を築きて居る。樓の跡、今、明らかならず、二說あり。吾輩、ともに之を踏査す。雪舟、豐後に庵留して畫くところ鎭田瀑の一枚を存す。鎭田瀑は九州のナイヤガラと稱す。吾輩、雪舟の畫を見て、彼の畫と實景とを對照せんが爲に、抽軒、石亭、白鷗、美可、碩村諸人と雨中に一觀す。

◉大雨を經たるが爲に、瀑勢、壯觀を極む。飛沫、高く山を超ゆ。雪舟畫中の觀音堂に、杯を擧げ高興逸會を得る。此の景に對して、雪舟が自然美を純化するの力量を感嘆し、瀑布が表現する無限の力を眺めつゝ、「生」の充實を想ふこと切なり。

◉此の瀑は豐後の萬峯の奧に在り。此の日、瀑布の蔭に、巖隙の淸淺なる水に、幾箇の鰻兒を發見したるは感興尠からず。此の鰻兒は定めて遠く大海千尋の底より出でゝ、萬溪を溯り來りしならん。詩神、暫らく彼に宿れ！、彼等の自然及び「生」に對する觀念を語らしめん。

◉豐後には畫家多し。大分の中尾義太郎、長野蓍五郎、衛藤歡吉及び戸次の帆足俊作は四大家と稱すべし。凡そ是等は地方の雄たるのみに非ず、世上に誇示するに足る。中津の自性寺の大雅室と併せて大分縣の五大藏畫堂と爲すべし。

◉長野の藏畫を見し時、床間に張瑞圖の山水の大幅を揭ぐ。吾輩、久濶にして此の一傑作に再會せり。奇緣實に淺からず。此の畫に對して五年前の畫行脚を回憶す。

◉大正二年の初夏、深野知堂と大阪に會し、本山松陰の家を主とす。知堂は判事を罷め丹靑に從事す、詩、書、畫三絕の稱あり。松陰、東道主人となり、三人相伴つて神阪の間に、張瑞圖の書畫を探る。此の如くする一週日、名家の藏幅其の大半を觀る。當時、見て其の構圖を寫せる瑞圖の一幀則ち大分に再會せるものなり。

◉松陰は趣味宏博にして精力旺盛。旅行を好み、足跡、天下に遍ねし。其の旅行するや、軍隊の行軍するが如く、行程、豫め精細に定めて勵行す。烟草を廢し、酒を節し殆んど禁酒に近し。克己、精勵して以て理想を行ふ。吾輩の節酒禁烟、實に、彼に刺激を受ること多し。◉吾輩の西游より歸るや、彼、吾輩に問ふに、觀光の

為か、藴蓄の為なる乎を問ふ。吾輩、答ふるに藴蓄の為なるを以てす。蓋し南紀の研究に沒頭すること半年、吾が文章を養ふ所以ならずんばあらざるなり。

其十一

㊅吾輩、生平、人國研究を好み、新人國記に著手する前より旅行を事とす。三河の豐川稲荷に參して、御籤を求め、少より旅行を好むの一句を得て、覺えず一笑せし事あり。新人國記を著すの後、歴、汗漫游を為す數年の中、まさに全國を完成するを得るに至るべし。

●十年來、游歴するところ、風景の、つねに胸裏に印象するもの小からず。名山は富士山、筑波山、淺間山、立山、比叡山、海門岳、高野山。今年、九重山を得る。明年夏、吾輩再游して、其の絶巓に立ち、山靈に向つて演説を試みん事を思ふ。

●川は利根川第一、殊に佐原以下尤も佳し、江々、沼々、漫々として吾が心胸を洗ふ。水郷は霞浦及び十六島。霞浦にては牛堀佳し。十六島は「日本の和蘭」なるべし。利根川、島を遶つて流れ、鹿島、香取、佐原、牛堀、潮來、皆、江を隔てゝ島を抱く。四周の堤防、春綠、若波に映ずる時、玉突台の新らしき羅紗よりも美し。若し此の堤上に櫻樹を遶れなく栽えば江上の佳觀を現出すべし。花時、扁舟を浮べて島を遶らば、無限の舟游たるを失はず。

㊅川は大和の吉野川、阿波の吉野川も共に佳し。海は鹿兒島灣、高知灣、馬關海峽、皆、極めて可なり。鹿兒島灣の櫻島、吾輩、其の噴火の前年を見る。明麗の姿、尚ほ眼中に在り。殊に、大西郷の遺宅より望みし時、尤も印象的なりし。其の翌年、大爆發の噴烟、天を覆ひて、遠く帝都を訪ひ、吾輩の書齋にも粉灰を留め、烟雲、濛々として更に北に進めり。此の頃、恰も、山本内閣にして、海軍收賄問題の勃發せし時なりし。

㊅吾輩、土佐に到りしは十月、秋風なほ炎暑を帶び、偶、瀧咬の櫻花、妍娟として山に映し、海に映じ、五台山下、吸江の一大木、尤も花氣を籠めしを記憶す。吸江の松颯は海南の壯觀、鏡川の香魚は頗る美味なりし。馬關海峽の朝暾、夕陽、瀬戸海の美觀、此に至つて窮まるものなるべし。

●吾輩、青年時に、一たび耶馬溪を見、今年、重ねて往く。二十年前よりは今年、見たるを佳しと思へり。昔は遠足行軍に、銃を負ひ、靴を穿つて往き、今、輕裝颯然、耶馬溪鐵道に搭して行く、車窓に見たる

耶[illegible]して見るに勝れり。汽車を殺風景なりと言ふこと[illegible]、車窓より見れば風景變化極無く、應接に遑あらず。若し快意の所を得ば、下車して以て留賞するを妨げず。

◉天下到處に小耶馬溪あり、鄉人に問けば未だ耶馬溪を見ずといふ。其の風景を見れば耶馬溪の壘を摩するもの少からず。其の自ら小耶馬溪を以て任ずるは、耶馬溪山天下無の一句に制せらるゝなり。三河の長篠の溪谷は小耶馬溪の一なれども却つて風情饒し。

其十二

◉十年來、奇游、奇景、一々說き難し。一游必らず一奇景を得る。然れども吾輩、屢、汗漫游を爲すを以て、概ね飄然獨征す。獨征は奇景を得るを妨げず。奇游は伴侶を得るに在り。好伴侶あれば必らず奇游を得ざる事無し。蘇東坡が窮死ニ南荒ニ吾不レ恨、玆游奇絕冠ニ平生ニといふもの、吾輩も亦、屢、此感を爲す。ひとり南荒のみに止まらざるなり。但だ東坡の所謂奇絕は、奇景を指す、吾輩の所謂奇游をいふに非ず。奇景は獨り之を歌ひ、畫くべし。奇游は、游畢るの後、長へに、共に囘想の樂を同じくする者あるをいふなり。

◉琉球の大驟雨、運天港に爲朝を弔して名護に歸るの途、日漸く暮れんとして閃電、雨を送り來り、海を倒して天より瀉ぐが如く、吾輿、魚の如くに潛航せし事、奇景、奇游、髣髴として眼中に在り。名護の輿夫といふもの、南國の珍とすべし。吾輩、此に特筆するを禁ずる能はず。

◉琉球の炎天、七里の路、野遥、嶮阪、殊に海岸の如きは拳大の石礫、磊々として、烈日に燒けて焔あるかを疑ふ。輿夫、裸體、裸頭、裸足、以て吾輿を舁ぎて、一散に馳す。如此くして一日の中、七里を往還す。其の身を被ふ者、僅に頭上の髮と腰間の褌とあるのみ。

◉彼等は息杖を揮つて行く。內地の輿夫の五十步、百步にして、每に、息杖を用ひて肩を換ゆるが如き事を爲さず。彼等が肩を換ゆるは、右肩より左肩に、後頭を、半圜を描きて輿棒を廻轉す。肩を換ゆる時、內地の輿夫は、每に、上下動を爲すに、彼等は水平動を爲す。これを以て、客は肩の換はれるを知らず、而して輿既に改まる。客は肩に隨つて水平的に、前後に方向を轉ず。客、輿中に坐して、前路を眺めつゝ、光景、忽ち變じて後路來る。

◉彼等は足底に山海無し。海濱の[illegible]礫を奔ること青疊

を行くが如きものあり。峻阪、梯子の如くなるを上下するも毫も遅疑せず、速力を緩めず。又た太だ動揺を感ぜざる事、エレヴエターに乗るに異ならず。朝發後に名護を發し、直ちに運天に向つて難路七里、恰も午餐の時に及ぶ。而して彼等の多く喘ぐを聽かず。此の行程、彼等は一回たりとも息杖を停めし事有らず。唯だ吾輩の請に任かせて、與に一度村店に憩ひ、僅に茶を喫したる事あるのみ。彼等は一氣に十里を踏破するならん。吾輩は三時間、輿中に定坐するに堪えざるなり。

◎吾輩、南北游十年、未だ嘗て此の如き輿夫を見ず。琉球の游、ガズマルの樹蔭に感興迸り湧く。今、唯だ一の輿夫を標出す。吾輩、嘗て輿に乘つて雨中に箱根山を登りし事あり。輿夫、雲助を說いて氣燄を吐けり。然れども雲助は、名護の輿夫に比すれば兒戲のみ。近時、マラソン競走に勇者輩出すと雖、名護の輿夫の如き、頑強、蠻勇、破格の足力を有する者有らず。

●名護の輿夫の脚底には行路難無し。是れ吾輩、目睹して驚嘆する事實なり。名護の輿夫は特に、琉球の名物なり。琉球國縣の輿夫、皆此の如くなるには非ず。

昔、普賢菩薩、化身して遊女と現はれ玉ひし事ありと傳ふ。名護の輿夫は、恐らくは韋駄天の化身ならずんばあらず。吾輩、南海の趣味卿に、此の不可思議なる脚力の、永遠に保存せられん事を望む。

◎名護には回憶多し。大驟雨の夜、晴れて天、水の如く、月下のガズマルに梟の啼くを聞く。南海の涼夜、星光、恰も流水は映ずる燈影の如く、流れて地に垂れんとす、天色、全く美人の明眸の如し。

◎吾輩、旗亭に南國の女の琴を聽きしも此夜なりし。天南、蛇皮線を抱き、琴に合せて、彈き且つ歌ふ。世界最小種の小蛇といふを見しも此處なり。實を食はずして藷を常食する薩摩芋を見しも此處なり。吾輩、農學校に「薩摩芋と新文明」とを演說せしも此處なりし。同游、朝軒、天南、及び仲村 南國の導者は物外なるも、此の游を共にせず。物外は黒髯十丈、琉球古文學の研究に沒頭す。大成するの曉南海の契沖たる可きは彼なり。彼の健在を祈る。

●吾輩を舁ぎし兩輿夫。一は青年、高くして中肉。一は中年、中脊にして稍肉多し、ともに鐵軀なりし。體重は吾輩の十九貫に及ばざりしと見ゆ。相距ること五年、彼等は、定めて頑健にして健脚を驅使しつゝある

ならん乎。吾輩の爲には、此の記念す可き兩個の韋駄天、惜い哉、其の姓名を逸す。然れども琉球にも稀に見るほどの、此の大驟雨と、彼等の樸實なる顏貌とを印象して忘れず。

其十三

●奇景、奇游必ずしも說き盡さず。金剛山下、五條町に、吉野川に舟游して、漁夫、急流に投じて鮎を手攫するを見しも興味淺からず。宮島の春游、秋游ともに夢寐に存す。松島は共進會の時に、極めて繁華の團體にて見たり。絃聲、島を覆ひたり。

●福井は、吾輩、寶永小學に在學したりを以て、第二の故鄕の思を爲す。却つて他鄕の友人櫻村に誘はれ、三十年にして再訪したる時、山河、悉く舊時の印象を改めず。父老、尙ほ吾輩を識る者あり。感慨無量、殆んど情に堪へざるものありき。吾輩游歷十年、未だ此の時ほど感動したる事あらず。

●吾輩、少年時の寓居は、今、知事官舍たり。吾輩の往きし時、池松時和、縣知事たり。吾輩を延いて、邸內を一見せしむるに、三十年來の變遷、啻だ衡門と、洋風應接室とを新築したりしに止まり、其の餘、家屋、園池すべて面目を改めず。吾輩の父の書齋を池松も讀書處となせるを見る。

●此の光景に對し、少年時の記憶、一々、活動寫眞の如くに、慌はしく吾が眼前に還原し來る。一木、一石、悉く吾が情を煽らざるは無し。暫らく恍惚とし斯心、夢境を樂しむ。忽然として覺むれば、少年時の幻影即滅す。空中を行くシャボン玉の破裂したるなり。依然として三十年後の斯身なり。

●當年、浦島と雖、龍宮より故鄕に歸り來りし時、定めて情は堪へざりしならん。彼が玉手箱を開きしは與徐、焦慮の餘に出でしものと見るを得べし。

●吾輩は少年時に見し白山を仰望し、福井城に登臨し、九十九橋を渡り、興奮せる心を抱いて、櫻村と共に東に去り、金澤の兼六公園を瞥見し、能登に入り七尾に宿して不識庵を思ひ、和倉に游びて、晩春の一日を吟詠に送り、越中に入り、立山の雄姿を仰いで、壯心を鼓舞す。久しく富山の反魂丹を聞く。此の時、貫堂を一見したるも頗る感興を動かせり。

●富山より東にく〱、此の時、富直線開通後、未だ幾日を經ず。信越の間、日本アルプス連峯、雪白、燦然として日本海に映ず、山岳の大觀なり。觀不知、子不

知の天險は今、好風景喜ぶべし。其の名當らず。
●吾號、直江津に下車し、五智に至り、親鸞上人を思ふて、涙を流す。春日山は深雪、登る可らず。新潟より歸り、昔、「此の下に高田あり」といひしといふ高田を、六十年來の大雪の中に訪ふ。東道主人は武山東城なり。中學に、始めてスキイを見、名勝を悉く大雪に尋ぬ。妙高山、黑姫山を明月に觀、柏原を過ぐ。燈影、溪聲、尤も一茶を思ふに堪へず。長野に至り、新舊知人、相得て喜ぶこと甚たし。桐生、悠々、永見桂堂、就中、桂堂は三十年來の鄕友なり。吾輩少年時、鄕友、概ね文辭を以て、彼に私淑せざるは無かりし。

其十四

●中京の大平原は心目を爽快ならしむ。小牧山に登臨せしは雨の日なりし。秀吉の本營、樂田は眼下に在り。小手を翳せば、西軍の大勢を展望するの氣あり。犬山城は白帝城の名空しからず。大江は箭の如く、城は高く懸崖の樹梢に在り。又た得難きの奇景なり。
●華山、平洲の鄕里を訪ひしは共に感慨深し。華山の田原は稍、世間に著はる。平洲の平島村は僻村にして遠人に知られず。嚶鳴館遺草は平州の傑作、大西鄕一生、此の書を愛讀す。此の書の板木、幸にして此の村に存す。此の村を見れば遺草の背景を見る。平州會の創立せられし時、吾號、平州論を講ず。時の內務大臣子平田東助、特に來つて感懷を述ぶ。平田は米澤の興讓館の出身。興讓館の設立は平州の贊畫するところなり。
●奇游といへば、此の春、ポプラクラブ同人と共に阿波の游を爲しゝは奇景を得、此の秋、同じく共に成田に游びしは奇游を得たり。去夏、吉江孤雁の巴里に行くを送る爲に、中秋山人と共に、三人、相伴ひ、利根川の水鄕、牛堀及び新島に遊んで、江畔の高樓に登り、須田方塘、高安蘆風も相會して離杯を酌みしは淸游なりし。蓋し萬里の游を送る、都門の尋常絲竹の間に於てするを慊らずとしたればなり。
●此の春、阿波に往きし時、池田町に到り、更に吉野川の溪谷を溯り、大凰渕、小凰溪の奇渉を得る。天工、巨斧を下して巖石を劈さいて此の一大碧溪を爲す。碧潭、碧玉を溶かせるが如し。鄕人、大歩危、小歩危の字を用うるは當らず。小凰溪の門口に川口町あり。月明に散策して橋上より遠く溪澗を俯瞰す。溪澗の聲、なほ聞くが如し。

◉吾輩一行と共に、大凰溪を溯り、山を踰え、蔓橋(カヅラバシ)を渡つて祖谷(イヤ)山に入る。祖谷山は四國の五箇庄なり。蔓橋は絶崖に、鯨網を擴げたらんが如し。此の橋を渡るは則ち網條を沿ふて歩するなり。吾輩の如き肥短漢、靴を穿つて細き網條を行くは容易に非ず。蔓橋の奇談多し。江湖の名士にして、匍匐して渡過せし者二三に止らず。吾輩の如きは、幸にして匍匐するを免れたる者なり。

◉吾輩八年前、泰岳居士と共に富士山に登る。當時、今日の如く肥豊ならずして、山行も亦た苦しまず。絶項に紅旭を拜するの感、崇高言ふ可らず。人生、一度、登岳の游無かる可らずと謂へり。蔓橋を渡りし時、亦た此の感を發す。蓋し富士山、蔓橋ともに種痘に比すべし。

其十五

◉吾輩、人物研究に從事し、古人に於て、闡幽發微を期せり。此の事、必ずしも努力に非ず、既に趣味となる。闡幽發微は其の人、其の事、兩様に關す。發微を要するの事あり。闡幽を要するの人あり。書を讀んで此の感を為し、遊歴を爲すに當つて亦た此感を爲す。殊に、游歴に於て、好風景を得るのみならず、古今の人物を得る事多し。風景と人物との潜在して著はれざるものを發見するに及んで、其の能く潜在して此に到れるを怪む事あり。今、亞米利加を除きて坤輿を考ふる事難し。此の大なる半球と雖、發見以前、無に同じき也。

◉去年、今年、節分に記念あり、共に野州に於てなり。去年は寒雨を衝きて、櫻町陣屋に二宮尊徳の遺風を尋ね、彼の日記を記きしといふ座敷に立ちて彼を思ふ。櫻町は、人國記に「下の下國」と記す。彼が、此の國の荒廢を興復せるの努力、則ち報德教の樹立を想見するは足る。郷人、父老、彼の遺像を畫くに當り、座せる彼を憶起する能はずして、立像を描かしめしと聞く。

◉今年の節分、宇都宮に蒲生君平の遺事を求めて感發す。郊外の大谷溪の斷石も亦た奇景なりし。滿山、悉く斫つて石材と爲して鐵道沿線に輸石す、所謂大谷石は是なり。此の溪、今、閑適、愛すべし。然れども時々、刻々、溪山、削減せられて、舊時の容を失ひつゝあり。

◉春雪に、柏亭と共に須賀川に、亞歐堂の遺事、遺蹟を求め、酒を灑いで其の墓を祭りし事あり。百年前、

此の地に居て亞歐堂と號す。其の人、郷味に合はざる事、譬へば奥州に椰子樹を移植したるが如くなりしなるべし。雄魂、遺事と共に、此の土に埋沒するは憐むべし。

●中津に、獨立自尊の碑を見、福澤諭吉の家を訪ふ。少年時、讀書室の土藏なほ存す。此の矮陋なる土藏、福澤宗の發祥の地と爲す。此の地に、高山彦九郎の親友なりし梁又七の家を訪ひ、彦九郎の遺墨を見し時は、彼の雄風、なほ座上に滿つるを覺ゆ。彼の經歷するところ、蓋し低氣壓の通過するが如く、何物も壓倒せられずんばあらず。其の遺墨は極めて大醇なるものなり。以て彼の小照に換ふべし。

●近世旅行者の英雄は彦九郎を推す。間宮倫宗の雄奇、伊能忠敬の深邃、松浦竹四郎の精悍なる、凡そ此の四人は共に第一流たる者なり。竹四郎の遺稿、未だ刊行せざるもの一萬枚。彼の旅行は且つ記し且つ書き、一日を鞋底に送り、日暮旅宿に投ずるに及び、日記を整頓せざれば入浴せず、晩餐せずといふ。彼の北疆探究は此の如くして成る。吾輩、彼の家に就き、概ね其の遺書を見る。旅行中、屢、竹四郎を憶起すことあり。彼の精力、吾輩の企及するところに非ず。

●鹿水と中秋に大洗に到り、滿天の明月に濤聲を聽き、翌年は銚子の怒濤に、重ねて中秋を賞す。偶、公桂も亦た數町を隔てゝ濱口別莊に在り。翌日、犬吠岬の燈臺に登り、彼の來るを待ちし事あり。鹿水が自輪車を驅つて、つねに公事に奔走するも亦た吾が交遊中の一奇なり。

◎趣味は必ずしも職業に伴はずと雖、小島烏水が精確なる銀行員にして、山岳會の泰斗なるは頗る奇なる者なり。吾輩、嘗て彼を横濱の正金銀行に訪ひ、其の最高層に登りて、彼の兼任する手形交換の實地を觀たり。彼は銀行に由つて豪富を成すやも知れずと雖、彼の名は日本アルプスに銘せらるべし。

◎吾輩、十年來、尤も多く研鑽を費したるは江川坦庵の遺事なり。未だ其幽微を盡さずと雖、自ら開發を期するは久し。凡そ開發の業、一氣呵成なるものあり、或は持久戰に類するものあり。感興あり、境遇あり。

其十六

◎斯筆十年、其の間、人事、世界の變、治亂の變に異ならず。談論は政治を談ずするより快なるは無く、一轉して書齋に入る時、又た無限の新味あり。譬へば旅

行の興味、一半は旅館に投じ、浴衣を著け、寛々然たる時に在るが如し。

◉北海の雪は白兎を生ず。現代は人物を刺激して、或は其の手を高くし、其の眼を高くす。或は刺激を以て人を健やかにし、或は人を弱くす。刺激は人を導いて超越せしむ。生存は問題に非ず、問題は超越に在り。

◉日露戰役以來、地盤向上し、雰圍氣一新す。吾が立脚地の地層、自ら高し。歐洲大戰は世界を以て比隣となせり。佐久間象山が吾年五十にして五世界に繫るあるを知ると云ひしは、彼に在つては其の志なりし。今に於ては眼前の事實なり。日本は座ながらにして世界の舞臺に乘出でたるなり。

◉十年來、政變、屢起り、桂内閣の外、能く長命を得たる者無し。「憲政の神」に水泡の如くに生滅す。憲政、善政の論、双びて進む。各種の方面に成金を生じ、人心ます／＼敏感にして、世運漸く改まる。依然として改まらざるものは、大都會にも蚊の多き事、繁華場裏を轟車が横行しつゝある事なり。

其十七

◉萬卷の書を讀み、萬里の游を爲し、萬古の人物を觀ん事、吾輩の理想なり。蘇穎濱が當代の人物、韓魏公を見るを以て長江泰山を觀るに比し、以て文章の氣を養はんといふ。吾輩も亦た多年、此感を抱く。

◉一人物、一箇の小宇宙を有す。多くの人物を見るは、多くの宇宙を觀るなり。吾輩、好んで一世の人物を觀る。氣宇の大、談論の雄、伊藤、山縣、大隈、蓋し一代の雄なり。乃木と東郷と、又聖世を飾るに足る。先帝、崩御して明治維新史、終結す。蓋し、先帝は東洋の理想的君主にして、歷史上に匹儔無し。中興の洪運、先帝を仰いで太陽となし、維新の光彩これより煥發す。維新以來、幾多の人物は、晴夜の星辰ならずんばあらず。

◉嚴猛の士は、牲命唯だ高節と觀察とに在り。高節は期し易からず、觀察は[illegible]能くすべし。操觚の業は觀察の上に立つ。經世も主張も觀察無ければ已む。觀察の高さは識力如何に依る。識力を養ふは操觚者の事なり。斯身、潛航艇に似たり、世波の上に浮ぶを要せず。但だ潛航艇が高く波上に、偵察鏡を擡ぐると同じく、世波を超越して、以て、觀察眼を著けずんばある可らず。

◉角力に堪えざるに及んで、檢査役たるを願ふよりも、

寧ろ初より名行司たらん事を期するに若かず。多くの場合に於て、檢査役よりも、行司つねに勝れり。行司は自ら角力を取るを要せず。蓋し、虎を描いて猫に類するよりも、猫を畫いて鼠に逼るに若かざる事あり。

●斯筆、閑忙併び到る。此身、何等の撿繫無くして此手極めて忙はし。是れ操觚者の常態にして、又た其閑日月なるべし。尤も自由なる者は行雲流水にして、尤も忙はしきものも行雲流水なり。此の夕、北海の霙日和に、徹霄して筆を走らす。五更を過ぎて、窓外の風雪怒號し、點滴の音、瀑布の如し。靜に將來の十年を想ふ。

大正六年十一月十六日、越後の翠錦堂に於て記す。此の日、主人、雲泉畫譜一卷を示す。筆品奇秀にして、雅澹の氣、人を魅す。坐右に置き、時に愛翫して又た稿を續く。雲泉は九州の人、北海に客死して一片の雲となる。其の傳を閱して、今日、偶、彼の忌辰に値ふを知る。靈、相招く乎、奇緣喜ぶべし。越後には南窓、格子あり、日無し。紙窓を隔てゝ窓外に、大風雪の荒れ狂ふ林郊を見る心地す。黑頭巾記。

次號說苑豫告

「知名の兄弟を產んだ兩親の研究」

兄弟が揃ひも揃つて世に名を爲せるは何の爲ぞ。之れ豈に其父母よりの遺傳及び教育に因る所尠しとせんや。之を究むるは父母及び教育家にとりては勿論、將來家を成し子女を產むべき青年者にとりても重要にして興味饒き問題たらずんばあらず。兄弟共全國に名を馳する文學者・藝術家・學者・政治家等十氏について、多くは其知名の兄弟夫自身より其父母に對する正直なる感想を集めたるもの約五十頁、之れを新年號の說苑に滿載して讀者の清覽に供へん。

人物評論（八十八）

文明批評家としての「田中王堂」と「若宮卯之助」

北昤吉

▽王堂氏と若宮氏とに就いて

雪嶺蘇峰兩先生が操觚界の雙璧として多年世人の仰望の對象であつたが、今日では王堂氏や若宮氏が高級の讀書兒に重寶がられてゐるようである。二氏共に民間の代表的學者で學識も比較的に裕かであれば、見識も高邁である。殊に兩氏共米國育ちの爲めか思索の態度が極めて自由であり、又此の思索の結

果を巧みに表現する靈筆を持つてゐることとは兩氏の共通點である。

王堂氏は十數年以前に早稻田大學で認識論と倫理學とを講じてゐたが、講義は明快過ぎる程明快であつて、早稻田には王堂學徒と見做すべき學者は尠くない。自分も講義を聽いた一人であるが、學識の豐富のことは波多野博士が第一人者で、獨創の見に富んだ點に於ては王堂氏の右に出る者がないと思つた。自分は其の後に於ても同氏の論文を拜見する機會があるが、思想の主要な特徴は今日でも、以前とは餘り異なつてはゐない。世人は氏をプラグマチストと見做してゐるが、嘗ての桑木博士との論戰に認められる如く、氏は此の主義の深厚なる同情者であるが、寧ろヒューマニストと云ふべきものであらう。又功利主義が氏の全體の思想の特徴と見做されてゐるが、先年は兎も角、氏自から云ふロマンチック・ユーテイリタリアニズムを標榜してゐる通り、英國のミルやベンザムの功利主義とは多少趣きを異にしてゐる。氏が月並の功利主義を超越したのは、藝術を如何に取扱ふべきかに苦しんだからであると思はれる。兎も角も氏の生活本位の主張に就いては、生活といふ意味を大部廣い意味に解釋しなければ、氏を正解した者とは云へまい。自分は氏の思想の特徴は何事をもダイナミックに、ファンクショナルに又レラティヴに見る點にあると思ふ。殊にレラチイヴイズムは氏の思想の最大特色であらう。氏はヘーゲルとは他の有ゆる點に於て異なつてゐるが、苟しくも或る時代或る民族を支配した學說や信仰に對しては、何等かの價値を認めて、之れをジヤスチイフアイしやうと力めてゐる點がヘーゲルに類似してゐる。所謂「價値の保存」と云ふことに留意する點は二者に共通である。此の點に於て王堂氏はかのヘーゲル哲學から脫化してプラグマチイズムに轉じた米國のデュウイ教授に負ふことが多いと推察される。氏はサンタヤナ、ゼームス、ウオルターペーター等を解放の一使徒として讚美してゐるが、氏の思想に影響した者としては、デュウイを無視することは出來ない、併し氏が幾多の私淑する先輩を有することは、必ずしも氏の獨創性を毀損するものではない。

若し氏に就いて慊らない點はと云へば、氏が宗教や形而上學に對して餘りに理解と同情とを缺いてゐる點である。氏は所謂理想派に屬する實證論者であるから、止むを得ないとしても、氏が嘗てゴコールを評した態度や時に獨逸の觀念論的哲學を評する筆致などは、自分等から見ると氏の興味や理解は非常に偏頗であると思はれる。特に氏の獨逸哲學に對する知識の缺乏は何人も否むことは出來まい。氏は卓見家ではあるが學識の點から云へば、若宮氏よりも多方面に亙る造詣の分量に於て劣つてゐるように思はれる。氏の態度には、食傷による不消化の食物はドン〳〵棄てゝ自己の消化し得らるゝものだけを食つて自己の健全を計るような傾きはあるが、食ふ物の貧弱な割合になす力の偉大なのは天下一品であらう。此の點に於いて、徒らに獨逸の哲學書に拘泥してゐる學者とは異なつてゐる。もう一つ氏に對する不滿を云へば、氏は單なる「人生解剖學者」であつて、人生を分析しては見たが之を綜合して見通りにする丈けで、氏に依つて現實の人生は教へられるが、之を如何にす

べきかは敢へられない。又氏の文章は巧みであるが、此頃のものは、從來とは違つて流暢の域を通つて何となく女でもたらす樣なだらしなさと一種の術學的の所がある。自分は從來の文格論法の風霜を帶びた時代の王堂先生を選ぶ。

若宮氏に就いては自分は未だ拜眉の榮を得ない位である。唯氏が十數年前米國より歸つた時、故の幸德秋水氏が自分の兄の所へ手紙で今度米國から若宮といふ面白い人物が來たから是非會ひ給へと言つて來たことを記憶してゐる。其の當時は自分は氏を社會革命家風の人物かと想望してゐた。それで氏の「我れ豈に辯を好まんや」といふ論文集が出た時直ちに讀んで、非常に頭腦の明晰な而も學識の廣い民間一流の學者であると信じた。殊に自分は氏の世に阿らない直情徑行的の筆致に感心した。自分は氏の性格からすれば、今の生活や主張は一種の擬似色であつて、氏の本質は他にある筈だと信じてゐる。然らば何かと云へば、夫れは云はぬが花であらう。自分は唯氏に對して、日本の思想の獨立を唱へ、官學の大家達の西洋崇拜を攻擊する態度の痛快なのに共鳴することを告白して置く。自分は殊に氏の痛快味の多い文章を好むものであるが、氏の爲めに云ふが、永井柳太郎君等の論文に牛刀を用ひるよりは、もう少し意義のある方面に用ひて貰ひ度いと希望する。切れ味がいゝからとて何でも切つていゝとは限らないではないか。

二氏共に月々の雜誌上の論文に天才的の閃きを現はして民間學者の爲めに氣を吐いてゐるが、自分は二氏が更に努力して組織的の大著述を著はして貰ひ度いと思ふ。大抵の日本の學者や思想家は、二氏の折伏を待ずたとも、自然に滅びる筈ではないか。二氏の健在を祈る。

▽若宮田中比較論

岩野泡鳴

若宮氏は一つ上の兄分として僕も無事に交際して來たが、田中氏には或る事情の爲め二三年間ばかりの私交を僕から謝絕したことは、一部の人々の知つてる通りだ。が、互ひに公人としての問題になる時、僕は私情に左右せられて物を云ふことをしないつもりである。

若宮卯之助氏は米國の東部に於いて某圖書館に三年間一日もかかさず通ひつめた人としてそこの在留邦人の間によく知られたことがある。その癖、西部に放浪してゐた時には多忙な新聞記者をしてゐた。渠の歸朝はついこないだのやうに思つてたのに、數へて見れば、もう小十年を經た。渠が文明批評家であるかどうかは別問題として、兎に角、もつと早く、乃ち『時代の批評』と云ふ小雜誌を獨經したに次いで直ぐ、世に認められなければならぬ筈であつたのに、さうでなかつたのは肺病の爲めに二年ばかり退隱したからである。けれども、將來の爲めに自重心の强い渠は自分のからだにも十分自重して、もとの肥大な重々しい姿に恢復した。

丁度、僕が大阪に於ける新聞記者生活をやめて歸京した時、――大正元年の末だ――東京魁新聞（今もあるのはその性質が全く變つてゐるやうだが）と云ふ異色ある日刊新聞が出て、その新らしい體裁や編輯振りが新聞界を驚かしてゐた。これに僕の舊同窓が黒幕になつてゐて若宮氏を主筆に押し立ててゐた。渠や僕の同窓が意見の衝突で手を引くまで僕もそれに入社した。渠が再び頭角を露はし初めたのはそこで書いた物と少し前から『實業之世界』に於ける發表の爲めであつて、多くは警句を好まんや』と『若宮論集』とに集まつてる。この兩書に見えた若宮氏はもと禪宗の小僧であり、また明治學院及び福音會神學校を卒業したに拘はらず、思想方面には案外單純で淺く、社會觀察にのみ輝く機智が動いてた。金錢とは云はず、「矢張りびか〳〵した圓い物が生命だから」と實業家を冷かしたり、德富蘆花氏の向上的努力に乏しいのを『滿腹の詩人』と笑つたりして、その機智的皮肉は、曾て僕が公けに批評した通り、平面上の轉換に過ぎなかつた。從つて、これを喜んだのは專ら思想上の苦しみに乏しいそして『實業之世界』などを喜び讀む新聞記者や實業家どもであつた。

けれども、渠は一たびその專門なる社會學上の問題になると、その筆は鋭利の上に適確を加へ來たつて、大學連中の形式一天張りの議論などは片ッぱしからぶち毀わすに勝れた點では、今も初めも變はつたことがない。ところで、渠は或人の保護でソードの大社會學を譯了した間に、いつのまにか政友會一部の政治家連中と聯絡が附いた。その結果、筆一管を以つて中央新聞の主筆になつた。そして同新聞夕刊の巻頭に出る渠の『天無口』は東京新聞界に於ける一つの呼び物となつた。渠の一たび米國で捨てた筆がやッとその力を恢復したのか、それとも渠としての思想が圓熟して來たのか、兎に角、わが國で初めて見せた渠の短所がこの時からはさう目に立たぬほど、その皮肉に内容が添つて來た。わざとなことをわざとらしく書いたと云ふ風が無くなつて來たと云つてもいい。つまり、渠が實際問題に問題を得て來たのだ。浮田博士の無常識な新聞否定論に對する論駁でも、小學教育問題に於ける本末顚倒の指摘でも、如何にもその筆がさえてゐる。

『天無口』の短文から既に廣く認められて中央公論や新小説に渠がその得意な時事問題研究の長論文を書き出したのは、まだここ三年來のことだ。

これに比べると、年も少くとも五六歳うへで米國からの歸朝もずッと早かつた田中王堂氏の歴史の方がずッと古い。田中氏の生命が覺醒したのは、若しくは氏が奮起したのは、恐らく、自然主義の批評にあづかる一人となつた時であらう。そして明治四十一年、僕、乃ち、「泡鳴氏の人生觀並に藝術觀を論評す」といふ長論文で渠は兎に角一種の批評家としての位地を確保することができた。當時、相馬御風氏がまだ大學の學生として渠を崇拜し、「泡鳴のあの大論文にはとても泡鳴は答へ得ないでしよう」と云つたとか、田中氏自身がその後僕に語つたことがある。けれども僕もこれには長い論文（而もこれで僕も一層僕の眞價を發揮し得た）を以つて答へたが、その時はまだ渠と知り合ひではなく、渠は何でも高等中學

校の教師をしてゐた。その時から、僕は渠の思想と傾向とには反對であつた。渠が哲學を以つて思想の樣式だとするのは——そんな學風もあるのだから——かまはないが、その樣式を樣式に固定させる傾向を取つた爲めに僕の具體的が渠の抽象的に、僕の作用的が渠の機械的に解釋された。つまり、渠は哲學者としても、又批評家としても、流動無碍の實人生を捉み得ない人と見えた。

若宮氏が曾て僕の現實的人生觀を評して『詩人の空想』と云つたには社會學的標準のみでは人生を論じられぬと云ふ別天地を僕の方に十分殘してあつたが田中氏が僕に對して樣式の哲學をふりまわしたには、——僕も樣式若しくは思想を實生活と同樣に重く見る以上——その樣式が內容を備へてゐるかどうか、否、內容の現はれなる樣式であるかどうかが根本問題であつた。ところで、渠の著『書齋より街頭に』や『哲人主義』やを見ても分る通り、渠は先づ空中におぼ仕掛けの樓廓を描いてそこに樣式を定め、それから何かの內容を無理にくツつけて見たと云ふ風だ。そんな態度の人も多少文藝問題や時事問題を議論の材料にすれば、また文明批評家と云はれるかどうか僕は知らないが、渠が工業學校を辭職してひまになつたからでもあらう、初めて僕の宅へも來出した。そして火曜會と云ふ會を一緒に幹事になつてつゞけたこともある。若宮氏が大きな諸雜誌へ書き出すやうになつたつてもこの會から得たのであつた。ところで、後者に向ふ時と前者に向ふ時とはまるで僕の感じが違ふ。若宮氏はきりりとして坐談に巧みだが、田中氏は話がのろくそしてどこかぼツとしてゐる。それがいつも考へ深くツてうち沈んでるのではないやうだ。かかる人が一大論文を書かうとして——そして渠の論文はいつも長いとして——渠の自稱なる「獅子」の眠りより醒めた樣子を、渠の帝國主義論や商業興振論(いづれも中央公論掲載)で指示して見るに、先づ成るべく大きな宴會の坐席を設け、それから成るべく立派さうなから膳を揃え付け、それからその膳や席場に適當な形式的話題を外國人の書物から引用し、さて食ひ物に何が出たかと思ふと、骨ばかりなのだ。渠自身はこの骨を獨得な馳走と考へてる。渠のいろ〱變遷した標準は以前から數へれば具體的理想主義、ロマンチク功利主義、哲人主義、新帝國主義などであつたが、すべて渠自身のその時代々々の骨に過ぎなかつたのである。

そこで以上の兩氏が文明批評家と云ふ、雜誌編輯者から與へられた名にどう當てはまるかを考へて見たい。さきには高山樗牛もさう呼ばれた。僕も亦或意味ではそれであると自任してゐる。だから、編輯者の意味がどうであるかは問はず、成るべく廣い意味にして、兎に角、その民族若しくはその時代の文明を根本的に、若しくは社會的に批評する者を云ふとして——樗牛のは空想的個人を理想としての而も感傷的な淺い批評であつた。僕のは樗牛等が捨てた日本主義を刹那哲學的に新解釋に附しての傳統、乃ち、日本人としての個性、からの文明批評だ。この僕のを若宮氏が空想と云つてしまふのは、渠には社會學的標準があるばかりだからである。また、田中氏が僕のをさきに僕の人生觀等を批評した言葉で抽象的とか機械的とか若し云ふなら、渠は却つて無內容哲學(內容の話は

ぬ)が禍ひしてゐるからだ。

　兩氏は在米の時代を異にしながらも、共にお定りのアメリカかぶれがして、根本に民主々義、否、共和主義をいだいて歸朝した人々である。そして實際に社會に觸れることが少い田中氏は今日でもなほそれを昧のめかしてゐるが、若宮氏は段々と變化して、野口米二郎氏がなつた程度で日本主義的な方に來た。そしてその程度がまた一層殆ど惡い意味の手段的にと見えるほど進んだのは、本年、金澤市の代議士選擧に中橋德五郎氏を應援に行つてからである。渠が元老の存在を辯護するがわに成つたのもそれが爲めで、わが國の社會主義者等が友交上から渠に歸待してゐたところを全く裏切つたけれども、渠の考へに於ける實際的研究問題上ではまた一つの進歩であつたのだ。選擧の實際に接して見れば、政治と云ふものは米國の圖書館や外國註文書で拵らへ上げた理論では行かぬと云ふことが人格的に分つたのだ。

　から云へば、田中氏だッてそんなことは初めから分り切つてると理論上では云ふだらうが、渠は十年一日の如く米國で拵らへた人格が變化してゐない。人のかげでは、『矢ッ張り、進歩してゐるのは共和政治さ、』と取り澄まして云へるだらう。こんな態度でわが國の文明の批評もできないとは云はぬが、少くとも必要な一條件なる適切を得ることはできない。今一つ讓歩して、日本人だッて無論日本國ばかりでなく、外國の政治や文明を、外人が日本のをする如く、批評してやれると云ふ意込みを將れるとして見るも、渠が政治の理論に應用する哲人主義なる物はプラトンのそれを出づることがなく、僕の日本主義の根本なる[illegible]の政治即人生の哲理に存する如き現實味と具體力とに乏しい。渠が『書齋より街頭に』を現はして間もなく、或時、丸善の書店から自分の註文通り街頭に出た時、いきなり自動車にぶつかつて怪我をした。幸ひに生命は無事であつたので、知人どもは渠を劬はる代りに、『矢ッ張り書齋にゐた方がいいよ』と冷かしたと云ふ。若宮氏の素ばしこく事實に走れる人であるに反して、田中氏は到底理論者若しくは空理にとどまれる人である。後者が事實に達する場合があるとしても、ヤッと間接にで、前者の如く直接的にならぬ。

　では、この兩氏が別々な立場からどんな文明批評を書いたかと云ふに、田中氏の最も得意らしいのは著としてさきには『書齋より街頭に』があり、近くは『福澤諭吉』がある。けれども、後者の如きも僕が『日本主義』誌上で批評した通り、餘ほど讓歩して若しくは迎合して書いてある傾向に――或人はこれを[illegible]して慶應大學に入り込まうとしたのだと云つたほど――理論と實際とにちぐはぐを生じてゐる。哲人主義をふりまはす人としては甚だ不見識な點が少くはなかつた。たとへば、福澤諭吉程度の人を麗々しく哲人と呼んで賞讃の辭を惜まなかつたのは、若宮氏が元老の存在を辯護したよりも一層不正直な裏切りであつた。また、渠の哲學を帝國主義や產業興振に應用したのも机上の空論であつて、たとへ社會の表面的事實まで徹透しないでも、せめてはもッと人間の内的生活に切實であつたらいいのに――。これに比べて若宮氏に不足がないと云ふのでは

ない。渠の人間の若しくは日本人の內的生活にまでは立ち入つて物を云ふことができない。渠の鋭利は社會の觀察と研究との表面に於てばかりだ。ただそこに空論を避けて成るべく事實に就くの方策の長所だ。

若宮氏にはまだまとまつた書物はないが、渠の一生の仕事は恐らく社會的、政治的著述に落ちつく時が來るだらう。田中氏を冗談も云はぬ生眞面目でありながらどこか滑稽に見える哲學者にして一般の俗人を藐た者とすれば、若宮氏は今日では新らしい新聞記者の見識を有する社學會者である。從つて、その文明批評が哲學や文藝に行かないで社會論や政治論にばかり行くのは止むを得ない。渠は中央公論や新小說に於いて頻りに日本の世界に於ける使命上いつまでも日英同盟に束縛されてゐるべきでないことを說いてゐる。そして殊にその亞細亞主義評論は米國の新聞で一問題となつたほどだ。

ついでに云つて置くが、遲鈍な點は兩者共に勝り劣りなからう。若宮氏はその會心な皮肉とその向け所とを考へる爲めに、田中氏はお膳立てを大きくする爲めに、そして後者の筆が一層こぢれるのは神經衰弱の時だが前者の一層鈍るのは雜誌編輯者の依賴しかたが拙い時だ。けれども、一たび書き上げられて見ると、氣持ちのいいのは前者の筆力若しくは論法で、永井柳太郎氏の曖昧な人種論に向けた筆法などは一點のすきもないほど筆者の眞實的學得を以つててきぱきと突ッ込んであつた。田中氏にはこの鋭さが無論なく、若し取り柄とすべきことを云へば、空理だが並べた理論が整つてゐるところだ。そこに渠の努力なきものを直ちに感服させる。外人の言葉を引用するにしても、前者のは自然必須に行くが、後者のは少からずてらひに見える。

それから、若宮氏は坐談に巧みなくせに全く演說ができないが、田中氏は今早稻田大學の教師をしてゐるだけに、演壇にも度々立つことを好む。

要するに、兩氏を共に文明批評家であるとしても、若宮氏をして人生の內的方面に立ち入らしめないのは社會學の罪で、この學問は如何に進んで新らしいのでもそこまで這入る性質のものでないからである。また田中氏をしてただ麗々しく並べ立てた空理にのみとどまらしめるのは渠の奉ずる種類の哲學から來たる禍ひで、一つにはまたこれを却つて高尙がるてきめんの應報である。

僕の考へでは、人生とか文明とか云ふ物を取りまとめて具體的に發想若しくは批評するには、必らず詩的もしくは藝術的素質をもツと有してゐなければならぬ。然るに、この要求に於いては、若宮氏も田中氏も共に殆どゼロである。そこが樗牛をしてその死後十數年の今日でも、なほ一種の文明批評家たる餘地を有せしめる所以で、渠のそれとしての缺點は今日から見れば感傷性に依つて物を云つたところに在る。(終)

▽田中王堂氏についての感想

本間久雄

つひこの間、私は、藝術俱樂部で開かれた早稲田文學社の講演會の講師控室で、折から講演のため來られた田中王堂氏に逢つた。その席には同じく講演するために來られた近松秋江氏も居られた。田中氏はさまざまの話の序でに、「私は迷つてゐる」と云はれた。簡單な言葉ではあるが可なりに意味深長な言葉であると私は思つた。自信の强い氏の口から出た言葉として殊に意味深長であると私は思つた。今、文明批評家としての氏を考察する場合に、どういふものか、自信の强い氏の口から出たこの「迷つてゐる」の一語は私の頭の中に粘りついてゐて離れない。

田中氏はその會場で「サンタヤアナの宗敎觀」と題する講話をされることになつてゐた。氏の前には秋江氏の芭蕉についての話があつた。田中氏は登壇第一に口をひらひて、「秋江氏は世間人（マン、オブ、ワォールド）、通人であつて、今の芭蕉についての觀察などにも仲々面白いものがあつた。氏に比べると、私は書齋裡の學究の徒だ。私が往年『書齋より街頭へ』を公けにしたとき若宮卯之助君がそれを評して、あれは『書齋より街頭へ』ではなくて『書齋より書齋へ』だと云つたが、同君のこの評言はたしかに當つてゐる。私は所謂書齋端以の人だ。」と云ふ意味のことを云はれた。この言葉も實驗的理想主義乃至ローマンチツク・ユーテリタリアニズムの提唱者たる田中氏の口から聞いたとき私は可なり奇異の感に打たれないでもなかつた。そして今文明批評家としての田中氏を考察する場合、以上の氏自らの言葉も可なりに深く私の頭に印象したことを私は思ひ出す。

一體田中氏の「私は迷つてゐる」といはれたのは、何をどう迷つてゐるといふのであらうか。私はそのことについて、その折委しく氏の口から聞くことは出來なかつたが、氏の最初の著述『書齋より街頭へ』以來、今日まで一意專心に華々しく勇敢に實驗理想主義、ローマンチツク・ユーテリタリアニズムを主張しつゝ居られる氏の口から出た言葉としては實際聞き逃すことの出來ない言葉である。

それは兎に角として、その折りに受けた今一つの印象、卽ち「私は書齋場裡の學究の徒だ」といふ氏の述懐はたしかに當つてゐる。氏はこれまでの乃至現在の自己の態度を告白して、

「わたくしは自分の過去や、未來に關しては何等の興味を有つて居りません、わたくしの興味は現在の自分にのみ集中されて居ります。如何にして、如何なる風に、現在の自分を啓發し、完成すべきかといふことだけが、今わたくしが全心と全力を擧げて從事して居る唯一の事業であります」（早稲田文學六月號所載）

と云つて居られる。これに依つても氏がいかに「現在」といふことに始終してゐる最もよい意味のプラグマチストであるかゞわかる。氏が文明批評家として現代のわが文化に寄與しつゝある點も實にこの一點にかゝつて存する。

けれども、これは田中氏に取つて恐らくたゞ「態度」の表明に過ぎない。氏は常に「如何にして、如何なる風に現在の自分を啓發し、完成すべきか」を說く。しかし、一歩をすゝめて、如何にして、如何なる風に自分が啓發され、完成されつゝあるかといふ內的經過については殆んど語らない。言葉を換へて云へば氏は常に「態度」を說いて體驗を語らない。

田中氏は「わたくしが哲學者、評論家として世に立ちまして以來、わたくしは絕えず自分を語つて來ました。切言すればわたくしは未だ嘗て一言半句も自分以外のことを語つたことはありません」(同上)と云つて居られるが、氏がその「絕えず語つて來た自分」も要するに單に「態度の人」としての田中氏を外にして、餘り多く私は知ることは出來ない。蓋しこれは、氏が自ら是認してゐるやうに、要するに書齋の人で街頭の人でないからである。

氏の評論の對象となつてゐる問題の範圍は道德に政治に產業に文藝に可なりに廣汎である。けれどもこれらの問題の多くは、氏に依つては、主として「原理(プリンシプル)」として論ぜられてゐる。かくあるべき原理として論ぜられてゐる。實際あるところの「細部(デテールス)」については餘り多くの考察を費されてゐない。これも亦氏が書齋の人であつて街頭の人でないところに基因する。

この書齋の人であつて街頭の人でないところが、文明批評家としての田中氏の長所であると共に短所である。

私一個の田中氏に對する要求を端的に表白すれば、氏にはまづ書齋の人たることよりも街頭の人となつて貰ひたい。といふのは、原理としての說くことの代りに、まづ一切の事象の、細部としてあるがまゝを觀察して貰ひたいといふのである。氏一流の實驗理想主義の立場に一切を還元して一元的な批判を下すことの代りに、日常の平凡事、家常茶飯事三面記事的現象の中に、暫らくまづ氏の自らの自己を沒入して貰ひたい。書齋の人よりも主張よりも觀察、批判よりも鑑賞を主として貰ひたい。書齋の人よりも寧ろ世間人となつて貰ひたい。書齋より街頭へではなくて、街頭より書齋へといふ順序で進んで貰ひたいといふことである。かうなつた曉、氏の文明批評は更に實生活の味ひを裏づけることに依つて一層多く權威的なものとなると思ふからである。

それにしても、氏の「迷つてゐる」とはどういふ意味であらうか。私は氏がその「迷ひ」を通つて、更に一層偉いなる權威的な氏の「人」が表白されることを私かに待ち望んでゐる。

文明批評家としての田中王堂氏を最も敬愛するが故に、私は敢て氏に以上の苦言を呈するのである。(十一月十八日夜)

▽文明批評家としての田中氏と若宮氏

石坂養平

私は田中氏にも若宮氏にも面識はないのですが、然し田中氏の著書は殆ど全部讀んでゐますし、最近の評論は大概目を通してゐます。ところが若宮氏の著書は手にしたことがないばかりでなく、氏にどんな著書があるかよく知りませんし、氏の最近に書かれたものも餘り讀んでゐません。本誌に出た『太陽は黄人を愛す』『大亜細亜主義とは何ぞや』『新小説』(十一月號)に載つてゐた『日本の孤立及び孤立の自覺』などを通して評論家としての氏を知つてゐるだけです。ですから二氏に對する私の理解の程度はどうしても餘程違つたものになつてゐます。

一體若宮氏に、本當の意味に於ける文明批評家たる資格があるでせうか。私は先づこの事を疑はずにゐられないのです。或る人が文明批評家であるかないかは、彼が現代に活きてゐる人間を本當に研究してゐるかゐないかに依つて決せられます。若宮氏には斯う云ふ人間の研究と云ふことが欠けてゐるやうに思はれます。人間の心理に關する極めて一面的な觀察眼しかないやうに思はれます。これは氏の評論が重に政治論や經世策の形ちをとつて表はれるから、さう云ふのではありません。具體的の人間を研究し理解するには、直接に個人の心理の研究から入つても社會的事件、國際的現象の批判から入つてもどちらでもいいのですから、氏の評論の様式が社會的國際的現象の批判に力點を置いてゐるのは少しも非難するに當りません。氏のやうな志向と情操とを有する評論家としては寧ろ當然の事です。私が氏に人間の深い研究がないと云ふのは、氏が社會的事件、國際的現象の批判を通してその根柢に横はる人間を充分に見てゐないことを指すのです。さう云ふ事件、現象を批判するに當つて複雜なる個々人の心理がいかに發動するかを無視して、たゞ事件を事件として、現象を現象として、その間の關係ばかり探求して滿足してゐるらしいことを指すのであります。

氏は『大亜細亜主義とは何ぞや』に於いて西洋文明を以て貪慾文明である、掠奪文明であるとまで極言し、更に『西洋書を讀むで西洋人を知らざる日本の讀書生は、其の西洋書中の抽象名詞、意義を誤解して、西洋人の所謂世界主義に世界の一部であべるき亜細亜の世界も亦含まれて居ると爲し、其の所謂人道には、亜細亜の生靈も亦包まれて居ると信じ其の西洋人と同一の太陽に照らされて、同一の路を辿つて居ると信じ亜細亜の利害が直に西洋の利害であるが如く惑つて居るのである。彼等で知らん、西洋の正義は、亜細亜に於いては不義であり、西洋の人道は亜細亜に於いては獸道であることを。』と云ふ鎖國時代の人達でもなければ考へさうもないことを附け加へてゐます。氏の擧げてゐるやうな、西洋勢力の亜細亜に對する包圍攻撃は私も充分に認めますが、この事實から直に西洋人に全然人道がない、あるのは獸道ばかりであるなど云ふ

を導き出すのは、個人の倫理的意識乃至人道的精神が民族的國家的競爭の一要素として如何に働くものであるか、如何に變化するものであるかを知らない者の仕業です。

田中氏は如何なる社會的事件を取扱つても、その基調となつてゐる人間の研究を忘れません。事件のストライキングな外形に囚はれて了ふやうなことはありません。必ずその根柢まで堀つて行きます。さうしてそこに氏の哲學が出て來ます。心理學が見えて來ます。

社會的現象に對する敏感とか反應性の鋭さとか云ふやうなものから見たら、若宮氏は田中氏よりも優れてゐるかも知れません。けれどもそんなものはあればある方がいいと云ふだけのものです。文明批評家たるの資格としては第二義的のものです。あらゆる社會的現象の基調となつてゐる人間の慾望と理想とに對する深い洞察をもつてゐる點に於いて田中氏は若宮氏に比して遙かに卓越してゐます。(十一月十八日)

▽田中氏と若宮氏

赤木桁平

田中氏の『哲人主義』が出た頃であつたと思ふ。教育學者の吉田熊次氏が『哲人主義と教育』と題して試みた氏の教育説に對する批評の中に、氏の議論は至極圓滿穩健な主張ではあるが、それが至極圓滿穩健な主張であるために、反つて何者をも贏ち得ることの出來ない虞れはないであらうか。少くとも理論上窮極の判定を與へる所の原理としては餘りに漠然としてはゐないであらうかといふやうな意味のことを云はれたが、獨りその教育説に限らず、氏の議論には屢々さうした意味の缺陷を發見するやうに思ふ。

なるほど田中氏の議論の立て方や進め方を見ると、その外觀の如何にも系統的であつて、且つ、如何にも綜合的である點に少からぬ敬意を拂はさせられるが、併し、結局に於いて見ると、氏の主張に兎角朦朧たる對象の裡に隱れて、容易にその眞意を捕捉しえない場合が多い。否、假令その眞意を捕捉しえたにしたところで、その眞意そのものの本質が未だ全く究明されてゐない場合が多く、これを實際の事實に照して考へようとすると、勢ひ多數の疑問に逢着せざるをえない。極めて精細に研覈して見ると、既に自明の觀念として取扱はれてゐる氏の功利說の裡にも、猶ほ多くの未解決な問題を包含してはゐないであらうか。

自分は嘗て田中氏に對する不滿を述べ、その第一は氏が「知識」を語る批評家であつて「體驗」を語る批評家に非ざること、更に一歩を進めて云ふと、「知識」と「體驗」とを共に語る批評家に非ざることだと云つたことがある。この考へは今日と雖も變らない。實際、氏の論議を讀んで見ると、その中に多量の教養と學殖と思辨とを見出すことは出來ても、それらのものの背後に潛在して、それらのものに生きた力を與へる生活體驗の深さに至つては、遺憾ながらこれを見出すことが尠いのである。

従つて、氏の思想を彩る色調は著しく審知的であつて、事實自體に徹する鋭さを持たない。現に氏が文明批評家としての態度を見ても、氏の現代文明に對する批判は多く受納的(エンプフエングリヒ)に傾き、これに反撥し、これに抗辯しようとする拒否的(アブシユレーギヒ)な點が乏しいのは、氏の思想が兎角審知的にのみ發展して、その背後に主觀の鞏強なる後援を携へてゐないからである。この點に於いて、氏が自ら「改造」を口にして「破壞」を口にしないのは、極めて故あることだと云つていい。

田中氏は常に多元的見解の誤謬なるを說いて、すべてを一元的見解に歸せしめ、理想と實際との一致、法則と事實との吻合、及び普遍と特種との融化を主張してゐるが、これらの主張も要するに觀念上の問題たるに留まつて、その思想的形式の整然たるほど、しかく實際上の效果を有するものではなからう。言葉を換えて云ふと、氏の思想と、氏の思想を孵育する心理的動機との間に存するものは理知の連鎖であつて、情意の斷ちがたい脈絡ではない。從つて、氏の思想を以て理知的に不可缺(ノートウエンデイヒ)であると云ふのはいいが、情意的には果して何と云つたらいいであらうか。氏自身の生活全部が理知的に統整せらてゐるか、若しくは、氏自意の情意が氏の理知的態度に制禦し盡されてゐるものとすれば、勿論、自分の疑義は餘計なものであるには相違ないが……。

これまで自分等の前に現れて來た多くの文明批評家は、大抵憤怒に滿たされてゐるか、或は憂鬱に沈んでゐる。中には絕叫の聲をを放つて號泣してゐるやうなものもないではない。それらの文明批評家に較べると、田中氏は著しく快活である。氏は常に晴々しい顏をして現代を眺め、且つ、現代人の生活を觀照してゐる。從つて、自分等は氏から怒罵を聞くこともなければ、冷笑を聞くこともない。時に疾言遽色することはあつても、それは感情の激越に基づくものではなくて、單に演說家の抑揚頓挫に過ぎないものである。この點に於いて、氏は非常に見得つ張りである。如何なる場合に於いても、必ず儀容を整へ威儀を正しらし、然る後徐ろに口を開くといふ風であるから、土足で奧座敷に怒鳴り込むといふやうな粗野な點もない代りに、どうも眞當に人の心を動かすだけの強い力もない。尠くとも自分一個の常識から云ふと、氏は徒らに陣立の仰々しさを欣ぶよりも、寧ろ思想を生氣あらしめるための情熱の涵養に心掛けたらどうであらうか。

尤も、辯論家としての田中氏は、わが文壇思想界に於いて、類の稀れに見るの人である。從つて、氏の論文などを讀んで興味深く感ずることは、氏が如何なることを說かうとするかといふ點よりも、反つて氏が如何なることを如何に辯證して行かうとするかといふ點に存する場合が多い。氏の論集『哲人主義』などを讀んで行くと、自分はいつでもその點に敬服する。

以上は文明批評家としての田中氏に對する極めて簡潔な考へを述べたものであるが、氏に比較論評すべく提供せられた若宮卯之助氏に對しては、遺憾ながら自分はあまり多くの知識を持たない。從つて、自分が敢て云はうとするところは、勢ひ貧弱さに類した短評に過ぎなくなるであ

あらう。

自分は嘗てから若宮氏が亞米利加仕込みの社會學者であると聞いてゐる。また氏が一般の社會事情に通曉する人で、ある程度までは政界や實業界に於ける裏面の消息にも暗くない人だと聞いてゐる。併し、その實際が果してどうであるか。自分はその點に就いて何も知らない。たゞ氏が書かれた少許の論文を讀み、且つ、氏が毎日『中央新聞』紙上に發表する時事評論などを讀んで見ると、なるほど氏は社會學者でもあらうし、また一般の社會事情にも通曉せる人ではあらうが、氏の議論には幾分の機智と、幾分の常識と、更に幾分の輕妙とがあるだけで、それ以上に格別自分の注意を惹くものはない。氏の社會觀乃至文明批評にしても、田中氏に於けるがごとく、氏の根本的態度に果して堅固な思想的地盤の存在してゐるか否やも疑はしく、氏の云ふ處が果してどれだけ事實を適確に把握してゐるかも分らない。思ふに、氏は所謂通俗思想家と云ふべき側に屬する人ではあるまいか。

文章の形式から云つても、また、議論の立て方から云つても、田中氏の方が常に堂々として大きい。田中氏には實際の事情に迂遠なところもあるが、若宮氏の世間智もしかく深邃なものではあるまい。――多くの點から見て、自分は矢張田中氏の方を優れてゐると思ふ。

――中央公論――

▽どこかまだ物足りなさの殘つてゐる批評家

近松秋江

――田中王堂氏――

田中さんは私の舊師である。私の過去の學徒生活――と云へば、いかにも高尚に聞えるが、田中さんに關聯していふとき、斯ういふのが最もふさはしく響く――その私の過去の學徒生活を振顧つてみて、自分の思想啓發、乃至廣汎なる意味の批評の興味を刺激し、誘導された點に於て、田中さんは私にとつて最も重要なる役を持つたお方である。自分に有益な影響を與へた人は少くない。田山花袋、坪内逍遙氏などは純文學に於て著書以外直接個人に接して利益を得た人々である。專ら著書についてのみの利益を云へば數限りもない。そして評論の上で、しかも純文學ならぬ方面に於て直接個人に接して影響せられたのは田中さんである。

田中さんは、私が早稻田の專門學校に入つた年――明治三十一年の頃からの顔馴染であつた。そして在學三年の間、どうかすると、三年級の時など、坪内博士よりも何人よりもこの田中さんが一番教授時間を多く受持つてゐられたこともあつた。坪内博士はあまり位地懸隔して近づき難く、田中さんは自由な獨身の下宿（但し高等）生活であつたから、私達

は、その頃の牛込揚場町だかの宿に始終遊びにいつたものである。三學年の頃になつて、私は急に自分の學問に對する興味と、識見と、理想とが從來の自身よりも進歩したことを意識し且つ自覺した。それは純文學の部面では坪内博士、精神科學乃至廣汎なる意味の所謂批評の部面では確に田中さんの影響であつたことは明かである。さういふわけでだん〳〵私には、田中さんの抱持してゐられる評論家としての傾向が、私が少年の頃から漠然夢想してゐた批評家として の資格に合致してゐることが明かになり、當時恰も高山樗牛氏の文筆によつて覺えたと稍々同じやうな興味を田中さんに對しても持つやうになつたのである。尤も田中さんは文筆の上でないのが、私に物足りなかつた。樗牛氏は飽くまでも瑰麗流暢なる筆あるが故に、藝術的の華かさを以つて私を悅ばし、且つ懷かしがらしたが、田中さんにはその筆がない。けれども、樗牛氏個人とては學校の教室以外には全く遠ざかつてゐるに反し、前述の如く田中さんとは既に教室に於て顏を見る時間が最も多い上に、前云つたやうに、自分の學業に對する興味などが從來に比しては大分進歩したることを意識し自覺するにつれて、私は殊に屢々田中さんの所を訪問した。卒業後の一二年間などは、一方田山花袋氏、一方田中王堂氏、此の二人の人のところへ實によく行つたものだ。ほとんど隔日くらゐ、或はもつと屢々田中さんのところへいつてゐた。すると樗牛氏の筆の代りに、田中さんは、いかにも溫雅な、上品な、靜かな、學問に對して極々淸い、つまり曲學阿世と云つたやうな點の微塵もない、立派な態度で、何時もいつも

私の熱心なる興味を惹くやうな話題について座談をするのであつた。本來純文學――主として英文學と日本文學――德川文學などの研究を主眼としてゐた當時の專門學校の文科に在つては聽くことの出來ないやうな、さま〴〵な話題に富むでゐた。その田中さんの座談、田中さんの靜かな優雅な態度や話しぶりが殆ど高山樗牛氏の絢爛なる筆力と同じ力を以つて私を魅したのであつた。田中さんは、その頃よく純粹な哲學書のほかに例へばギボンの羅馬衰亡史だとか、ミルの自叙傳だとか、アミイルの日記だとか、グロートの希臘史だとか、ジョン・モーレイの種々の評論――その中には佛蘭西革命時代の人々を論じたディデロー、チュルゴー、コンドルセイ、ボルテールそれから二册につづいたルーソーの評傳だとか、リスリイ・スチイブンの各種の評論、その十八世紀英國思想史。まだ例のウオルタア・ペータアの文藝復興期、メリアス・ゼ・エピキュリアンなどゝいつたやうな、高級なエンライトンメントに必須な、貴い――内容の貴い書籍を幾種も座右に備へておいて、それ等を片つぱしから讀みながら、「君、チュルゴーは賢人だ。ゲーテも賢いが、チュルゴーはそれよりもまだ苦しい賢人だ。」とか、「ペータアのヴインケルマンの批評は實にえらい。」とかいふやうな話をしてきかされたものである。それは今から十五六年前の明治三十四、五、六年頃にわたつてゐる。私は、個概念たゞ田中さんから其等の話を承つたのみで、僅に二三の書を除くの外は遂に今日まで未だ讀む機會を得ぬのであるが、そんな話をきくといふことは、少年時代から夙に思想に抱いてゐた自分の學問の傾向、

將來何者たらんとするかねての希望と全然一致してゐるので、私は田中さんの宅に屢々往來するのを最大最要なる勉强とおもつてゐた。そして日本のことについて種々談話を交へてゐた。例へば明治の初年來の文明批評家福澤先生だの、御維新當初の五誓文の立案者たる越前の由利公正子の師傅の地位にあつた横井小楠――小楠がその實五誓文の起草者であつたといふやうなことなども語られた。殊に福澤先生に關しては私と田中さんの批評がよく合つてゐたりした。その他賴山陽のことなども語つた。田中さんはまた支那の思想を最もよく讀んでゐた。日本の伊藤仁齋とか徂徠とか云つたやうな儒者の書いた書も讀まれた。勿論それでゐて、平常人に接する態度などはアカデミカルな、官僚的なところもなく、また思想は何處までも自由思想家の態度であつて、宗敎家などの思想家讀書家によくみる偏僻な狹隘なところのないのが殊に自由思想を好む私には氣に合つたのであつた。さうかと云つて、氏は凡べて實行といふことになると、極めて手腕の乏しい人であるからのみならず、一體が人柄(ひとがら)な溫雅な性質であるから、粗暴な社會改良家などに見る如き態度などは微塵もないのも私は好ましかつた。

で、氏は、私が、學問乃至文學の人として將來どういふ方面に希望と理想を持つてゐるといふことを、最もよく理解(アンダアスタンデ)してくれて、私本來の趣味、私の比較的多分に持つて居る能力(アビリテイ)、見識(インサイト)などを感謝に堪えないばかり――田中さんのほかには先輩の知友も一人(ひとり)も私のその點へ同感し、眞面目に勸告してなどくれるものはないのに――田中さんのみ一人(ひとり)、透明な發見で、私に歷史家になれよと云つてくれたのであつた。歷史も細些な研究に精力を要する、つまり根氣の入る仕事であるが、それも方法と識見とによつて、必ずしも考證にのみ沒頭しなくつても能いものである。と云つて、屢々史論家になれよと勸められた。私が賴山陽などを好むのも、そんな氣分を多く持つてゐるからである。

けれども私の境遇はそれを困難にし、私は生活の爲めに文筆の職業では比較的割りのいゝ小說を書いてゆかねばならなかつた。段々その方に深入してゆき、田中さんの深切に負(そむ)くやうになるにつれて、最初は私の傾を見るたびに氏は、私の折角の趣味と、田中さんは所謂私の能力(アビリテイ)を善用しないことを惜しみ且つ苦言を呈せられてゐた。私は小說家としても未だ大成しないでゐる。どうかして小說の方でも傑作を遺したい願意ではあるが、私はいつかは田中さんの好意を無にしないやうにしたいと思つてゐるが、私も次第に年をとるばかりである。ただ思ふばかりで、そのうち死ん行くであらう。

私のことのみを云つて、賢命の田中氏のところについては云はなかつた。けれども、私の立場からこれだけ云へば、多少田中師に對する卑見の一助ともならうとおもふ。田中さんは多々益々健筆を揮つてゐられるやうであるが、氏の批評は、私も度々云つた如く、あまりに純理に傾きすぎてゐて、事實問題を捉へてゐない。血と肉と(ブラッド・エンド・フレッシュ)を見のがしてゐる。何かそのうち重要な意義を持つた大きな事實問題についての評論を見たいものと思つてゐる。生活な事實問題を云々するに田中氏の自負心から察しと

せぬところかも知れぬが、氏の敬意を表する福澤先生は、その些細な事實問題を批評し、世俗に教へ、啓發した人であつた。

――若宮氏――

貴社の御下命であるが、僕は若宮卯之助氏については、殆ど何等の見聞を持つてゐない。ただ若宮氏が好評のある評論家であると云ふことを聞いて、嘗て貴誌に載出された、ある短い論文と他の雜誌で一二、これも極く短い物をのぞいてみただけである。「中央新聞の短評をも、どうかした機會に眼にふれたこともあつたやうに思ふ。そんなわけゆゑ若宮氏の評論の文明批評家としての見地といふやうな部分に接したことが全然ないのである。ただ次のやうなことを云ふのは甚だ用意の足りない、輕率の謗を免かれないが、ただ文章そのもののみに付いて云へば、氏の文章は少し厭味のやうである。平明に云ひ得べきことをも、わざと持つてまはつた云ひ方がしてあるやうにおもう。併し純文學の藝術家とちがひ、文章―修辭―は必ずしも重要なる部分でないから、それがために氏の批評家としての價値に大した損益はないわけである。若宮氏については、これ以上云ふべき何物をも、私の淺學から、用意してゐないことを遺憾に思ふ。

▽若宮卯之助君と田中王堂先生

生方敏郎

大正元年の冬であつたと思ふ。三十間堀の日本新聞社――今は燒けて了つたが、――内に、池田藤四郎氏を、訪ねて行つた時、私は初めて、若宮卯之助君に紹介された。池田氏が、私の事を有名な文士だなんて、戯れの様に若宮氏に告げ、また私に向つて

「新歸朝の學者で、豪い人なんだ。」と、若宮君を紹介した。

その後、若宮君は池田氏が、經營してゐた、黄色新聞に、執筆されてゐた様に思ふ。それから、僅かの間に、名聲嘖々として上り、本當に豪い人になつて了つた。今では中央新聞に、「天無口」と云ふものを書いてゐられる。私は中央新聞を、見る機會があれば、先づ「天無口」から、見初める。

田中王堂先生のことは、ずいぶん古い時分、まだ、先生が、單に高等工業の教授であつて、全く、文壇の人ではなかつた頃から、私はその評判を聞いてゐた。私の先輩たる松浦工學博士が

「俺の學校に、田中つていふ英語の教師がゐるが、文學だの哲學だのゝ氣焔をよく上げる。そして英語の教師といはれるのを、嫌がつてゐ

なぞといふ事を、話された。そして私は、兎に角、高等工業には

といふ、少し變り者の先生が、ゐると思つてゐた。

ところが、緣は不思議なもので、明治三十八年に私が早稻田の、英文科の最高級に進むと、此田中先生が私達に、倫理を敎へることになつた。長い髮の毛をちゞらして分けて、毎も黑い洋服で、這入つて來て、生徒等は眼中にないかの如く、無頓着で、倫理の他には、何物もない樣な勢で、極めて熱心に、その素撥なぞはおかしい程眞面目に、天下の一大事の樣に、倫理を講義された。生徒は、私し初め、好くも〳〵集めたと思ふ低能兒揃ひであつたから、先生の熱心振りを、あつけにとられて見てゐるものが多かつた。だが、今思ふと先生の講義の時間だけは、私達がたゞ暇つぶしの樣に、思ふ大學生活の中で、極めて有益に費されたものゝ一つであつた事は、確かだ。

學校においては、王堂先生と僕とは、師弟の間柄だけれども、その筆を執つて文壇に出づるや、先生と僕とはほゞ時を同じうしてゐた。そして、先生の、書き初めた頃の文章は、なか〳〵廻りくどい、漢語澤山のものであつた。ある時、私は、讀賣の日曜附錄誌上であつたか、先生の文章を、思はず知らず罵倒して了つた。

それから、餘程時過ぎてから、根岸なる先生のお宅へ遊びに行つた。すると、先生は、

「君に、先年僕の事を、長鞭馬腹に及ばすと、毒舌をついたね。」と、云はれた。私は驚ろいて、

「そんなことがありましたか。」

人を痛罵して置いて、全く忘れて了ふとは、まことにけしからたであるが、私は忘れてゐた。そして無實の罪を責められる樣な氣がした。と先生は、

「あるとも、僕は口惜しくつて涙が出た。今だに忘れやしない。」と、云つて笑はれた。

「君は十二萬圓の成金になつたさうぢやあないか。そんな事が何かの經濟雜誌に書いてあつたよ。」等と、四方山の話はそれからそれへと絕へなかつた。

先生の此頃の文章を見ると、如何にも洗錬された、立派なものである。鞭の長さは、丁度好く馬の腹へ屆いてゐるやうである。そして馬は千里の逸物であることをも、つけ加へてこれを機會に、昔の毒舌のお詫びをいたして置く。

△若宮氏について思ひ出すまゝ

上司小劍

若宮氏の書くものは、ずつと前「日本新聞」によく出たのを讀んで、なか〳〵物のよく解つたことをいふ人だと感心したことがある。一體日本では、眞事に御座なり話が流行し、少しでも突き進んだ、徹底したこ

とゝ言ふと、直ぐ奇言とか僻論とかいふものに見て、書いた人を變人扱ひにして了ふほど、一般の讀者といふものが幼稚である。されば若宮氏の文章も當初は、毛色の變つたことを言ふものが居るぐらゐに思はれたぐらゐで、たいして世の注意を惹かなかつたらしい。私は故秋水氏から一二度若宮氏のことを聽かされてゐて、一寸した座談の中にも、二つや三つの警句めいたことを吐くとか、長い間の外國生活で、坐るのに難澁らしいとか（其の頃丁度氏はアメリカから歸つたのであらう）いふことを、小耳に挾んでゐたし、日本新聞のＷＵと署名してあつたものも、實は秋水氏より、あれが若宮だと敎へられてから、よく讀んだのです。無論感服したものもあつたと共に、何んだ詰まらないと思つたものもあつた。しかし當時他の新聞なんぞでは見ても見られぬよい觀方をしたものゝあつたのは事實である。氏の立言は社會學が基礎をなしてゐて、其の點では徹底してゐるが、しかし何うも氣品の足りないことゝ、筆に潤ひの乏しいのとが缺點であると思つたことがある。近頃「中央新聞」の夕刊に毎日見える『天無口』も、時々讀むが、なか／＼面白いこともあるし、また下らないと思ふのもある。けれども「日本新聞」時代のものにくらべると、何んだか書きにくさうで廻はりくどく、奥齒に物が挾まつてゐるやうなのが多い。近頃の日本人は兎もすると、『機會ある毎に自分の馬鹿を廣告してゐる』やうな氣のすることがあつて、若宮氏なんぞが、攻撃したり、嘲笑したり、痛罵したりする標的には、まことに恰好の代物と思はれる。希くは氏の健在を祈る。世間では氏のやうな聰明で穩健な常識家をば、何んだかアブノーマルな人間のやうに思つてゐるものもあるさうだから可笑しい。



評論

内外時論　法學博士　古川學人

所謂排法科萬能主義によつて暗示せられたる三大時弊

（一）

「帝國文學」十月號にあらはれた芳賀文科大學教授の「法科萬能主義を排す」といふ論文は著しく世間の注目を惹いた事は十一月の諸雜誌に之に對する多くの評論があらはれた事によつても分る。仝教授の論文の中には已に二三評論家の指摘せるが如く多少の誤解と偏見とが交つて居り、且つ法科出身者の跋扈に不平を言ふに急にして、此論文の暗示する根本の大問題を如何に處理すべきやの積極的方面は缺けて居るに拘らず、斯くまで世間の耳目を聳動せるは、畢竟該論文が偶々世人の多年抱懷して居つた教育上の大問題に觸れて居るが爲めであらう。而して世上の評論家多くは芳賀教授の論文の末節に拘泥して教授の暗示する根本の問題について懇切に考ふるもの少かつたのは予輩の密かに遺憾とするところである。

予の見るところによれば芳賀教授の該論文は我々平素痛切に感じて居る三大問題――三大時弊に觸れて居ると云ふ點に於て最も我々の興味を惹くものである。仝論文が世上の注目を惹いたのも畢竟之が爲めであらうと信ずる。

（二）

教授は第一に今日社會の各方面に於て法科出身者が獨り法科出身者たるの故を以て最高の地位に置かれて居るといふ事實を指摘して居る。教授曰く「現代の狀態は法科の卒業生を殊に偏重する傾向」あり「上は補弼の大臣から下は刀筆の吏に至まで一切の國務政務の施行者商事會社の事務擔當者までも法科出身者ならでは其他位を與へられぬといふ有樣、專門の技術を要する官衙でも會社でも之を經營し之を指揮し之を監督する役目は法科出身者に委ねて居る」が之は正當の狀態でもなければ、又「國家の發達進歩の爲めに最善の組織でもない」と。斯くて教授は平安朝の時代が法科萬能主義でなかつた事や、又德川時代の各藩の政治は多く儒學者の手によつて行はれ而して其政治的手腕は實に立派なものであつた事を擧げて居る。此觀察に對しては言ふ迄もなく世上いろ〱の批評があつた。教授の言ふが如く法科の卒業生を特に偏重するといふ傾向は事實の上に隠す事が出來ない。然し所謂國務政務の施行者、商事會社の担當者等に適する人才が他科出身者よりも法科出身者に多い、從つて其中から多く此等の任に當る者が採用せらるゝといふ事も止むを得ない現象である。只此等の任に當る者が須らく法科出身者に限るべしとするの不當なるは、教授と共に感を同じうするところである。而して現在の官吏登用の方法は特に法科出身者に便利なるやうに作られて居る事は、教授と共に確かに一つの時弊として指摘するの價打はある。教授の說かるゝが如く今日までの官吏任用令は維新後急に西洋の制度を模倣し、此等制度に關する智識を有する法科出身者を續々あげて官吏とするを必要とする時代に作らしめたものである丈け、これ丈け法科出身者に都合のよいやうに出來て居るが、然し何時までも斯くの如き制度を保存する事は必要でもなければ又得策でもない。任用令に除外範圍を擴張して廣く人才を求むるの餘地を開き、又試驗制度にも改正を加へて、殊に試驗課目にも根本的の改正を加へて、文科に屬する課目の中例へば哲學、史學の如きも必須科目とするが如きは必要であらう。文官試驗が實質上より

大學の試驗と相去る遠からざるが如き事實にも多少着眼するを要するかも知れぬ。紙の上では兎も角、事實上法科出身者のみが官吏登用の途に於て特に便宜を受くるが如き地位に置くのは公平でもなければ又眞に人才を得る所以でもない。此點に於て敎授の論は今日の一時弊に適中して居ると思ふのである。

併し以上の如き瑣末の點よりも尙一層敎授の暗に指摘せんとするところの一大時弊は、今日の社會は實質的運營の方面を輕視し、獨り專ら形式的整頓の必要を過重するといふ根本的謬想に觸れて居るといふ點であるまいか。凡そ國家公共の事務乃至會社諸團體の煩雜なる仕事は一定の形式に組織統一されて運用せられて居る。又斯くせざれば實効を擧ぐる事が出來ないといふのが今日の實情である。故に此等の事務に從ふものは現に其執るところの仕事の組織を知り、又一般近代社會の同種類の事業に共通なる所謂一般組織を知り而して此智識に基いて現在の智識を整頓し完備する爲めの能力を養ふ事を必要とする。此等の形式的組織に關する智識は乃ち法制の學問の與ふるものであつて、今日社會の實務に當る人に取つては最も大切なものである。併しながら今日社會の實務に當るには單に之れ丈けでは足りない。形式に合するといふ事のみで事効の擧るものではない。更に內容が要る。如何なる理想、如何なる目標に進むか。又此目標に進む途を如何に充實するかの實質的方面を全うしなければならない。形式は目的其物ではなくして、目的を達する爲めの最良の手段方法に過ぎない。而して此等の實質的能力は法制の學問のよく供給し得るところにあらずして、之は寧ろ哲學とか、史學とか芳賀敎授の所謂文科に屬する學問の供給するところである。之を要するに社會の實務に當るもの殊に國家の政務に當るものに取つては、形式實質二面の智能を必要とすると言はなければならない。形式的智識を缺く政治家に國政を托するの危險なるが如く、實質的能力を缺く政治家に國政を托するも亦甚だ危險である。芳賀敎授が法科出身者が單に法科出身者たるの故を以て國政樞要の地位に居るを憂ふ

るの眞意は恐らく茲にあらう。

然るに我國先輩は人を取るに其形式的智識を重んじ、其局に當る者は實際運用の精神を重んじない。否な、萬般の施設をなすに方つても寧ろ運用の任に當る人を見るよりは運用の方法形式の整備を苦慮する。斯く〳〵の目的を達するには斯く〳〵の制度を作ればよいとか、これ〳〵の目的を達するにはこれ〳〵の法律を作ればよいといふ方面に專ら着眼するけれども、何人が如何なる精神を以て之を運用するかといふ方面を比較的閑却する。例へば今度船舶管理令、物價調節令を發布した。から云ふ規則を作れば理論上かく〳〵の弊害が取り除かれ、國民はこれ〳〵の幸福を受くる、而して此所期の目的を達する爲めには之が實行に當る人が大事だと云ふ方面は閑却する。之れ法制徒に燦然として事効更に擧らざる所以である。全體の考が斯の如くであるから、其の局に當る刀筆の吏も亦其重んずる所は、自分の爲す所が所定の形式に合するや否やの點にある。之れ繁文縟禮を來たすの一つの原因であらう。

地方の視學官に少壯の法學士を擧げた方が却て老練な教育家を擧げたよりも成績が好いといふ議論の如きも畢竟教育法令に合するや否やを明かにする事が、地方教育事務の大部分であるとする見地に立つものである。形式に合するや否やは屬官の爲すべき事である。さ當局の首腦者は根本的に教育其物の進行を計らねばならぬといふ考に立つものなら、文部省の一屬吏たりし福原氏の如きを大學總長の任に置くといふが如き奇怪な現象も我國に起らなかつたであらう。要するに我國では政務運用の任に當る其人を重んずるといふ事をせずして形式的組織其物を重んずる。組織を重んずるの弊は強制主義を重んずる事である。何故なれば人を一箇の器械として之れに定まつた仕事を強制する事が、其目的を達する捷徑であるからである。斯くして政治組織は軍隊式になり、其局に當るものは政治の理想に全然盲目ならんとするの傾向を呈する。今日我國の政界に行はるゝ思想は、百般制度を精細に整ひ、最も有効に此組織を活用するといふ事の外に何の高遠なる理

想があるか。而して組織尊重の傾向が今度の戰爭で尙一層强くなつたやうだ。之れ政界の先覺が獨乙の强さは軍國的組織の鞏固なりしにあり、英佛の捗々しく獨乙を屈し得ざりしは平素組織の整頓を忘りしにありと見たからである。併し深く考ふれば獨乙の强さは單に組織のみでない。英佛は亦個々の人其物を尊重して居つたが故に、組織の整はざるによつて來る弱點を大いに補ふ事が出來た。故に我々は形式的組織の方面の必要を高調する共に、之のみにては駄目だといふ事を深く考へねばならず、且つ又組織を過重するの弊は遂に國家を專制的無理想に導く事の虞あることを警戒しなければならない。芳賀教授の所謂國家を指導するに足る高尙なる理想を缺く、又其教養の淺薄なる法科出身者が跋扈するといふのは、偶々我國の政界に組織過重の弊あるを適切に示すものであつて、此點に於て教授の要る所は我々大いに之に傾聽するの必要があると思ふ

(三)

第二に教授はすべての方面に於て其首腦者たるものは常に法科出身者に限るの謂れなきを指摘し、特に各部門に於ては其路の專門家を長官とするの正當なるを說いて居る。教授曰く「苟くも常識ある限りそれ〴〵の專門家は單純に技師たるのみならず、其專門の學術技藝に關する經營に當る方が國家としての利益ではあるまいか。其方が事業の進捗の上に効果が多いのではあるまいか……專門家をして最初から其局に當らしめて、扨それに必要な法制的智識を後から學ばせてもよいのではなからうか。」と。之れにも大きな問題が横はつて居る。予輩も專門家は其專門の部内に於て其長となり、一切の計畫の指導者となるといふ事は適當の事であるのみならず、又必要の事であると思ふ。然るに我國では常に此地位に行政官を据ゑる例になつて居る。大學總長の地位に一國の文化學術の進捗に何等の交涉なき行政官を置くの例は已に之を述べた。地方の視學官は言ふを俟たず、美術學校長、音樂學校長の如きまで行政官たりしものを擧げて居る。甚だしきに至つては美術の鑑賞に就いて何等の智識も興味も無き一局

係が文展の審査委員長となつて居る滑稽事すらある。斯くの如くにして一國文運の進行を計り得ると思ふならば大いなる誤りである。尤も一局部の長となれば、其人の仕事の中には専門の法制的智識を必要とするものも少くない。而して芳賀教授の言ふが如く特殊の専門家に後から法制的智識を學ばしむるといふ事も實は困難である。又法制的智識の修得に餘力を注がしむる事は得策でもない。此方面の事務は例へば書記官若くは事務官といふ地位に専門家を据ゑることによつて補はしむる事が出來る。故に理想的制度としては専門家を長とし、其下に法制智識を配して之れを助けしむべきである。法制的智識を長として其下に専門の士を率ゐしむるは、冠履轉倒の甚しきものである。尤も各部門の長となるのには其専門的智識と共に夫れ〳〵の理想と見識とが無ければならぬ。學校の校長ならば敎育的見識とか經驗とかなければならぬ。唯其道の専門家であるといふ丈けでは十分で無い。然しながら此等の理想見識は必ずしも法制的智識を前提するものではない。法制的智識なしと雖も其人の敎養次第で之れ丈けの資格は備へ得る。芳賀教授が「苟くも常識のある限り」と言はれたのは、恐らく此點を意味するものであらう。唯事實上日本今日の敎育の有様では深遠なる敎養に基き、高き見識の専門家を見るといふ事は頗る困難であらう。唯所謂常識ある人物即ち見識ある人物は本來高等普通敎育で養はねばならぬのであつて、此方面の必要が何も他の各専門家に限つた事ではない。法科方面にも此必要は無論大いに感ぜられて居る。専門家に見識ある人物が無いからといつて、一局部の長官たる地位を法科出身者に持つて行く理由とはならない。況んや法科出身者と雖も敎養ある人士の乏しきは同様なるに於てをや。此點に於て予輩は我國の高等敎育の組織の中に人物を作るといふ方面に尚一層努力を加へねばならぬといふ必要を感ずるものである。

（四）

第三に教授は今日文科方面の著しく衰退して居る事を嘆ぜられて居る。曰く「國家の思想界を指導すべき

文科は今日全く度外視せられて居る……今日の狀態で行くと全國の秀才は文科には最も緣が遠い……今日の有樣で行つて將來第二流第三流の人のみが文科に入る事が國家敎育の方針に協つてゐるのであるか」と。一國文化の進歩は、一つには文科に屬する學問を研究せる人々に俟たなければならない。而して此方面に天下の秀才は多く足を向けないといふ事は、國家の將來の爲めに眞に憂ふべき現象である。予輩は今日の天下の秀才が多く法科とか醫科とかに集まり、文科理科の如き最も根本的な基礎學の方面に身を投じないといふ最近の著しき現象を耳にし、敎授と共に其憂を同じうするものであるが、唯其原因の何れにあるかといふ事に就ては、敎授の說の如く單純に說き得る問題ではないと考へて居る。文科出身者をもつと樞要なる地位に擧げたり、官吏登用の途に於て尙一層文科出身者の便宜を講じたり、一言にしていへば文科出身者に今よりも尙多くの形式的榮達の途を講じても、這般の憂は取除かるゝや否やは大いに疑とせねばならぬ。予輩は今日の天下の秀才が喜んで多く法制や醫科に身を投ずるの現象を以て、もつと深い所に根柢する現代日本の一大病弊となし、識者によつてもつと痛切なる解釋と對應策との講ぜられん事を希望するものである。

段祺瑞失脚の飛報と我對支經營の頓挫

十一月十六日の新聞は、突如段祺瑞の辭職を報じて尠からず我々を驚かした。翌十七日の新聞に見えたるやゝ詳しき情報によれば、江蘇督軍李純等の提唱に係る南北調停の說に關し、國務院會議に於ける大勢が妥協論に傾き、當初より武力討伐を主張してやまなかつた段祺瑞を孤立の地位に立たしめた事が、實に彼をして勢窮り遂に十五日の夜を以て辭表を馮總統の手元まで差出さしめた原因であるらしい。此邊の事情は尙後報を俟つて判斷せねばならぬけれども、要するに、段

氏失脚の直接の原因が南京督軍等の反對にあること丈けは疑ないやうだ。抑も李純將軍が、馮國璋の後を受けて南京に駐在してより以來、彼が武昌の王占元、南昌の陳光遠を連ねて隱然一敵國をなして居つた事は公知の事實であり、南北兩勢力の中間に位して時局の解決上最も世間の注目を惹くべき地位にあつた。彼が所謂馮國璋派に屬し必ずしも段祺瑞の下風につくものにならざるは、元より人の知るところ、而して段が傅良佐を湖南に入れ、吳光新をして頻りに南方に段派の勢力を擴張せしむるの態度を快しとせなかつた事も亦明白な事實である。只彼は陸榮廷や孫逸仙と同類と見傚されたり、南北政爭の渦中に卷き込まれる事を欲しなかつたが故に、久しく中立の態度を取つて動かなかつた。而して彼が段祺瑞の武力討伐の政策の成功を喜ばなかつた事丈けは疑を容れない。何となれば、段の此策の成功して南方に段派の勢力の張るは、それ丈け彼の不利とする所ろだからである。然るに最近湖南の動搖が一層の激しさを加へ、四川に於ても亦貴州軍の俄かに北軍に反噬する等の事情よりして、段派の最も力瘤を入れた湖南四川其物に於て南方の勢力が俄かに激増するの事實に鑑み、武力討伐の不可能は漸く明白ならんとしつゝあるに乘じ、玆に敢て起つて段を抑へんとするに至つたのであらう。彼等が適當の時機を見計つて斯くの如き態度に出づべきは、支那最近の政局を觀察する者の已に早く豫想せるところである。而して湖南四川に於ける右の如き事情の變化の外、陸榮廷の出動による兩廣の結束、軍器借款の結果として起れる段祺瑞の不人望、此等の事情も亦李純をして當初の素志をなすに適當なる時期至れりと信ぜしむるに與つて力あるものであらう。要するに、最近段內閣の所謂親日政策は、著しく現內閣の不人望を齎らした。而して之に伴つて段內閣反對を標傍する南方側の勢力も頓に加つた。そが段內閣不人望の結果であるか、或は李純等が段內閣反抗を企てんとするの計畫の外部に傳つた結果であるか、其邊の事情は今之を明かにしないけれども、要するに長江以南に於ける段內閣の威望が最近俄かに地に

落ちた事丈けは疑を容れない。湖南第八師團長王汝賢の威嚇に恐れて、督軍傅良佐が旗をまいて武昌へ逃げたなどゝいふ事は、最も這般の形勢の變化を物語るものである。李純が段祺瑞に反抗の陣形を張つたのは十月の末からである。最初は軍器借款に關する段祺瑞との再三の應酬にも李純の斷乎たる決心の鋒先があらはれて居つたが、十一月の央に至つて更に南北調停を提議して武力討伐の不可能を論じたものと見える。武力討伐其事が假りに不可能でないにしても、李純一派の反對が武力討伐を暫時不可能ならしむる事丈けは明かである。武力討伐を不可能とすれば、段祺瑞は依然其職に留る事は出來ない。李純の提言は謂はゞ段內閣不信任の意志表示であつた。故に或意味に於て、段祺瑞は長江一帶に倨然たる一大勢力を擁するところの督軍連より無理に蹴落されたるものと言つても差支はない。而して此陰謀の奥に大總統馮國璋の存在する事は又略ぼ想像するに難くない。

斯くの如き觀察をして誤なしとすれば、段の失脚は今春の場合の如き一時の狂言と見るべからざるは論を俟たない。今春段が一片の辭表を殘して天津に去り以て元の大總統黎元洪を脅かしたのは、畢竟大勢我にありとの自信があつたからである。單に大總統といふ最高の地位を占めて居るの外、何等の實力なき黎總統は此威嚇に屈して再び段を迎へ、之に從來以上の權力を任せなければならなかつた。然しながら今日の形勢は此時とは同一でない。今日の馮總統は前の黎總統の如き無力無援の木偶ではない。段の勢力は尚北京を中心として侮るべからざるものなりとするも、外省督軍の多數は今や必ずしも段につくものでない。即ち段今日の失脚は大勢の壓倒する所ろとありしものであつ例令所謂支那の大勢なるものは往々昨を以て今を計るべからざることありとはいへ、今日までの來歷より想像するに容易に再び元の如く急變する見込もない。然らば段の失脚は之を以て一時の狂言とすべからざるは明かである。自信を以て斯く斷言するは尚些か早きに過ぐるの感あれども、予は段の失脚を以て決定的のも

のと信ぜんと欲するものである。

段の失脚を以て決定的のものとすれば、段に代つて北京政府の主人公たるものは馮大總統たるべきは之れ亦論を俟たない。支那に於て大總統が政界の中心となる事亞米利加の如くすべきや、內閣總理を以て中心とする事、佛蘭西の如くすべきやは制度としても慣例としても未だ極つて居ない。袁世凱時代に於ては大總統が實權の掌握者であつた。袁の死後は黎元洪の周圍に政治的實權の中心圏を作らんとするの一部の運動ありしに拘らず、遂に實權は國務總理段祺瑞に歸して了つた。馮黎元洪の失脚して馮國璋の之に代つて入京するや、馮の實力は相當に段を牽制して政界の中心點は此兩者の間に彷徨する形であつた。從つて表面屢々馮・段の融和の說傳へらるゝに拘らず、兩派の反感が北京政界の暗流をなして居つた事は疑ひない。而して李純等が横を見て段に反抗したのも、畢竟馮と通謀の結果なるが故に、段失脚後の北京政界が馮の統制に歸すべきは亦疑を容れない。只問題は馮は一旦北京政界の主人公となつて、扨てどれ丈け時局收拾の効を遂げ得るやの點である。要するに、今後の支那政界の落付きは馮の勢力如何に着眼して判斷すべきである。段に代つて國務總長たるものが王士珍たると熊希齡たるとは全然無關係ではないけれども、亦深く問ふを必要としないと思はるゝ。而して予輩の觀測するところによれば長江一帶に蟠居する李純一派と馮との連絡が密接である限り、馮は時局收拾の上に相當の効果を擧げ得るだらうと思ふ。況んや、風說によれば李純の此度の擧は實に陸榮廷の一派と脈絡通ずるところあるの結果なりと言ふに於てをや。此等の點に於ては未だ確證を缺くも陸の近來の態度より推して强ち根據なき風說とも思はれない。況んや湖南に勢力を張り、否湖南を自家の藥籠中に入れずんば熄まずとするの熱心なる希望を有せし陸榮廷と相謀る事なくして、彼の聰明なる李純が輕卒に段近所謂日本の同情なるものを楯として得意滿々たりし段總理に反噬する筈はない。國民の間に人望を失ふと反比列して、外勢の援助を專ら賴みし段祺瑞の勢力は

外勢の援助が政治的勢力の一大要素たる支那に於ては決して侮るべきものではない。斯く見れば馮の勢力は支那今日の狀況の下に於ては先づ相當の根據あるものと見なければならない。元より廣東の孫一派の所謂純粹なる革命黨は尙十分に馮國璋に信頼せぬであらう。純段派と見らるゝ安徽の倪嗣仲、山東の張懷芝、奉天の張作霖も大勢に壓せられて飽く迄馮に楯つく事も出來まい。其上强いて極端な場合を想像すれば、馮と南方革命派との間には從來の關係上何等か疏通の道を見出し得ない事もなからう。して見れば馮にとつて多少眼の上の瘤となるものはお膝元の北京方面に去年以來扶植せられたる段の勢力のみである。流石に北京方面には段の勢力牢として拔くべからざるものがある。段失脚の報に先つ事一日の北京電報は、激しき競爭の結果參議院議長の地位は王揖唐が大多數を以て擧げられた事を報じた。彼は袁の寵兒にして最近は段派の錚々たるものである。曹汝霖、陸宗輿等と共に所謂交通系の中堅をなすものである。北京政界の勢力の一半を占有する進步黨系を排して交通系の全勝を占めたのは偶々以て段の勢力の拔くべからざるものあるを語るものである。此點を馮は果して如何に處置するであらうか。腕力を以て壓倒する事の出來ない事情もあれば、馮に取つて多少の苦心を要する問題たるを失はない。此外の進步黨系の操縱も亦多少の問題になる。進步黨系を重用するの結果は南方民黨と妥協するの妨げとなろうし、又南方民黨の要求を聽用するに過ぎれば、進步黨系の憤激を招かないとも限らない。若し夫れ進步黨系と交通系と相結託して馮に當ることあらんか、之れ又優に中央政界に一波瀾を捲き起す丈けのものはある。要するに馮が此等の小難關を如何にして切り拔けるかは卽ち繫つて支那は近き將來に於て小康を見るや否やを決する鍵鑰である。此等の點は讀者と共に今后の發展に注意して判斷せんとする所である。

最後に一言附け加へねばならぬのは、段の失脚は日本の對支政策に如何なる影響を及ぼすや、否、日本の政局は段の失脚によつて何等の波動を蒙る事無きや否

やの問題である。斯く云ふ所以は世上の說が等しく說いて居つたが如く、我國現内閣は實に段によつて一切の對支政策を立てゝ居つたからである。而して段の主義方針が國民の多數、否少くとも支那の有力なる政治家の多數と共觀る所を同じうするものであるならば、段によつて立つる所の我對支政策は其儘之れを其後繼者に繼承せしむるに多くの困難を感じないけれども、不幸にして段は此點に於て全體として殆ど孤立の姿である。故に帝國政府は從來の方策を其儘後繼者をして引受けしむることを得るや否や。最も明白なる例を取つて言はんか、即ち段をして納得せしめ得た所の、所謂軍器購買契約の如きは果して之を段の後繼者をして同樣に納得せしむることが出來るか如何か。段の失脚を促した最大の功勞者李純は已に此問題に關して段に反對の意を表して居る。軍器問題が實に段祺瑞失脚の一原因であつたとすれば、折角苦心して作り上げた此契約も段の失脚　共に遺憾ながら中絶するものと見なければならないやうに思ふ。之れ唯一例に過ぎない。我現内閣が餘りに段一人を過重して他の政治的諸勢力を省みなかつた丈け、段の失脚によつて我對支政策に掩ひかゝる所の影響は極めて著しきものであると言はざるを得ない。尤も我政府は兼々主張して居るが如く、何も段祺瑞一人と親しまんとしたのではない。政府としては時の正當なる政府と結ぶ事の外親善關係の立てやうがないではないか。時の正當なる政府を以て國民の正當なる代表者と見ざるべからずと言ふ事は全然形式の論である。形式に拘泥して實際の勢力關係を度外せんとするは、特に外交界に於てあるまじき謬妄である。政府は時の正當なる政府であるならば、段たると馮たると將た陸榮廷たると孫逸仙たるとを問はず之れと相折衝するを厭はない。帝國政府は其根本方針に於て一視同仁の大義を尊重するものなりといふ。此說明によし誠意ありとするも、少くとも支那の國民は之を諒としなかつた。日本の現政府は國民多數の輿望に反して、段祺瑞一人を援助するものなりと誤解して居つたが故に、段祺瑞反對の風潮に乘じて起つた後

繼内閣は國民に對する面目としても段と同じ態度を以て、所謂日本の好意を受くることは出來ないかも知れない。茲に亦日本政府に此變局に處して自ら内閣の體面を傷けざると同時に、帝國其物の威信と利益とを擁護する爲めに少からざる苦心が要ると思ふ。餘りに段祺瑞を重んずるに過ぎ、且つ段祺瑞偏重の根本主義により帝國政府の外交を指導するの概ありしの稱ある林公使は、段の失脚に拘はらず依然其職に留る事を得るや否や。假りに林公使を更迭せしめたりとて内閣は更に加何なる方策を立てゝ支那の新内閣が日本政府と段内閣との間に結ばれた所謂各種の日支親善の成果なるものに對して何等かの誤解を持つて居つた場合に、如何にして之れを彼等をして甘受せしめんとするや。此點に關して十分成算無くんば恐らく日本内部に於て政府反對黨は此處に内閣攻撃の好個の口實を見出すであらう。而して政府は此等の攻撃に對して果して如何なる辯明を以て之に答へんとするや。今や政治期節は目睫の間に迫りつゝある。段内閣の失脚は恐らく將に開かれんとする我國の政壇に一大波瀾を生ぜずしては已むまい。(十七日)

附記。博士が本稿を寄せられたる後、或は段總理の留任となり、或は段内閣員の辭任となり、種々小波瀾を重ねたるも、大勢は最早や段氏の勢力の昔日の如くならざ　を明證して餘あるを覺ふ。然らば支那の形勢を揣摩せんとする上に於て本稿の大旨は毫も之を變更するの要を見ざるなり。尚其後の事件の發展については又後日之を詳論せらるゝの機あるべきを信ず。(一記者)

新刊紹介

- ▽歐洲最近の社會問題(定價一圓八十錢) 桑田熊藏著 有斐閣發行
- ▽大宰相ロイド・ジョオジ(定價一圓三十錢) 原田榮一郎著 白水社發行
- ▽狂へる歌(定價六十錢) 佐藤惣之助著 無我山房發行
- ▽ワシントン(定價二圓) 矢代井上共著 實業之日本社發行
- ▽吹くや蒙古嵐(定價一圓二十錢) 西田士郎著 緑興社發行
- ▽三都生活(定價一圓四十五錢) 岡田播陽著 大同館發行
- ▽King Lear (△定價一圓二十錢) ロンバード註 博文館發行
- ▽捷を得るまで(定價一圓五十錢) 水上梅彦著 千章館發行
- ▽ビスマルク(定價一圓) 蜷川新著 實業之日本社發行
- ▽大英國覇業難(定價一圓) 田中萃一郎譯 富山房發行
- ▽資金運用論(定價九十錢) 與梠杢太郎著 實業之日本社發行
- ▽エマアソン論文選集(同一圓卅錢) 戸川秋骨譯 阿蘭陀書房發行
- ▽異端者の悲み(定價一圓三十錢) 谷崎潤一郎著 阿蘭陀書房發行
- ▽天眼通(中)(定價一圓三十錢) 村上浪六著 至誠堂發行

- ▽惡太郎如何にして矯正すべきか(定價九十五錢) 服部南冥著 南北社發行
- ▽滿洲の經濟(定價七十錢) 清水靜文著 六盟館發行
- ▽日本文明叢話(定價二圓二十錢) 足立栗園著 明誠館發行
- ▽王陽明研究(定價一圓) 桑原天泉著 帝國堂發行
- ▽日本仇討物語(上、下)(同上一圓卅錢 下一圓卅錢) 千葉花明著 阿陀蘭書房發行
- ▽十五代將軍(定價一圓二十錢) 高濱虚子著 阿蘭陀書房發行
- ▽離合(定價一圓) 谷崎精二著 阿蘭陀書房發行
- ▽漱石文學瑣談(定價八十錢) 夏目漱石著 高踏書房發行
- ▽子供本位の家庭(定價一圓) 安部磯雄著 實業之日本社發行
- ▽傳説ロマンス(定價六十錢) 渡部[illegible]著 實業之日本社發行
- ▽波のまに〳〵(定價六十錢) 水野廣德著 實業之日本社發行
- ▽父と子(定價一圓二十錢) 稻毛詛風著 大同館發行
- ▽大江戸の思ひ出(定價一圓三十錢) 龍居松之助著 大同館發行
- ▽軍談(定價一圓) 秋山眞三著 實業之日本社發行
- ▽村の創業(定價九十錢) 都築省三著 實業之日本社發行
- ▽黄昏の世界(定價一圓) 小山内薫著 正午出版社發行
- ▽現代の藝術(定價一圓三十錢) 上田敏著 實業之日本社發行
- ▽波上の日本(定價一圓) 佐藤鐵太郎著 實業之日本社發行

▽羅生門（定價一圓） 芥川龍之介著 阿蘭陀書房發行

▽評傳夏目漱石（定價一圓二十錢） 赤木桁平著 新潮社發行

▽大總統黎元洪（定價一圓） 内藤順太郎著 誠會春秋社發行

▽ダンテ神曲（定價一圓三十錢） 山川丙三郎著 警醒社發行

▽弦齋式斷食療法（定價一圓七十錢） 村井弦齋著 實業之日本社發行

▽歐洲大戰と日本の將來（定價一圓八十錢） 山口圭藏著 寶文館發行

▽貧しき人々の群（定價一圓二十錢） 中條百合子著 玄文社發行

▽南洋游記（定價二圓六十錢） 鶴見祐輔著 大日本雄辯會發行

▽早教育と天才（定價一圓四十錢） 木村久一著 心理學研究會發行

▽印度佛教史（定價一圓六十錢） 黒田行啓著 早大出版部發行

▽那翁大帝（定價三圓） 千頭清臣著 博文館發行

▽現代と偉人（定價一圓二十錢） 仲小路廉著 大倉書店發行

▽日本風俗史（上）（定價二圓二十錢） 加藤咄堂著 新修養社發行

▽憲政大意（定價一圓七十錢） 上杉愼吉著 憲政大意刊行會

▽政變物語（定價二圓五十錢） 前田蓮山著 文成社發行

▽新藝術論（定價一圓五十錢） 鈴木福二著 先彼書房發行

▽死の蔭に（定價一圓八十錢） 德富健二郎著 大江書房發行

▽支那戲曲集（定價二圓五十錢） 今關天彭著 東方時論社發行

▽國民經濟講話（定價二圓三十錢） 福田德三著 佐藤出版部發行

▽貧乏物語（定價九十五錢） 河上肇著 弘文堂發行

近來本文の記事頻りに輻輳を極め、逐號頁數の超過を患へざる事なき始末にて、爲めに本欄も久しく之を缺載いたす能はざりしは、記者の深く遺憾とせし處に御座候。然るに本號も亦連月の例に洩れず、已に豫定の頁數を超過し、到底批評御紹介申可き見込み立ち不申候へども、最早や今歳も暮れんとする時に有之候まゝ、遺憾乍ら唯書名を列擧して其責めを果す事にいたし候。何れ一陽の來復すると共、是非頁の繰合せをつけて、舊の如く毎號新刊の批評紹介に力むべく候まゝ、惡からず御了承の程御寄贈下されし著者、發行者、並に讀者諸彥に御願申上候

立雲、頭山滿翁著

きもつ玉

四六判三百頁總クロース
美本定價九十五錢送八錢

壯なる哉男兒の意氣、豪なる哉傑士の膽、膽を說くその人を得て初めて完く、衝天の氣魄爲めに顯然たり。當代の偉人、頭山滿翁頃者一書を著して、斗の如き膽を說く、本書を繙くものは何人か翁と語るの思なきを得んや。敢て江湖の諸士に薦む。

泰山房編

輕便當用 日のない日記

布表紙四六判金六十五錢
同上菊半裁金四十五錢
送料一六、八錢

記錄法、眞に嶄新!!

日付けを附せず且つ記錄の長短は勿論、記帳開始も全く記入者の自由自在にして、四百頁を數ふ、以て文章極蓋し日記界本誌の右に出づるものなからん、敢て大方の士女に便益至薦む。

醫學士 井上溫監修　醫師 河野穗著

腦神經 耳鼻咽喉 自宅療法

四六版箱入
金一圓廿錢
送料八錢

本書出で、保健の術初めて完し。

本書は疾病の兆候より說明して、之れが療法に及び一々處方箋を附して施業の方法を示す、實に自宅療法の尤なるもの本書を座右に保たば蓋し心身强健なるを得ん。

東京市神田區
淡路町一丁目

發行 泰山房

振替口座東京
九〇七九番

（二〇二寸七）

最新刊經濟名著

社會と經濟

法學博士 津村秀松著

◎布裝全一冊・定價金參圓八拾錢・送料金拾六錢

本書は津村博士が過去十年間の數多き勞作の内會心のもののみを選出し蒐めて一卷となしたるものなり。研究室裡倦くを知らざる博士が過去十年の感想思索は盡し經國濟民上に於ける千金の文字たるべく、時代の變遷に伴ふ世態人情の推移亦窺はれて趣味津々たり。題目の重なるものとして⦿日本の社會問題⦿日本の婦人問題⦿日本の農村問題⦿日本の商工問題⦿日本の取引所問題等を擧ぐ。實に近代稀有の快著なり。

戰爭と經濟

法學博士 津村秀松著

◎布裝全一冊・定價金參圓・送料金拾貳錢

世界の各國民經濟は今次の大戰亂より生ずる偉大なる教訓によりて更に甚大なる變化を見んとす。經濟の碩學津村博士は戰爭の勃發當時より深く此點に留意し、爾來一意專心之が研究に從事し今や其公表を見るに至る。實に社會の期待に恰當せるものと云ふべく、世界各國民共に戰後の經濟問題に焦慮せるの際、學究者は勿論戰後の經濟戰に勝者たらんと冀ふの士は本書によりて目標を得らるべし。

經濟學原論

しやーる・ぢーど著
神戸高等商業學校教授 飯島幡司譯

◎布裝全一冊・定價金四圓五拾錢・送料金拾六錢

ぢーど氏は現代經濟學界に於ける第一人者なり。原著は此權威者が三十餘年間の推敲洗練に成れるものにして、約二十箇國の語に飜譯せられたる世界的大名著なり。譯者飯島教授は博士の說に憧憬すること深く、之を一般に普及せしめんが爲め飜譯に從事して推敲多年茲に公表せらるゝに至れり。譯文流暢爽明戯曲を讀むの感興を以てよく經濟學の秘訣を了得し得るは本書の一特色なりとす。

東京市日本橋區本石町 振替東京二〇八番

寶文館

大阪市東區淡路町 振替大阪四三番

(中付二の三)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

思想の根本生命の糧

醫學博士 永井潛先生著
生命論
價參圓八拾錢 税貳拾錢

藤本慶祐先生著
平敍日本佛教
價壹圓六拾錢 税八錢

ダンキユー著 黒田敬次譯著
世界自然科學史
價貳圓五拾錢 税貳拾錢

トルストイ著 加藤一夫譯
我等何を為すべき乎
價壹圓八拾錢 税八錢

文學士 新城和一氏著
ドストイエフスキイ
價壹圓卅錢 税八錢

モークレル著 渡邊吉次譯
ロダンの生涯と藝術
價壹圓四拾錢 税八錢

畔上賢造先生著
生命の一路
價壹圓四拾錢 税八錢

高島平三郎先生著
心理學上より觀たる日蓮上人
價壹圓六拾錢 税貳拾錢

ロマンロラン著 加藤一夫譯
ベエトフエンとミレエ
價壹圓五拾錢 税八錢

醫學博士 永井潛先生著
生物學と哲學との境
價參圓八拾錢 税貳拾錢

木村莊八氏譯著
藝術の革命
價壹圓七拾錢 税貳拾錢

長與善郎氏著（長編小說）
彼等の運命
價壹圓九拾錢 税貳拾錢

帆足理一郎先生著
宗教と人生
價壹圓卅錢 税八錢

畔上賢造先生著
悲哀より歡喜まで
價九拾錢 税八錢

海軍中佐 若林欽先生著
面白い科學の話
價壹圓五拾錢 税八錢

文學士 木下四郎一著
哲學汎論
價壹圓拾錢 税八錢

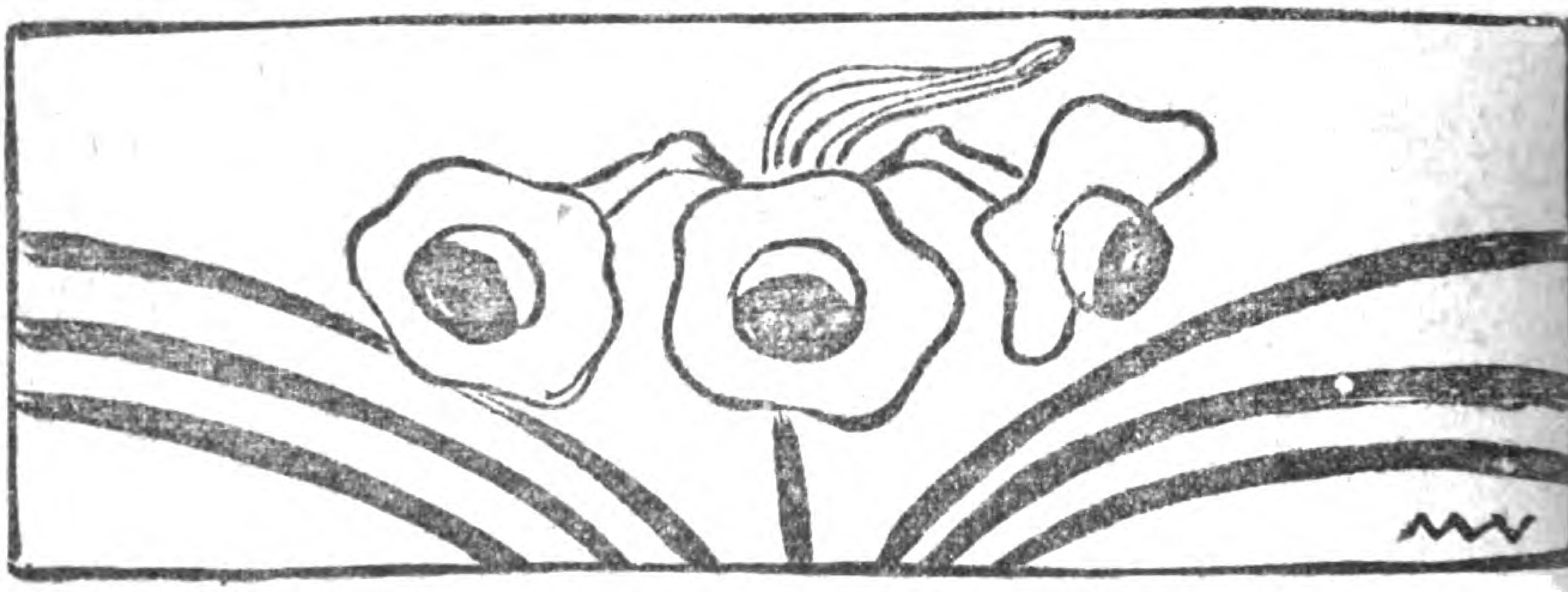
兒玉昌先生著
滅び行く宇宙と人類
價壹圓四拾錢 税八錢

武者小路實篤氏著（脚本集）
向日葵
價壹圓五拾錢 税八錢

（中付二の四）

發行所 東京市麴町區平河町五丁目 振替口座東京二〇一九一四四番 **洛陽堂** （電話番町四二五八）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



紅蓮

上司小剣

一

生れた時、雪枝の掌には、たしかに六字の名號が現はれてゐたと、母は信じ切つてゐる。十九年前の或る月或る日、柳谷の觀音講を勤めて、御詠歌を上げてゐる最中に、母のお定は蟲がかぶり出し、獨りで講中を拔けて、產の用意に取りかゝつたのであるが、もう四人目の安々と、其の日の暮れがたに生み落したのが、雪枝であるといふ。

「また雌んたか。」と、夫春造が、臺所の方で言つてゐる聲を、夢現の間に聞いて、お定は自分が疊の目まで見えなくなるほど苦んだことが、――幾ら安產だと言つても、それだけの苦みはある――一向手柄にもならなかつたことを知つたのである。

「また、他家の嚊一人育てるんか。……」

夫が次ぎの間の長火鉢の前へ來て、こんなことを言つてゐるのも聞えた。

それから取りあげの婆が、
『今度の嬰兒は、ほんまに器量よしだつせ。』と、言ひ〳〵、湯を使はして、茄蛸のやうな赤子を此方向けて見せた時、お定は其の子の蒸し菓子みたいな掌に、あり〳〵と『南無阿彌陀佛』の六字が、後光を射して現はれてゐるのを見たのである。
『あの時、嬰兒はかうやつて手を握つてはりましたがな。』と、後になつてこの話を聞いた時、取りあげ婆は自身の皺だらけの兩手で拳を拵へて見せながら、合點の行かぬ顏つきをした。
『まア何んでもえゝがな。柳谷の講を勸めてはつた折に、氣がついたんやさかい、おほかた觀音さんが生れて來やはつたんやろ。雪枝はんは觀音さんの生れがはりや。觀音さんは女體やいふよつてなア。』と、西の端のお小夜婆さんは大きな口をあいて言つた。
『觀音さんの手に、南無阿彌陀佛も工合なもんやおまへんか。』と、取りあげ婆は冷かな笑顏を見せた。
『八宗兼學や。』と、お小夜婆さんは、田螺のやうな齒を剝き出して、げら〳〵笑つた。
其の雪枝が生れてから八年の間、お定は岩田帶の味を忘れてゐた。もうこれで止まりかなアと自分には思つたが、まだ三十そこ〳〵でそんなことがおますもんか、と人々は滅相なといふ顏をした。
式の通りに胸がむか〳〵して、酸いものが好きになつて、いつもきまつて下孕みのお腹を取りあげ婆に摩すらせるやうになると、廣くもない村中へ、糸瓜はんのお定はんは腹ボテやといふ評判がいつぱいになつた。何んの不義淫奔の果てではなし、主ある女子の懷姙が何んぢやいなと、お定は自分の噂さが珍らしさうに、村人の語り草となるのに腹立たしかつた。けれども人の懷姙の噂さでもしなければ、

何一つ話の種のない、餘りに無事な村であつた。
「月が重なれや、お腹がふとる、どしよぞいな、……さアさ棄てとけ放つとけ。」といふ唄を、子守り等が聞えよがしにうたつて、杉の生垣の外を通つた。
「何んの糸瓜が、……」といふことを會話の中に挾むので、國澤といふ苗字よりも、春造といふ名よりも、糸瓜はんで通用してゐる夫は、今度こそ男の子が生れてもよさゝうものと、心の中で祈りつゝ待つてゐたが、月滿ちて生れたのは、矢張り女であつた。
「また雌んたか。」と、嘆息する勢ひさへもなくて、春造は只ぼんやりしてゐた。この時は柳谷の講を勤めてはゐなかつたし、嬰兒の掌に六字の名號が現はれてゐたなぞとお定も言はなかつたので、この子はまことに、詰まらないが上にも詰まらない餘計物として、家中に取り扱はれた。
「あんた何んでもよろしおますよつて、名を一つ命けたッとくなはれな。」と、六日だれも濟んでからお定は、相濟まぬやうな樣子をして夫に言つたが、春造は「ふゝん」と鼻の先きで笑つて、
「名なんぞ要りやへん。」と無茶を言つた。それでも十日目に漸う「季野」と命けて、戸籍吏へ屆け出た。
もうこれで女の子の季にしよう、女の子ならもう生れるなと祈つて、お末といふ名を命けようと思つたのであるが、村中に同じお末といふ名が八人もあるといふので、それでは此方は季野にしてやれ、お末がそんなにどッさりあつては、利きが鈍からうと思つたのである。それにお末とかおはしたといふ言葉は餘んまりぞッとせぬらしいので、何うでもよい子にしてからが、矢つ張り親の慾目は手傳つて、字も末でなく、季といふ方を使つた。

八人もある村中のお末といふ名の謂はれを訊いてみると、みんな、もう後が生れぬやうにといふ禁厭であつた。子寳を辭退しようといふ制札であつた。

『何を阿保臭い、……おきさらせ。めんめに節制なんどきやがらいで、子の出來るのを厭やがつても仕樣があるかい。』と、春造は自分のことを忘れて、獨りでがうたくを吐いた。

よち／＼と歩き出した頃から、雪枝はよく佛壇の前にちよこんと坐つて、ぴよこ／＼とお辭儀をした。また時には五枚の座蒲團の積み重ねてある上へ載つて、小ひさな兩手を合はせつゝ、廻らぬ舌で、念佛を唱へたこともある。

季野は雪枝と違つて、十歳になつても、神佛を敬ふことを知らなかつた。柳谷の護符をビリ／＼と引き裂いて、母にひどく擲られたことさへある。

二

雪枝十九、季野十一の秋になつた。折角季野なぞと名を選んだ甲斐もなく、お定はまた懷妊になつて、六年前に一人生み落してゐる。けれども、今度は男であつたから、春造も滿足して、名前も殊に檀那寺の和尚に頼み、孟二郎といふのにした。孟二郎……けッたいな名やなア、と思はぬでなかつたけれど、昔し唐の大賢人とかいふえらい人の名から取りましたのぢや、と和尚に言はれて、兎も角感心して了つた。

『孟さん、……』と呼ぶのが、如何にも滑稽に響くので、兄妹や母のお定までが、笑ひ出しては春造に睨まれた。生きてゐれば二十七になつてゐる筈の總領娘はお時と言つて、これさへ居て呉れたらと、春造

は逃がした魚のやうに殘念がつてゐる。

「一人で智惠を持つていてしまひよつた。」と、今も嘆いてゐる。次ぎが二十四になるお須磨で、五里奥の車も通はぬ山里へ三歳下の亭主を持つて片付いてゐるが、村の誰れ彼れや、駐在巡査とまで浮名を流して、其の揚句が氏神の祭の夜に、若い衆が櫓太鼓を擔いで來て、「祝ひまへう、祝ひまへう」と口々に叫びつゝ、耳も裂けよと鳴り響く大鼓の音とゝもに、二尺廻はりからある太い棒を春造の家の入口の戸や雨戸に打ち付け、めり／＼と壞はれる響きに、凱歌代りの木遣りを殘して引き上げたことがある。

三番目は孟二郎が生れるまでの唯一人の男の子で、「芳一一人だけではかけ代へがないので‥‥」と言つて、春造は男の子を欲しがつてゐたのである。芳一は二十二になるが、十二の時前川の笹の生へた岸で釣りをしてゐると、背後の崖の上から誰れが投けたとも知れぬ流れ礫が、頭顱の少し上へあたつて、眼暈のするほどの痛みを覺え、濃い血がだら／＼と流れて、「痛いよう、痛いよう」と泣き喚きながら跣つて來たのを、母のお定が驚き周章てゝ、自身の丸髷の上に被つてゐた古手拭を取つて、鉢巻きをさしてやつたことがある。それから其の石疵が山形なりの禿になつて、時候の變り目には、頭のシンまでがづき／＼と痛むのみか、平常でも少し込み入つたことを考へると、腦の中が螺旋のやうにくる／＼廻はつて何が何やら分らなくなる。去年の徴兵檢査には、父の春造が、白縮緬の猿股褌などを締めさした芳一を、役場の門まで送り出した其の足で、丹波境の或るお宮まで徴兵除けの神符などといふものを受けに行つたりしてゐたが、芳一は其の後腦部の疵の爲めに、不合格になつて了つた。

「おほかた昔し、丹波の宮はんの投げはつた石が、芳さんの頭にあつたたんやろかいな。」と、顏の蒼白い村

長は皮肉を言つた。

「家の芳も、頭へ石があたるまでは、もつと賢かつたんや。……この春伊勢參りしよつてから、阿呆が餘計阿呆になりよつたがな。」と、春造は愚痴を溢すといふほどの意味もなくよく言つた。

月々積み金をして置いて、五年目毎に催す伊勢參りは、同勢が大抵二十人ぐらゐで、村の若者をすぐつて行くのである。汽車はあつても、昔風の道中姿で、菅笠に脚袢といふこしらへ、宿々の遊女宿に泊つて、ヴイエルジ性を破るといふことは、村の親々が許すのである。この前の伊勢參りに芳一は十六で、若い衆に入つた初めの年であつたが、同い年の仲間が三四人も菅笠の一行へ加はつたのに、芳一だけはあつけらかんとして、一所に行きたいとも思はなかつた。若い衆の長老（仲間の役の名）が勸めに來ても首を振つてゐた。父春造も息子に十六の初旅はさせたくなかつたので、

「あいつは晩稻だす。」と詫びながらも、「若しやあの頭の疵が障りをしてゐるのであるまいか。」と心配にもなつて、一行が朝酒の立振舞に元氣好く、

「ヤアとこせー、よういやなア……」と、木遣りの音頭勇ましく立つて行くのを、八重櫻の咲きこぼるゝ下に立つて見送りつゝ、寂しさうな顏をしてゐた。

「家の芳やんはあかんなア……。」と、十三で異性の肉を知つたといふお須磨は、大きな口をあけて、げらげら笑つた。

「何ん吐すぞい。默つてけつかれ。」と、其の時お須磨を叱り付けた春造の顏は、近頃にない險しさであつた。

學問と言へば、唯字を覺えることゝだけに考へてゐる春造は、子供を小學校より上の學校へは、もう入れようと思つてゐなかつた。總領娘のお時は賢かつた、えらかつた、惜しいものを死なしたと、いまだに悔んでゐるのも、一つは檀那寺の和尚が度忘れをしゐたノコギリといふ字を、其の時十二三であつたお時が、金偏に居ると書くんだすと即座に言つたのが、春造には又とない者に見える一つの原因になつてゐるのである。十九の厄年で亡なつたお時のことをば、父の春造が村一番の學者を失ふたとして嘆けば、母のお定はまた、「一生殿御の肌知らず、……」と、淨瑠璃の文句を引つ張つて來て泣いた。「妹のお須磨はんが二人前してはりますさかい、泣かいでもよろしいがな。」などと、お小夜婆さんたちは、陰口を言つて舌を出した。

芳一は小學校を卒業すると、直ぐに村役場の筆生に雇はれた。この村では、そんなことが名譽の一つになつてゐて、息子が役場に出てると言へば親たちも肩身が廣かつた。村長や助役も親の顏で芳一を筆生に採用してみたものゝ、眞に役立たせて使ふつもりはなかつたのである。ところが、行らして見ると案外出來るので、「これは妙や、妙ちきりんや」と、役場の手合は皆顏見合はせて、煎豆に咲いた花のやうに芳一の様子を覗き込んだ。

徵兵は免れる、伊勢參りは濟む、芳一もいよ／＼男一人前になつて、二十二の秋までには、役場の方も首席の書記に進んだ。殊に速算の名手で、少しぐらゐ腦が病めて來ても、算盤の珠の響を聞くと癒るといふことであつた。春造は芳一の爲めに水晶の實印を一つ刻らしたが、それが出來ると、山林と田地とを少しばかり芳一の名義に切りかへて登記した。しかし實印は自分のと一所にちやんと何處へか隱す

やうに納つて、芳一は已れの實印といふものを印判屋が持つて來た折に、唯一度見ただけで、其の後は曾つて手に觸れたことのないのみか、影も形も二度とは知りやうがなかつた。

秋になると、春造の家は、猫の手も人の手といふほどに忙がしい。春造は朝から下男の治郎吉を連れて、山の方へ松茸にかゝつてゐるし、田の方は男女二三人の日傭を入れてもまだ足りないで、お定や雪枝や、下女のお作までが、赤い襷がけで手甲を嵌めて、白い手拭を姉さんかぶりに、表の廣場で稻扱きなどをした。芳一だけが白い手をして、毛糸の嚢に入れた辨當をぶら〳〵と、役場通ひしてゐるのが、まるで別の人種のやうにも見えた。

三

松茸は何うやら生えやんだし、稻の方も一片付きして、唐箕にかけるだけになつたし、やれ〳〵今日は蛤汁でもして、一同を振舞へと、春造は久し振りに仕事着脱ぎ棄てゝ、手織の布子に羽織、小倉の帶を子供のやうに胸のあたりで締めて、奥の小座敷で帳合をし始めた。松茸の賣り揚げから、貸金の利息、日傭の賃錢と、小ひさな帳面へ細い字で入念に附け立てたのを、眞ん圓の眼鏡越しに眺めて、算盤の珠に引き合はせつゝ、雪達磨のやうに層を作つて太つて行く此家の身上を、ほく〳〵と圓い顔いつぱいに笑み溢れさして喜んだ。もう五十に近く額の深いはに老刻てまかくれけゐるが、其の皺に限りのない辛抱强さを見せて、あの顔で若い時は伊勢參りもしたし、夜遣ひにも行つたのかと思ふと可笑しくなるほどの物堅さが表はれてゐる。

入口の横へ玄關代りにしつらはれた廣い緣板は、疵だらけになつて、黒く漆でも塗りかためたやうに

なつてゐるが、お天氣でさへあらば、日あたりが好くて、冬も火鉢が要らぬので、お定や雪枝は、此處で糸を紡いたり、縫物をしたりする。都に大きな紡績の會社が出來てから、村の家々の小さな糸車は納屋の天井などに放り上げられて、煤と塵埃とに塗れてゐるけれど、この家では今でも時々、じんきを作つて、ビイ／＼と糸を紡ぐことがある。ビイ／＼／＼／＼、チヨンと、女たちの操る手に、じんきは糸となつて、針に卷き付き、椎の實なりの白い玉が拵へられて行く。まだ小春と言ふには早いのであらうけれど、長閑な日向に雀の影がちらついて、前の廣場の眞ん中にある柿の木の根かたに、陽炎が燃えてゐる。

過ぐる年の祭の夜に、村の若い衆の恨みから櫓太鼓を打ち付けられたのに懲りて、廣場に續く生垣の出口に瓦屋根の門を建てたが、扉の門は始終差されたまゝで、人は皆潜り戸から出入りさせる。太い鎖に錘を付けて、開きつ放しにならぬやうな仕掛けになつてゐるので、人の出入りの度に、鎖が金具に擦れて、ガラ／＼と高い響きを立てる。

お定と雪枝と下女のお作と、丁度三人で居るには、廣くも狹くもない鏡板の上で、お定は解き物を、雪枝は縫ひ物を、お作は糸を紡ぎつゝ、暖か過ぎるほどの日光を浴びて、よくさま／＼のことを聞き出して來るお作の口から、村の人々の噂さを受け賣りされてゐた。雪枝は時々、佛壇の方を見ては、線香が消えてゐると、抽斗から新らしいのを出して立てる。宣德まがひの火鉢に朝から炭火が一つ埋んであつて、それをば神佛の燈明や線香の火種に使ふのであるが、燐寸の火は不淨ださうで、毎朝燧石を打つて引火奴にうつし、其火で炭をおこして、この火種を作るのが、雪枝の役ときまつてゐる。朝と晩とに

は必ず佛壇の前へ坐つて、お經は讀まぬが、ぢつと靜かに默禱してゐる。——何時からか、「念佛娘」といふ綽名が、村の若い衆の間に弘まつてゐる。——といふことをも、お作が聞いて來て、言ひにくさうにしながら喋舌つた。

「念佛娘。……結構なこつちや、わしや嬉しいがな。」と言つて、雪枝は其の霑ひのある眼で、前面の柿の木を眺めて、うつとりと遠い世界のことでも考へるらしかつた。

「何んとでも言はしといたらえゝがな。口に税はかゝらん思ふて、皆いろ〳〵のこと言やはる。」と、お定は娘が善かれ惡しかれ、綽名なんぞを命けられるのが面白くなかつた。

「もう柿も今年はしまひやなア、鴉に取られんうちに、あれを一つ佛さんへ供へようかなア。」と、雪枝の眼の光は柿の木を離れないで、梢に五つ六つ、眞ッ赤に鬼灯のやうな色をして殘つてゐるのを見詰めた。葉が殘らず振ひ落されて、實ばかりになつたのが、寒く淋しさうであつた。赤と黄とがまだらに、七寶のやうな色をして、美しく初霜に染まつた葉が、根元の方へ堆かく治郎吉の箒で掃き寄せられてあるのが、剝ぎ取られた柿の着物のやうにも思はれた。

　來年から學校へ行かねばならぬ孟二郎が、裏門の方から駈け戻つて來て、まだ乳汁を呑みたさうな顏で、「お母ん何んぞ」と、お定の膝に取り付いた。

「何んにもないよつて、捻り餅をあげよう。」と、お定はきまつたことを言つて、解き物の片手を止めて、指の先きで抓るさまをして見せた。

「あゝ痛い、痛い。」と、孟二郎は顏を顰めて、兩手でお腹を押へた。

「何んや孟さん、捻り餅の眞似だけ見て、もう痛いのん。」と、お定は小皺の寄つた眼元に溢けるやうな風を見せて、孟二郎の垢に汚れた頸筋を見た。

「出臍が痛いのんや。」と、孟二郎は兩手で頻りにお腹を撫で廻はした。お定は驚いた顏をして、

「あゝさうか。ちやつと立つてみいや。」と、少し周章てた樣子で、俯向いてゐる孟二郎を引き起し、帶を解いて出臍を改めたが、別に痛さうにもなつてゐなかつた。この子は生れた時取り揚げ婆の不手際から、臍が一寸五分ばかりも出てゐて、角のやうになつてゐるが、障つてみるとぐにや〳〵に柔かく、白い色をして、西洋菓子のバナナみたいだと、兄や姉に言はれてゐる。何うしたものかと兩親は心配して、町の醫者に相談したこともあるが、大人になるまでには自然に引つ込むであらうと言はれて、稍安心はしてゐるものゝ、それが時々赤くなつて、しく〳〵と痛むらしいので、兩親は其の出臍から自分の肉體へ神經が繫がつてゐるやうに、痛さうな顏をした。

「阿母はん、痛いのやあれしまへんで、それが孟さんの手だす。痛いといふたら、何んぞ呉れるやろ思ふて、……」と、雪枝は傍にあつた物尺を取つて、ちよい〳〵と孟二郎の頭を突いた。

「何んぢや雪んちよ。……」と孟二郎は突然顏を上げて、泣き聲をしながら、鼻緒の切れかゝつた下駄を拾つて、打つてかゝらうとした。

「これ滅相な、姉さんをどやしたら、手が腫れる。……姉さんは觀音さんの申し子や。」と、お定は一生懸命に孟二郎の手を押へて、汚ない下駄を捥ぎ取つた。

「出臍がいーたーいー。」と、孟二郎は破れるやうな聲をして泣き出した。

『えへん、えへん。』と、春造の空咳が板張り一重隣りに聞えると、孟二郎の泣き聲は更に大きくなつた。春造の居間は、あたりまへに行くと、次の間から八疊の座敷二つを通つた一番奥の遠いところにあるのだけれど、其の奥の遠いところが玄關の式臺代りの鏡板の隣りになつてゐるのだから面白い。其處の壁は普通に塗つてあるのだが、下の方を板張りにして、初めからさういふ設計か、または偶然か知らぬが、玄關の話し聲は手に取るやうに、居間の寺子屋机に凭れてゐる春造の耳へ入つて、誰れが來た、何を話してゐるといふことが直ぐ分るやうになつてゐる。客によつては應對の工合や返答の內容を考へなければならぬので、それが甚だ重寶である。

『さアこれを上げるさかい、泣くんやない、泣くんやない。』と、やがて春造の莞爾やかな顏が、玄關に現はれて、大切なお客に出すか、自分に喰べるかでなければ、孟二郎の口へ入る外には、決して切られたことのない駿河屋の羊羹が、其の小作りの身體に似合はぬ大きな、節くれ立つた手にあつた。

『これ、これ、これ、孟さんこれ欲しいてことない。』と、太い指で摘んだ厚切りの羊羹をば、春造は子供のするやうにひけらかして、孟二郎を喜ばさうとした。孟二郎は父の顏と羊羹との催眠術にかゝつたやうに、今啼いた鴉といふ風で笑顏をしながら、それでも鼻だけは涙を含んでゐるやうに、ズウ〳〵と音をさして、兩手を差し伸べた。

『廻はしてるんやなア、孟さんは、……』と、雪枝は見くびつたやうに、弟と父とを眺めて、年寄りッ子といふものはこんなに可愛いものか知らんと言つたやうな顏をした。お定はまた蕩けるやうな眼元をして、羊羹に鼻汁を付けて喰べてゐる孟二郎の顏を見詰めてばかりゐた。

「あれ欲しい、……」

ぴちや〳〵音さして喰べてしまつた羊羹に舌舐りをしてから、孟二郎はまた柿の木のてツぺんを指さしつゝ言つた。

「柿か、よし〳〵、取つたろ、取つたろ、待つていよ。」と、春造は一つ孟二郎の頭を撫でゝから、下へおり立たうと、履物を引付けてゐる時、潜り戸の鎖がガラ〳〵と鳴つて、季野が學校から午飯に戻つて來た。

「もうお午かいな、季やん。」と、同じことを二つの口から言つて、お定と雪枝とは日脚を覗かうとしたが、春造はこれ幸ひと季野を呼んで、

「お前、孟さんにあの柿一つ取つたれ。」と、腮をしやくつて言ひ付けた。

四

前髪を馬のやうに額へ垂れて、てつぺんでお煙草盆に結つた、總べて古風なつくりの季野は、袴も穿かぬ海老茶の前垂姿で、また甘へてるなア、と言つたやうな顔をして、孟二郎をば、茶化すやうに一つ、口を尖らして睨んでから、長い竿竹の先きを割つたのへ、けゝん棒を挾んだのを、納屋の脇から細い庭で持ち上げて來て、柿の木の梢を望みつゝ、赤い實を狙つてゐたが、竿が自由にならぬのと、木が高いのと、眞上から射す日の光が眩しいのとで、腕がだるうなるばかり、柿はなか〳〵下へおりて來なかつた。天上の星でも取らうとするやうに、季野はうん〳〵言つて、一生懸命であつた。

「季公、落すなよ。うまいことと竿へ挿め、落すと柿がわれて土が附くさかい。」と、孟二郎は態々聲を出

して、母の横に突ッ立ちながら、自分も竿の動くたびに、うん／＼と力を入れてゐたが、待ち兼ねて臺所へ水を飲みに行くと、下女のお作も、午飯の茶を沸かしに、釜の前へ下り立つた。

お定は解き物の手を息めて、日向のぬくもりに、いつかうと／＼と居眠りを始めると、雪枝はくすくす笑ひながら、母の頭のぐら／＼するのを眺めてゐた。

「あッ、季公が登りよつた。」と、したゝかに水を飲んで來た孟二郎は、口の端のびつしより濡れたのを拭きもせずに、赤い舌を出して、けたゝましく叫んだ。雪枝が先きに、お定はあとから、喫驚して柿の木を見あげると、季野はもどかしい長い竿を枝に立てかけておいて、スル／＼と牝猿のやうに木登りをしたのである。雪枝と母とが見た時は、もう赤い帶から下が見えたゞけで、手や顔は深い軒端に遮られてゐた。二人は低く頭を伏せて、上へ登つて行く季野の身體を長い視線で追ッかけようとした。

「えらいはッさい（お轉婆に似た意味）やなア、季やんは。……何時の間にあない木い登ること上手になつたんやろ。……早う下りとくれ、胸がドキ／＼する。」と、雪枝は心配氣に言つて、新蝶々に結つた頭をビリ／＼搖かしてゐた。

「あの子は一體身が輕いのやなア、こなひだも前栽の塀の上を地べたみたいに駈けつてゐた。」と、お定もやれ危ないといふ色を顔一面に浮べてゐたが、今こゝで喧ましう叱りでもしたら、過ちがあるかも知れぬといふ心で、母と姉とが、唾液を呑み込み／＼、ハラ／＼してゐるのを、季野は少しも知らぬさまで、稍う赤い實に細い手の屆くところまで行くと、兩足を幹と枝とに踏ん張つて、先づ大きな柿を一つ捥り、白い前歯でカクリと一つ喰ひ缺いた。

「こらア。」と、一心に見詰めてゐた孟二郎は、たまらないやうに泣き聲を出した。

「孟さんは蟹で、季やんは猿や。欲しけれや澁いのを一つあげるさかい、この下までおいで。」と、季野は笑ひ〳〵孟二郎を調弄ひながら、ひしやく〳〵と柿を喰べ續けた。

「季やん、え丶加減にしときんか。いんまに罰があたつて、石臼や昆布や卵が復讐に行くでえ。」と、雪枝も笑ひながら、この危なッかしい心持ちから早く遁れたいと、季野の早く下りてくれることを、心の裡で神佛に念じつ丶言つた。

「下から竿で突くぞ。」と、孟二郎はもう此處より外には殘つてゐない柿を喰べられるのが惜しさに、涙をぼろ〳〵と溢しつ丶、聲張りあげた。

大きな柿を一つ、悠々と喰べ終つた季野は、蔕としんとを靜かに下へ投げてから、あと三つの柿を悉つて、長い袂に入れ、今一つ上の方のを取らうとして、いッぱいに右の手を伸ばした途端、右の足をかけてゐた太い枝が、思ひの外脆く、ポキッと折れて、季野の身體は左の手につかまへてゐた細い枝の、共に折れたのを握つたまゝ、ずでんどうと落ちかけたが、下の方の枝に引ッかゝつて、其處で一つグラリとひッくり返つて、白い足と赤い紀州ネルの腰卷とをお開帳のやうに見せてから、眞ッ逆かさまに、白い花の咲いた茶の木の間へ投げ出された。

「季公が落ちよつた。」と、眞先きに叫んだのは、孟二郎であつたが、お定と雪枝とは急に言葉も出ず、顏の色を變へて、洗足で駈け付けた。

「季やん、しッかりしいや。」と、雪枝は漸くおろ〳〵で言つて、母と二人で季野を引き起した。孟二

も後から走つて來て、季野の袂から轉がり出た柿を三つ、急いで拾ひ廻はると、其の二つを自分の袂へ入れ、一つをば先刻季野が木の上でしたやうに、カクリと喰ひ缺いて、可味さうに喰べ始めた。

季野は、母と姉とに右左から扶け起されると、兩手で額から顏の上半面を覆ふて、口元に笑ひを見せつゝ、默つて突ッ立つた。大怪我で氣絕したと思ひ詰めてゐたお定と雪枝とは、左程のこともないらしいのに、ほッと安心はしたものゝ、額を押へた季野の、學校の墨の附いた指の間から、血潮の染み出して來たのには、ハッと胸を打たれた。

季野は何んと思つたか、ほゝゝッと笑ひ聲を立てると、母と姉との手を振り放して、一散に家の土間へ驅け込んで行つた。お定と雪枝とは、平常からしぶとい季野の性質を呑み込んでゐるものゝ、この場合氣が狂つたのではないかと思ひ煩ふて、季野の後を追つかけた。さうして『士族國澤春造』の標札に並べて、神符や祈禱札や何々講社の木札やのごちや／＼と貼り付けてある煤つた入口から、牛部屋の臭ひが鼻を衝いて、羽根の衰へた蠅の死んだやうになつてとまつてゐる土間の壁の隅で、季野を引ッ捉へ、向ふをむいて一心に額を押へてゐる兩手を引き離し、前髮を搔き上げて、薄暗い中でよく見ると、生え際の眞ん中から斜めに一寸あまりの裂き傷が二つあつて、被つてゐた手拭を取つて血を拭いた雪枝の手までが赤く染まつた。

「阿母はんお醫者はんとこへ連れて行きまへうか。」と、雪枝が言ふと、お定は首を振つて、

「お醫者はんもえゝけど、いんまの間に合えへんがな。……あのお神水持つといで、あれを附けたろ。」と少し落ち付いた風になつて言つた。

「あゝさうだしたなア。」と、雪枝はこんな時眞ッ先きに躊躇などと言つたのを恥づる風情で、急いで佛壇の間へ行くと、抽斗から栩谷のお神水の入つた竹の筒を持つて來た。お定はそれを三遍恭しく頂いてから、少しばかり掌へ滴らして、何やら呪文のやうなことを口の裡に唱へながら、季野の額の疵所に塗り付けた。

「痛アーい、痛アーい。」と、季野はこの時初めて泣き聲を立てた。雪枝は靜かに兩手を合はして、お神水の利き目のあらたかならんことを祈つた。

「何をしたんぢや。」と、春造も奥から出て來て、先刻からの顛末を聽き取つたが、固い顔に冷かな笑みを含ませて、

「女だてら、やんちやが過ぎるさかい、どえらい目に遭うんや。額へ疵付けると、大けなつて嫁入りが出けんぞ。」と、季野の樣子を見詰めながら言つた。

「何言ふてなはるんや。……あんたが孟さんに柿取つたれ言ふて、季野に言ひ付けなはつたんやおまへんか。」と、お定は不平らしく、夫の顔をチロリと見て、お神水の上から雪枝と二人分の袂の糞を疵へ附け、二人の手拭を引き裂いて、季野の頭をグルぐ〜巻いたが、血は容易に止まらなかつた。

「煙草の粉がよろしおまッせ。」と、お作も釜の前から出て來て、呆れたやうな顔をしながら言つたが、生憎主人夫婦の煙草を吸はぬこの家には、それがなかつた。

「あの下の枝へ一遍引ッかゝつたよつて、この位の怪我で濟んだんだッせ、いゝ、てッぺからそんなり落ちたんやと、死んだやら知れまへんなア。」と、雪枝は柿の木の方を見やりながら言つた。其處にはいッぱい

に暖かさうな日光を浴びて、孟二郎が、何してけつかるかえ、と言ひさうな顔で、むしや／＼と柿を喰べつゞけてゐた。折柄のッそりと午飯に戻つて來たぼろ／＼の仕事着姿をした下男の治郎吉を見ると、お定は周章(あは)てゝ吃りながら、

「治郎、煙草入れ、……早う出し、／＼。」と言つた。

五

金具が壞はれて、藤蔓で叺(かます)を縛つた治郎吉の汚ない煙草入れの底を叩いた粉で、季野の傷の血は不思議に止まつた。其の代り痛がつて悲鳴を揚げる聲は、隣り近所から學校へまでも聞えるかと思はれた。

「お神水だけではあかん、早う醫者どんに見せなどんならんがな。」と、春造が言つても、お定と雪枝とはなか／＼服さなかつたが、春造の理解を盡しての言葉の中に、「怪我したり患ふたりした時、醫者にかゝるも、神佛のお心や。」といふことがあつたのと、季野がいつまでも痛みを訴へて已まぬのとで、季野に祭の日の着物と着更へさせ、頭はそれなりにして、治郎吉に負はせ、手早くよそいきに着更へて、頭髪を撫で付けた雪枝が附き添ひ、一里ほど距つた町の若い醫者の許へ連れて行つた。

其の醫者はまだ學校を出たばかりの、白い顔い薄く八字髯の出來かゝつた小池といふ先生であつたが、痛い／＼と相變らず泣いてゐる季野を、赤いビロード張りの腰掛けの上へ据ゑて、雪枝が治郎吉と二人で宥め慷かしつゝ、一時間の餘も待たされたところへ、漸く外診から歸つて來た。

「やア、お待たせしました。」と、醫者は二三度顔馴染になつてゐる雪枝に言つて、白い診察衣の袖紐を、工合わるさうに片手で結び／＼出て來た。さうして季野とは隣室へ連れ込んで、傷所を改めたが、無雜

作な手拭の繃帶の下から、黒く血汐に凝固つた秩莢や粉煙草の出た時は、口の端限りの輕い微笑が醫者の顔にあつた。

「痛いでせう、危ないですね。柿の木から落ッこちたんですか。」と、醫者は手短かに雪枝から聽いたことを、歯ぎれのよい東京辯になほして、獨言のやうに言ひながら、十五六になる書生を助手にして、流石は手際よく疵を洗ひ、藥を附けガーゼと油紙とを當てゝ、純白な繃帶を長く／＼、惜し氣もなく卷き付けた。

ぴたりと痛みの止まつた季野は、綿帽子でも被つたやうな繃帶を欝陶しさうに、鳩みたいな眼をくしやくしてゐたが、自分の兩袖を見やつては、祭の日の着物に初めて氣が付いたらしく、嬉れしさうな樣子をした。

「先生、癒りますでござりまへうか。」と、雪枝は心配氣に問ふた。先刻からの新らしい醫術の手際を見せられては、何うもお神水や念佛ばかりを手頼りにもして居られぬやうな氣がして來たのである。

「えゝ、直き癒ります。疵は二ケ所になつてますが、一つは三サンチメートル、も一つは二サンチメートルぐらゐです。どッちも割りに淺いから縫ふほどでもありません、いゝ鹽梅に石がなかつたのですな、落ちたところに。」と、事もなげに言つて、醫者は手を洗つてゐた。

「明日も參じまへんならんでへうか。」と、雪枝は重ねて問ふた。

「えゝ當分毎日お出でにならないといけませんな。」と、醫者はにこりと笑つて見せた。

「癒りましても痕が痣みたいに殘りやいたしまへんでへうか。」と、雪枝は輕く自分の額を撫でつゝ、

訊いた。

「少しは殘りませうな。追々消えるだらうとは思ひますが。……」と、醫者は首を傾けて考へてゐたが、

「他から肉を持つて來て植ゑたら何うかと思ひます。……この手術は私が今獨りで研究してゐますので、成否は斷言いたし兼ねますが、成功すれば痕は殘りません。細い糸ぐらゐに縫目は出來るかも知れませんが、白粉でも附けて置けば分らなくなります。」と、唾液を呑み込み〳〵言ひ足した。

「他から持つて來ると仰しやるのは、他の人の身體を切るんでござりまへうか。」と、雪枝は醫者の奇妙な話に釣り込まれた。

「さうです。たとへばあなたの肉を切り取つて妹さんの疵の上へ貼り付けるんですな。……あなたの額の肉を切つて妹さんの額へ持つて來れば、御姉妹ではあるし、一番都合が好いんですが、それぢやあなたが困るから、順繰りにまた誰れかの肉を持つて來なければならない。」と醫者は輕く笑つた。

「額の肉や無うてもよろしいのやおまへんか。」と、雪枝はもうだいぶ醫者に馴れて來たやうで、言葉も少し粗末になつた。

「え〳〵、額の肉なら理想的ですが、それはまア難かしい註文ですから、腕の肉でも、また臀部でもいゝんです。臀部は肉が多いから、切り取るのに都合はよろしいが、腰から下の傷は癒りにくいし、場所が場所ですから、あなたにしたつて、お厭やでせう。お臀を切られるのは。……」と、醫者はまた輕く笑つた。

「きらひ、先生ッ。」と、雪枝は顏を眞ッ赤にしたが、直ぐ眞顏に返つて、「そんなら先生、わたくしの

腕の肉を殺いで、この子の額へ貼つて頂けまへうか。」と、駄目を押した。話が急に、空想の花から現實の果を結びかけたので、醫者は少し當惑した樣子であつたが、屹と決斷した樣子で

「僕ァ研究中のことですから、必ず成功するとは受け合へませんが、兎に角やつてみませう。失敗したッて、人間の生命に關係する仕事ではないのですから。」と、女にして見まほしいやうな可愛らしい眼をくり〳〵と動かしつゝ、椅子に腰をおろして、卓子に有り合はしたペンで、罫紙の上へドイツ語の樂書をした。

寺の本堂で說敎を聽く時のやうに、あんぐり口を開いて、キラ〳〵光る醫料器具を眺め廻はしてゐた治郞吉は、大きな欠伸を一つすると、「孃さんもう去なうやおまへんか。」と、頓狂な聲を出した。

六

行きがけには、泣き叫びながら治郞吉に負はれてゐた季野が、町で買つた赤い鼻緒の下駄をカラコロ響かして、元氣よく戾つて來たので、お定はホッと安心しつゝも、頭部の繃帶の仰山なのに胸の迫るを覺えた。さうして雪枝から、腕の肉を切つて額の疵を埋めるといふ話を聞くと、何も言はずにほろ〳〵と淚を溢してゐたが、やがて、ついッと立つと、佛壇に燈明を上げて、其の前に瞑目合掌禮拜した。雪枝も何か知ら感淚が込み上げて來て、母の橫に坐りつゝ、瞑目合掌した。春造も奧から出て來て、妻の橫に端坐し、低い聲で念佛を唱へ始めた。下男部屋でも、治郞吉が珠數を繰つて「南無大師遍照金剛」と高らかにやり出したので、毎度のことながら、季野は只呆氣に取られたやうな顏をしてゐた。

「阿母はん、腕の肉より額の肉を切つた方が附着は良いんだすて、寧そのことわたへの額切つたりまへ

うか。」と、雪枝は顔をぽうッと赤くして、感極まつたといふ顔をしながら言つた。

「そんなことせいでもえゝ、後でお前が難儀するがな。」と、お定は靜かに眼を開いて、小聲で言つた。

「腕でえゝ、腕でえゝ。額を切つたら、季野に罰が當る。」と、春造も横合から口を出した。

「だいでおまへんで、わたへ。……妹に代つたりますね。可哀さうに一生疵だすもん、可哀さうに。」と、雪枝はいよ〳〵感に堪へぬといふ風で、耳まで眞ッ赤にして言つた。

「もうえゝちうたら、其の言葉だけで有り難いこつちや。」と、春造はつく〴〵感心して、お定がよく、「雪枝は觀音さんの生れ更りだッせ」といふのを、何んじや阿呆らしいと、平生は馬鹿にしてゐても、かういふことがあると、成るほど大慈大悲の化身かいなと、うッかり考へ込んで、佛壇の前へ坐る仲間に引き入れられるのである。

「何んしよまア、こいつが生れよつてから、此方の身上は倍になつた。こいつは當り前の奴やないわい。」と、春造は何事も利慾を離れて物を考へることをしない流義だけに、いよ〳〵雪枝が大事なものに思はれて來た。

總領のお時は賢かつたけれど、年頃になつては男との浮名がまるで立たないでもなかつた。お定はお時の十九で亡なつた折に、「一生殿御の肌知らず」などと泣いたけれど、自分はさう思はなかつた。さうして次ぎのお須磨は言語同斷だのに、獨り雪枝は「をとこ」の「を」の字も噂さを立てられたことがない。雪枝の身體には、それだけの威光が備はつてゐて、いかな若い衆も雪枝には指もさすことが出來ぬのであらう。――と、春造はまたよく考へることを考へて、容易に佛壇の前を去ることが出來なかつた。

下男部屋では、「南無大師遍照金剛」と頻りに唱へる治郎吉の聲が、朗らかに聞える。この治郎吉は十二でこの家へ草刈丁稚に年季を入れた孤兒で、十五六の頃から手足の爪の間に膿を持ち出し、白かつた顔も何時かドス黒く、眉のあたりは紫色に腫れかけて、天刑病の相に紛れがないと思はれ、醫者の藥もだいぶ服ましたが、少しの功能もなかつたのを、其の頃まだ幼なかつた雪枝が、

「治郎やん、お前はおくすり服んでもあかん、四國參りしいや。」と、この時は殊に朗らかな聲で言つたのを、治郎吉の耳には佛のお授けのやうに聞えて、「へえ、さうさして貰ひまへう。」と、即座に答へた。それが幼い人を相手の言葉とは思はれぬシンケンさであつたと、傍で聞いてゐた下女は、後によく人に話して不思議がつた。

「觀音さんのお授けで、この病を癒しに四國參りがしたうおます。」と、治郎吉は春造の前へ出て、暇を與れといふことを賴んだ。

「觀音さんのお授けなら、西國參りやろ、四國なら大師さんやで。」と、春造は笑つたけれど、一家が皆信心に凝り固まつてゐることゝて、治郎吉の願ひは直ぐ許された。

もとより乞食になりに行くのであるから、納經の帳面を入れた小ひさな柳行李一つに、赤塗りの椀一つ、着物は仕事着のましなのゝ上へ、白木綿のでんちみたいなものを引ッかけ、菅笠に竹の杖で、「そんなら治郎、いといでや、身體を大事にしてなア。早う快うなつて戻りや。」と、お定の優しい聲に送られ、神戸から船で多度津へ渡つて、八十八ヶ所の靈場を巡りつゝ、路傍に納經の帳面を出して、往來の人々に合力を乞ふてゐたのであるが、丁度まる三年四國の土に塗れてゐると、不思議や惡い病は、「南無

大師遍照金剛」を唱へる聲の數重なるとゝもに、だん〳〵癒つて來て、四年目には、ちやんとした色艶の好い身體になつて、駈け込むやうに主人の家へ歸つて來た。

「おゝ治郎、戻りたか。」と、お定は何處かの乞食が入つて來たかとも思はずに、變つた治郎吉の面影も見忘れはしなかつた。

「あゝ、お家はん、……」と、治郎吉は漸くこれだけを言ひ得たばかりで、あとは、垢が皆のやうにこびり附いてゐる兩の頰に、さめ〳〵と熱い涙が流れた。お定も止め度なく溢れて來る涙を、襦袢の袖で拭いた。

「治郎吉に風呂沸かしたれよ。」と、春造も奥から出て來て、遍路の間に乞食振りの整ふた治郎吉に見入つた。

「旦那はん、お家はん、……」と、治郎吉はおろ〳〵聲で、こんなことばかり言つて、ぺこ〳〵頭を下げてゐた。涙の滴を上り框へ掌でこすり付けながら、「旦那はん、お家はん、……」と、また言つた。

「まあえゝわ、挨拶はゆッくりで。……足洗ふて着りもん着更へい。……腹が減つてるやろ、飯喰へ。」と言ひ〳〵、春造は突つ立つたまゝ、おッと治郎吉の伸び放題に伸びた頭や、汚れくさつた白木綿のでんちにお寺の印の朱肉でぺた〳〵と隙間もなく捺してあるのを見てゐた。

「治郎、癒つたなア、病が、……」と、お定は初めて氣が付いたやうに、ほく〳〵して言つた。

「成るほど、癒つたらしいのう。……有り難いこッちや。」と、春造は上り口にへたり込んで了つて、またつく〳〵と治郎吉の樣子に見入つた。

「南無大師遍照金剛。……」と、治郎吉は高らかに唱へつゝ、黒く汚れて蓋も破れた行李の眞田紐を解き、恭しく納經の幅面を取り出して八十八ヶ所の靈場の印を少し披いて見せてから、

「お家はん、これ佛壇へ。」と、些か權式を見せた。

「あゝさうか。」と、お定は其の汚れた納經を受け取つて、佛壇に納めた。其處へ赤い帶の雪枝が外から戻つて來ると、治郎吉は一際聲を高くして、「南無大師遍照金剛」を唱へた。

こんなことがあつしから、春造の家は、近頃の腥いお寺よりも佛くさくなつて、何かあると、「南無阿彌陀佛」と「南無大師遍照金剛」と、それから西國の詠歌とが大きな藁葺の屋根の下いッぱいに響き渡り、天から紫の雲が舞ひ下がつて、土間より座敷に、蓮華の葩が飛ぶやうであつた。

七

雪枝は朝起きると、直ぐ白い腕を捲くりあげて、こゝらあたりと思ふところを一心に洗つた。糸瓜の皮でごし／＼擦つて、石鹸を附けて、ヒリ／＼と赤くなるほどにして、其の肉をスッとメスで殺ぎとられる時のことを考へた。痛いであらうか、刃物がよく切れるであらうから、そんなに痛くもあるまい。よしや堪へられぬほどの痛みを感じようとも、自分の胸の裡の悦びは、其の痛さを償ふて何んぼお釣錢が來るやら知れんと、頻りに心の算盤を彈いても見た。

滾々と大鍋から湯氣の立つ溫かい麥飯を喰べてから、季野を連れて門を出た。昨日のことはもう村中へいッぱいに弘まつて、行き逢ふ人は皆見舞を言つたり、また見え透いたべんちやらで、雪枝の美しい

心がけを日本一なぞと褒め立てた。賢いやうでも雪枝には、其のぺゝんちやらを看破るだけの性根は無て、褒められるがまゝに、わく／＼と嬉しかつた。さうして自分は、ほんまに季やんを可哀さうやと思ふよりも、家の人たちに感謝されたり、村の誰れ彼れに褒められたり、皆者に珍らしがられたりしたさに、痛い思ひもするのであらうといふやうなことは、てんで考へなかつた。

朝餉炊く家々の烟の末が、明神の松原の梢に棚引いて、淺い霧と重なり合つてゐた。明神の石垣に沿ふて、だら／＼坂を下りると、村に一軒の小料理屋のおカミさんが、流鏑馬の箭の羽根のとれたので、軒へ暖簾を懸けてゐたが、桃色に白く、吉頭、秀香、八千代なぞと市の藝子はんの名の染め拔いてあるのが、旭日を受けて、ちら／＼してゐた。

「あんたはん、まアえらいお怪我をしやしたさうで、……」と、おカミさんの小ひさな丸髷に結つた圓い顔には、片靨が深く刻まれた。雪枝はこの人に顔を見られると、直ぐ缺點を探されるやうな氣がして、たゞ／＼眩しかつた。町へ行く時、町から村へ歸る時、此處を通るのが關所のやうで、氣がさしたけれど、さりとて、裏道を行くのも卑怯に思はれた。

よい加減に挨拶をして、小料理屋の前を通り過ぎると、藍甕が陷穽のやうに並んでゐる紺屋や、草鞋が束になつて吊り下がつてゐる、荒物に駄菓子を兼ねて賣つてゐる店や、そんなのが二三軒兩側に並んで、農業地の商業區域と言つたやうな姿を見せてゐる。さうして其の家續きの端に役場があつて、昨夜は泊り番の兄芳一が、大火鉢に股火をしながら、給仕を調弄つてゐるのも、硝子戸越しに見えてゐた。役場の筋向ふに學校があつて、運動場にまだちらりほらりしか集まらぬ子供等が、けでんな顔をし

て、季野の繃帶頭を見てゐた。小使室の前で小使の婆さんが、朝晴れにパチ〳〵と機嫌のよい粉炭をおこしてゐるのをチラと見ると、季野は何んと思つたが、繃帶頭を振り立てゝ、一散に學校の前を走り過ぎた。

念佛娘なぞと謳はれてゐても、まんざらに戀を知らぬ雪枝ではない。まだ漸う十五の時、村の門徒寺の新發智が市の中學校へ修業に行つてゐる時、土曜日から日曜日へかけて、制服制帽の黒く金釦の光る姿に、白い瓜實顔を餘計白く映えさして、泊りがけで歸て來たことがある。生れてから鍬なんぞを手にしたことのない、村で唯一人の纖細い身體の持主で、百姓の忰どもとは、まるで違つてゐるのが、浮氣娘等の噂さの俎板に上ることは度々であつたけれど、雪枝は其の床かしい制服制帽姿を見るまでは、新發智に對して何んの氣も付かなかつたのである。

折柄蠶の時節で、ほんの慰みに飼つてゐる小ひさな蟲の爲めに、雪枝が笊を持つて桑を摘みに出てゐると、あらい紺飛白の着物に、制帽を目深かにかぶつた新發智が、竹の根節を振り〳〵やつて來て、「雪やん」と聲をかけた。もとより寺とは殊に親しくてゐる雪枝の家であるから、新發智が遊びに來て、丁度沸き合はした風呂へ入つて歸つたこともあるので、雪枝に聲をかけるのが不思議でもないけれど、雪枝はこの時ほど、ハッとして胸を躍らしたことがない。顔は耳まで眞ッ赤になつて、何んと答へたか、あとで考へても分らなかつた。果敢ない別れといふのは、かういふのを言ふのであらう。新發智は其の日の午後市の中學校の寄宿舍へ歸へり去つたが、それから時々戻つて來る度に、雪枝へ何かしら一寸した土產物を呉れるやうになつた。雪枝はだん〳〵市の水に洗はれ磨かれて來る新發智の器量よしを見る

のが、嬉しくもあれば、また變に嫉ましく、心配でもあつた。

事柄はたゞそれだけの、幼い飯事のやうな、いきさつだけに終つて、中學校を卒業した新發智は、上の方の學校へ入る都合上、暫らく村の小學校に代用敎員をして、つひ其のまゝ徴兵檢査も芳一と一所に去年濟んだ今まで、それをやつて、季野の級を持つてゐる。幼い飯事じみた心のいとしらしさが、眞の戀に醱酵しそこなつたのではあるが、新發智も雪枝も、まだ當りまへの態度では向き合ふことの出來ぬ有樣でゐる。――

今丁度、季野がキマリわるさうに小學校の前を走つて通つたので、雪枝も其のあとから走りたいやうな氣持ちになつて、自然に足を早めながら、偸み見に敎員室の方を見やると、窓硝子に旭日が赤く射し込んで、まだ人影は一つも見えなかつた。

八

巖に水があたつて、寒さうに碎け飛ぶ川に沿ふて、小山の裾を廻はると、もう町の甍が見えて、白壁がきら〳〵してゐる。これから街道が本筋になつて、山奥の市ん人が、荷車や牛の背に薪炭を積んで行くのが、ごろ〳〵ぞろ〳〵と、後や前に氣ぜはしない。この町から五里先きの大きな市へ通ふ汽車の笛が、ピイと鳴つた。

辿り着いたペンキ塗りの醫者の家では、眼のわるいお婆さんや、ねんねこ袢纏に子供を包んだ細君やが二三人、診察の巡番を待つてゐた。雪枝は季野と並んで、卓子に有り合はした寫眞の多い雜誌を取り上げ、都振りの花嫁姿などに見惚れてゐたが、小一時間もして、季野が二三度小ひさな欠伸を嚙み殺した

頃、お婆さんや細君も皆去つて、白い診察衣の先生がぬうッと眼の前に現はれた。

「何うですか、一つ遣ッ付けますかなア。」と、言つた先生の口振りは、如何にも危ッかしく、手頼りなさゝうであつたが、雪枝はそんなことに氣が付かず、いよ〳〵自分の腕が季野の頬になつて、姉妹が眞に血と肉とを分けた間となる時が近づいたと思ひながら、

「よろしいやうに、お願ひいたします。」と、おちよぼ口をして言ふと、「さア季やん。」と妹を促がした。

手術室の設備もないことゝて、奥の診察室を掃除して、書生を助手に、この大きな困難な試みは、いとも無雜作に取りかゝられた。

先づ雪枝の腕とは、石垣の穴から鰻を引き出すやうに、醫者は力を籠めて、奥の奥まで攫み込んだ。さうして銘仙の羽織と着物と、赤い襦袢の袖とを撥ねて、腋の下近くまで、白い腕が若い先生の金縁の眼鏡の前に露はれた時、雪枝は何んとも知れぬ氣持ちで、ぼうつと顔が赤く染まつた。毒々しいまでに濃い發育し切つた女の香を嗅ぎながら、醫者は先づアルコールを取つて純白のガーゼに染ましたので、此處ぞと思ふ腕の肉を輕く擦つた。先刻家で丁寧に洗つたり磨いたりして來たのであるが、醫者の手にかゝると、鼠色の垢が薄くまくれて、薄皮を剝いたやうになる。

「垢が出ますね。」と、醫者は微笑みながら、綺麗な指先きを動かしてゐた。雪枝はまた別の感情で、顔を少し赧くして、

「家で、あんじやう洗ふて參じましたんでんがな。」と、いつものおちよぼ口で言つた。

「いや、幾ら洗つても垢は出るもんです。極端に申しますと、人間は垢の塊で、垢のなくなる時は、人

間のなくなる時かも知れません。」と、醫者は微笑をつゞけてゐた。それから別に醬油のやうな色をした藥を、白い茶碗の中へたらして、それに水を入れ、水の色が丁度吸物の少し濃いぐらゐになつたので、また丁寧に雪枝の腕を洗つて、それへガーゼを覆ふておいてから、今度は季野の繃帶をとつて、傷所をよく洗ひ、次に自分と助手との手を念入りに消毒して、いざとばかり醫者が、ドギ〳〵光る「メス」を執つて、微笑の顏を難かしい顏に變へつゝ、突立つた時は、今更に雪枝も季野も、恐ろしいやうな氣になつた。

けれども、其の手術といふことは、存外なものであつた。覺悟してゐた程の痛みもなかつた。首を切られる時はこんな工合であらうかと、眼を瞑つてゐた雪枝は、何んだか腕が冷りとしたと思ふと、もう自分の役目は終つて、助手が腕の新らしい疵へ藥を附け、繃帶を捲いて呉れた。痛みは却つて其のあとからチク〳〵と來た。

季野の方はなか〳〵手間取れて、「痛い、痛い」と首を振つて泣き出したので、醫者は弱つてゐるらしかつた。「季やん、季やん」と、雪枝は頻りと宥めてみたけれど、季野はいかな泣き止まなかつた。辛ふじて手術を終つた醫者は、銀色の箸のやうなものを持つたまゝで、

「巧いこと行つて呉れるといゝな。」と、獨言を言つた。雪枝も共に、巧いこと行くとえゝなと思つて、稍暫らくはぼんやりしてゐた。季野は自分がこの仕事の主人であるといふことなぞは考へない風で、窓の外に雀が二羽、組み打ちでもするやうにして戯れてゐるのに見入つてゐた。

しかし、この手術は失敗であつた。翌日行つて見せた時、醫者が玉手箱の蓋でも開けるやうにして、繃帶をとつて見ると、植えた肉は、和布の切れ端みたいになつて丸まつたまゝ、繃帶にくつ着いてゐた。
「駄目だッ」と醫者は太い息を吐いて、肉の上つて來た疵を見詰めた。
雪枝が强ひて賴んだので、醫者は前よりも一層弱い自信で、今一度同じことを繰り返したけれど矢張駄目であつた。
あとで他の醫者に訊くと、そんなことをあの醫者が企てるのは、朝顔の蔓を傳うて天へ昇らうとするやうなものだと言つて、えらく笑はれて了つた。
この企てはたゞ、念佛娘が妹の爲めに自分の肉を殺いだといふ美談或は珍談をば、隣り村かけて、いつぱいに傳へたゞけのものになつた。中にはまたこの話を聞いて、
「何んのあの念佛娘が、あれはのう、みんな自分のことを吹聽して貰ひたさにしよつた仕事や。」と、憎々し氣に言ふものもあつた。

九

娘も十九になるまでには、縁談が降るほどあるのが常である。この村あたりでは、早くは十四五で片付くものもあるか、通例は先づ十七を頃合ひの花嫁時としてゐる。十八は先づ〳〵よいとして、十九になつてまだ白歯でゐるものは、(近頃は鐵漿を附ける風が殆んど無くなつたけれど、一般に未婚の女を白歯と呼びなしてゐる）縁遠いとされてゐる。
觀音さんの申し子だとか、念佛娘だとかいふ評判者になつて了つたので、勿體ないとでも思つた。

「お家の雪枝はんを……」と言つて來るものは滅多になかつた。春造やお定は、それが却つてえらいやうな氣がしてみたり、また寂しくも思はれたりした。

つひぞ見たことのない小間物屋が、嵩の高い荷を背負つて來て、玄關の鏡板の上へ綺麗なものをいつぱいに擴げつゝ、別に賣りたいやうな顏もしないで、世間話をはずましてゐるのを、偖は家の雪枝を見に來た縁談の前驅ぢやなと、兩親は思つてゐると、同じ村の年頃の娘のことを根掘り葉掘り聞きたがるので、何んのこつちや、他家の娘の聞き合はせかと、お定は親心の寂しさに打たれることもあつた。

寺の新發智は、一週間に一度ぐらゐ遊びに來た。三四年前の繪のやうな初戀は、お互ひの胸にスッカリ變色しながらも、幾らか殘るには殘つてゐた。

「雪やん、……」

「坊んち、……」

互ひに呼び合ふ聲には、並々ならぬ響きが籠つてゐた。もうこれ亥の子も近付いて、柚子の實が繪の具で染めたやうに眞つ黄色になつてゐるのに、二人は眞夏か何んぞのやうに、床几に腰をかけて、初冬の日の暮れ足の早いのを忘れてゐるやうなこともあつた。

「治郎やん、幼な馴染は違ふたもんやな、鴨の味がするちうさかいな。」と、暗い釜の前で、大鍋の雑炊の煮え上るのを見ながら、お作は、畑を仕舞うて來た治郎吉を顧みて言た。

「勿體ないこと言ふもんやない。新ぼんちは生佛さんの筋を引いたお方やし、嬢やんは觀音さんの申し子や。……鴨の味がするて、それはお前從兄妹夫婦のこつちやないか。」と、治郎吉は以ての外だと言う

たやうな顏をした。

「そいでもあれ見いで、あの仲のよさゝうなこと。」と、お作は丁度其處から入口へかけて、レンズに收められた景色のやうに遠く見える、たそがれの柚子の木の下を指さした。

「お前、けなりいのやろ、けなりけれや、俺と夫婦になりんか。」と、治郎吉は厚く反り返へつた唇から、汁の垂れさうな聲を出して、もう霜やけの出來かゝつてゐるお作の手を引つ張つた。

「さらひ、……じんばり。」と、お作は治郎吉の手を振り放し二三尺後へ飛び退いた。釜の下のでもくが一時に燃え上つて、二人の顏を赤く火のやうに見せた。

柚子の木の下の床几では、新發智と雪枝とが、もう何も話がなくなつたのに、立ち上るには惜しいやうな心持ちで、二人ともヂッと腰をおろしてゐた。

「雪やん。……」

「何んだす。」

「お前覺えてるか、わしが十二やつたよつて、お前は九つやつたなア、學校へ行きがけに、わしが牛の糞喰はしたる言ふて、竹の先きに汚いもん付けてお前を追ひかけたら、お前は逃げたか、直き追ひ付かれて、わアッと顏へ袂を當てゝ泣いたやろ。」

「そんなこと忘れましたがな。……そやけど、あんたに常時せぶらかされたのは、よう覺えてまッせ。權太やつたなア、あんたも、……」

「雪やん、もう一遍、あんな時分になりたい思ひやないか。」

「そんなホッこい時分になりたい思やしまへんけど、十五六ぐらゐには後戻りしたいと思ひますわ。」

夕暉が魔のやうに二人を包んで、さやかには見えなかつたけれど、雪枝の眼は濁るやうに霑ふてゐた。

「雪やん、もう十六、……大けなつたもんやなア、とわしが言ふたら、お前はめんめかて十九になつた癖にと、其の可愛らしい眼でわしを睨んだなア。わしもあの時分になつてみたい。」

「あの時分は、考へてることが、何んでも眞ッ直ぐで、思ふことは皆其の通りになると決めてましたのやなア。」

雪枝は肩を窄めて、溜息を吐いた。新發智も同じやうに溜息をして、二人は暗の中に顔と顔とを見合はせた。

「誰れや知らんと、誰れや知らんと、可笑しいな。」と、もう繃帶も取れて、額に二つ赤飴のやうな色をした疵痕を、今の中はまだ前髪の下に隱してゐられる季野が、大きな聲で節を付けて、入口のところから唄つたので、二人はハッと飛び退くやうにして床几を離れた。

十

氣が氣でないといふ有樣で、春造とお定とは、雪枝の緣邊に就いて話し込むことがある。

「そんなこと言ひなはつたかて、あんた、何時までも家に置いとけるもんやおまへんし、今年は厄歳で惡いやろけど、來年は何うあつても遣らんなりまへんがな。」と、かういふ言葉をお定は夫と差し向ひの時幾度繰り返へたやら知れぬ。

この家では、こんなことに男の方が却つて迷ひが强く、雪枝が生れてから、めつきり殖えて來た身上が、雪枝を他家へ遣ると、だん〳〵減りはしないまでも、もう殖えぬやうになりはせぬかと、春造は馬鹿なことゝ知り拔いてゐながらも、そんな氣がしてならないのである。

「わたへかてそら、あの娘をいつまでもねきへ置いときとおますけど、そんなことして、あの娘を小母はんにしてしもたるのは、可哀さうやおまへんか。」と、理の當然のお定の言葉に、春造は懷手のまゝ首を傾けて、

「そら分つたるがな。」と言ひ〳〵、何んぞよい法はないものかと考へるのである。

寺へ遣つて、新發智に添はすといふことも考へないではない。老住持一人の、此頃は少し氣が狂れたやうになつてゐるさう豊かでもない寺の坊守りになつても、苦勞するのは目に見えてゐる。檀家の機嫌取りの難かしいあの寺は、代々坊守りの骨が折れた。門徒寺の世襲でも、あの寺は住持が傘一本で追ひ出されかけたことがある。そんなこんなが面倒なので、老住持は態と氣が狂れた風を裝ふてゐるのおやといふ噂さもある。

それに寺の嫁は、矢張り寺からが好さゝうである。なまじひ在家から入つて行つても、持ち切れぬし、それに檀家の口が煩はしい。門徒の村に、唯一軒の淨土の家から、坊守りを入れるといふことに、苦情がなくて濟みさうにも思はれぬ。

何もかも念佛と算盤とから割り出す春造だもの、考へに考へ拔いて、雪枝を新發智に添はせることは先づ諦めた。よく父の氣質を承け繼いで、冷やかに心の算盤を弾くことの上手な雪枝もさう考へてゐ

に違ひないと思はれた。

さうかうしてゐる中に、思ひがけないところから縁談がかゝつて來た。それはあの一里先きの町の小池といふ醫者で、雪枝の腕の肉を切り取つて季野の額へ植ゑる手術には失敗したけれど、まだ獨身の、一生の苦樂を共にすべき一心同體の異性の友の選擇には成功したい。自分の肉を殺いで妹に與へるといふお娘御の貴い心には泣かされた。あんな人と一所に自分の仁術を弘めることに努力したいといふ、當村の助役を通じての話で、春造もお定も、相手が長袖ならと、大に心は動いたが、雪枝の了簡を訊いてみると、このあひだ左の腕の肉を殺いだ痕が、丁度梵字の形になつてゐるのも何かの緣やら知れぬ、あのお方ならといふことであつたから、なほよく人を頼んで聞き合はしみると、家は里の大百姓で、醫者をせずとも結構に喰べて行かれる身分、筋目も此方と同じく鄉士格で、舅姑はまだ五十そこ／＼で、至極達者であるが、あゝして別に開業してゐるのだから、若夫婦は差し向ひの氣兼ねなし。そこで本人は二十六の八白、火性で、四綠の木の雪枝とは丁度合ひ性だし、年から年へ八つちがひで、新發智との四つちがひのやうに、「四め十め笠のうち」といふ忌み言葉にも障らぬので、わざ／＼治郎吉を柳谷へ代參さして引いた御籤が上上吉とあるに、話はいよ／＼手ッ取り早く運んで、今年は何分女は十九の年廻はりが惡いから、來年早々の輿入れとまで決つた。

村の助役が來て、長火鉢の側で、春造夫婦と其の取り決めをしてゐる最中に、丁度新發智が入つて來たので、話は途切れたが、もう別に念を押しておくほどのこともなかつたから、三人は妙な顏をして、新發智にお世辭笑ひを浴びせた。新發智は其の樣子に不審を打つて釜の前へ來ると、臺所に立つて長火

鉢の側の話に聞く耳を立てゝゐたらしい雪枝も、厭やな厭やな、物に怖ぢけたやうな顔をして、新發智を見た。

いよ〳〵様子が變なので、新發智の神經は鋭く働いて、雪枝の縁談が持ち上つてゐるなアといふことを、人々の顔色から讀み得た。勿論結髪の中といふではなし、双方でたゞそんなことを考へあつてゐたゞけであるが、それでゐて、いづれも心の顫へを禁ずることが出來なかつた。

小聲でまた暫らく、助役と春造夫婦とは話をしてゐたが、やがて助役は「そんならあの田地の小作はこれ〳〵に」と態とらしく聲を高うして立ち上つた。さうかと思ふと、春造の聲で、「今のことは極内で、……」などといふのが聞えた。「大けにおやかましう」と助役はそこ〳〵に出て行つた。

何んだか氣持ちのわるくて仕樣のない夕方であつた。「坊んち、今夜は御ッつおうしまんがな、うちで御膳あがつといなはれ。」と、春造が無理にお追從を言ふらしいのも、新發智には、むしやくしやする種であつた。何も言はずに新發智は、逃げるやうにして、薄暗い土間を出た。敷居を跨ぐ時、何んだか涙の込み上げて來る眼で、背後を振り返へると、あか〳〵と火の燃えた釜の前で、雪枝は襷掛けの前こゞみになつて、頻りと立ち働いてゐた。もうこれが彼女の姿の見納めであらうか、などと思つて、急ぎ足に門の潜り戸へかゝらうとする途端、夥だしく柴を抱へて入つて來たお作に突き當つた。

十一

念佛娘が片付くさうな、といふ噂さは、忽ち村中に傳はつて、新發智の耳へも入つた。新發智はそれを、「案の定さうやつたなア」とも思はぬまでに、もう其のことに就いては考へつくし、諦め切らうとし

てゐた。

「嫁くもんなら、早う嫁くがえゝ。ぐづ〳〵してゐよると、此方がたまらん。」と、稻束にもたれて犬と遊び〳〵考へて、淋びしさうにぞッと身ぶるひをすることもあつた。

亥の子も報恩講も十夜も皆濟んで、年の暮れ近くなつたが、春造の家ではこの月日がたゞ雪枝の厄歳を終らしめるためにのみに、明け暮れて行くやうに考へられて、さま〳〵の支度に忙はしく、山奥へ片付いてゐる姉のお須磨も手傳ひに戻つてゐるらしかつた。新發智はもう鼬の路を切つたやうに、春造の家へ寄り付かなくなつて、あの押し馴れた潜り戸の鎖の音も絶えて耳にしなかつた。何んだか人に顔を見られるのが恥かしいやうで、殊に雪枝の兄芳一と役場で顔を突き合はせる時なんぞ、厭やで仕様がなかつた。

小學校へ出てゐても、上の級のませた子供等は、自分の胸の裡を讀んでゐるやうに思はれて、新發智は此方から顔を赧くしてかゝることがあつた。自分の受持ちに前髮の下へ赤い疵痕を隱した季野が居るのも、一つの皮肉のやうで、厭やであつた。氣の故か、季野は妙に悄氣てゐる風で、時々休むことがあつた。

新發智は、季野の代りに村の小料理屋の娘で季野と同じに自分の受持ちのお田鶴といふのを可愛がり始めた。數へてゐる女生徒の中に誰れか一人、特別に可愛がるものを拵へて、他の生徒に彼れ是れと嫉みがましい蔭口なぞを言はせなければ、淋しくて仕様のないのが、代用教員に成り立てからの新發智の心であつた。

其の人身御供のやうなものには、差し詰め季野が上つてゐて、彼女もそれを誇り顔に振れ舞へば、他の女生徒等は、季野の背後に雪枝の在ることを知つて、小まちやくれた口振りで、さま〲のことを言ふのを、新發智は放課時間なんぞに、嬉しく小耳に挾んだのである。

「これからはお田鶴ちや。」と、新發智は心の裡で叫んだ。お田鶴は一人娘で、背景がないけれど、季野よりも小綺麗で、家の稼業柄だけに垢抜けがして、平常着の縞柄なぞも流石に粋なところがある上、年端も行かぬのに嬌羞を作ることさへ心得てゐた。

「お田ちやん。……」と、新發智が家で呼ばれてゐる通りに學校でお田鶴を呼んでやると、彼女は眩しさうな科をして、圓い顔、パッチリとした眼、蕾のやうな口元に、甘つたれかゝる風を見せて、新發智の中學の制服其のまゝで代用教員を勤めてゐる姿に寄り添ふて來た。耳の後に前の晩の白粉の殘つてゐるのなんぞも、他の百姓娘には見られぬお田鶴のいとしさであつた。

お田鶴を可愛がり出してから、小料理屋――瀧野屋といふ――ではおカミさん始めが、殊に新發智を大事にして、表を通ると直ぐ、「坊んち」とか、「先生」とか言つて呼び止めた。風の吹き荒ぶ夕方、學校の歸りにマントの襟を立てゝ、酒肴いろ〱と書いた障子の立つてゐる瀧野屋の前を通る新發智を、おカミさんが二階の戸を閉める途端に見付けて、鈴を振るやうな聲で呼び止め、あたゝかい物を拵へて喰べさせなぞすることが毎度であつた。

朝はまた男ばかりの世帶で、寒いのに、温かいお菜を拵へられまいと、出來たての味噌汁を行平へ入れて、お田鶴に寺へ持たしてやることもあつた。寺の男世帶と反對に、瀧野屋はおカミさんをしんに

其の母の隱居婆さん、お虎といふ中婆で親類からの厄介者、それにお田鶴、それから下女を加へて、女ばかりの五人の女護の島であつた。おカミさんが戸主で、下男あがりの聟養子は內緣だけで、お田鶴はそれでも「お父ッつあん」と呼んでゐたけれど、二三年前に店の錢箱を浚つて行方知れずとなつた。今年の春無名の小包が屆いて、鈴の付いた赤い駒下駄が入つてゐたが、それで見ると、遠い〳〵東の都の深川といふところに居るやうだす、と言つたおカミさんの眼にも、側で聽いてゐたお田鶴の頰にも、流石に涙が光つた。

男きれがないので、瀧野屋はいろ〳〵の意味で、新發智を大事にした。

年が明けて、雪枝の婚禮の日もきまつたらしく、新發智はおカミさんの入れ智惠で、瀧野屋の二階で紅白の眞綿の紙包を拵へ、村の使ひあるきをしてゐる眇の女に、春造の家へ持たせてやつた。

十二

婚禮の日は、丁度日曜日に當つたので、新發智はわく〳〵する胸を撫つて、今日は學校へ出なくてもよいのを、せめてもの幸ひとした。自分が一生の記錄に、こんな厭やな日はまたとあるまいと、幾度も〳〵さう思つた。

朝から淺黃色に晴れた空も憎くてらしかつた。けれども雨が降つては可哀さうだと思ふ情が、胸の何處かにあつた。嫁入りの門出に犬が吼えればよいなぞとは思はなかつた。

これなりに、明日の朝まで、何も知らずに、ぐッすりと寢込んで了ひたいと思つて、朝飯そこ〳〵に、

本堂の脇の自分の室で、夜の物を引ッ被つて仰向けになつたけれど、何うしてなか〳〵眠られさうにならなかつた。そこでむつくり起ると、のこ〳〵本堂へ行つて、冷たい内陣の板間を白い素足で踏み〳〵、頻りと念佛を唱へた。

それから元の室へ戻ると、引きちらかした夜具は其のまゝにして、机の抽斗から一昨年の春より記し始めた日記を取り出し、雪枝のことは皆悉黒々と消して行つた。さうして不圖思ひ出した風で文庫の底から、自分が十八、雪枝が十五の時に貰つた銀の指輪を摘んで、つく〴〵ながめてゐたが、もう一度自分の指に嵌めてみようといふ氣には、兎てもなれなかつた。こんな穢らはしいものを、何うして今までこゝへ納しておいたか、それが殘念だと思ひながら、指輪を掌に載せて、すた〳〵と本堂の後縁へ出たが、向ふの笹原を望んで、其の小ひさな思出の多い品を投げ棄てようとして、やれ待てと誰れかに背後から止められでもしたやうに、ぐたりと腕を垂れた。

また暫らくは、其の指輪を見詰めるのであつたが、「何糞ッ」と自分の耳にも驚かれるほどの聲で叫ぶと、今度は思ひ切つて發止とばかりに笹原へ投げ込んだが、少しそれで横の方のぐろに、葉の無い芙蓉の幹が見窄らしく突ッ立つてゐるあたりへ落ちて、哀はれや石にあたつたか、カチンと音がした。

「あゝ、これでよい、これでよい、」と獨言をしつゝも、新發智は、あの指輪がこれから永久にあのぐろの土の中に埋れてゐるであらうか。それとも縁あつて誰れかに拾はれるであらうかといふやうなことを考へたりした。銀は黴みたいに錆び腐つて了はないのだから、自分たちの死んだ末の末までも、あの形をして殘つてゐるであらうとも思つた。さうして今頃は雪枝がそは〳〵して、一生に一度の大事の日を、

時計の針とゝもに刻んでゐるであらうといふことが、胸にまた新らしい痛みをもつて浮んで來ると、もう其處には寢ても立つてゐられなくなつた。

塀の外の細い里道を通る村人の口にも、嫁入りの話が語られてゐるやうである。新發智は室へ入つて、大きな障子をピシャリと邪險に閉め立て、また頭から夜の物を引つ被つてひッくり返へつた。

午後になるまで、それなりヂッと息を殺してゐたが、何處かで子供等が、「嫁さんや、嫁さんや」と囃やす聲がするやうに思はれたので、むッくり起きると、帶締め直して、ふら／＼と新發智は寺を出た。

行き逢ふほどの村人が、皆謎でも解かうとする風にして、自分の顏をしげ／＼と見るので、新發智は幾度か後戻りしようとしては、到頭瀧野屋の前まで來て了つた。なかには隨分無遠慮に、

「坊んち、あんたまだ雪枝はんに會ひなはれへんのか。……名殘りに一遍會うたげときなはれ。……」なぞと、笑ひ／＼言ふものもあつた。瀧野屋の前あたりには、嫁入りを見ようとする子守り等が、あちこちに佇んでゐたが、

「坊んち、おいなはれ。」

「先生、阿母さんが呼んではります。」と、瀧野屋の母子が呼んで呉れた聲には、痛い傷を柔かい舌で舐められるやうな、快い響きがあつた。

瀧野屋の二階へ上つて、お田鶴と並んで欄干に凭れてゐると、町から呼ばれて來た五臺の空人車が、

前のだら〳〵坂を登つて行くのを、子守り等は珍らしさうに見てゐた。

時刻が近づいたらしく、子守りに混つて、大人がチラホラ路傍へ出て來た。嵩張つたものを擔いで行く他所村の男までが、荷を卸ろして立ち止まつた。

「嫁さんや、嫁さんや。」と叫んで歩く男の子の聲や、「あの嫁さんよいけれど、……」と、節を付けて唄ふ女の子の聲なぞのガヤ〳〵してゐるところへ、坂を下りて來る先頭の人車が見えた。ませたお田鶴は二階の障子を締め切り、一番端を一寸ほど細目にあけておいて、

「先生、此處から覗いてなはれや。」といふと、自分は急いで階子段を下りて行つた。

「二番目が嫁さんやァ。」と、下では子守りが大きな聲で言つた。媒妁人の助役の黒紋付を先頭に二番目の人車には藤紫の紋付を着た雪枝が、襦袢の襟の白さと紛ふほどに白粉をこッてり付けて、高島田で、耻かしい顏をして乘つてゐたが、妙に着膨れて平生よりも形がわるく、何んだか首が短かくなつたやうで、無細工であつた。上は目を使つて雪枝が瀧野屋の二階を見たのは、其の時のテレ隱しで、新發智が其處の障子の隙間から覗いてゐようとは知るよしもなかつたが、新發智は卑怯にもハッとして、顏を引ッ込めた。さうして今度覗いた時は三番目、四番目と、春造夫婦の人車が行き過ぎて、最後の助役の妻の人車が、坂の下を廻はるところであつた。

十三

其の夜、新發智は屢々惡夢に魘されて、翌朝はいつもよりズッと早くまだ一人も兒童の來ぬうちに學校へ出ると、起きたばかりの小使は喫驚した顏をして、職員室の掃除を始めた。續いて出て來た同僚の

首席訓導は、「お早やう、えらい早いこッちやなア。」と冷かすやうに言ひ〳〵、出勤簿に認印を捺すと、かじかんだ手をおこりかけた箱火鉢に翳ざしつゝ、

「今頃雪枝さんは、婿さんのねきへ坐つて、恥かしさうにお茶でも入れてはるやろか。」と、にた〳〵して言つた。漸くなほりかけた新發智の氣分は、この一語にまた傷なはれて、この日は授業を終るまで、たゞぼんやりと、お田鶴を可愛がることさへ忘れて了つた。

雪枝が婚禮の第二夜まで過ぎると、新發智の諦めも、深く腹の底に根ざして、もう自分のものを人に奪はれたといふやうな悲しみはしなくなつた。

其の日、學校では、同僚の誰れ彼れが頻りと、「今日は三日歸へりぢや」と、小うるさくも雪枝の噂さを持ち出してゐた。

「こないだは見なんだから、今日は一つよく見たらう。……何んな顔して戻つて來やはるやろ。……しかしもう處女ぢやないのやなア。……」と、感動するやうに言ふものもあつた。

「あの人は、あんたの嫁はんになるのやとばかり思ふてました。」などと言つて、始終新發智をいたはるやうにしてゐた首席訓導は、洋傘で顔を隠す恰好をして、「△△君、これやよつて顔は見られへんやろ。」と言つた。

午後の放課時間に、丁度雪枝の人車は、先方の母親のと二臺で小學校の前を通つたが、お召の着物か何かを着た雪枝は、首席訓導の想像したやうなことはなく、憎らしいほどツンと取り濟ました横顔を見

せて、すうッと通り過ぎた。
三日歸への祝宴の料理の買物に、町へ行つたのであらう、下男の治郎吉が、天秤棒をしわらして、重さうに籠を擔ひつゝ、間もなく學校の前を通つて歸つて行つた。
其の日は兒童の成績調査で、首席訓導を始め、職員は皆灯の點く頃まで學校にゐた。さうしてこれから首席の御馳走で、一同が瀧野屋へ行かうとしてゐる時、滅多に音を聞いたことのない村の警鐘が、役場の前の火の見櫓で、ぢやん〳〵と鳴り響いた。
半鐘で直ぐ火事と知るまでにまだ馴れてゐない村人は、「何んぢや、何んぢや」と立ち騷いでゐるだけであつた。新發智も同僚とゝもに二階へ上つて、窓から村中を見渡したけれど、左義長ほどの烟りさへ何處にも揚つてゐなかつた。
「火事は糸瓜はんや、……國澤はんや。」と叫んで、里道を駈け去るものがあつた。新發智はハッと顏色を變へたが、直ぐ其のあとから來た村人の叫に、一層强くとむねを突いた。
「雪枝はんが燒け死んだ。……」
事實はかうであつた——。
雪枝が三日歸への土産に持つて來た數々の品の中に、孟二郎へとて、玩弄品にしては精巧な懷中時計の模型があつた。孟二郎は飛び上るほど喜んで、其の鎖を汚れくさつた三尺帶に卷き付けて跳ね廻はつてゐるうちに、附いてゐた磁石を土間へ落としたが、白晝でも薄暗い土間の夕方は、それがなか

見付からなかつた。

孟二郎が、わア／＼と泣いて訴へるので花嫁の雪枝が、晴れ着のお召は脱いでも、矢張り絹物のぞろりとした姿で蠟燭を手にして、其の磁石を探してやつてゐると、折節母のお定が朝ほどに自分の着更への襟垢を洗つた揮發油が小ひさな金盥に入れたまゝ忘れられてあつたのへ、パッと蠟燭の火が移つ、あはやと驚く間にそれが逆惡るく、脇に置いてあつた開いたばかりの石油罐に飛火し、土間一面に炎に包まれて、雪枝の身體も紅蓮の臺に載つた如く、裾から袂へ燃え付くと、流石は念佛娘の、早くもそれと觀念したらしく、合掌しながら、ピタリと坐つて了つたので、兩親や治郎吉が駈け寄つて、火を揉み消した時は、稱名の聲も細く、手足と臀部とに大火傷をして、蟲の息のまゝ、擔架で、添ふてからまだ三日目の花聟の家へ、改めて重態患者として擔ぎ込まれた。

新發智は、直ぐ見舞ひに行かうか、もう少し後にしようか、何うしようかと、案じ煩ひながら、氣拔けのやうになつて、突つ立つてゐた。

――大正六年十一月二十日脫稿――



淨明寺橫町

長田幹彥

淨明寺橫町で名代のものは角の烟草屋の看板娘と、寺裏の大銀杏樹と、それから橫町の中程のところへ出る小松鮨であつた。烟草屋の娘は今年の秋に橋向ふの材木屋へ嫁にいつてしまふ、大銀杏樹はつい此間の暴風で大枝を三本も吹き折られてしまつたので、今では三つの名物のなかでも小松鮨ばかりが僅かにその名殘りを止めてゐるのである。

大橋から廓へ通ふ一筋の橫町には此邊で育つたものもよく覺えないくらゐの昔から、夜毎にいろいろな屋臺店が立つならはしになつてゐた。おでんもあれば牛飯もある、立喰ひの安西洋料理もあれば鮨もあるといつた風で、いづれも廓へ通ふ客を相手に相應に繁昌はしてゐたが、併しそのなかでも小松鮨に肩を並べる家は一軒もなかつた。移り變りの激しい小店のことゝて、一年と續くものは珍らしかつたが、そのなかで小松鮨だけはもう十五年から賣込んだ屋臺であつた。前の親爺は河岸で小松の看板をかけてゐた家の弟だつたが、地道な男

にも似合はず、少しばかり小金がたまると人にすゝめられて相場へ手を出したので、それがぐれはじめで到頭屋臺ぐるみ今の佐吉に渡すやうなことになつてしまつたのであつた。

今の親方の佐吉ももとは人形町の都鮨の職人で、酒飲みの遊び好きの、何處といつて取柄のない男ではあつたが、それでも商賣にかけてはなかなかしつかりした腕をもつてゐた。それに今はもう半身不隨で、家で寢たつきりになつてゐる内儀さんが名うての働きものだつたので、この屋臺が賣りものに出た時に、先の親方に泣きついてやつと株を買ひ受け、それから丁度今日まで七年の間、二人で稼ぎ込んで兎に角淨明寺横町の名代とまで唄はれる店に仕上げたのであつた。殊にこの小松は煮物が旨いといふので賣込んでゐた。

佐吉も今では昔のやうに大酒も飮まないが、しかし生來（うまれつき）からの職人氣質なので、つい酒を飮むと惡い朋輩に誘はれて店の賣溜めを掻攫つては遊びに出たりした。商賣のことには身を入れるが、平常の身持はだらしのない一方で、殊に内儀さんが寢つくやうになつてからは小言の云ひてがないので、大びらで遊んで歩いた。それ故、一日に十圓十五圓の鮨はつけてゐながら、いつもぴいぴいしてゐた。時々客が少しは蓄（たま）つたらうなどゝいつて冷評したりすると佐吉は眞面目腐つた顔をして、

「はゝゝゝ。笑談でせう。金を殘すつもりなら、こんな道樂な稼業はしませんや。せいぜい旨え酒を飮んで、面白え思ひをして死に度えからこそかうしてゐるんでさあ。」と、云つて、空嘯いてゐた。

佐吉には十七になる忠治（これは佐吉が講釋の國定忠治が馬鹿に好きなので態とつけたのである。）といふ息子と、十五になるおせいといふ娘があつた。子供はその二人つきりで、晝間は家で手傳はせて、

晩は二人とも屋臺で小僧がはりに使つてゐた。忠治は年よりも老せた子なので、一人前の若衆のやうによく働いた。客がそれをほめると佐吉は笑ひながら、

「なあに、蛙の子は矢張り蛙の子でさあ。今に私みたいになるから見てゐて御覧なさい。」と、云つてゐた。

その晩は恐ろしい師走風が吹いてゐた。戸外には烟のやうな砂塵が舞ひ立つて、年の暮によくあるやうな底冷えのする晩であつた。向側の店明は不氣味な程冴えて、寺の壁際に並んだ屋臺の暖簾は絶えず吹きめくられ、向ふ通りの電車道では曲角をまがる鐵輪の軋りが齒の根に疼くやうに冷たく聞えてゐる。とみると寺の屋根を掩ふやうに聳えた大銀杏樹は散り殘つた葉をばらばらふるひ落として裸になつた梢のところには大きな寒月が蒼白く輝きながら懸つてゐた。

佐吉はちよつと客の合間をみて、さも冷たさうに七輪の火に手を炙つてゐたが、甲鉢のなかの飯がもう殘り少なになつたのを見ると、傍で寒さうに肩をすくめてゐる息子の忠治の方をみながら、

「おい、忠公。手前家へいつてもう一釜持つて來な。今夜はこの風だから、それだけつけちやつたら山にしよう。この寒さぢやお客樣もあるめえからな。」と、云ふ。家といふのはそこから二丁ばかり離れた裏町にあつた。

忠治は水鼻汁を啜りながら、

「だつてお父つあん。まだ十時がちよつと廻つたばかりだぜ。」と、云ふ。

「うむ、まだそんな時間か?」と、云つて佐吉は棚のうへの眼覺時計をみたが、そのまゝ魚を圍つて置

く箱の傍から大きな貧乏徳利を引出して振つてみながら、やがて湯呑をとつてそれへごぼごぼと注ぐ。それは佐吉が寒さを凌ぐ樂しみ酒であつた。彼は屋臺へ坐るとすぐからもうかうやつて一杯二杯づゝ呷つてゐなければ仕事が出來ないのであつた。

佐吉はもう一度徳利を振つてみて、

「おい、忠公。手前これをもつてつて、又三河屋からいつものやつを取つて來て呉れねえか。今夜は寒が強いせいか、馬鹿に早くなくなつてちめえやがつた。」と、云ふ。

忠治は下駄を穿いて下へ降りながら、その徳利を受取るには受取つたが、

「お父つあん。まだ飮むのかい。もう今夜これだけにしとおきよ。もうお仕着(しきせ)はすんでるんぢやねえか。」と云ふ。

佐吉は傍を向いて笑ひながら、

「生を云ふねえ。まあ考へてみろ、この空ッ風が吹くのに白面(しらふ)でゐられるけえ。愚圖々々云はずに取つて來な。そのかはり手前には溫い蕎麥を奢つてやらあ。おう、さうさう、家へいつたらお母(つかあ)やおせいにも饂飩でもさう云つてやんねえ。」と、云つて、子供思ひの彼は賣溜めのなかゝら三十錢ばかりつまみだして、忠治に渡してやる。

忠治は仕方なさゝうに徳利をかゝへて、

「うゝ、寒いや。」と、云ひながら幟の古布で圍つた屋臺の陰から吹く風のなかへ飛び出してゆく。

それと引違へに二人の客が入つて來たので、佐吉は

「いらつしやい。」と、云ひながら、湯呑のなかの酒をぐつと呷つて、仕事にかゝつた。鮨を並べる塗板のうへには明るい電燈の光が銀色の鰶(こはだ)の肌にくつきりと冴えてゐる。客は不器用な手つきをしてそれをむしやむしや食べだした。佐吉は顔見知りのない客なので、紅い鮪の、いゝ加減なところを二つ三つつけたつきりで何をつけませうとも云はずに默つてみてゐた。

その客が二十錢ばかりの勘定を濟まして歸つていつてしまふと、又店はがらんとしてしまつた。往來では風の音がひとしきり電線を鳴らして、すぐ隣り町の料理屋でやつてゐる騷ぎの三味線が吹きちぎられるやうに聞えて來る。佐吉は又七輪へあたりながらぼんやりしてゐた。皶の出た彼の鼻は紅く光つて、どんよりとした眼には疲れたやうな醉ひがみえてゐる。

そこへ今度は遠くの方から冴えた下駄の音が聞えて、思ひなしかどうも自分の店へ來る客のやうな氣がしてゐると、果たして、暖簾をかゝげてついと入つて來たひとりの男がある。年の程はやつと四十を出たくらゐで、中折帽を眼深かに被つて、毛皮のついた外套の襟ででつぷり肥つた頸を隱してゐる。

佐吉はそれをみると吃驚して、

「おう、旦那。」と、云つたが、客はその聲で隱嚢から手を出して帽子を後へずらしながらさも意外さうににつこり笑つて、

「や、親方。お前まだ達者だつたのか。」と、云ふ。

佐吉は笑ひながら

「達者だゝたかは心細うござんすね。はゝゝ。それよりゃ旦那こさあお珍らしいぢやござんせんか。

一體どうなすつたんですい？」と、さも懷かしさうに云ふ。

客も少し醉つてゐるらしく、

「いや、しばらくだつたなあ。はゝゝゝゝ。全く面目ねえ。お前も連中から聞いたらうが、俺やすつかりぼしやつちやつてね。しばらく息をぬきに上方へいつてゐたが、實はつい五日ばかり前にやつと又此方へ歸つて來たのよ。」と、云ふ。

その客といふは木場で材木の仲買ひをしてゐる山佐の番頭で、安どんといふのだつた。これも矢張り遊びの好きな人間で、店の名で金を廻はしては自分でこつそり商賣をして、その上りでぶらぶら飮んで歩いてゐたが、去年の秋、ふとしたことから帳尻がばれて、店にも居憎くゝなつてふいと姿を消してしまつたのであつた。小松の屋臺にはもう四年も昔からの馴染みで、今日は芳町へいつた歸りだとか、今夜はこれから洲崎へ行くのだとか云つてはよく寄つて食べていつた。何よりも鮪のトロが好きで、氣に入るとひとりで三十錢も四十錢もたべていつた。佐吉も馬鹿に氣合が氣に入つて、一緒に連れられて遊びにいつたことなども三四度はあつたが、それが急に姿を消してしまつたので、何だか心寂しい氣がしてゐた。同じ仲間のものが食べに來たりすると、いつも安さんはどうしてゐますと云つて、その安否を訊ねるのであつた。最初のうちは何處へいつたともまるで行衞が知れなかつたが、そのうちに大阪へいつてゐるといふことが誰れからともなく聞えて來たのであつた。佐吉は鮪のトロのいゝのが出る時分になるとよくその安どんのことを思ひ出したりした。それが今日になつて思ひがけもなくひよつくら姿を現はして來たので、佐吉が驚くのも全く無理はなかつた。

佐吉はまだ夢でも見てゐるやうな顔をしながら、熱い茶を湯呑みについで出して、
「いや、旦那、私やあんたが大阪へいらしつてるつてえお噂は聞いてましたが、それにしても全く變ぢやありやせんか。今頃お眼にかゝれるなんて全く變でさあね。はゝゝ。だかまあよくお歸んなさいましたよ。」
安どんはにやにや笑ひながら
「何が變なことがあるもんか。なにも東京に愛想がつきた譯ぢやねえし、實はもう此方へ歸り度くつて耐らなかつたのさ。お庇護様でまあやつと身性が直つて、又お前達にも逢へるやうになつて、俺やこんな嬉れしいこたあねえや。まあ喜んで呉んねえ。」
佐吉はさういふ口調がすつかり昔の通りなので、ひとしほ懐かしくなりながら、
「いや、恐れ入りやす。私も皆さんが被居るとよく旦那のお噂をしちやゐたんですが、まあしかし御無事でお目出度うござんす。」と云つて、布巾でそこらを拭きながら鮨をつける支度をして、「だが、なんでござんせうなあ、大阪は又大阪で面白うがせう。」
安どんは顔をしかめて、
「うん、まあ、ぶらぶら遊んでゐるにや面白えところだが、俺あみたいな意地の汚えものにや、なによりも食物で里心がついていけねえや。」
「だつて大阪は大層食べものゝうまいところだつてえぢやござんせんか。」
「そりやまづくはねえが、やつぱり何を云つても生れた土地のものが戀ひしいさ。第一大阪にや鮪が

えからね。俺あもうこの鮨が食ひ度くつて、どれほど難儀をしたか知れやしねえ。東京驛へつくとすぐ河岸へいつて、喉から出るほどやつたが、全くお袋に逢つたより嬉れしかつたね。今夜も久しぶりで洲崎へでもいつてみようと思つて、此處まで來かゝるとお前のところのことを思ひ出したのさ。誰れかの話に又代が變つたとか聞いてたから、お前にやもう逢へねえものと思つて、暖簾をくゞつたが、からつて屋臺へ入つてみると相變らずなんでほんとに懐かしかつたよ。」

佐吉は不平さうな顔をして、

「誰れがそんな代がかわつたなんて縁喜でもねえことを云ひやがつたんでせう。仕様のねえ奴だ。この小松の屋臺はまだちつとも腐つちやゐませんぜ。腐るどころかお庇護様でこの頃ぢや十五兩からの鮨をつけてゐますさあ。」と肩を張つて云ふ。

安どんは四邊を見廻はしながら、

「そりやまあ結構だ。さう云やあ屋臺も此節ぢや小綺麗になつたぢやねえか。どうだい、今日の仕込みは？」と、魚の入れてある箱の方を覗き込む。

佐吉は自慢らしく箱の蓋をあけて、

「旦那。いゝ晩にいらしつた。今日の鮪は全くようがすぜ。久しぶりでひとついゝところをお食りなすつて下せえ。」と、云つて、態と落着き拂ひながら大きなシビの一塊を手許の板のうへへ持ち出す。半分切り取つたなかには中脂の旨さうな肉が電燈の光を受けてむちむち冷たく光つてゐる。

安どんは感心して、

「ふむ、矢張り江戸だなあ。」と、嘆息をつくやうに云ふ。

佐吉は薄刃でいゝところ斜に二片ほど長く切つて、肉の塊はそのまゝ箱へおさめて、今度は馴れた手つきでその鮪を幾片にもおろして飯につけだす。安どんは外套の襞のなかからぬつと手を出して、つける奴を片つぱしからさも旨さうにつまんで食べた。その手つきにも鮨食ひらしいいなせなところがあつた。佐吉は安どんの指に今迄ついぞ見なかつた太い金の指環がはまつてゐるのをその時初めて見た。着物も澁い結城お召の羽織が外套の間からちら／＼みえてゐた。

そこへ家へ飯をとりにいつてゐた忠治が大きな飯櫃を脊負つて、片手にはさつきの徳利をぶらさげたまゝ、聞き覺えた浪花節のひと節を口吟みながらぬうつと歸つて來た。安どんがゐるのを見ると、彼も顔は見知つてゐるので、

「いらつしやいまし。」と、云ふ。

安どんは鮪を頬張りながら、

「親方。こりやあの忠公かい？、恐ろしく大きくなりやがつたな。まるで見違へるやうだ。はゝゝゝ。」と、云ふ。

佐吉も笑つて、

「柄ばかり大きくなりやがつて、から役にや立たねえんでがすよ。」と、云ひながら、忠治が持つて來た飯櫃をとつて甲鉢へあける。そして徳利をそのまゝ又箱の傍へ形づけやうとするのを安どんはふと見咎めて、

「おい、親方。相變らずやるんだねえ。はゝゝゝゝ。」と、云ふ。

佐吉も苦笑ひをして、

「へゝ、これぱつかりはねえ。でも私も年のせいか此頃は大して飲めなくなりやしたよ。」と、云つて、又鮨をつけだす。

安どんは默つて笑つてゐたが、忠治の方をみながら、

「ぢや遊びもそろそろ忠公の方へ讓りかね。馬鹿に年寄じみちやつたぢやねえか。はゝゝゝゝゝ。」

「はゝゝゝゝ、どうして、そつちの方はまだなかなかそんなこつぢやござんせんや。此奴あ圖體ばかり大きくつてまだ大門から向へ一足も踏込んだこともねえんでげすよ。ですから遊びの株はまだ讓れませんや。それに此頃は嚊が例の病氣で寢たつきりだもんでね。へゝゝゝ。」

「うん、さうさう。内儀さんは病氣だつたな。それぢや猶可けねえ。」と、安どんは鮨を口のなかでもぐもぐやりながら云つてゐたが、やがて茶のなくなつた湯呑をとつてにやりと笑ひながら、「親方。お前さんのお仕着へ手を入れちや濟まねえが、どうだい、一杯讓つてくんねえか。はゝゝ。」と、云つてそれを差出す。

佐吉は惜げもなく德利を出して、

「冷ぢやいけますまい。ちよつとつけませう。」と、云つて、手早くそこにあつた正宗の壜を洗つて、それへ一杯注いで、七輪の藥罐のなかへ入れる。そして二人は酒飲みらしく顏を見合はせて笑つた。

安どんは大阪の方の景氣のいゝことなどを話しながら鮨をつまんでゐたが、燗がつくと湯呑に一杯受

けてぐうつと呷りながら、
「ふう、こりやいゝ酒だ。あゝ旨え。ついでだ、もう一杯貰はうかな。」と云ふ。
佐吉は又酌をしてやつた。
忠治は呆れたやうな顏をして見てゐた。
佐吉はそのまゝ自分も思ひ出したやうに燗のあまりを湯呑へついで飲みながら、
「旦那、それであんた今何方です？ 又山佐へお歸んなすつたんですか？」と、訊く。
安どんはちよつと眉を動かして、
「いや、もうあすこへはいくら厚顏しくつても歸られねえぢやねえか。俺も今度大阪で少しばかり儲けて來たから、ひとつ何か商賣でも初めてみようと思ふんだが、やつぱり水で育つたものは駄目だね。自分ぢや可けねえと思つてゐながら、つい兜町へ足が向いちまひやがつてね。はゝゝゝ。」
「いや、そんなら結構でさあ。當節は大分株も動いてやすから、又ボロいこともござんせう。それでやつぱりおひとりなんですか。」
「當り前さ。年は老つても女の子に不自由はしめえし、なにを好んで、足手まどひの女房なんか持つもんけえ。はゝゝゝ。ひとりものゝ方がどれくらゐ氣樂でいゝか分りやしねえやな。」
佐吉はしみじみ感心したやうに、
「全くでござんすなあ、私も旦那方のやうなお身分が羨ましうござんすよ。」と、うつかり云つて、ふと氣を兼ねるやうに忠治の方をみながら、「おい、藥罐に水を入れときねえ。」と、云ふ。

安どんはいゝ氣持ちになつたと見えて、鮨は食つてしまつてもなかなかそこを動かうともしなかつたが、そのうちにこの近邊の若い者らしい二三人の客が來て食べるとすぐに歸つていつた。

安どんは醉つた眼をそこらへさまよはせながら頻りに舌なめずりをしてゐたが、ふいに、

「おい、親方。どうだい、久しぶりだ、俺らが奢るから今夜一緒に交際(つきあ)はねえか。」と、云ひ出す。

佐吉はにたりと笑つて、

「へえ、有難うござんす。だがまあだこんなに飯が殘つてゐやすから、これをどうにかつけつちまはねえぢやねえ。」

安どんは鼻の先で笑つて、

「ふん、そんな吝(しみ)つたれなことを云ふなよ。小松鮨の佐吉さんぢやねえか。昔の馴染が來たんだあ。はゝゝゝゝ。大したことは出來ねえが、まあ洲崎なら大籬ぐれえ彈むよ。」と云つて、外套の隱嚢から革製の紙幣入を取り出し、そのなかゝら五圓紙幣を一枚ぬきだしてぽんと飯臺の向ふへ放り出しながら、

「親方。それでもう山にしようぢねえか。俺も大きなことを云ふやうだが、今度はちつと紙幣の匂ひのする體になつて歸つて來たんだぜ。」と、云ふ。態と見せびらかすやうに手に持つてゐるその紙幣入には紙幣がずつしりと入つててゐるらしかつた。

佐吉は氣前よく五圓紙幣を投げだされたので、すつかり氣を呑まれてしまつた。

「旦那。こんなに頂いちや多うござんす。」と、云つて、返さうとするのを、安どんはついと身を引きながら、

「まあ、いゝやな。とつときねえ。それだけで名代の小松鮨を山にしたと思やあいゝ氣持ちだ。はゝゝゝ。」と、鷹揚に笑つてゐる。

佐吉は一寸紙幣を額のところへ持つていつて、

「さうでござんすか、ぢやまあ頂いときます。」と、云つて、錢箱へ入れたが、下地はいくら遊びの好きな佐吉でもさすがに息子の手前があるので、少時の間考へて、やがて思ひ切つたやうに、

「それぢやお言葉に甘えてお伴をしますかな。はゝゝゝ。全く久しぶりでお眼に懸つたんですものねえ、こゝでお斷りしちや實も花もありませんや。」と、自分に云ひ譯をするやうに云つて、態とそこらを片づけるやうな振りをして忠治の方へは顏を背けながら、

「おい、忠公、手前濟まねえけど、ひと走り飛んでつて、家から俺の唐棧の半纏をもつて來て呉れねえか。お袋の寢てゐる枕許の箪笥のなかへ入つてるから。もし分らなかつたら、おせいに聞いて、持つて來て呉んな。」と、云ふ。

忠治は又かといふやうな顏をしてまじまじしてゐたが、かういふ時に何か云ふときつと怒鳴られるので、やがて素直に出ていつた。

その間に佐吉はいそいそ鄕のことなど話しながら、薄刃を洗つたり、七輪の火を始末したりしてゐたが、ふと思ひついたやうに德利をとりあげて、

「旦那。まだお酒は澤山ござんすよ。もう一本つけやせうか。」と、云ふ。

安どんは手を振つて、

「いや、もう結構だ。行先が極りやなにもお前さんの飲む口まで取りあげる必要はねえさ。はゝゝゝ先へいつて女の子のお酌で飲む方がいくらうめえか知れねえからな。」と、云ふ。

少時すると忠治は佐吉の自慢の唐棧の半纏を肩から引擔ぐやうにして息せき歸つて來た。佐吉は、

「うむ、御苦勞、御苦勞。」と、云つて、狹い屋臺のなかで上被をぬいでそれを羽織りながら、

「まあ、下の着物はこれでいいだらう。ねえ、旦那。どうせ職人だあ、これで御勘辨を願ひます。」と、云ふ。

安どんは又鷹揚に笑つて、

「御勘辨どころぢやねえさ。豪儀な唐棧だ。いゝこしらへぢやねえか。」と、云ふ。

佐吉は嬉しさうににこにこして、

「それぢやひとつお伴しませうかな。おい、忠公、手前それぢや氣の毒だが、店をしまつて、屋臺はいつものやうに引込んどいて呉んな。それから薄刄はちやんと水をきつてな。……」と、云ひ置いて、そのまゝ下駄を突懸けて、屋臺の外へ出る。

忠治は明るい電燈のなかへたつたひとり取殘されると、急に心細くなつたか寂しさうな眼つきをして、

「お父つあん。お前今夜歸つて來るのかい？」と、云ふ。

暖簾の外では安どんの崩れるやうな笑聲が聞えて、

「はゝゝゝ。此奴あよかつた。この様子ぢや親方、此節ちよくちよく家を明けるんだね。」と、云ふ。

佐吉は蓋ひの外で。

「はゝゝゝ、御冗談でせう。とんだところでばれちやつたね。」と、いつにない若々しい聲で云つて、「おい、忠公。今更そんな餘計なことを聞くにや當らねえぢやねえか。旦那のお伴で行くんだもの、さうのめのめ泊つて來られるけえ。はゝゝゝ。おつと、煙草入れを忘れた。」さう云ふ聲と一緒に佐吉は酢の氣で荒れた紅い手だけをにうつと蓋ひの間から突込んで、棚の傍に置いてあつた煙草入れをとつてゆく。

「そいぢや頼むぜ。」と、いふ聲も吹く風の底から恐ろしく威勢よく聞えて來た。

忠治はそつと蓋ひの間から顔だけ出してみたが、佐吉が安どんの後から笑ひ興じながらついてゆく姿が眞白な月光の底に明るく見えてゐた。二人はやがて横町を大通の方へ曲つて行つてしまつた。

その晩、いつまで待つても佐吉は家へ歸つて來ないので、裏町の長屋にある小松舘では一時を打つと間もなく、忠治ももうどうせ歸つて來ないのだらうと思つて、戸をしめて寢てしまつた。店がひと間、二階が一間の狹い家なので、いつもおせいは二階へいつて病人のお袋の傍へ寢る、忠治は父親と一緒に店へ寢ることになつてゐた。その晩も忠治はあとで叱言を云はれるといけないと思つて、飯臺やら、鹽のしてある鮨の笊やらを取散らしたなかへ親父の臥床だけは敷いといてやつた。そして毎晩のしきたりでは寢る前に一度づゝ母親の便瓶の世話をしてやることになつてゐるので、それを濟ますと、忠治はそのまゝ冷たい臥床へ入つて寢てしまつた。

いつもは晝間の疲れで枕に就くとすぐにぐつすり寢てしまふ忠治が、その晩はどうしたのか妙に眼が冴えて眠られなかつた。自分でも不思議に思つて、一生懸命に眼を瞑つてみるがなかなか眠れない。風は漸次と吹き落ちて、戶外の月夜の明るさが戶の隙間から細い縞のやうになつて射し込んで來る。天井で鼠の荒れ廻る音と、遠い町を流れてゆく火の番の撃柝がうす寂しく聞えて、寒氣は肩先から水でも浴びせられるやうに迫つて來る。さうかうしてゐるうちに柱時計は眞闇なかで三時を打つてしまつた。

忠治は幾度か寢返りを打ちながらしまひには寒いので布團を引被ぶつて自分の膝をじいつと抱きしめながら丸くなつて寢てゐたが、そのうちにうとうとしかけたかと思ふと、突如、戶外の方で誰かゞ、とんとんと激しく雨戶を叩く音が聞えた。初めは隣の家のやうに聞えたので、忠治はそつと顏だけ布團の外へ出して聞き耳をたてゝゐたが、二度目のときにはたしかに自分の家の戶だと分つたので、きつと親爺が歸つて來たのだらうと思つて、彼はしぶしぶ起き上つていつた。そして手探りに下駄をさがして土間へ下りると、いつものやうに呂律の廻らぬ聲で「俺だ。」といふ親父の聲を豫期しながら、

「お父つあんかい？」と、聲をかけてみた。

と、戶外では聞き馴れぬ聲が、

「あの、淨明寺橫町に出てゐる小松鮨さんは此方ですか？」と、云ふ。

忠治は變に思つたので、急に聲を改めながら、

「へい、手前です。」と、答へて、がらりと戶を開けてみたが、それと一緒に白晝のやうな明るい月光が戶の外へ來て今まで立竦んでゐたやうにさつと土間へ流れ込んで來る。その月光のなかに頭から膝掛け

を被つた車夫體の男がぬつと立つてゐた。

忠治はびつくりしてまじまじその男の顏をみてゐたが、少しもその顏には見知りがなかつた。と、その男はいかにも寒さうに齒の根をがた〳〵させながら、

「あの私は洲崎の住吉樓から使に來たんですが、此方が小松鮨さんなら、あの親方が今急病でひどく苦しんでますから、誰方か大急ぎで來て下さるやうにつて頼まれて來たんですが、……。」と云ふ。

忠治はそれを聞くと餘り思ひ懸けなかつたので悸乎として、

「なに、お父つあんが急病ですつて？」と、耳を疑ふやうに訊き返して、「急病つてどんな鹽梅なんでござんす？」

「さあ、私は使ひでよく知りませんが、なんでもお酒を飲み過ぎて、どうとかしたつて小母さん達がさう云つてましたよ。兎に角、私や俥を持つて來ましたから、誰方か大急ぎでいらしつて下さい。」と、云ふ。

忠治はそれを聞くともうぢつとしてゐられなくなつた。此の前にも一度大酒を呑んで親父が血を吐いたことがあるので、又そんなことではあるまいかと思つて、そのまゝ寝着のうへから小松鮨の半纏をきて、二階へ寝てゐる母親や妹達には何んとも云はずに、雨戸をそつと外から閉めて、大急ぎで家を出ていつた。そして路次口まで出てゆくと、そこには紅い提燈をぼんやり點した一臺の俥が置いてあつたので、あとから隨いてきた俥夫に、

「ぢや若衆さん、濟みませんがどうか大急ぎで、……。」と、云つて、それへ乘つた。

大通りへ出ると、月は丁度眞向ふの家並とすれすれになつて、何處の屋根にもまるで雪でも降つたやうに霜が眞白に輝いてゐる。がらんとした電車道には片側だけ明るく月の光が射して、凍りついたやうな軒燈の列が寂しく明滅してゐるばかりで人ッ子ひとり通らない。

俥夫は寒いので一生懸命に駛けながら、途々自分が使ひを賴まれた次第を細かに話してくれた。丁度その俥夫がもう夜も更けたので、いつもの溜りへ歸らうと思つてぶらぶら空車をひいて住吉樓の前まで來かゝると、なかゝらふいに聲がかゝつて、實は急病人があるからこれこれのところまで使ひにいつて來てくれと賴まれたのだといふ。その時住吉樓の玄關のところには小母さんらしい老婆と、外套を着た中折帽をかぶつた男が立つてゐて、その男は使賃だといつて一圓紙幣を一枚呉れたといふ。

忠治はその外套の男が安どんだと思つたので、

「それぢやその外套を着た旦那はどうしましたい？　その旦那が家のお父つあんを達つてつたんですよ。」と云ふと、俥夫は事も無げに、「その旦那はもう一臺外の俥をよんで、私よりも先に大門を出ていきましたよ。なんでも醫者のところへいくとか云つてましたが、私がみてたらずつと黒江町の方へいつてしまひましたよ。」と、云ふ。

忠治は變だとは思つたが、その場合安どんに對してはそれ以上に考へる餘裕もなかつた。

金刀比羅樣の側の小橋を渡ると、銀色に光る海と、がらんとした埋立地の向ふに紅い廓の灯が點々と瞬いてみえる。白けた道を一散に走つてゆくうちに、朝歸りの客をのせた俥らしいのが二臺ほど摺れ違つていつたが、そのほかには往來の人影もなく、大門のところへ來てやつとまた二四臺の俥に逢つた。

橋を渡ると、ひろびろとした廓の大通りには落ち方の月が唯眞向に射し渡つて、霜は道の面に冷たく光つてゐた。角の交番の前を通るとき、帽子も被らぬ忠治の姿を怪しく思つたか、鳥のやうにすつぼり頭から外套を引被ぶつた巡査がじろじろとこつちをみまもつてゐた。

やつとのことで住吉樓の前で俥を下りると忠治は全く案内知らぬところなのでどうしていゝのか分らなかつた。俥夫は大戸の眞中のところに切つた小さな潜り戸を開けて中に入つていつたが、やがてそこから顔だけ出して、

「さ、此方へお入んなさい。」といふ。

忠治は躍る胸を押へながらおづおづ入つていつた。

廣々とした玄關の板敷には電燈がたつたひとつ點つて、そこには不寢番の若い者が眞紅に火の燃つた大火鉢へ股火をしながら立つてゐたが、忠治が入つてゆくのをみると、唯默つて、此方へといふやうに眼顔で云ひながら正面の大階段をとんとんと上つていつた。忠治も仕方がなしにそのあとからついていつた。

階上へ上つてみると、中庭を取圍んだ四方の廣廊下にはひつそりと風寂びて、紅黄い燈の點つた同じやうな部屋が幾つとなく續いてゐる。ほの暗い薄闇からはさもだるさうな重ね草履の音がして思ひがけないところから花魁が寒さうに肩をすくめながら出て來たりする。

番頭は廊下の曲り角のところまで來ると、そこの一間の障子際にたつて、

「お初どん、お初どん、さつきの……」と、聲をかける。

と、なかでは煙管をはたく音がして、ぶつきらぼうな聲が、

「あい、今いきますよ。」と、云ひながら、やがてそこの障子をあけて髮の薄い、痩せ呆けた一人の遣手婆さんが出て來る。そしてふと忠治をみながら、

「お前さん、小松とか云ふお鮨屋さんから來なすつたのかい？」と、訊く。

忠治は丁寧に頭を下げた。

婆さんはそれを見るとさも迂散臭さゝうに彼の頭から足の先までぢろッと見ながら、

「そいぢやお前さん、あの人の息子さんなんだらう。どうもよく似てゐるよ。」と、云つて、「まあ、此方へいらつしやい。あの急病とは云つたけど、どうも餘程ひどいらしいんだよ。」と、ひつそりした聲で呟きながらそのまゝ忠治を連れて三間ばかり先の名代部屋へいく。

そこの障子を開けてみると、なかには古びた屏風が立てゝあつて、その陰に紅裏のついたむくむくした蒲團が敷いてある。床の間もなければ、置いてある道具もないので、縱四疊の小部屋には十燭の電燈の光が侘びしさうに充ち溢れてゐるのであつた。

忠治は初めてこんなところへ來るので、少しは好奇心も働いて、ふと蒲團のなかを覗くと、そこには父親の佐吉が少し蒲團からずり落ちたやうな形になつて、枕もなにもしずに寢てゐるのである。枕許にはコップをひつくり返しでもしたものと見えて、水のこぼれたあとが古疊にしみついて、その傍には火の消えた煙草盆が置いてあつて、父親の煙草入れと卷煙草の吸ひさしたのが落ちてゐる。

忠治は蒼ざめた父の顔をみると悸乎として、いきなりその枕許へ膝を突きながら、

「お父つあん。お父つあん。どうしたんだね。」と、呼んでみた。

それでも佐吉は眉ひとつ動かさない。

忠治は戀に思つて、猶顏をさしよせながら、

「お父つあん。俺だよ。忠治だよ。」と、呼んでみたが、佐吉は矢張り身動きもしない。

忠治は龜縮んだ手をぬつとのばして、佐吉の額へ觸つてみたが、それと一緒に顏色をかへて、

「ヤッお父つあん、大變だ。」と、泣聲をたてながら、いきなり上の夜着をはねのけてみた。そして洗ひざらした浴衣一枚になつてゐる胸のところへ手を當てみるともうそこらは薄氣味惡く冷えきつて、心臟はぴくりとも動いてゐない。佐吉はもういつの間にか死んでゐたのであつた。

遣手はそれをみると、これも蒼くなつて、腰を折りながら、

「どうかしたんですかい？」と、呟いたが、忠治と同じやうに手をのばしておづおづ胸のところを觸つてみると、「あッ。」と聲をたてゝ、すぐ後にぬうつと立つてゐる番頭の方を振返りながら「おい、吉どん、た、大變だよ。此の人は死んでゐるッ。」と、叫ぶ。

番頭も吃驚したやうな顏をしてのつそり部屋のなかへ入つて來たが、もうどうすることも出來なかつた。

そこへ隣りの廻しでその聲をきゝつけてか、やがて父親の敵方らしい二十六七の年増の花魁が紅の入つた縞の部屋着をだらしなく引懸けて、眠むさうな眼つきをしながら入つて來た。

「おばさん、お客樣どうかしたの？」と、立つたまゝで夜具の方を覗き込みながら訊いたが、婆さんは

口をあぐあぐさせて、

「どうかしたどころぢやないよ、死、死んぢまつたんさ。」と、云ふ。

それを聞くと花魁も度膽をぬかれたやうな顔になつて、

「まあ、死んぢやつた！」と、云つたが、つい今しがたまで添寢してゐながら死んだと聞くと、まるで別な世界から來た人間のやうにさも氣味惡さうに袂で顔を掩つてしまふ。その肩は眼に見えるやうにぶるぶる慄へてゐた。

それから二十分ばかり經つて、病院の醫者と巡査がやつて來たが、もうその時には注射をすることさへ出來なかつた。佐吉は酒を飲みすぎて、そのために突然心臟痲痺を起して死んでしまつたのであつた。

漸次様子を聞いてみると、その晩は表座敷で藝者を三人も招んで、さんざ騒いだ揚句、退け過ぎになつて部屋へ入つたが、花魁が二度目の廻しに來てみると、佐吉は胸が苦しいといつて、俯伏せになつてうんうん呻つてゐたといふ。きつと飲み過ぎだらうからといつて花魁が寶丹をもつて來て飲ませてやると、それで少しは落着いたといつてゐたが、やがて又ひどく苦しみだしたので、お連れを起しにいつて、それぞれ手當てをしたのだといふ。その時までは誰れも死ぬやうな病氣ではないと思つてゐたのであつた。

遣手婆はおろおろ聲で、

「座敷ぢや久しぶりだといつて、章魚を踊つたりなんかして、面白さうに遊んでゐなすつたが、まるで夢みたやうだねえ。」と、云つた。

敵方の花魁は默つて、鶴龜々々といふやうな慴えた顏容をしてゐたが、忠治は父親の枕許へ坐つたつきり、泣くにも涙が出ないやうに茫然としてゐた。

硝子戸になつた小窓にはいつの間にかもう蒼ざめた曉の薄明が冷たくしみついて來た。

嘘のやうに敢なく死んでいつた佐吉はその翌々日町の世話役達が集まつて、形ばかりの葬式は營んで與れたが、扨て困るのはあとに殘つた病人の内儀さんと、二人の子供であつた。郵便局の貯金帳に殘つてゐるのはほんの仕込みの資本ぐらゐなものなので、小松鮨ではどうしても何とか都合をして屋臺を出していかなければ家の者三人の口が干上るといふ有樣だつた。町の世話方は折角買込んだ店なので然るべき職人を連れて來て店の株を貸すなり、又分合で商ひをさせるなりした方がいゝといふ說に傾いたが、しかしもうかう押詰つては差當つてどうにも出來ないで、兎に角、忠治ももう十七になること故、どうにかして當分の間彼に屋臺を持たせるより他にいゝ思案はないのであつた。忠治も町方からさういはれると、心細いながら引受けない譯にはいかなかつた。

そのうちにその年ももう押つまつて、淨明寺では年の市の立つ日が來た。忠治は大方煮ものゝやり方や、鮓の鹽加減なども見覺えてゐるので、河岸の方は佐吉の仲間だつたものに引廻して貰つて、やつとその晩から自分で屋臺を張ることになつた。

その日は萬事の取廻しが親父の生きてゐた時分のやうにはいかないので、忠治は早くからおせいを手助けに使つて支度をして、兎に角曲りなりにもいつもの立場へ屋臺を曳いていつた。近邊の人達は氣の

毒がつて屋臺の傍へ來てはいろいろ世話を燒いて呉れたりした。

「ほんとにまあ飛んでもねえこつだつたねえ。だがまあお前さんがかうやつて店をやつてける年頃になつてゐるからいゝやうなもんだけれど、さもなけりや病人のお母さんを抱へて大抵なこつちやないよ。」

などゝ云つて、水を汲んで來てくれる內儀さんもあれば又、

「親父や腕はよかつたが、全く酒で生命をとられたんだなあ。お前も金刀比羅樣へ願をかけて一生酒だけは絕ちねえよ。」などゝ親切に言葉をかけて、暖簾を手傳つて釣つてくれる親爺もゐた。

日が暮れる頃にはそれでもやつと屋臺の形がついた。忠治は親父の坐つてゐた腰掛きのうへへちよこなんと坐つて、魚の箱を開けてみたり、庖丁桶を置き換へてみたり、そわそわしてゐた。いつも忠治の坐るところには妹のおせいが筒つぽを着て、不馴れな手つきで七輪の火を熾してゐる。

戶外は年の市へいく人でざわざわ賑つてゐた。暖簾の陰からみるといつになく女の往來が多くて、もうなかには注繩飾りなどをぶら下げて歸つてゆくものもゐた。そして年の市の露店の出た降り町にはカンテラの火が紅く曇り空に映つてゐた。

そこへいろいろ世話を燒いて呉れた町方の人がぽつぽつやつて來て呉れた。お祭禮の時などには眞先に飛び出してゆく三番組の親分は湯歸りに手拭をぶらさげたまゝひよつくら入つて來て、

「おう、忠公。豪儀だな。はゝゝゝ。さうやつてゐるとお前もいゝ職人のやうで何處か鯖がついて來たぜ、爭はれねえもんだ、庖丁をもつ手つきが親父そつくりだなあ。」などゝ聰と陽氣に聲をかけて、「おい、紅いのをひとつつけて呉んな。いつもは俺ら下りだが、今夜はお客樣だぜ。はゝゝゝ。」

忠治は笑ひながら鮨を切つて、飯につけて出したが、親分はそれをみると又笑ひ出して、

「おい、忠公、お前なかなかうめえが、それぢや握り方が大き過ぎるぜ。親父から聞いて知つてるだらうが、この鮨屋の職人てえものはその手つきひとつで店を握り潰すといつてな、此節のやうに米の高けえ時分にや氣をつけねえと、とんだ損をするぜ。はゝゝゝ。」

忠治はつゝましやかに笑つてゐた。

親分は五つほどつまむと、懐から湯錢の餘りらしい銀貨を出して、

「さ、此處へおいとくぜ。お前もその分ならやつていけさうだ。まあ、いゝ鹽梅だ。まあせいぜい身を入れてやんなよ。」と、いつてぷいと歸つてゆく。

忠治は親父の生きてゐる時分からやりつけてゐる、

「有難うございゝ……」を云つて、それを送り出した。

それから二代りばかり客が來たが、それが歸つていつてしまふと、しばらくの間客足がまるで途絶えてしまつた。

忠治はおせいと二人で小さくなつて七輪の火にあたつてゐたが、夜が更けるに從つて、漸次と底冷がして來た。葢ひの隙間からみると空は暗く垂れ下つて、吹く風もないので、四邊の燈影や、白く乾きつた路の面がくつきりと冷たく冴えてみえる。年の市のどよみはそのなかを寒さうに流れて來るのであつた。

忠治はいくら思ひ出すまいとしても、亡つた父親のことが思ひ出されてならなかつた。毎晩親父が使ひ

なれてゐた庖丁や、山葵卸しなどを見るにつけても餘りに思ひ懸けないその死にやうが不思議に思はれてならなかつた。漸次と考へつめてゆくとどうしても親父はこの廣い世界の何處かに生きてゐるやうな氣がして、いくら打消してみても死んだとは思はれなくなつて來る。

ふとおせいの方を振り返へると、彼女も矢張り父親のことを考へてゐると見えて、黒眼勝ちな瞳をうつとりと据ゑて、何か頻りに考へ込んでゐる。そゝけた髮の毛には電燈の光がしみついて、見るから頼りなげなその姿が忠治には耐らなく可哀想になつて來る。

忠治は默つてゐられなくなつて、

「おい、おせい公。矢張俺らが代りにやつてるんで、お客様が來ねなあ。」と、佗びしさうな聲で云ふ。

おせいはふつと我れに歸つたやうに顔をあげて、

「ゑ？」と云つたが、葢ひの隙からそつと町筋に並んだ屋臺の列を覗いてみながら、「向ふの與平さんとこにやお客が一杯入つてるね。矢張りお父つあんがゐないとお客をとられつちまふんだねえ。」と、心細さうに云ふ。その眼には子供らしい涙が光つてゐた。

忠治はそれを聞くと自分までが急に引入れられるやうに心細くなつて、先のことよりも先づ差當つて、毎日これだけの仕込みをしてこれが客がないために殘つていくとしたらどうだらうと思はずにはゐられなかつた。今は時候が時候なので鮪なぞは三日や四日置いたときに足がつくやうなことはなかつたが、それでも河岸へいく度びに何かしら仕込みをしなければ威勢が惡いやうな氣がするので、漸次仕込みの種だけが蓄まつて、金が拂へないやうになつたらどうしようと、そんな子供らしい心配が胸一杯に

溢れて來る。と、今度は又漸次と客を他の店に取られ、病人の母を抱へて路頭に迷はなければならなくなつたらどうしようといふやうな不安がそれと一緒に先々とひろがつて來て、忠治は身柱もとから水を浴びせかけられるやうな突詰めた思ひに引入れられていつた。

そこへ今度はすぐ家の路次口のある筆屋の老人がひよつこり暖簾をくゞつて來て、

「今晩は。」と、云ふ。

忠治はふつと我れに返つて、

「小父さん。被來い。」と、態と勢よく云つた。

筆屋の主人はそれを見ると皺だらけの顔でにこにこ笑つて、

「はゝゝゝ。もうすつかりお父つあんの代りが出來るなあ。いゝ鹽梅だ。どうだい、お客は元どほりの顔がみえるかい？」と、云ふ。

忠治は揉み手をしながら、

「小父さん。矢張り私ぢや可けねえと見えて今夜さつぱりお客様がないんですよ。」と、訴へるやうに云ふ。

筆屋の主人は苦もなさゝうに白い髯を弄りながら笑つて、

「はゝゝゝ。さうお前、店を出した晩ばかりぢや分りしないやな。第一まだお前の手性をみたお客はいくらもないんぢやないか。なにも今夜ひと晩で氣を腐らすにや當らないさ。」

「だつて、親父が死んだ噂を聞いて、お客様がみんな他へいつちまつたんぢやねえかと思つて、私や心

配でならねえです。」

「いや、さう心配するがものはないさ。これほど實込んだ屋臺だし、あゝして思ひ懸けもなく親父が亡つちまつたんだから、お客様はお前が可愛想だと思つて、却つて來て下さるさ。商賣といふものはさうしたもんぢやないよ。」と、云つて、忠治がつけてだす鮨をむしやむしや食べながら、「こりや結構、々々。仕込みから何がらお前さんがひとりでやんなさるのか?」と、云ふ。

忠治は恥かしさうに、

「え、まあ、どうやら私がやるんでござんすけど、今日の鮨は辛過ぎやしませんか。」

「いや、これなら上等だ。これだけやれりやお前さんの腕で立派にやつていけらあねえ。ほんとにしつかり勉强して、お母さんに安心させてやんなよ。」と、云つて、箪屋の主人はその次の鮪に手をつけながら「しかし佐吉さんも馬鹿なことで生命を落としたもんさねえ。かういふことがあるから私はふだんから酒をつゝしめと云つてゐたんだ。お前さん達のやうな大きな子まであるのに、女郎屋の二階で死ぬたあよくよくだ。ほんとに笑談ごとぢやないよ。お前さんなんかも此れからが大事だ。偶にや女郎買ひにいくのも仕方がないが、酒だけは飲みなさんなよ。」

さう云つてゐるところへ又一人外套を着た脊丈の高い男が入つて來た。年の市の歸りとみえて、太い〆飾りを外套の裏のなかゝらみせてゐる。それは山佐のすぐ近處にある勝傳といふ材木問屋の主人だつた。ふとみると後には屋臺に脊丈の屆かないくらゐな男の子を連れてゐる。

忠治は古い馴染の客なので、

「いらつしやい。」と、云つて、筆屋の主人の方はそのまゝにして置いて、茶を注いで出しながら何をつけませうかといふ顏をしてみせる。

勝傳の主人は子供の方を向いて、

「おい、坊や。お前何をたべる。海苔卷がいゝだらう。」と、云つて、「ぢや海苔を卷いてくんな。」

忠治は棚のうへからブリツキの海苔箱を下ろして、卷きにかゝつたが、勝傳の主人はそれをじつと見ながら、

「おい、忠公。今度は代變りがして、お前がやるんだつてな。ほんとに此間は又とんだことだつたなあ。俺や店の若え者から聞いて吃驚したよ。」と、云つて、熱い茶を啜る。

忠治は飯を握つて海苔のうへへのせながら、

「へえ、どうも有難うございます。どうか又相變らず御贔負に願ひます。」と、ませたことを云ふ。

勝傳の主人は大きく合點いて、

「なんだつてえぢやねえか、なんでも山佐の安と一緒に遊びにいつて、その晩いつちやつたつてえ話だが、親父のずべらにも呆れるぢやねえか。遊びの好きな男だつたから、まあ親父とすりやそれが相當な死にやうかも知れねえ、はゝゝゝ。」と、云つて、出來た海苔をひとつづゝ子供につまんでやつて、「だが親父も人をみて交際やあいゝのに、相手が惡いやな。安のこつたから、後のかけ構ひなしに無闇に飮ませやがつたに違いねえ。仕樣のねえ野郎だ。」

筆屋の主人は氣澤山に口を入れて、

「ほんとでござんすなあ。家にや病人の内儀さんや子供が二人もあるのにそれを引張り出すなんて随分思ひ遣りのねえ人もあつたもんですよ。そのためにとんだことになつてしまつて、跡に殘つたものは法返しがつきやしませんや。」

勝傳の主人はそれを輕く受けて、

「全くですとも。」と、云つたが、又忠治の方を向いて、鮪を注文しながら、「それでなにかい、そのあとで安が顏出しでもしたかい？」と訊く。

忠治は首を振つて、

「いゝえ、親父が死んだ晩にも私がいつた時分にやもう彼居いませんでしたが、そのあともばつたりお見えになりませんですよ。」

勝傳の主人は唇を引歪めて、

「それ見ねえ。ぢや彼奴たしかに又風を喰つて遁げちまひがつたに相違ねえ。腹の惡い奴に逢つちや叶はねえなあ。」と云ふ。

忠治は鮪をつけながらそれを聞き咎めて、

「ぢやあの旦那はどうかなすつたんですか？」

「どうかなすつた處ぢやねえさ。お前達は知るめえが、彼奴は山佐を失策つてから大阪へいつてやがつて、彼地でもなにかよくねえことをして土地にゐられなくなつたんで、又此方へ舞戻つて來やがつたのさ。さうして、今度はあの木場の松井な、あすこの若造をだまかしてなんでも四日ばかりの間に二千兩

からの金を卷き上げてそのまゝ姿を隱してしまひやがつたのさ。ほんとに太え野郎ぢやねえか。」と、云ふ。

筆屋の主人は眼を丸くして、

「へえ、それがこゝの親方を連れ出した人なんですか? まあ、驚いた奴があるもんだな。」と、話に引込まれてゆく。

忠治は呆れて、庖丁を持つ手をやめながら、

「旦那、そりやいつ頃のことなんでございませう。親父が死んだあとでございませんか?」と思はず乘り出して聞く。

勝傳の主人は鮪の脂のついた指を擦りながら、

「待てよ、お前んとこの親父の死んだのはいつだつけな。」

「この十七日の晩でござんす。」

「うむ、十七日? それぢや死ぬ前の晩にそれがばれたんだ。ぢやきつと卷き上げた金を懷に持つてやがつて行がけの駄賃にお前の親爺を連れ出しやがつたんだな。」と、いふ。

忠治はさう云はれると、その晩安どんがいやに紙幣びらを切つてゐたのを思ひ出した。ずつしりと紙幣の入つてゐさうな財布を出してみせたりしてゐたのが、今見るやうに眼に殘つてゐる。あの晩もそんないきさつで親父を連れ出したのかと思ふと、中折帽を眼深にかぶつた安どんの顏が親父を殺ろした下手人のやうな恐ろしい顏になつて心の底に映つて來た。

勝傳の主人は安どんが松井の若旦那をだまかして、材木の金を巧く卷き上げた話などをしながら鮨を喰べてゐたが、十ほど食べてしまふと、氣さくな調子になつて
「おい、忠公、仕込みはいゝが、握りがどうも親父ほどにいかねえぜ。鮨屋つてえものは難かしい商賣だ。氣を入れて、暖簾に傷をつけねえようにしろよ。とんだ親父をもつたおかげでお前までか苦勞をするなあ。」と、云ひながら手を洗つて、懷から大きな財布をだして、「いくらだ?」と、いふ。
忠治はさういはれると何だかしんみり人の情が身にしむやうに思はれて、思はず、聲を落としながら、
「三十錢頂きます。」と、云ふ。
勝傳の主人は五十錢玉をひとつ放り出して、
「ぢやまあ一生懸命にやんねえ。さあ、坊やいから。」と、云つて、暖簾を出ていつたが、その途端に、
「おゝ、寒い。おや、到頭降つて來やがつたな。」と、いふ聲が外から聞えて來た。
筆屋の主人も續いて歸つていつてしまふと、あとは又急に寂しくなつてしまつた。店には電燈ばかりがやけに輝いてゐるやうで、鮪の肌の色が妙にうら悲しく見える。ふと聞耳をたてると戶外では何だか急に人足がざわつき出したやうなので、忠治は何氣なく蓋ひの隙間から顏だけ出してみると、さつき勝傳の主人が云つたときには氣にも留めなかつたが、戶外ではいつの間にか大粒な雪がちらりちらりと降つてゐるのであつた。往來の人は春を祝ふくさぐさの買物を抱いて、袖を合はせながらそのなかを急ぎ足に驅けてゆく。
「あゝ、到頭雪になつちやつたな。」と、忠治は口のなかで呟いて、今日はもう商賣もこれつきりかと思

ふとひとしほ心細くなつて來た。雪は暗い空から絶え間もなく降つて來て、店明りのなかへ出るとほの白くちらちらと彼方此方へ躍り狂ひながら漸次と激しく降りまさつてゆく。

忠治はそのまゝ首を引込めて、

「おいおせい公。雪が降つて來たぜ。今夜はいよ〳〵アブレだな。」と、態と調子を張つて云つたが返事がないので、ふと後を向くと、おせいは餘り晝間體を使つたので疲れが出たか、屋臺の障子のところへ寄りかゝつて、こくりこくりこくり居眠りをしてゐるのであつた。

忠治はそれを見ると可哀想になつて、いつも親父がするやうに、又饂飩でも奢つてやらうかと思つたが、飯臺の下の錢箱を見ると親父の時分と違つて、銀貨の數が數へるほどしか入つてゐなかつた。

それから二時間ばかりの間に六七人の客があるにはあつたが、その晩は考へてゐた半分も賣れなかつた。そしてその客が歸つていつたあとにはもう往來にも雪のせいかめつきり人通りが薄くなつて、暖簾をくゞつて呉れる客はひとりもなかつた。

忠治は時々眼を覺ましては又居眠りをしだすおせいをそのまゝにして置いて、自分ひとりちよこなんと七輪の前へ坐つてゐたが、人足が薄くなるにつれ四邊はいつになくひつそりして來て、氣は滅入つてゆくばかりであつた。もし親父がゐたら今頃は又酒を買ひにやられる時分だなあとふつと思ひ出すと、彼は何かなしに急に胸が迫つて、思はず汚れた上被りのうへへぽろりと涙を落してしまつた。

暖簾の蔭から見ると路の面にはもう雪が眞白に積もつてゐる。じいつと聞いてゐると、屋臺の上覆ひに當る雪の音は喘ぐやうにさらちらと鳴つて、その寂しい音とゝもに浄明寺横町の夜は忍ぶやうにひそや

かに更けて行くのであつた。　（をはり）

大正七年初頭の文壇を飾るべき「新年號」の創作十篇の豫告は本欄の初めに挾みたる豫告に詳かなり

東京市神田區表神保町　東京堂
仝　神田區裏神保町　上田屋
仝　京橋區銀座三丁目　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　北區東梅田町　宮內立盛堂
京都市七條停車場前　三共社
仝　間之町七條　大盛社
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

〇定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國	
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢	以上郵稅共
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢	

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替にて御送金の場合は指定を本鄉區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるる虞なし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵劵代用必ず一割增の事
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料
　一金五圓迄　金七錢　及送料共）
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正六年十一月廿九日印刷納本
大正六年十二月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地
中央公論社
電話[illegible]小石川一[illegible]
振替東京三十四番
電信略號コウロン

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.